秋田県文化財調査報告書第115集

# 県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書

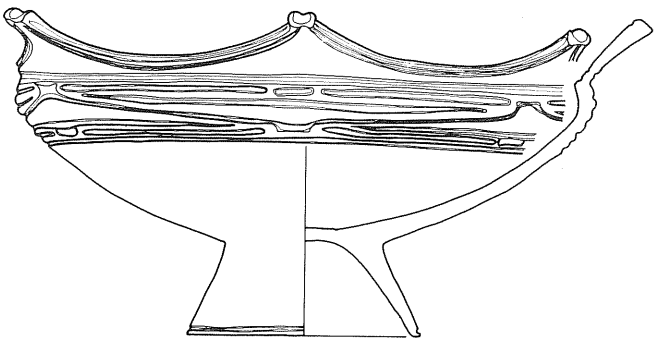
―― 案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡 ――

1984・3

秋田県教育委員会

# 県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書

―― 案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡 ――



1984・3

秋田県教育委員会

# 序

秋田県には数多くの文化財がありますが、中でも鹿角市は国特別史跡大湯環状列石をはじめとして縄文から中世に至るまで数多くの遺跡が所在しております。これら先人の残した文化遺産を後世に伝えて将来における文化の向上発展の基礎としてその活用を図ることは私たちの重要な責務と思われます。

昭和57年度から秋田県土木部により県道田山花輪線のバイパス工事が実施されることになり、その路線上にある案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡の発掘調査が工事に先立って昭和57･58年度の２か年にわたり行われました。

その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡・土壙・弥生時代土器・平安時代竪穴住居跡などが検出されました。本書はこの２年間の発掘調査成果をまとめたものであり、学術・教育上はもとより、文化財保護思想の高揚の一助となることを願ってやみません。

最後に、この調査にあたり長期間御協力くださった秋田県土木部、同鹿角土木事務所道路課、鹿角市、鹿角市教育委員会及び地元の皆様に深く感謝の意を表します。

昭和59年３月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

# 例　　言

1．本報告書は、昭和57・58年度に発掘調査を行った県道田山花輪線関係遺跡発掘調査報告書——案内(ないIII・IV・V・VI遺跡——である。

2．遺跡については機会をみて発表してきたが、本報告書を正式のものとする。

3．発掘調査に関して、下記の諸氏から御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する。

国立歴史民俗博物館考古研究部長教授　岡田　茂弘

北海道大学文学部助教授　林　謙作

秋田県鹿角市教育委員会主事　秋元　信夫

秋田県立十和田高等学校教諭　大里　勝蔵

4．本報告書の執筆は以下のように分担し、編集は橋本が行った。

案内III第1章・第2章、案内V第2章第1節　阿部　義行

案内IV第1章、案内VI第2章第1節　畠山　圭

案内V第2章第2節、案内VI第2章第2節・第3章　小林　克

案内III第3章、案内IV第2章・第3章、案内V第3章、案内VI第1章　橋本　高史

5．石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。

6．火山灰の分析は東北大学農学部教授庄子貞雄氏にお願いした。

7．報告書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1、鹿角市作成の鹿角市都市計画図（2千5百分の1）及び秋田県作成の千分の1の地形図である。

8．遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版　標準土色帖」(日本色彩研究所）を使用した。

9．遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

10．遺跡の写真撮影は主に次のものがあたった。

橋本　高史、阿部　義行、畠山　圭、大高　博康、米川　一郎、桧森　好広

11．遺物の写真撮影は主に次のものがあたった。

橋本　高史、渋谷　志、熊谷　安、高橋れい子、高野ひより、安保　徹

12．本報告書に使用した遺構の略号は秋田県埋蔵文化財センターで協議したものを使用した。

| 略号 | 遺物 | RT | 貝製品 | SB | 建物跡 | SJ | 窯跡 | SL | 河川・河道 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| RC | 炭化物 | RU | 人骨 | SC | 廊 | SK | 土壙 | SM | 道路・橋・階段 |
| RM | 金属製品 | RV | 紙・布製品 | SD | 溝・堀・濠 | SKF | フラスコ状ピット | SN | 焼土遺構 |
| RN | 自然遺物 | RW | 木・竹製品 | SE | 井戸跡 | SKI | 竪穴状遺構 | SQ | 配石遺構 |
| RO | 骨角製品 | RX | その他 | SF | 築地・土塁 | SKP | ピット | SR | 土器埋設遺構 |
| RP | 土製品 | 略号 | 遺構 | SH | 広場 | SKS | 土壙(組石)墓 | ST | 捨場 |
| RQ | 石製品 | SA | 柵列・柱列 | SI | 住居跡 | SKT | Tピット | SX | その他・不明 |

# 目　次

序
例言
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……5
　第１節　立地と環境……5
　第２節　周辺遺跡と歴史的環境……7

案内Ⅲ遺跡
第１章　調査の概要……13
　第１節　遺跡の概観……13
　第２節　調査の方法……13
　第３節　調査の経過……14
第２章　調査の記録……18
　第１節　発見遺構と遺物……18
　第２節　その他の出土遺物……19
第３章　まとめ……20

案内Ⅳ遺跡
第１章　調査の概要……27
　第１節　遺跡の概観……27
　第２節　調査の方法……28
　第３節　調査の経過……28
第２章　調査の記録……30
　第１節　発見遺構と遺物……30
　第２節　その他の遺物……46
第３章　まとめ……62

案内Ⅴ遺跡
第１章　調査の概要……85
　第１節　遺跡の概観……85
　第２節　調査の方法……86
　第３節　調査の経過……86
第２章　調査の記録……90
　第１節　発見遺構と遺物……90
　第２節　その他の遺物……115
第３章　まとめ……127

案内Ⅵ遺跡
第１章　調査の概要……157
　第１節　遺跡の概観……157
　第２節　調査の方法……158
　第３節　調査の経過……158
第２章　調査の記録……162
　第１節　発見遺構と遺物……162
　第２節　その他の遺物……183
第３章　まとめ……193

別編Ⅰ　秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵跡および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析……128

付１　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書……20

# 挿　図　目　次

第１図　田山・花輪線関係遺跡位置図……２
第２図　遺跡付近地質図……６
第３図　遺跡地形図……９

## 案　内　III　遺　跡

第１図　グリッド及び遺構配置図……15
第２図　土層断面図……17
第３図　ＳＫ01土壙……18
第４図　ＳＫ09土壙……18
第５図　出土遺物……19

## 案　内　IV　遺　跡

第１図　土層模式図……27
第２図　ＳＫ12土壙出土遺物……29
第３図　ＳＫ12土壙……30
第４図　ＳＲ16埋甕……31
第５図　ＳＲ16埋甕実測図……31
第６図　ＳＩ01竪穴住居跡……33
第７図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物……34
第８図　ＳＩ03竪穴住居跡……35
第９図　ＳＩ03竪穴住居跡かまど……37
第10図　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(1)……39
第11図　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(2)……40
第12図　ＳＩ06竪穴住居跡……41
第13図　ＳＩ09竪穴住居跡……43
第14図　ＳＩ09竪穴住居跡かまど……44
第15図　ＳＩ09竪穴住居跡出土遺物……45
第16図　ＳＮ11焼土遺構……46
第17図　ＳＮ11焼土遺構出土遺物……46
第18図　遺構外出土土器実測図(1)……48
第19図　遺構外出土土器実測図(2)……49
第20図　遺構外出土土器実測図(3)……50
第21図　遺構外出土土器拓影図(1)……51
第22図　遺構外出土土器拓影図(2)……52
第23図　遺構外出土土器拓影図(3)……53
第24図　遺構外出土土器拓影図(4)……54
第25図　遺構外出土土器拓影図(5)……55
第26図　遺構外出土石器実測図(1)……56
第27図　遺構外出土石器実測図(2)……57
第28図　遺構外出土石器実測図(3)……58
第29図　遺構外出土石器実測図(4)……59

## 案　内　V　遺　跡

第１図　グリッド配置図……87
第２図　ＳＩ04竪穴住居跡……90
第３図　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物……91
第４図　ＳＩ17竪穴住居跡……92
第５図　ＳＩ 111 竪穴住居跡……94
第６図　ＳＩ 111 竪穴住居跡出土遺物……95
第７図　ＳＫ01土壙……96
第８図　ＳＫ07土壙……96
第９図　ＳＫＦ10・11フラスコ状ピット……97
第10図　SKF 12･13･14･15･16フラスコ状ピット･98
第11図　土壙内出土遺物……99
第12図　ＳＫ18土壙……100

第13図　ＳＫ19土壙…… 100
第14図　ＳＫ 101 土壙…… 101
第15図　ＳＫ 102 土壙…… 101
第16図　ＳＫ 103 土壙…… 101
第17図　ＳＫ 106 土壙…… 101
第18図　ＳＫ 107 土壙…… 102
第19図　ＳＫ 108 土壙…… 102
第20図　ＳＫ 109 土壙…… 103
第21図　ＳＫＦ 112 フラスコ状ピット…… 103
第22図　ＳＫ 115 土壙…… 103
第23図　ＳＫ 116 土壙…… 104
第24図　ＳＫ 117 土壙…… 104
第25図　ＳＫ 118 土壙…… 104
第26図　ＳＫ119・122土壙…… 105
第27図　ＳＫ 120 土壙…… 105
第28図　ＳＫ 121 土壙…… 105
第29図　ＳＩ02竪穴住居跡…… 106
第30図　ＳＩ02竪穴住居跡かまど…… 108
第31図　ＳＩ03竪穴住居跡…… 109
第32図　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物…… 111
第33図　ＳＩ05竪穴住居跡…… 112
第34図　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物(1)…… 114
第35図　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物(2)…… 115
第36図　遺構外出土土器実測図(1)…… 119
第37図　遺構外出土土器実測図(2)…… 120
第38図　遺構外出土土器実測図(3)…… 121
第39図　遺構外出土土器拓影図(1)…… 122
第40図　遺構外出土土器拓影図(2)…… 123
第41図　遺構外出土土器拓影図(3)…… 124
第42図　遺構外出土石器実測図(1)…… 125
第43図　遺構外出土石器実測図(2)…… 126

## 案　内　VI　遺　跡

第１図　グリッド配置図…… 159
第２図　ＳＩ 101 竪穴住居跡…… 162
第３図　ＳＩ 106 竪穴住居跡…… 164
第４図　ＳＩ 107 竪穴住居跡…… 165
第５図　ＳＩ 107 竪穴住居跡出土遺物…… 166
第６図　ＳＩ 112 竪穴住居跡・出土遺物… 167
第７図　ＳＩ 119 竪穴住居跡・出土遺物… 168
第８図　ＳＩ 119 竪穴住居跡出土土器…… 169
第９図　ＳＫＴ 102 Ｔピット…… 169
第10図　ＳＫ 103 土壙…… 170
第11図　ＳＫ 104 土壙…… 170
第12図　ＳＫ 105 土壙…… 170
第13図　ＳＫＦ 109 フラスコ状ピット…… 171
第14図　ＳＫ 110 土壙…… 171
第15図　ＳＫＦ 111 フラスコ状ピット…… 172
第16図　ＳＫ 113 土壙…… 172
第17図　ＳＫ 114 土壙…… 173
第18図　ＳＫ 115 土壙…… 173
第19図　ＳＫ 117 土壙…… 173
第20図　ＳＫ 122 土壙…… 174
第21図　Ａ地区土壙内出土遺物…… 174
第22図　ＳＫ 205 土壙…… 175
第23図　ＳＫ 206 土壙…… 175
第24図　ＳＫ 207 土壙…… 176
第25図　ＳＫ 211 土壙…… 177
第26図　ＳＫ 212 土壙…… 177
第27図　ＳＫＦ 215 フラスコ状ピット…… 177
第28図　ＳＫ 216 土壙…… 178
第29図　ＳＫ 217 土壙…… 178
第30図　Ｃ地区土壙内出土遺物(1)…… 179
第31図　Ｃ地区土壙内出土遺物(2)…… 180
第32図　ＳＫ 219 土壙…… 180
第33図　ＳＲ 126 埋甕…… 181
第34図　ＳＲ 126 埋甕実測図…… 181
第35図　ＳＮ 120 焼土遺構…… 181
第36図　ＳＮ 121 焼土遺構…… 181
第37図　ＳＮ209・210焼土遺構…… 182
第38図　ＳＮ 213 焼土遺構…… 182
第39図　ＳＡ07柱列…… 183
第40図　ＳＢ 202 掘立柱建物跡…… 184
第41図　遺構外出土土器実測図…… 185
第42図　遺構外出土土器拓影図(1)…… 189
第43図　遺構外出土土器拓影図(2)…… 190
第44図　遺構外出土土器拓影図(3)…… 191

第45図　遺構外出土石器実測図(1)…… 192
第46図　遺構外出土石器実測図(2)…… 193

別　図　案内IV遺構配置図…… 213
別　図　案内V遺構配置図…… 215
別　図　案内VI遺構配置図…… 217

# 表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 3

## 案内IV遺跡

第１表　ＳＩ01竪穴住居跡観察表……32
第２表　ＳＩ03竪穴住居跡観察表……38
第３表　ＳＩ06竪穴住居跡観察表……41
第４表　ＳＩ09竪穴住居跡観察表……42

## 案内V遺跡

第１表　ＳＫ01土壙観察表……97
第２表　ＳＫ07土壙観察表……97
第３表　ＳＫＦ10フラスコ状ピット観察表…97
第４表　ＳＫＦ11フラスコ状ピット観察表…97
第５表　ＳＫ12土壙観察表……99
第６表　ＳＫ13土壙観察表……99
第７表　ＳＫ14土壙観察表…… 100
第８表　ＳＫ15土壙観察表…… 100
第９表　ＳＫ16土壙観察表…… 100
第10表　ＳＫ18土壙観察表…… 100
第11表　ＳＫ19土壙観察表…… 100
第12表　ＳＫ101土壙観察表…… 102
第13表　ＳＫ102土壙観察表…… 102
第14表　ＳＫ103土壙観察表…… 102
第15表　ＳＫ106土壙観察表…… 102
第16表　ＳＫ107土壙観察表…… 102
第17表　ＳＫ108土壙観察表…… 102
第18表　ＳＫ109土壙観察表…… 103
第19表　ＳＫＦ112フラスコ状ピット観察表 103
第20表　ＳＫ115土壙観察表…… 103
第21表　ＳＫ116土壙観察表…… 104
第22表　ＳＫ117土壙観察表…… 104
第23表　ＳＫ118土壙観察表…… 104
第24表　ＳＫ119土壙観察表…… 105
第25表　ＳＫ122土壙観察表…… 105
第26表　ＳＫ120土壙観察表…… 105
第27表　ＳＫ121土壙観察表…… 105
第28表　ＳＩ02竪穴住居跡観察表…… 107
第29表　ＳＩ03竪穴住居跡観察表…… 110
第30表　ＳＩ05竪穴住居跡観察表…… 113

## 案内VI遺跡

第１表　ＳＫＴ102Ｔピット観察表…… 169
第２表　ＳＫ103土壙観察表…… 170
第３表　ＳＫ104土壙観察表…… 170
第４表　ＳＫ105土壙観察表…… 170
第５表　ＳＫＦ109フラスコ状ピット観察表 171
第６表　ＳＫ110土壙観察表…… 171

第７表　ＳＫ 111 土壙観察表…… 171
第８表　ＳＫ 113 土壙観察表…… 172
第９表　ＳＫ 114 土壙観察表…… 173
第10表　ＳＫ 115 土壙観察表…… 173
第11表　ＳＫ 117 土壙観察表…… 173
第12表　ＳＫ 122 土壙観察表…… 174
第13表　ＳＫ 205 土壙観察表…… 175
第14表　ＳＫ 206 土壙観察表…… 175
第15表　ＳＫ 207 土壙観察表…… 176
第16表　ＳＫ 211 土壙観察表…… 177
第17表　ＳＫ 212 土壙観察表…… 177
第18表　ＳＫ 215 土壙観察表…… 177
第19表　ＳＫ 216 土壙観察表…… 178
第20表　ＳＫ 217 土壙観察表…… 178
第21表　ＳＫ 219 土壙観察表…… 180
第22表　焼土遺構計測表…… 182

# 図　版　目　次

巻頭カラー図版　案内遺跡付近航空写真

## 案　内　III　遺　跡

図版１　上　案内遺跡遠景
　　下　浮石上面
図版２　上　東側近景
　　下　土層断面
図版３　上　ＳＫ01土壙
　　下　ＳＫ09土壙
図版４　上　出土遺物
　　下　発掘風景

## 案　内　IV　遺　跡

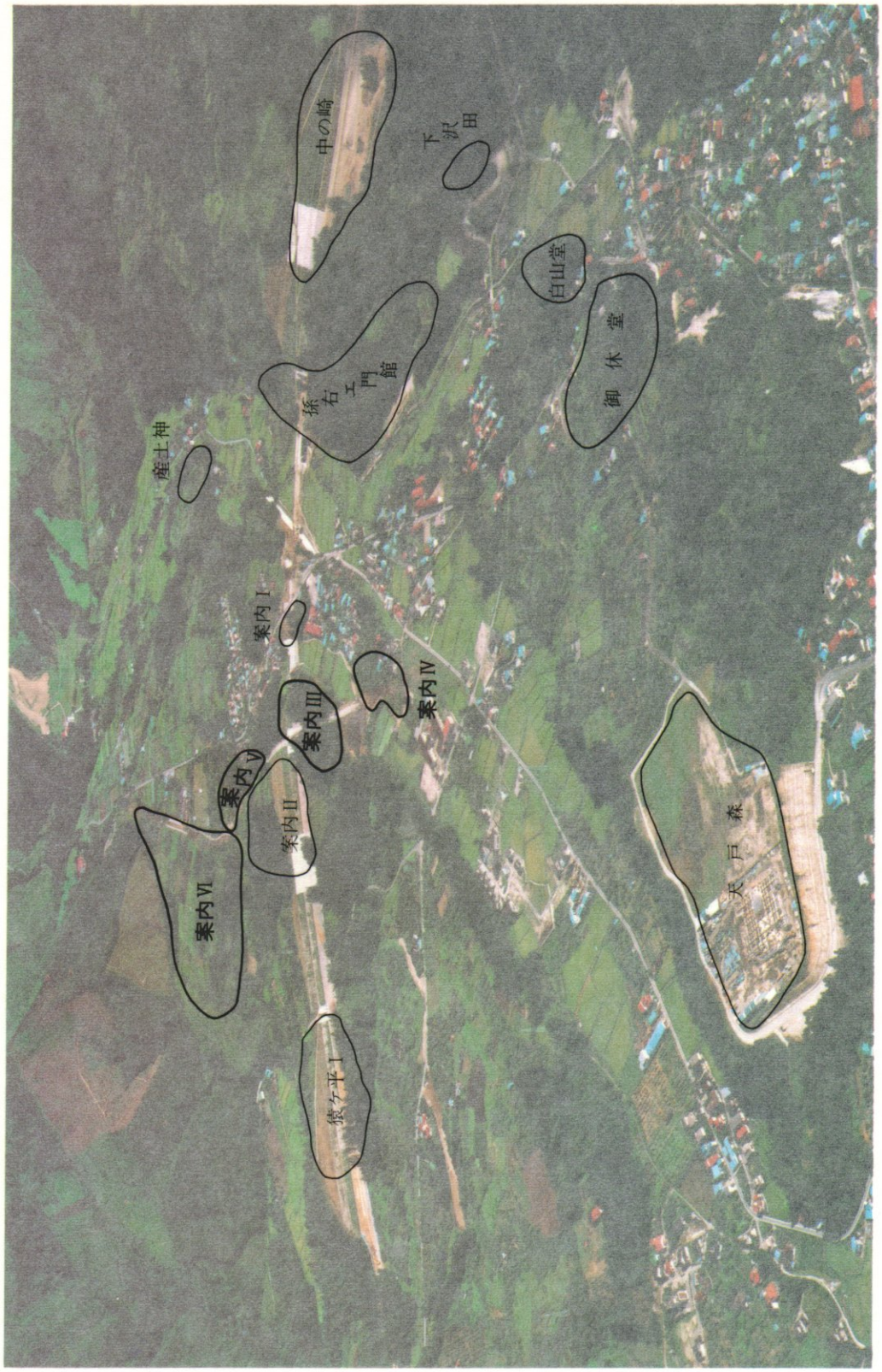
図版１　案内IV遺跡航空写真
図版２　案内IV遺跡近景
図版３　上　ＳＫ12土壙
　　下　ＳＫ16埋甕
図版４　縄文時代遺物出土状態
図版５　ＳＩ01竪穴住居跡
図版６　ＳＩ03竪穴住居跡
図版７　ＳＩ03竪穴住居跡かまど
図版８　上　ＳＩ06竪穴住居跡
　　下　ＳＩ09竪穴住居跡
図版９　ＳＩ09竪穴住居跡
図版10　上　ＳＫ12土壙出土土器
　　下　ＳＲ16埋甕
図版11　ＳＩ01竪穴住居跡出土土器
図版12　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(1)
図版13　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(2)
図版14　ＳＩ09竪穴住居跡出土遺物
図版15　上　遺構外出土土器(1)
　　下　遺構外出土土器(2)
図版16　上　遺構外出土土器(3)
　　下　遺構外出土土器(4)
図版17　上　遺構外出土土器(5)
　　下　遺構外出土土器(6)
図版18　上　遺構外出土土器(7)
　　下　遺構外出土土器(8)
図版19　上　遺構外出土石器(1)
　　下　遺構外出土石器(2)
図版20　上　遺構外出土石器(3)
　　下　遺構外出土石器(4)

## 案内Ⅴ遺跡


図版１　案内Ⅴ遺跡　地区近景
図版２　ＳＩ04竪穴住居跡
図版３　ＳＩ17竪穴住居跡
図版４　ＳＩ111竪穴住居跡
図版５　ＳＩ111竪穴住居跡遺物出土状態
図版６　上　ＳＫ01土壙
　　下　ＳＫ07土壙
図版７　上　フラスコ状ピット群近景
　　下　ＳＫＦ10・11フラスコ状ピット
図版８　上　ＳＫＦ12～15フラスコ状ピット
　　下　ＳＫＦ16フラスコ状ピット
図版９　上　ＳＫＦ18フラスコ状ピット
　　下　ＳＫＦ19フラスコ状ピット
図版10　上　縄文時代遺物出土状態
　　下　弥生時代遺物出土状態
図版11　ＳＩ02竪穴住居跡
図版12　ＳＩ03竪穴住居跡
図版13　ＳＩ05竪穴住居跡
図版14　上　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物
　　下　ＳＩ111竪穴住居跡出土遺物
図版15　上　土壙内出土遺物
　　下　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物
図版16　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物
図版17　遺構外出土土器(1)
図版18　遺構外出土土器(2)
図版19　遺構外出土土器(3)
図版20　上　遺構外出土土器(4)
　　下　遺構外出土土器(5)
図版21　上　遺構外出土土器(6)
　　下　遺構外出土石器(1)
図版22　上　遺構外出土石器(2)
　　下　調査風景


## 案内Ⅵ遺跡


図版１　案内Ⅵ遺跡航空写真
図版２　案内Ⅵ遺跡近景
図版３　案内Ⅵ遺跡Ｃ地区近景
図版４　上　Ｃ地区土層断面
　　下　ＳＩ101竪穴住居跡
図版５　ＳＩ06竪穴住居跡
図版６　ＳＩ107竪穴住居跡
図版７　ＳＩ112竪穴住居跡
図版８　ＳＩ119竪穴住居跡
図版９　ＳＲ126埋甕
図版10　ＳＡ07Ａ柱穴
図版11　ＳＡ07Ｂ柱穴
図版12　上　ＳＢ202掘立柱建物跡
　　下　ＳＤ208溝跡
図版13　上　ＳＩ106竪穴住居跡出土土器
　　中　ＳＩ107竪穴住居跡出土土器
　　下　ＳＩ112竪穴住居跡出土土器
図版14　上　ＳＩ119竪穴住居跡出土土器
　　下　Ａ地区土壙内出土土器
図版15　上　Ｃ地区土壙内出土土器
　　下　ＳＲ126埋甕
図版16　上　遺構外出土土器(1)
　　下　遺構外出土土器(2)
図版17　上　遺構外出土土器(3)
　　下　遺構外出土土器(4)
図版18　上　遺構外出土石器(1)
　　下　遺構外出土石器(2)




巻頭図版　案内遺跡付近航空写真　（左が東）

# 第1章　は　じ　め　に

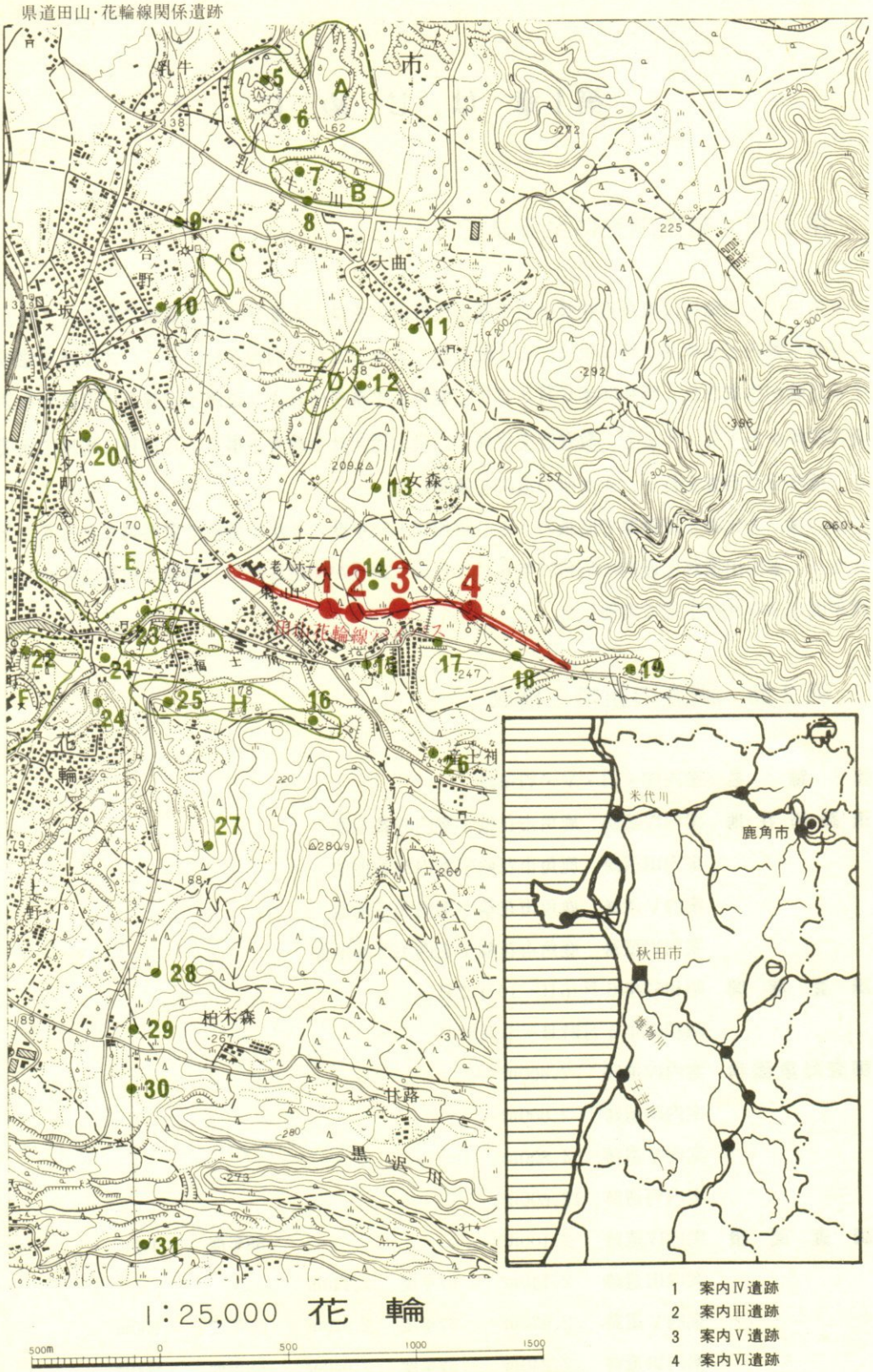
## 第１節　発掘調査に至るまで

県道田山・花輪線は鹿角市花輪と岩手県安代町田山を結ぶ大部分が山岳道路である。このうち花輪字案内と赤坂間は特に狭く、こう配も急であることから別線としてバイパス道路を建設する計画が作成され、昭和56年６月２日付で鹿角土木事務所長より道路予定線上の遺跡分布調査の依頼があった。そこで、教育庁文化課では畠山憲司社会教育主事を７月17日に現地に派遣し、遺跡分布調査を行い、４か所の遺跡を確認した。

その後、文化課と道路課で協議のうえ、昭和57・58年度の２か年継続で発掘調査を行うこととなり、案内III遺跡を最初に昭和57年６月15日から調査が開始された。調査は初年度6,800㎡、次年度8,300㎡の予定で実施した。

## 第２節　調査の組織と構成

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| **遺　跡　名** | 案内IV・III・V・VI遺跡 | | | | | |
| **遺跡所在地** | 案内IV遺跡 | 鹿角市花輪字案内89番地他 | | | | |
| | 案内III遺跡 | 鹿角市花輪字案内23番地他 | | | | |
| | 案内V遺跡 | 鹿角市花輪字案内26番地他 | | | | |
| | 案内VI遺跡 | 鹿角市花輪字案内102番地他 | | | | |
| **調査期間** | 昭和57年６月15日～10月22日 | | | | | |
| | 昭和58年４月21日～９月30日 | | | | | |
| **調査対象面積** | 案内IV遺跡 | 2,800㎡ | | | | |
| | 案内III遺跡 | 2,600㎡ | | | | |
| | 案内V遺跡 | 4,800㎡ | | | | |
| | 案内VI遺跡 | 12,600㎡ | | | | |
| **調査面積** | 案内IV遺跡 | 2,100㎡ | | | 58年度 | 2,100㎡ |
| | 案内III遺跡 | 2,140㎡ | 57年度 | 2,140㎡ | | |
| | 案内V遺跡 | 2,970㎡ | 57年度 | 2,070㎡ | 58年度 | 900㎡ |
| | 案内VI遺跡 | 7,240㎡ | 57年度 | 2,040㎡ | 58年度 | 5,200㎡ |




1 案内Ⅳ遺跡
2 案内Ⅲ遺跡
3 案内Ⅴ遺跡
4 案内Ⅵ遺跡

第1図 田山花輪線関係遺跡位置図

## 第１表　周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時代・時期 | 遺構・遺物 | 報告書 |
|---|---|---|---|---|
| 5 | 乳牛平 | 縄文、平安、中世 | 縄文土器、平安竪穴住居跡 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ |
| 6 | 妻の神Ⅲ | 縄文、平安、中世 | 縄文竪穴住居跡、中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡土壙墓、柵列跡 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ |
| 7 | 妻の神Ⅱ | 縄文、平安 | 縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡、中世建物跡 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ |
| 8 | 妻の神Ⅰ | 縄文、平安 | フラスコ状ピット、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ |
| 9 | 天戸森Ⅰ | 縄文（前期、中期、晩期） | 円筒下層d、同筒上層c・d、大木8a、大洞Ｂ～$C_2$式、石鏃、石匙、石剣、磨製石斧 | |
| 10 | 陣場 | 縄文、弥生 | 縄文土器片、続縄文土器片 | |
| 11 | 大曲 | 縄文、平安 | 縄文土器片、土師器片 | |
| 12 | 猿ケ平Ⅱ | 縄文（早期～晩期） | 縄文竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ |
| 13 | 猿ケ平Ⅰ | 縄文（中期～晩期）弥生 | 縄文竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、弥生土器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ |
| 14 | 案内Ⅱ | 縄文 | 縄文竪穴住居跡、土壙、配石遺構、縄文土器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ |
| 15 | 案内Ⅰ | 縄文、平安 | 縄文竪穴住居跡、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ |
| 16 | 孫右エ門館 | 縄文、平安 | 屋外炉、縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ |
| 17 | 東山Ａ | 縄文（晩期）、弥生 | 縄文土器片（晩期）、石匙、弥生式土器 | |
| 18 | 東山Ｂ | 弥生 | 弥生式土器 | |
| 19 | 赤坂Ａ | 縄文 | 縄文土器片 | |
| 20 | 天戸森 | 縄文（中期、後期）、平安 | 円筒下層e式、大木8a・b、9、10、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡、土壙、配石遺構、十腰内Ⅰ式土器 | 天戸森遺跡発掘調査報告書 |
| 21 | 白山堂 | 縄文 | 縄文土器片（後期）、石鏃、石斧、経石 | |
| 22 | 花輪館（桜山） | 中世、近世 | 中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡 | 花輪館試掘・下沢田遺跡発掘調査報告書 |
| 23 | 御休堂 | 縄文、平安 | 縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡、土壙、溝状遺構、縄文土器片（大木10、円筒下層d） | 御休堂遺跡発掘調査報告書 |
| 24 | 日向屋敷Ⅰ | 縄文（中期） | 縄文土器片（中期）、円筒上層式、石匙 | |
| 25 | 下沢田 | 平安 | 平安竪穴住居跡、土壙、空堀 | 花輪館試掘・下沢田遺跡発掘調査報告書 |
| 26 | 産土神Ｄ | 縄文（後期） | 縄文土器片（大湯式、大洞$C_2$～Ａ式） | |
| 27 | 中の崎 | 縄文、平安 | 縄文土器（後期、晩期）、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡、須恵器、土師器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ |
| 28 | 柏木森 | 縄文、平安 | 土壙、フラスコ状ピット、縄文土器（早期、後期、晩期）、土師器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ |
| 29 | 明堂長根 | 縄文 | 土壙、フラスコ状ピット、縄文土器、溝状遺構 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ |
| 30 | 一本杉 | 縄文、平安、中世 | 縄文土器、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土師器、須恵器、中世陶磁器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ |
| 31 | 上葛岡Ⅳ | 縄文、平安 | 縄文土器、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器 | 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ |
| A | 乳牛館 | 中世 | 残存状況（不良）。城主（伝）は乳牛六郎（安保）。 | 秋田県の中世城館 |
| B | 妻の神館 | 中世 | | 秋田県の中世城館 |
| C | 無名館 | 中世 | | 秋田県の中世城館 |
| D | 無名館 | 中世 | | 秋田県の中世城館 |
| E | 黒土館 | 中世 | 残存状況（やや良）。城主（伝）は黒土丹後（秋元）。 | 秋田県の中世城館 |
| F | 花輪館 | 中世 | 残存状況（不良）。 | 秋田県の中世城館 |
| G | 花輪古館 | 中世 | 残存状況（不良）。城主（伝）は花輪次郎（安保）。 | 秋田県の中世城館 |
| H | 孫右エ門館 | 中世 | 残存状況（不良）。 | 秋田県の中世城館 |

**調査主体** 秋田県教育委員会

**調査担当者** 熊谷　大郎　橋本　高史（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）

**調査補佐員** 阿部　義行　大高　博康　菊地　一良　高橋　修　高橋　一則
桧森　好広　米川　一郎　畠山　圭

**事務補助員** 泉沢　敦子　奈良美栄子

**調査協力機関** 秋田県鹿角土木事務所
鹿角市役所
鹿角市教育委員会

**整理作業協力者** 古屋　学　岡本　龍子　加藤　正子　土屋ひさ子　熊谷　恵子
後藤　正子　茂木　祐子　藤井美貴子　中村　陽子　奈良　栄子
松本　幸子　山田美喜子　浅石　悦子　佐藤　文子

**発掘調査参加者** 浅石竹次郎　浅利　雄造　阿部安五郎　阿部　嘉美　小田　幸吉
小田藤次郎　小田島善則　海沼仁太郎　海沼与四郎　金沢　憲一
川又　吉弥　川又喜代治　川又権太郎　川又　武司　川又　秀幸
木村　留吉　佐藤清太郎　佐藤　彦市　瀬田石隆広　田中　敬二
田村　勝弥　奈良　慶治　奈良正太郎　成田　惣太　根元　市蔵
山口　武敏　山崎　清助　山田　正則　相川　金子　秋本　吉子
安保　和子　安保テイ子　安保ハルエ　安保ヨシノ　石井ヨシエ
石川　一枝　大森テイ子　小田島キクエ　小沼　テル　金沢実津子
金沢　リセ　川又　エイ　川又　千代　川又　フジ　川又　ミヨ
川又　ヨリ　木村　ミツ　金田一實津子　斎藤　節子　佐藤　正子
佐藤フミエ　高田　チオ　苗代沢ノブ　成田　チギ　倍賞　正子
前田　エミ　松岡　テイ　松岡トキヨ　三上　美子　宮沢イサエ
宮沢　カヨ　安村　英子　柳沢　テル　柳沢　照子　柳沢　ミエ
柳沢　ヤス　（敬称略　五十音順）

# 第２章　遺跡の立地と環境

## 第１節　立地と環境

案内Ⅲ～Ⅵ遺跡はいずれも鹿角市花輪字案内に所在する。遺跡は国鉄花輪線陸中花輪線駅の東北東 1.8 ～ 2.8 kmに東西に並んだ状態で、西から案内Ⅳ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵの順に位置する。標高は案内Ⅳ遺跡が 174 ～ 178 m、案内Ⅲ遺跡が 180 ～ 204 m、案内Ⅴ遺跡が 210 ～ 218 m、案内Ⅵ遺跡が 220 ～ 240 m である。

岩手県田山から西流してきた米代川は湯瀬を出たところで熊沢川を合流して北側へと向きを変え、北西部で大湯川、小坂川と合流してここに花輪盆地を形成する。この盆地内は東側のこう配の急な山地、西側のややなだらかな山地、段丘地形及び沖積地に大別され、遺跡は主に米代川右岸の段丘地形上に多く分布している。鹿角盆地一帯は火山砕屑物が広く分布しており、段丘地形もこれにより形成されている。花輪盆地内の段丘は花輪高位段丘、花輪中位段丘[註1]、鳥越段丘[註2]、松館段丘、大里段丘の５段に区別されるが[註3]、遺跡はいずれもこのうちの花輪高位段丘上に位置する。花輪高位段丘面は花輪盆地の南東部に形成されており、南部では平的こう配も急(4.1°)で標高も250～350ｍと高いが、北部ではこう配もゆるやか(2.5°)で標高も180～300ｍと低くなる[註4]。案内Ⅳ遺跡はこの花輪高位段丘の最縁辺部にあたり、案内Ⅳ遺跡が最頂部にあたる。

花輪盆地は十和田火山起源の火山灰が分布することでも知られているが、大湯環状列石調査時に検出された黄褐色の『火山礫層』は大湯浮石層と名づけられ、遺構の年代関係をとらえる上で重要視されている。案内遺跡でも大湯浮石層は検出されたが、すべての面から検出されるわけではなく、プライマリーな堆積と認められたものはなかった。したがって、遺構との新旧関係をつかむことはできなかった。大湯浮石層の分布は東側の遺跡ほど良好で、案内Ⅵ遺跡の東部ではほぼ一様に５cm前後の厚さで検出されている。また地形的凹地で厚く堆積しているところがあり、案内Ⅴ遺跡の風倒木痕とみられる凹地では数回に及ぶ70cmもの堆積がみられた[註5]。

鳥越段丘　関上段丘　中位段丘　高位段丘　山　地

**第2図　遺跡付近地質図**

## 第２節　周辺遺跡と歴史的環境

花輪盆地内は古くから大湯環状列石など遺跡の多いことでしられているが、近年東北縦貫自動車道建設に伴う開発等で、急ピッチに発掘が行われている。東北縦貫自動車道に伴う48遺跡鹿角市立中学校に伴う２遺跡、田山花輪線に伴う４遺跡など、ここ５年間の発掘総面積は30万㎡を越える。遺構の検出数も膨大なものがあり、古代鹿角地方の様相も次第に解明されつつある。

鹿角地方での旧石器時代の遺跡は発見されていないが、縄文時代にはいると遺跡数は増大する。早期の遺跡としては柏木森遺跡(註６)[28]、猿ケ平Ⅱ遺跡[12]、一本杉遺跡[30]、上蔦岡Ⅳ遺跡[31]があげられる。前期の遺跡としては天戸森Ⅰ遺跡[9]があげられる。中期の遺跡としては大木８～10式期に検出例が集中するが、150棟以上の竪穴住居跡を検出した天戸森遺跡[20]、中期末～後期初頭の竪穴住居跡を検出した御休堂遺跡[23]がある。後期は鹿角地方の縄文時代の中で最も発見調査例の多い時期であるが、案内Ⅰ遺跡[15]、案内Ⅱ遺跡[14]、案内Ⅲ遺跡(註７)、猿ケ平Ⅰ遺跡[13]、猿ケ平Ⅱ遺跡[12]、天戸森遺跡、産土神Ｄ遺跡[26]等があげられる。晩期の遺跡としてはフラスコ状ピットを検出した妻の神Ⅰ遺跡[8]、柏木森遺跡[28]、猿ケ平Ⅰ遺跡[13]、猿ケ平Ⅱ遺跡[12]、明堂長根遺跡[29]があげられる。

弥生時代は遺構の検出はないものの、遺物が出土した遺跡としては猿ケ平Ⅰ遺跡[13]、陣馬遺跡[10]があげられる。

奈良・平安時代の遺跡は近年の東北縦貫自動車道建設に伴って多くの調査例がある。乳牛平遺跡[5]、妻の神Ⅲ遺跡[6]、妻の神Ⅱ遺跡[7]、妻の神Ⅰ遺跡[8]、大曲遺跡[11]、案内Ⅰ遺跡[15]、天戸森遺跡[20]、御休堂遺跡[23]、下沢田遺跡[25]、中の崎遺跡[27]、柏木森遺跡[28]、一本杉遺跡[30]等があり、ほとんどの遺跡が台地縁辺部から竪穴住居跡を検出した。

中世城館は鹿角に58か所確認されている。発掘調査の行われたのは図の中では乳牛館[A]、妻の神館[B]、花輪館[F](北館)、孫右エ門館[16, H]であるが、いずれもごく一部の調査のため、その全貌はまだ解明されていない。このうち乳牛館[A]の一部とみられる妻の神Ⅲ遺跡[6]、乳牛平遺跡[5]からは中世の竪穴状遺構が検出されている。

註１）　内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形」『地理学評論』第39巻第17号、1970年。

註２）　秋田県「花輪」『秋田県総合地質図幅』1973年。これによると鳥越段丘は鳥越段丘と関上段丘に分かれる（第２図参照）が、連続性に乏しいためここでは一括して分類した。

註３）　藤本幸雄「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』1982年、秋田県教育委員会。

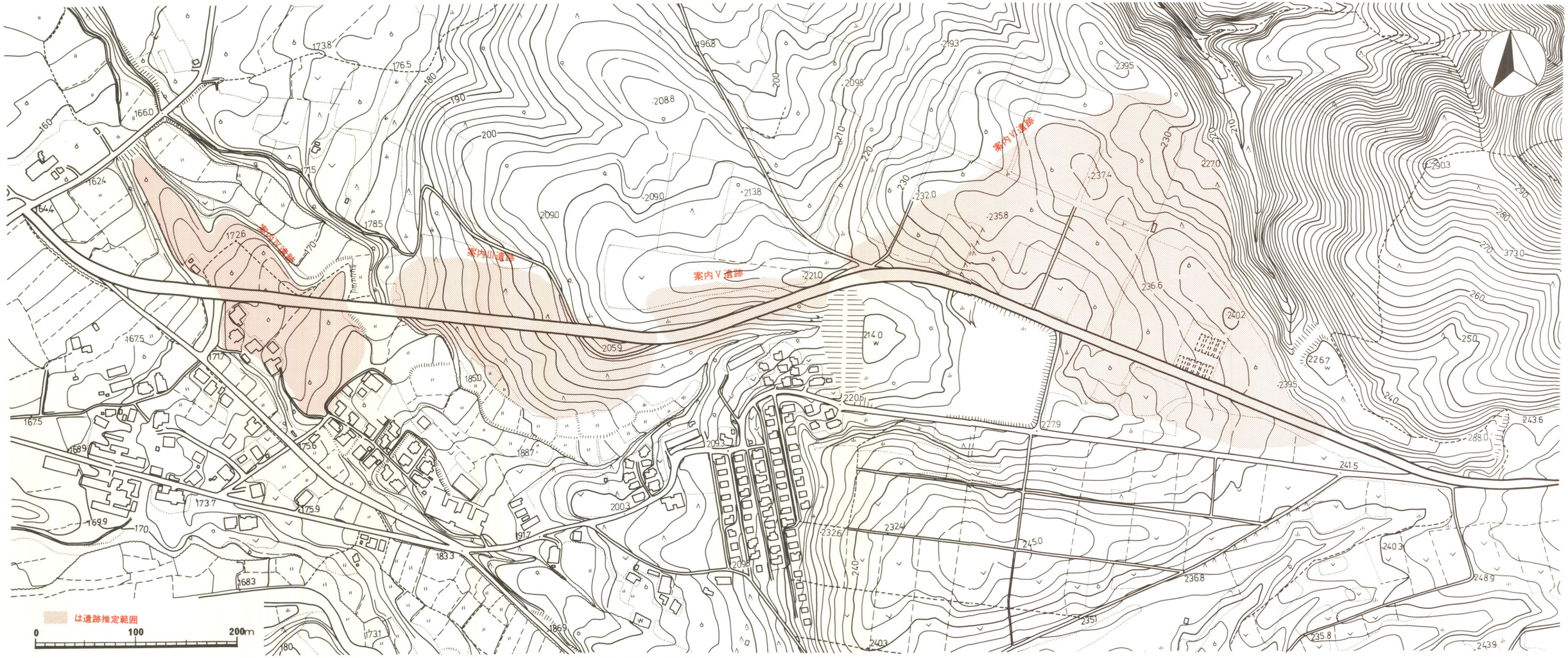
註４）　註３と同じ。

註５）　別編Ⅰ「秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析」に使用のものがこれにあたる。

註６）　第１図、第１表の遺跡番号と一致する。

註７）　今回調査した案内Ⅲ遺跡と同一段丘上に位置する遺跡。本調査より先の1981年に東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、縄文時代竪穴住居跡・土壙、平安時代竪穴住居跡等を検出した。秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』1983年。

第２図段丘地形図については、能代北高等学校教諭　藤本幸雄氏、十和田高等学校教諭　鎌田健一氏の御指導、御教授を賜わった。記して感謝したい。




第３図　遺跡地形図

# 案内 III 遺跡

| | |
|---|---|
| 遺跡番号 | No. 2 |
| 所在地 | 鹿角市花輪字案内23番地他 |
| 調査対象面積 | 2,600m² |
| 調査面積 | 2,140m² |
| 調査期間 | 昭和57年6月15日～8月10日 |

# 第1章　調 査 の 概 要

## 第１節　遺跡の概観

### １．遺跡の層序

本遺跡の層位は基本的には６つに分類される。ただしＩ層は生成因は同じと思われるが若干色調が異なるため、Ｉａ層、Ｉｂ層の２層に分けている。

第Ｉａ層及びＩｂ層：共に黒褐色土（Ｉa-10ＹＲ$^{2}/_{2}$、Ｉb-10ＹＲ$^{2}/_{1}$）　調査区全域に広がる表土であり、植物根を多量に含む表土。

第Ⅱ層：にぶい黄色土(2.5ＹＲ$^{6}/_{4}$)　径0.5～３㎜程度の浮石層である。

第Ⅲ層：黒褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{2}$）　非常にきめが細かい。

第Ⅳ層：黒褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{2}$）　遺物包含層であり、上部より弥生時代、下部より縄文時代の遺物が検出されている。

第Ⅴ層：暗褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{3}$）　黄褐色土の混入が著しくかなり明るい印象をうける。地山漸移層。

第Ⅵ層：黄褐色土（10ＹＲ$^{5}/_{6}$）　非常に粘性に富み、きめが細かい。地山層。

### ２．遺構の分布及び遺物出土状態

本遺跡において、遺構として確認しえたものは、ＬＤ49グリッド（ＳＫ09土壙）及び、ＭＩ54グリッド（ＳＫ01土壙）において確認された土壙２基だけである。いずれも、ローム面で確認されたが掘り込みは、20cm程度であり、実際の掘り込み面は第Ⅳ層中と思われる。この他、十数か所の円形もしくは、不整円形のプランを確認しているが、いずれも、遺構としての決め手に欠き、単なる落ち込み又は、風倒木痕と判断した。

遺物は第Ⅳ層中から出土したが、出土量は極めて少ない。遺物が集中した箇所もほとんどなく、ＳＫ09土壙上面及び埋土中からややまとまって出土しているにすぎない。

## 第２節　調査の方法

調査区のほぼ中央に任意の基準点を設置し（ＭＡ50とした）、ここから磁北方向での東西南北基線を求め、ＭＡ50を起点として４ｍ×４ｍのグリッドを組んだ。東西にはＭＡ50を基準に

アルファベット文字の組み合わせ、南北にはＭＡ50を基準に２桁の算用数字の組み合せとし、各グリッドの名称は東南隅の交点のアルファベッド、数字の組み合わせを用いた（ＭＡ50、ＭＣ49など）。

各遺構は、その検出順に通し番号を付していったが、精査の結果遺構と認められないものは欠番とした。遺構の実測は、グリッド杭を基に、原則として縮尺1/20で行った。

## 第３節　調査の経過

本遺跡の発掘調査は、昭和57年６月14日から、同年７月30日まで実施した。

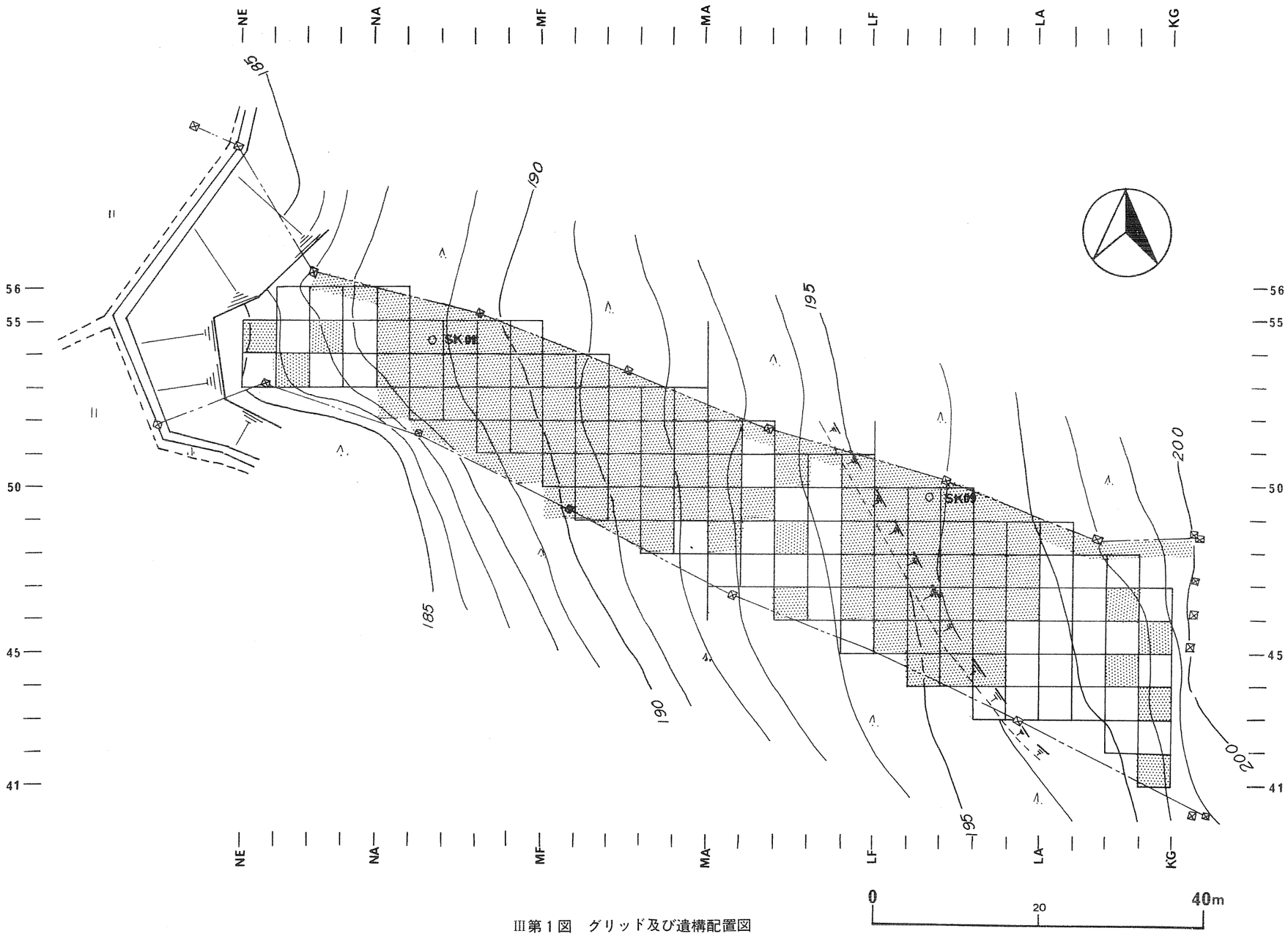
６月14～19日、発掘作業のための説明会を行うとともに、機材の搬入、プレハブの設置、枝の刈払い等の発掘諸準備を行った。６月21日から本格的調査を開始し、路線に沿って遺跡北壁に幅２ｍのトレンチを設定し、粗掘りを始めた。遺物は縄文土器片と陶器片が出土したのみであり遺構も検出されなかった。22～24日にグリッド杭打ち作業を行い、終了した部分（ＬＨ48グリッド）より粗掘りを開始した。遺物東側は、除去された表土を捨てる場所がないため、グリッドを交互に掘り、あいている部分に捨土することにし、遺構が検出された時点で広げて行くことにした。

25日、ＭＪ54グリッドにおいて、ＳＫ01土壙を確認した。この後も黒色土の落ち込みを検出し、遺構番号を付していったが、ほとんどが風倒木痕であった。

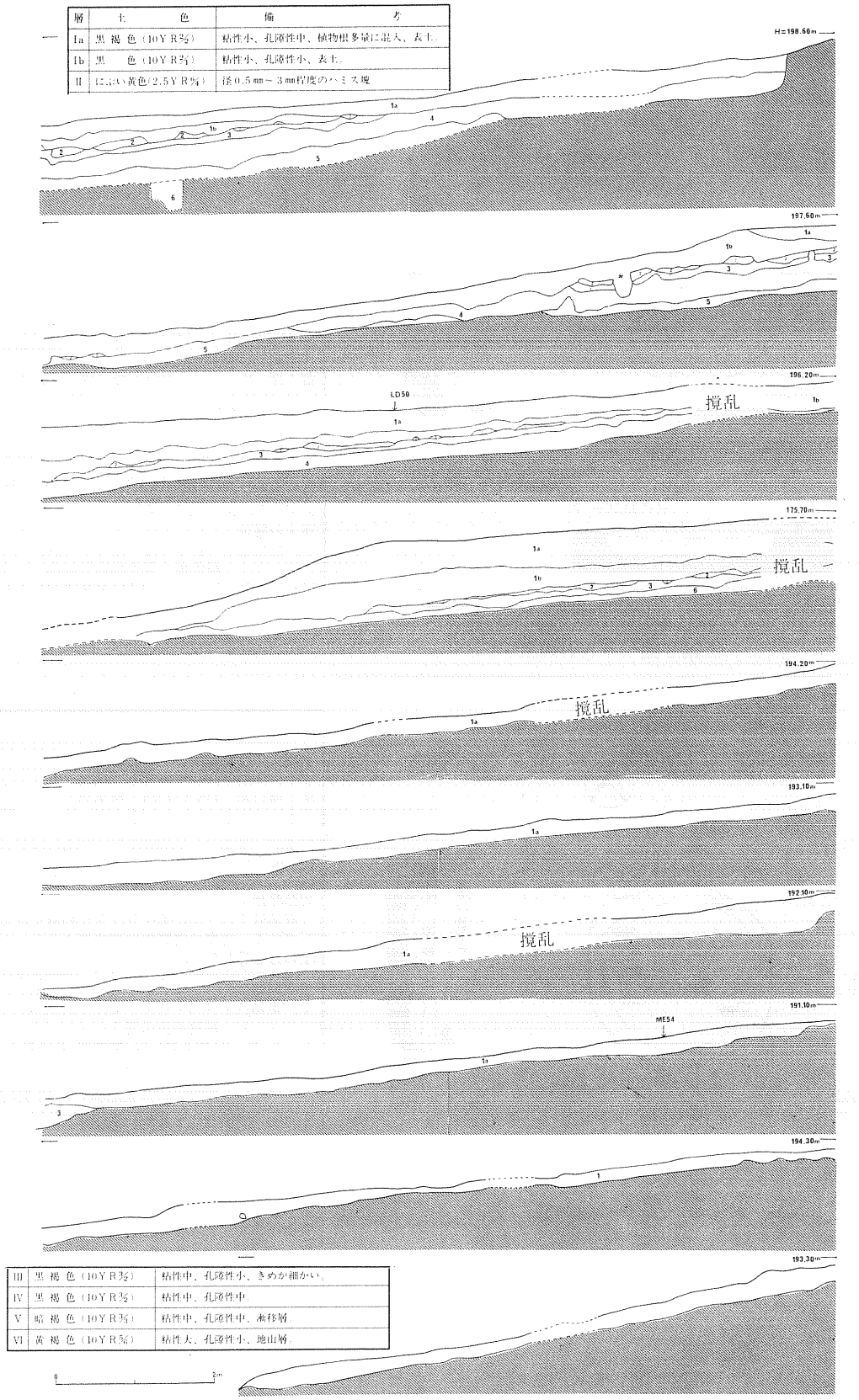
７月５～９日浮石の堆積が広範囲に確認され、ＭＣ～ＮＡ間及びＦライン以東を集中的に広げ、浮石上面にて精査したが遺構は検出されず地山面まで下げることにした。

７月28日に弥生式土器片が多量に出土したＬＤ49グリッド付近を遺物取り上げ、精査した結果ＳＫ09土壙を検出した。覆土より先に出土している土器と同一個体のものと思われる土器片が出土したことから、ＳＫ01土壙同様ＳＫ09土壙も実際の掘り込み面は、第Ⅳ層中と思われる。

７月30日、案内Ⅲ遺跡の調査を一旦終了し、案内Ⅴ遺跡の調査に合流した。その後プレハブ設置区域内が未発掘のことから８月５日からプレハブ下の約160㎡の調査を行ったが、遺構及び遺物は確認されず、10日案内Ⅲ遺跡の発掘調査を終了した。




III第１図　グリッド及び遺構配置図



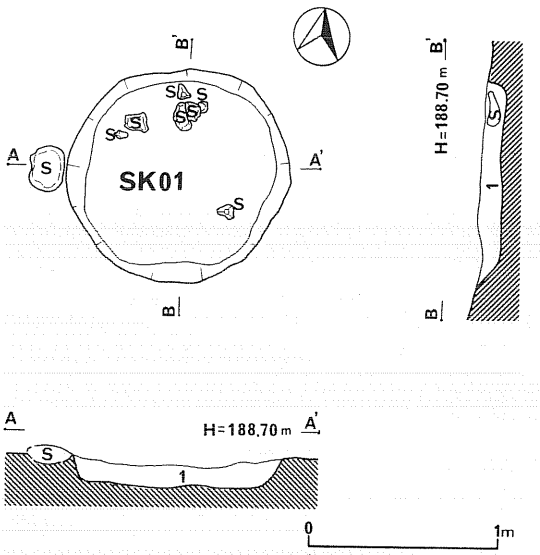

| 層 | 土　　色 | 備　　考 |
|---|---|---|
| Ia | 黒 褐 色（10YR3/2） | 粘性小、孔隙性中、植物根多量に混入、表土 |
| Ib | 黒　　色（10YR2/1） | 粘性小、孔隙性小、表土 |
| II | にぶい黄色（2.5YR6/4） | 径0.5mm～3mm程度のハミス塊 |

| | | |
|---|---|---|
| III | 黒 褐 色（10YR3/2） | 粘性中、孔隙性小、きめが細かい |
| IV | 黒 褐 色（10YR3/2） | 粘性中、孔隙性中 |
| V | 暗 褐 色（10YR3/4） | 粘性中、孔隙性中、漸移層 |
| VI | 黄 褐 色（10YR5/6） | 粘性大、孔隙性小、地山層 |

III第2図　土層断面図

# 第2章　調査の記録

## 第1節　発見遺構と遺物

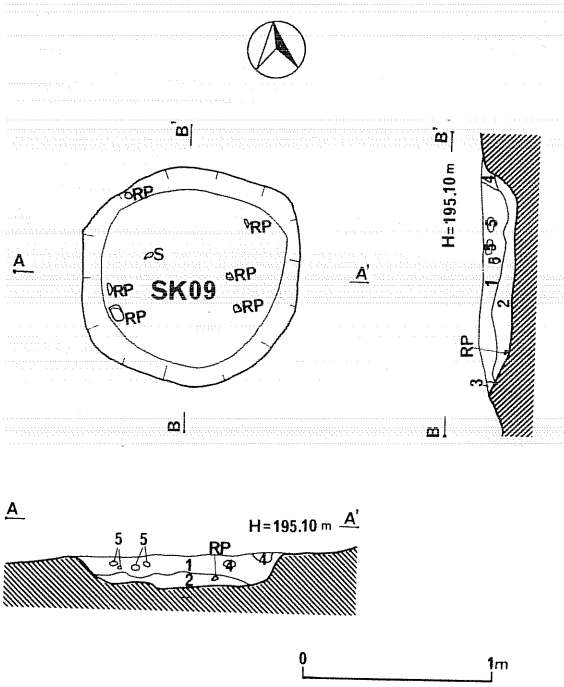



III第3図　ＳＫ01土壙

| 遺跡名 | 案内III遺跡 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ01 | | 検出地区 | ＭＩ54 |
| 法量 | 壙口部 | 116×113cm | 壙底部 | 98×96cm |
| | 深さ | 13cm | 面積 | 1.28m² |
| 形態 | 不整円形 | | | |

確認状態
覆土中(床面近く)において径5～15cm程度の石を含む。底部はほぼ平坦である。実際の構築面はもっと上の方と思われる。

埋土の層位
1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。植物根、炭化物若干混入。



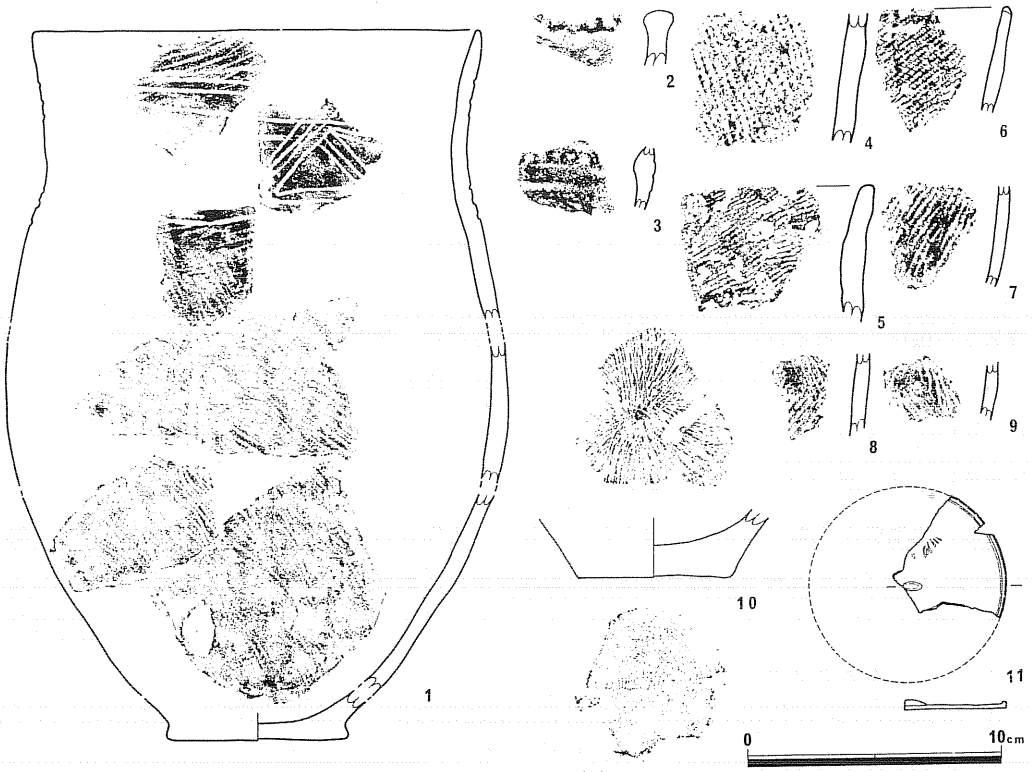

III第4図　ＳＫ09土壙

| 遺跡名 | 案内III遺跡 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ09 | | 検出地区 | ＬＤ49 |
| 法量 | 壙口部 | 116×117cm | 壙底部 | 100×95cm |
| | 深さ | 16cm | 面積 | 1.10m² |
| 形態 | 不整円形 | | | |

確認状態
底部近くの一部に焼土及び炭化物層を確認している。実際の構築面は確認面よりもっと上の方と思われる。

埋土の層位
1．黒褐色土(7.5ＹＲ3/2) 粘性中。孔隙率中。植物根苦干混入。
2．黒色土(10ＹＲ1・7/1)粘性中。孔隙率大。炭化物多量(80～90%)に混入。
3．褐色土(7.5ＹＲ4/6) 粘性弱。孔隙率中。焼土。
4．褐色土(7.5ＹＲ4/6) 粘性強。孔隙率小。ロームブロック。
5．にぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）浮石層。

遺物とその出土状態
本遺構内においては、覆土下層より縦位のＲ撚糸文を施文する土器が出土している。また、この土器片と同一個体と思われる土器片が本遺構上面付近からも出土している。
口縁部にＲの撚糸文を施し、その下に鋸歯形の沈線文を施し、胴部にも縦位のＲの撚糸文が施されている。このことからこの土器は小坂Ｘ式に属するものと考えられ、弥生時代のものと思われる。




Ⅲ第５図　出土遺物

## 第２節　その他の出土遺物

Ⅲ第５図１はＳＫ09土壙から出土したが、その出土状態からこの土壙に付随したかどうかは決め手にかける。すなわち、土壙覆土内に大湯浮石が小ブロック状に混入しており、大湯浮石降下後土壙が形成された可能性が強い。また、土器出土レベルも土壙覆土中位もしくは検出面より上面である。土器は焼成も良好で、口縁部から底部まであり、図上に復元は可能であった。器形は口縁部下部がややくびれる深鉢形で、口縁部資料が少ないため不明確ながら平縁もしくはゆるやかな波状口縁を持つものと思われる。口縁部にはＲ撚糸文が斜位に施文され、その下部に３～４条の沈線を廻し、その下に３～４条の連続山形沈線文を描き、その下に再び３～４条の沈線文を廻す。胴部は口縁部と同じくＲ撚糸文が斜位に施される。推定口径約18cm、最大径約20cm、底径7.2cm、器高約28cmと思われる。弥生時代のものと思われる。

２～７は縄文時代晩期のものと思われるが、単節縄文が施される。

８、９はＬ撚糸文が施されたもので、１とほぼ同時期の弥生時代の土器と思われる。

10は中世の瓦器に類するもので、底部は回転糸切りである。

11は中世以降と思われる青銅製の和鏡で、推定半径は7.8cmである。

# 第3章　ま　と　め

案内III遺跡は、隣接する東北縦貫自動車道で発掘調査をした案内III遺跡[註1]と同一段丘面にあり、竪穴住居跡等の検出が期待されたが、検出された遺構は土壙2基にとどまった。これは今回の調査区の南側に台地の縁辺部が張り出す舌状台地のため、調査区の大部分が同一台地とはいえ縁辺部の区域が少なかったためと考えられる。また、西側の縁辺部を中心に削平が著しく、表土下数10cmで地山であることにも起因しよう。したがって、今回の調査区外となった南側の舌状台地縁辺部に遺構の広がりが予想される。

ＳＫ09土壙埋土上面から出土した土器はいわゆる小坂Ｘ式土器に属するものと思われる。鹿角市内においては東北縦貫自動車道関係の大地平遺跡[註2]、駒林遺跡[註3]、猿ケ平Ｉ遺跡[註3]から出土している。案内III遺跡出土のものは口縁部下に連続山形沈線文が施されており、この点が他遺跡出土のものとは異なる点であろう。

註１　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VI』　1983年。
註２　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｉ』　1981年。
註３　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｖ』　1982年。

## 付１　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

１９８３．12月23日

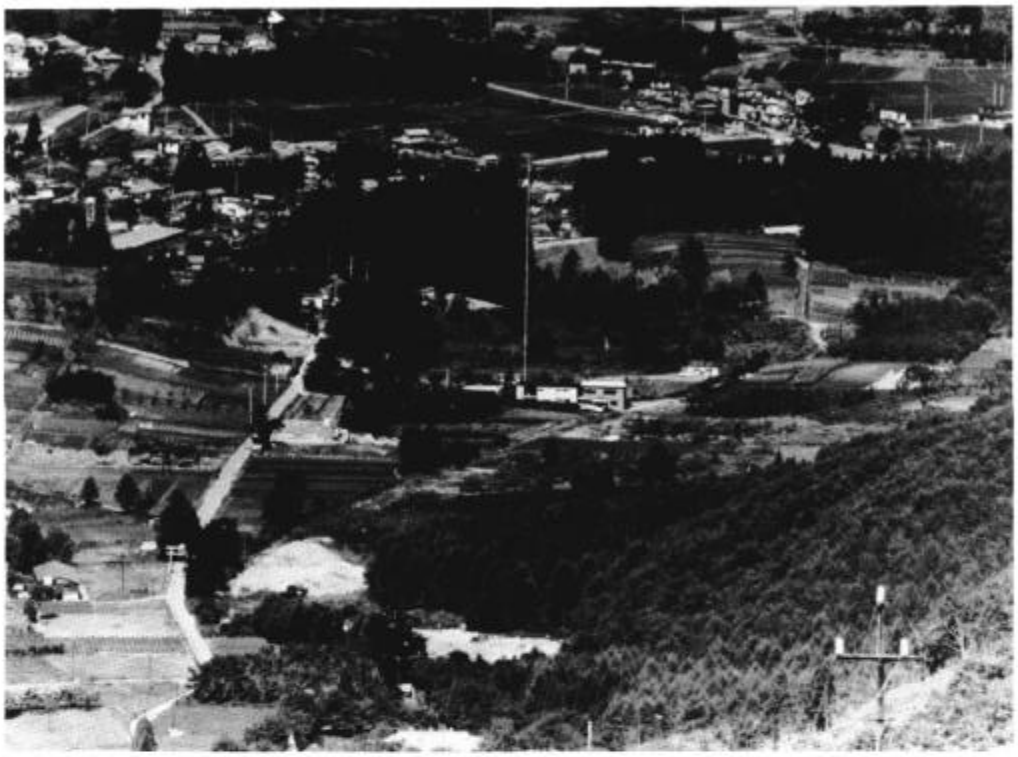
秋田県埋蔵文化財センター殿

1983年９月19日受領致しました試料についての$^{14}$C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

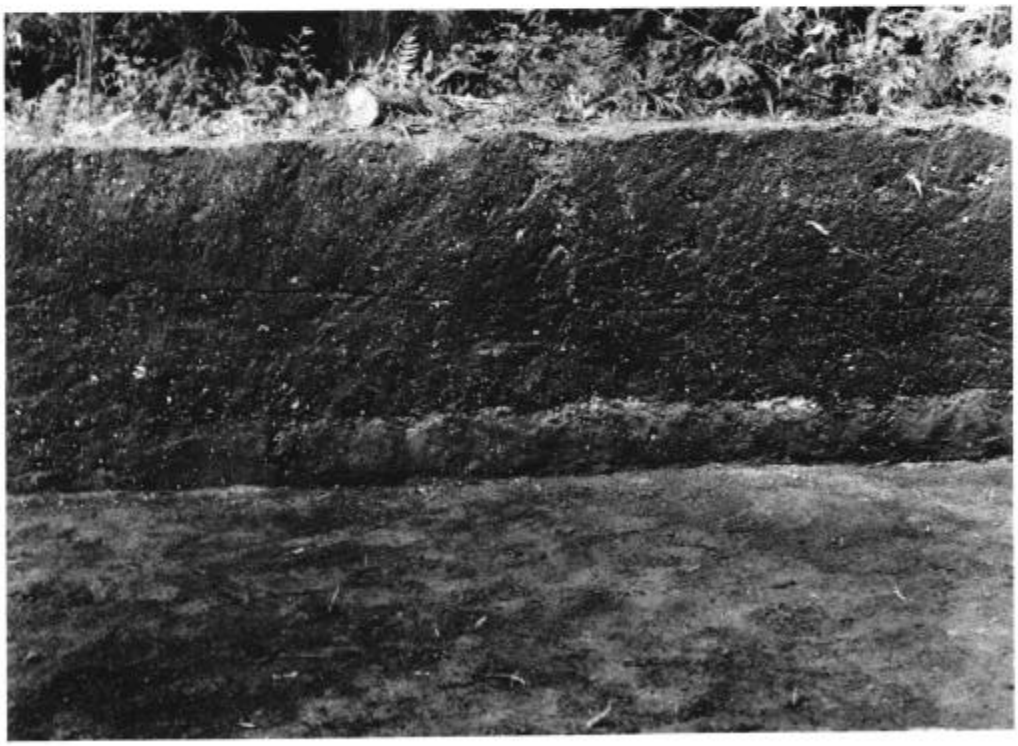
なお年代値の算出には$^{14}$Cの半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は$\beta$線計数値の標準偏差$\sigma$にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (one sigma) に相当する年代です。試料の$\beta$線計数率と自然計数率の差が$2\sigma$以下のときは、$3\sigma$に相当する年代を下限とする年代値(B.P.)のみを表示してあります。また試料の、$\beta$線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が$2\sigma$以下のときには、Modern　と表示し、$\delta^{14}$C％を付記してあります。

記

| 出　土　地　点 | Code No. | 試　　料 | B.P.年代(1950年よりの年数) |
|---|---|---|---|
| 案内IV<br>ＳＩ03　床面炭化材 | GaK-11338. | Charcoal from Hanawa, Akita.<br>Sample No. 1. ANIV, ＳＩ03. | 1490 ± 100<br>A.D. 460 |
| 案内VI<br>ＳＩ106 床面炭化材 | GaK-11339. | Charcoal from Hanawa, Akita.<br>Sample No. 1. ANVI, ＳＩ106. | 3700 ± 200<br>1750 B.C. |
| 案内VI<br>ＳＩ107 炉内炭化物 | GaK-11340. | Charcoal from Hanawa, Akita.<br>Sample No. 1. ANVI, ＳＩ107. | 4270 ± 110<br>2320 B.C. |

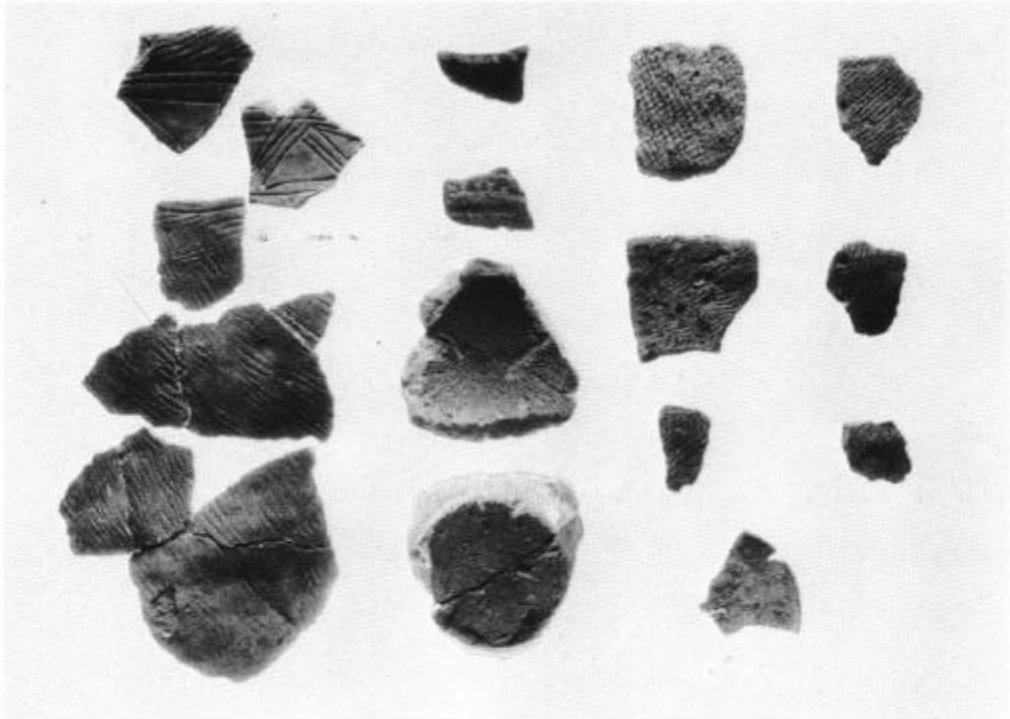


Ⅲ図版1　上　案内遺跡遠景　（東←西）
　　下　浮石上面　（東←西）



III図版2　上　東側近景　（東←西）
　　下　土層断面　（南←北）

III図版3　上　ＳＫ01土壙　（南→北）
　　下　ＳＫ09土壙　（東→西）



III図版4　上　出土遺物
　　下　発掘風景　（東←西）

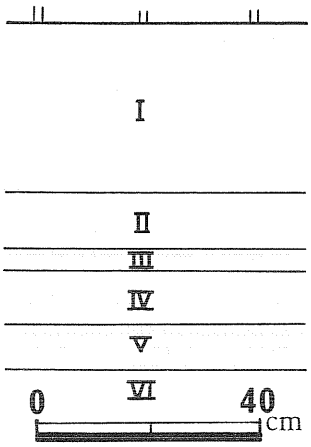
# 案内Ⅳ遺跡

| | |
|---|---|
| 遺跡番号 | No.1 |
| 所在地 | 鹿角市花輪字案内89番地他 |
| 調査対象面積 | 2,800㎡ |
| 調査面積 | 2,100㎡ |
| 調査期間 | 昭和58年6月7日～8月19日 |

# 第1章　調査の概要

## 第１節　遺跡の概観

### １．遺跡の層序



Ⅳ第１図　土層模式図

案内Ⅳ遺跡は西に向って緩く傾斜しており、その標高は174～178ｍである。このため、遺跡の基本層位把握は、ＭＧラインに設けた南北に切った２本のトレンチによって観察した。基本的に遺跡の層位は次の６つに分類される。

第Ⅰ層：暗褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{2}$）　表土。遺跡西側は宅地として使用されたものであり撹乱された部分が見られるものの、ＭＪライン以東ではほぼ12cm～40cm程度の厚さで堆積している。

第Ⅱ層：黒色土（10ＹＲ$^{1}/_{1}$）　部分的に欠如しているところがあるが、４cm～16cmの堆積量である。若干の遺物を包含する。

第Ⅲ層：にぶい黄色土(2.5ＹＲ$^{6}/_{4}$)　３cm～４cm程度の大湯浮石層である。層全体の中ではブロック状に散見されるが、主としてＭＧライン以東に多く見られる。

第Ⅳ層：黒褐色土（10ＹＲ$^{2}/_{2}$）　遺物包含層であり、縄文後期から晩期の土器片が多量に出土した。

第Ⅴ層：暗褐色土（10ＹＲ$^{3}/_{4}$）　地山への漸移層であり、１cm～５cmの礫を多量に含む。遺構はこの土層の中部面、又は下部面にて検出された。

第Ⅵ層：褐色土（10ＹＲ$^{4}/_{4}$）　拳大の礫を多量に含む地山層（高位段丘）である。

### ２．遺構の分布

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡４軒、土壙１基、埋甕１基、焼土遺構１基、計７遺構である。これらの遺構のほとんどがＭＦライン以東に集中して検出された。

住居跡に関しては検出数が４軒を数えるが、その検出区域は全部が遺跡の東端に集中している。Ⅵ層上面により確認されているが、実際の掘り込み面はもっと上の面と思われる。その内かまどを持つ竪穴住居跡が３軒あり、その位置は南１、東２である。隣接状態等からもこれらの竪穴住居跡がすべて同時代に存在していたとは思われない。発掘はこの台地の西側のごく一部の調査であり、さらに東南側に竪穴住居跡が分布していると思われる。

その他の遺構もすべて東側に集中しており、西側は遺物が多く出土したものの遺構は検出されなかった。

3．遺物の出土状態

本遺跡で出土した遺物は、整理箱で7箱を数える。縄文時代の土器が集中して出土した箇所はＭＧ51、52、ＭＪ49付近で晩期の土器が、ＮＨ52、ＮＤ56付近で後期の土器が出土した。これらの土器は、第IV層中からの出土で遺物はＮグリッドからは後期のもの、Ｍグリッドからは晩期のものとほぼ区切ることができた。平安時代の土器は竪穴住居跡内からのものが大半を占めた。このほとんどが甕であり、坏はほとんど出土しなかった。

石器については、出土量が極めて少なくフレイクがほとんどであった。

## 第2節　調査の方法

発掘にあたり調査方法は4ｍ×4ｍグリッド法をとることとし、本遺跡の東部に任意の基準杭を定め、これをＭＡ50としこの点を中心に磁北に沿い4ｍ×4ｍのグリッドを組んだ。座標軸にあたる南北の基線は2桁の数字、東西の基線はアルファベット2文字の組み合わせを用いた。すなわち、南北の場合南から北へ4ｍ行くごとに数字が1つずつ増す。東西の場合は東から西へ4ｍ行くごとにアルファベット2文字のうち1桁目の文字がＡ～Ｊへ進みＪまで進むと2桁目の文字が進む。またそれぞれのグリッドの名称は4ｍ×4ｍグリッドの南東隅の交点座標名（ＭＡ50、ＮＢ52など）を使用した。

調査は以上述べたように、4ｍ×4ｍのグリッド法により随時拡張していくことにした。グリッド杭は業者委託により行い、標高はそれらのうちの20ｍ毎に設けられたレベル原点からとった。実測は1ｍに組んだマス目や間尺を用いて原則として1/20、かまどは1/10で行った。

## 第3節　調査の経過

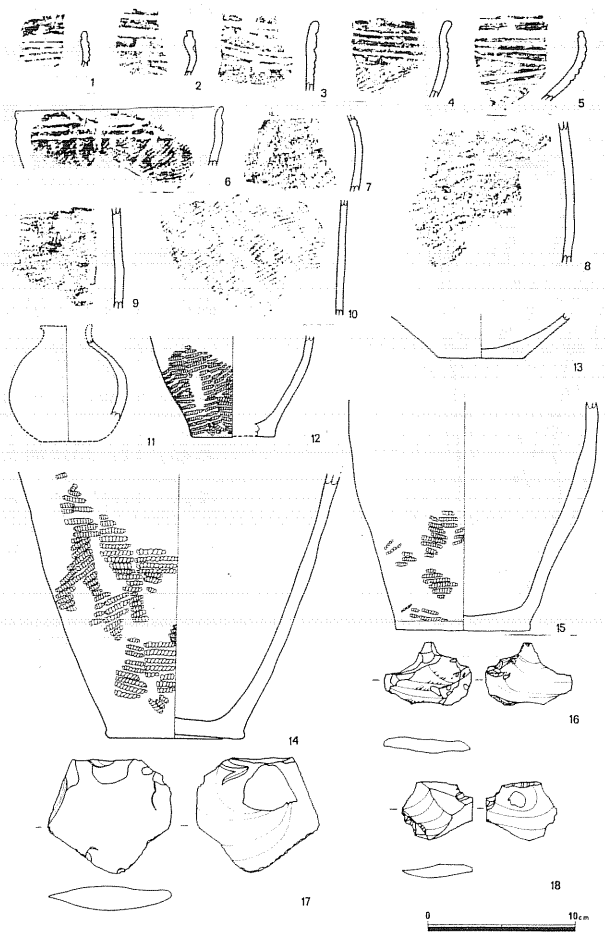
案内IV遺跡の調査は、昭和58年6月7日～16日、6月29日～7月2日、7月15日～8月19日の3回に渡って行った。

適当なプレハブ建設予定地がないため、6月7日、プレハブ建設予定地の調査として、作業員の一部で表土除去作業を開始した。9日には、掘り下げ20cm程度のところで方形のＳＩ01竪穴住居跡を検出し、さらに10日にはＳＩ03竪穴住居跡の北壁プランを確認した。14日から16日にかけてＳＩ01竪穴住居跡の実測を終了し、一旦調査を打ち切った。

その後６月22日にはプレハブが建ち、調査中の案内VI遺跡が機械排土で一時発掘ができなくなるため、28日に器材の移動を行うなど調査準備を進め、29日から本格的調査を再開した。調査は、遺跡の東側から表土除去作業を進めて行ったが、表土20cm下のところより縄文後・晩期の遺物が出土した。このため、浮石上面及び地山上面より数cm上のところで一旦精査することとした。排土作業の終了した７月２日、調査を一時中止して再び案内VI遺跡の調査にはいった。

７月15日には再び作業員25名で調査を再開した。25日からはその後検出された竪穴住居跡、土壙などの掘り下げ、実測を西部表土除去作業と平行して行った。同時にＭＧライン、ＮＪラインに南北トレンチ設定し、土層断面の観察を行った。８月４日、遺跡西側のＮＧ55付近より焼土遺構を確認しＳＮ11とし、10日にはＳＫ12土壙を検出した。18日には各検出遺構の実測等もほぼ完了した。

８月19日には遺跡全景の写真撮影を行い、９月10日に航空写真を撮影し案内IV遺跡調査を終了した。




IV第２図　ＳＫ12土壙出土遺物

# 第2章　調査の記録

## 第1節　発見遺構と遺物

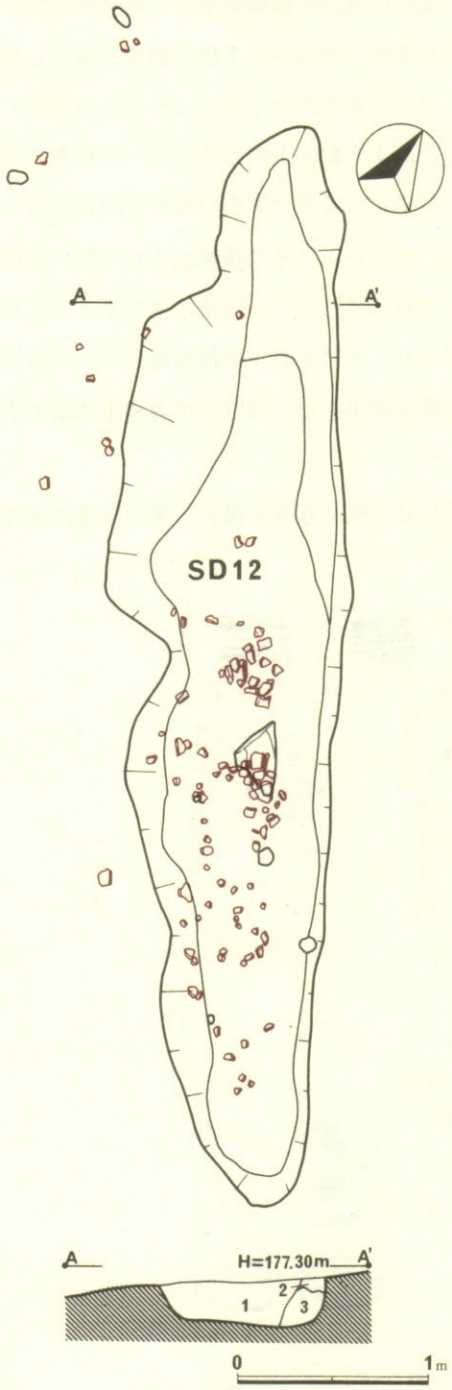
### 1．縄文時代の遺構

**ＳＫ12土壙**　（第２・３図　図版３）

ＭＥ51、52、ＭＦ52地区から地山上面にて検出された。不整長楕円形を呈し、長軸560㎝、短軸131㎝、深さ43.7㎝、面積4.9㎡である。長軸方向の断面形はゆるやかな傾斜の舟底状を呈する。

Ⅳ第３図に示す遺物が出土しており、縄文時代晩期末葉のものと思われる。１～４は小型鉢形土器、５はおそらく台付浅鉢形土器の口縁部であり、いずれも沈線による変形エ字文が施されている。７～９は同一土器で、口縁部に数条の平行沈線、胴部はＬＲ縄文の横位回転施文である。11、13は無文の精製土器で、13は浅鉢、11は壺である。14、15は粗製深鉢形土器で、胴部は単節ＬＲ縄文が斜位回転施文されている。

16～18はいずれも示定形石器であり、石質は頁岩である。



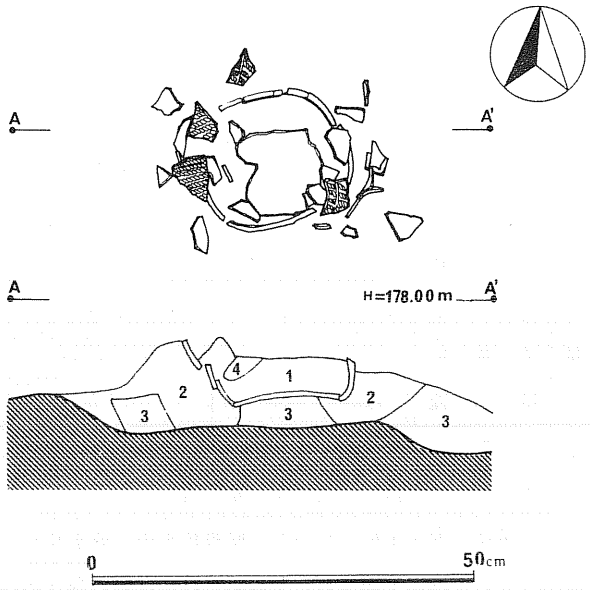

1．黒褐色土　10ＹＲ3/2　炭化物。黄褐色極小粒混入。やわらかくしまりなし。縄文晩期末葉遺物包含層。
2．暗褐色土　10ＹＲ3/4
3．黒褐色土　10ＹＲ3/2　しまりややよい。　炭化物小粒。黄褐色極小粒混入。

**Ⅳ第３図　ＳＫ12土壙**

**ＳＲ16埋甕**　（第４・５図　図版３）

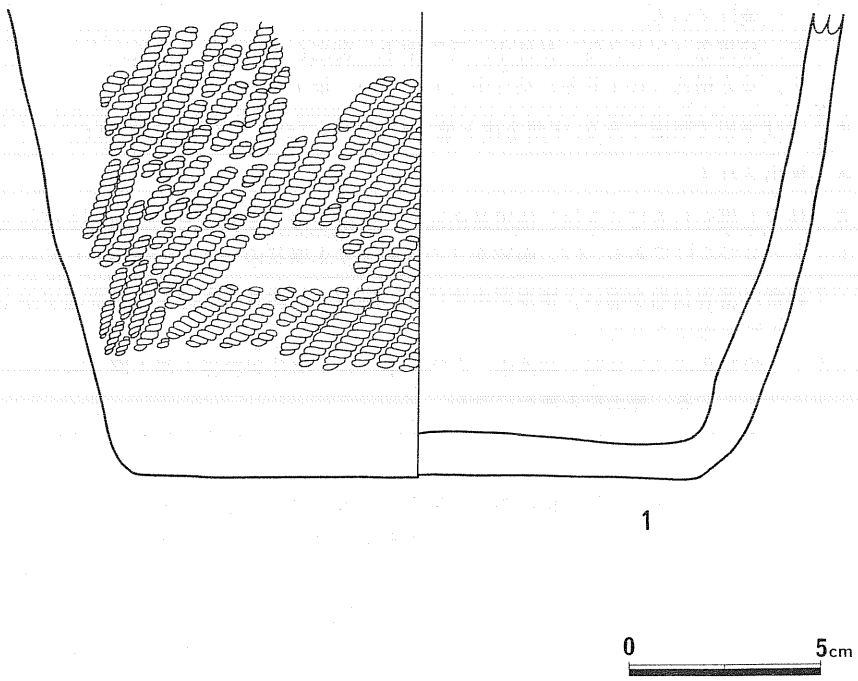
ＭＢ47地区より、標準層位第Ⅳ層下面近くで検出された。上部は削平されており、土器自体も胴上半部は欠如している。検出状態が悪いため、明確な掘り方も確認できず、したがって明確に埋甕であるとは言い難いものである。

出土土器は平底の深鉢形土器で、底径14.8cm、残存高12.3cmである。胴部には大粒の単節ＬＲ縄文が縦位に回転施文される。縄文時代中期のものと思われる。




1．黒褐色(7.5ＹＲ3/2) 粘性中。孔隙率低。
2．暗褐色（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。
3．暗褐色（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率高。
4．黒褐色（10ＹＲ3/3）粘性弱。孔隙率中。

Ⅳ第４図　ＳＲ16埋甕




Ⅳ第５図　ＳＲ16埋甕実測図

## 2．平安時代の遺構

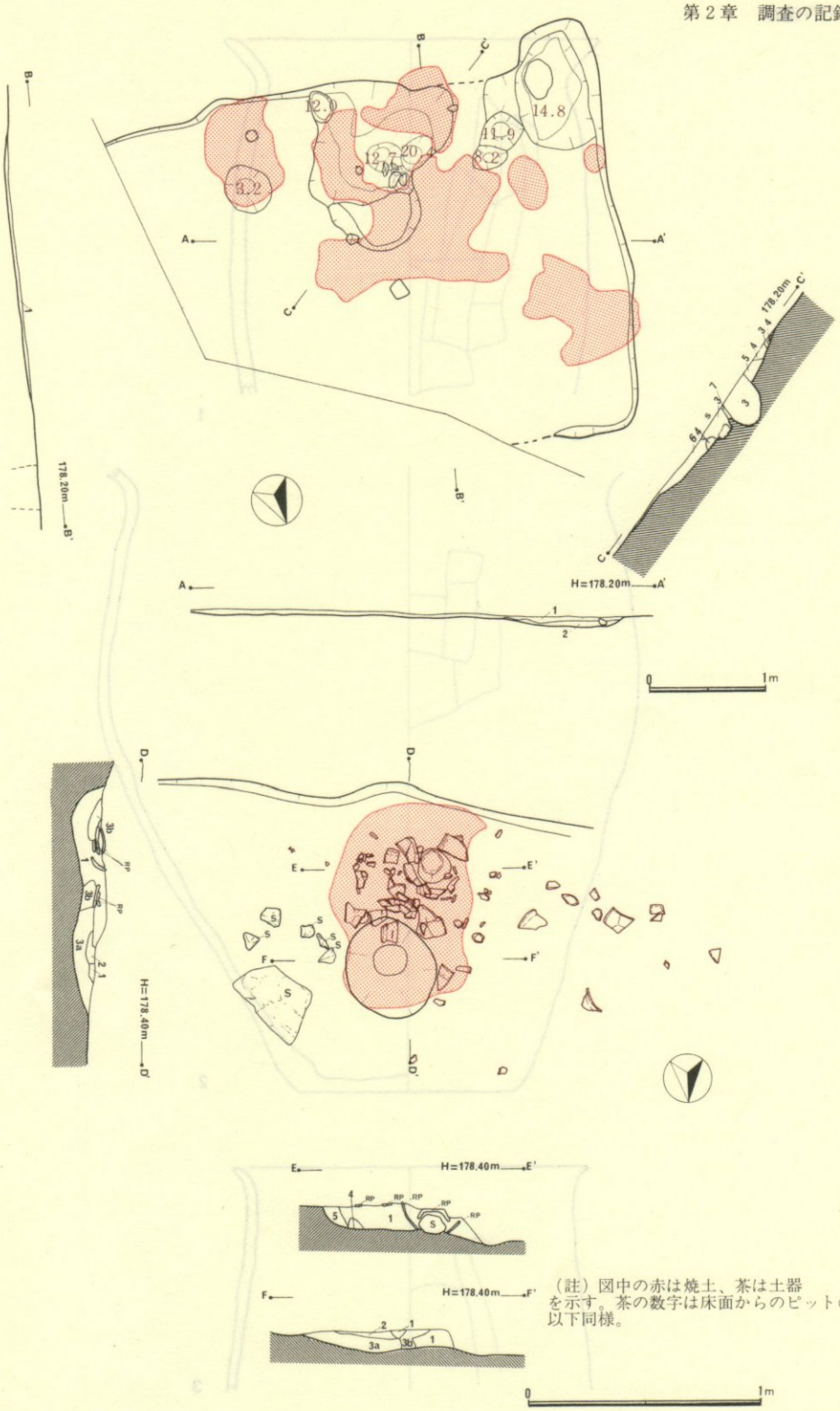
※表内の（　）は測定可能な値を示す。

| Ⅳ第1表 | 挿図番号 | Ⅳ第6・7図 | 図版番号 | Ⅳ図版5 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | S I 01 | 検出地区 | MA50、MA51、MB50、MB51 | |

| 法量 | | 東側壁 | 西側壁 | 南側壁 | 北側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 壁長 | ―――― | 3.5m | (4.3m) ※ | (1.1m) |
| | 壁高 | ―――― | 1.8 ～ 3.1m | 8.0cm | 2.0cm |
| | 壁溝幅 | ―――― | ―――― | ―――― | ―――― |
| | 壁溝深 | ―――― | ―――― | ―――― | ―――― |

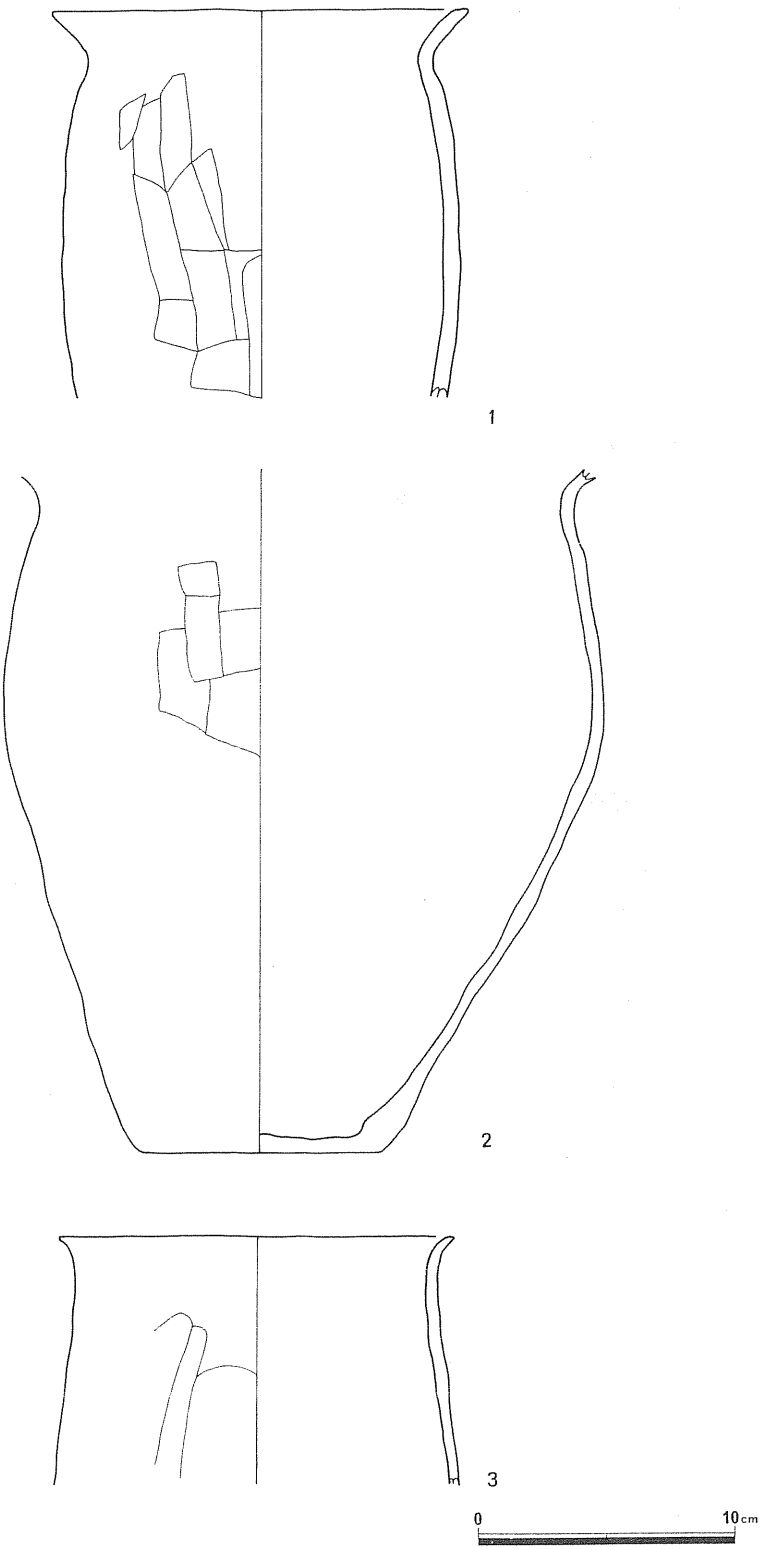
| 形態 | 方形 | 面積 | (11.4)m² | 主軸方向 | N13°E |
|---|---|---|---|---|---|
| かまど | 位置 | 南壁東寄り | | 構築素材 | 粘土（石組？） |

| | |
|---|---|
| プラン確認 | 地山上面において、暗褐色土中に焼土粒を含む方形プランを確認した。 |
| 壁面の状態 | 地山上面において確認されたための掘り込みが、極端に浅く、せいぜい2～8cm程度である。北壁及び南壁の一部及び東壁は調査区範囲外のために検出されなかった。 |
| 覆土 | 1．暗褐色(7.5YR3/3) 粘性強。孔隙率中。パミスを若干含む。焼土粒を若干含む。<br>2．にぶい黄褐色（10YR5/3）粘性強。孔隙率中。1の層に黄褐色土ブロックが混入した層。<br>3．暗褐色（10YR3/3）粘性中。孔隙率中。黄褐色土ブロック僅かに混入。<br>4．赤褐色（5YR4/6）粘性強。孔隙率中。ネバネバしている焼土。<br>5．暗赤褐色（5YR3/6）粘性中。孔隙率低。固くしまっている、焼土非常によく焼けている。<br>6．暗褐色（10YR3/4）粘性中。孔隙率中。黄褐色土ブロック混入。<br>7．暗赤褐色（10YR3/3）粘性中。孔隙率中。焼土が多量に混入。 |
| 床面 | ほぼ平坦で堅固である。床面全体と焼土が広がっており、焼失家屋と思われる。 |
| 壁溝 | 検出されず。 |
| 柱穴ピット | 柱穴と思われるピットは、住居跡南西偶及び南壁ほぼ中央において検出されたピットの2つだけである。また、南壁寄りの床面より土壙状のピットが検出されている。 |
| カマド | 非常に遺存状態が悪い。燃焼部中央に径20cm程の川原石の上に土師器底部をかぶせた支脚が確認されている。<br>1．暗褐色(7.5YR3/3) 粘性中。孔隙率中。S I 01住居跡覆土第1層と同じ土である。焼土粒を僅かに含む。<br>2．褐　色(7.5YR4/6) 粘性弱。孔隙率低。非常に固くしまっており、カマド上部形成土がくずれ落ちたものと思われる。<br>3a．赤褐色（5YR4/6）粘性弱。孔隙率低。ボロボロしている焼土。<br>3b．暗赤褐色（5YR3/4）粘性中。孔隙率中。焼土。<br>4．暗褐色（10YR3/3）粘性中。孔隙率低。しまっており、焼土粒を僅かに含む。<br>5．褐　色（10YR4/4）粘性強。孔隙率低。粘土。 |
| 遺物とその出土状態 | Ⅳ第7図に示す遺物が出土した。ほとんど土師器の甕の破片であり、量的にはあまり多くない。かまど付近から集中的に出土した。 |

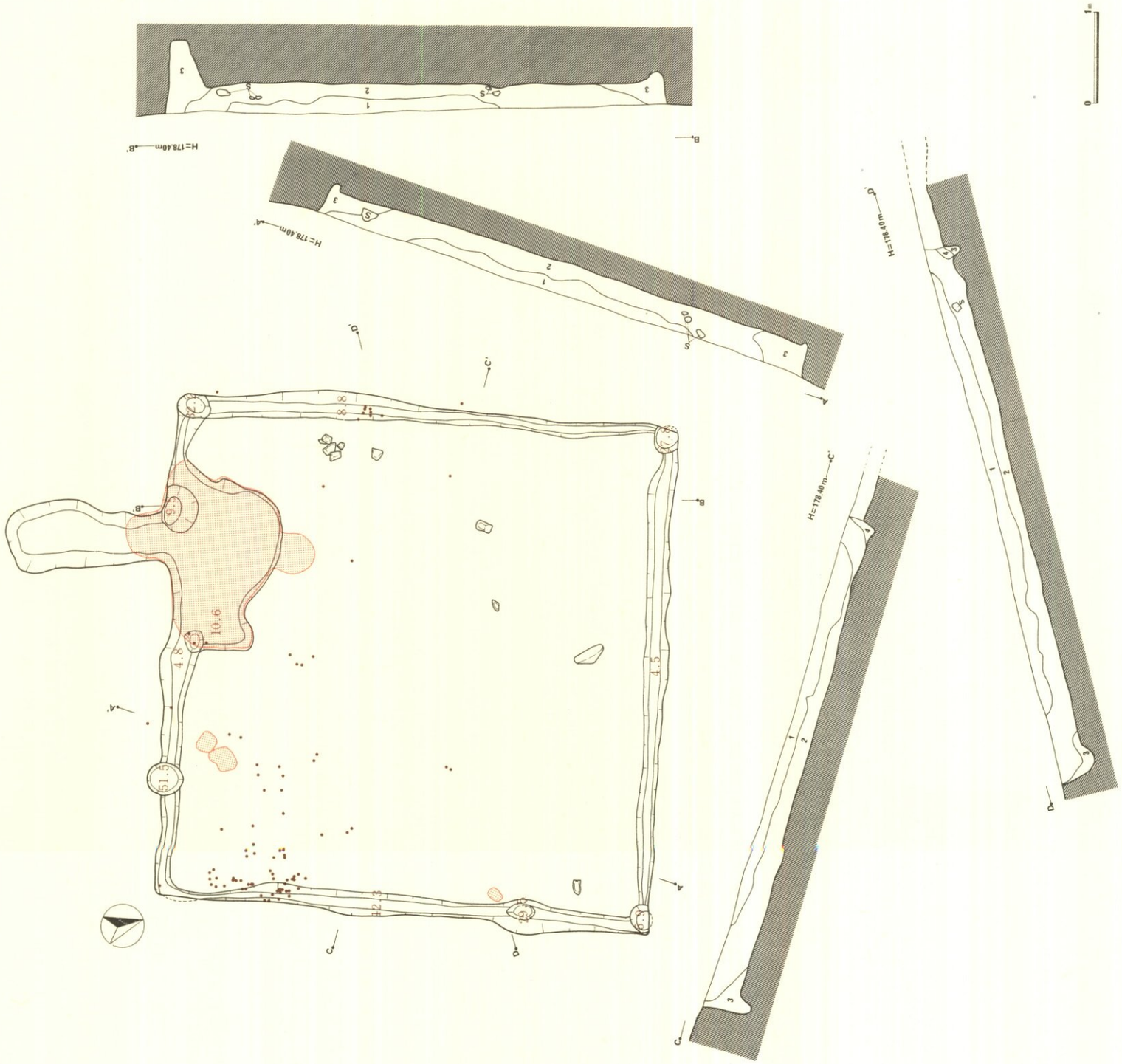



（註）図中の赤は焼土、茶は土器を示す。茶の数字は床面からのピットの深さ。以下同様。

Ⅳ第６図　ＳＩ01竪穴住居跡




Ⅳ第７図　ＳＩ01竪穴住居跡出土遺物




Ⅳ第8図　S I 03竪穴住居跡

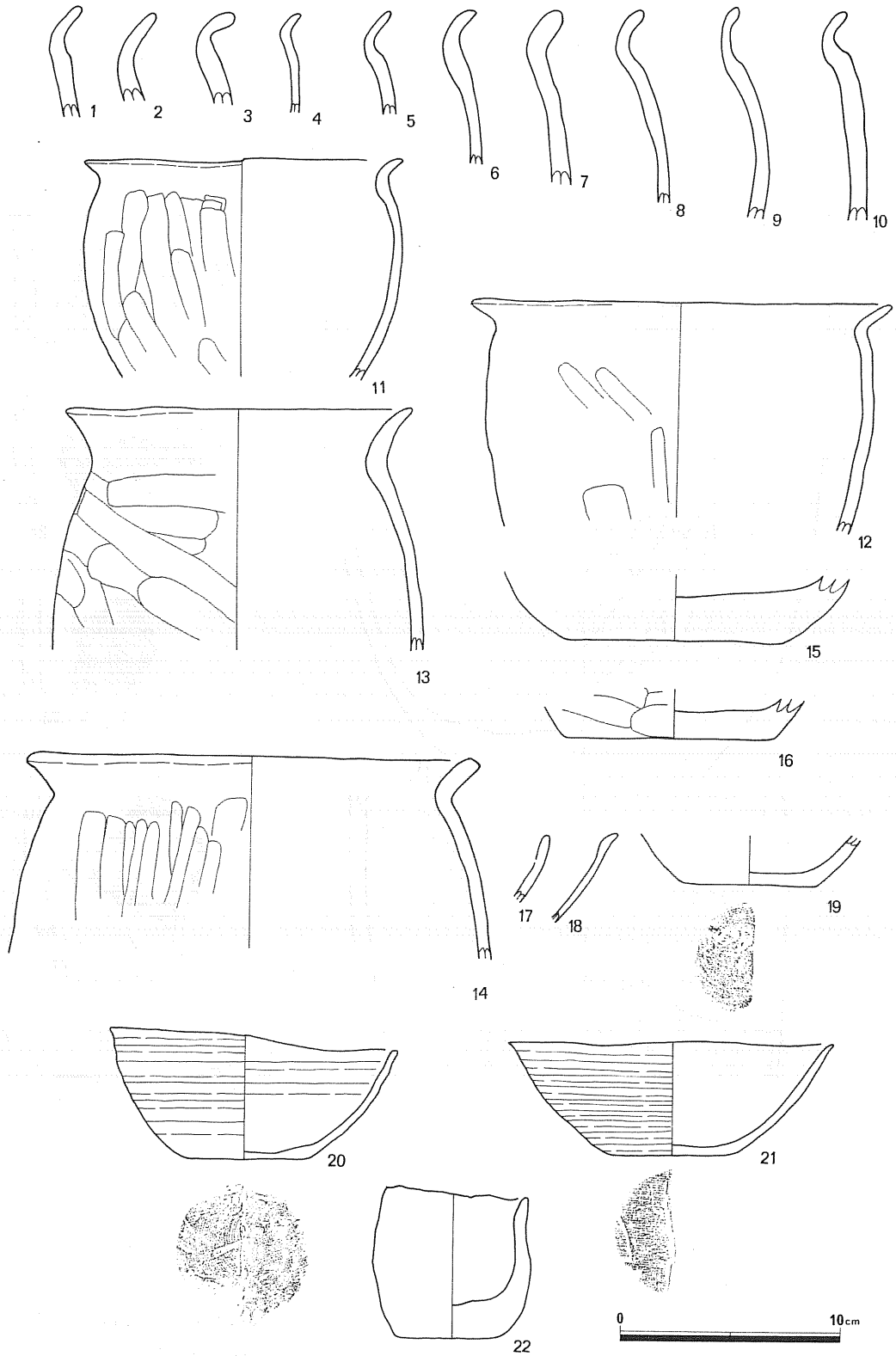
Ⅳ第９図　ＳＩ03竪穴住居跡カマド

| Ⅳ第２表 | 挿図番号 | Ⅳ第８～11図 | 図版番号 | Ⅳ図版６・７ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＩ03 | 検出地区 | ＬＪ48、49、ＭＡ47、48、49、ＭＢ47、48、49 | |

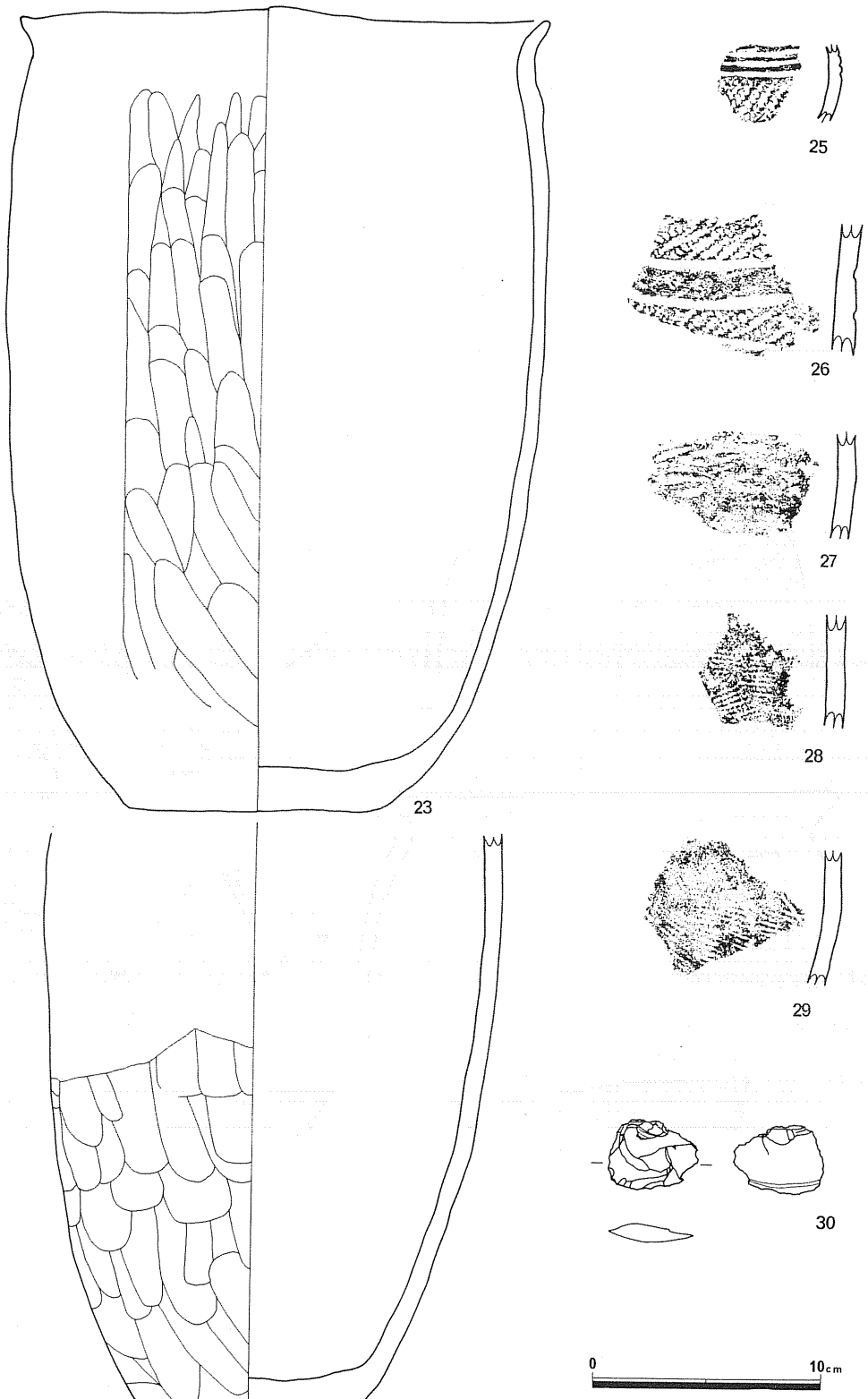
| 法量 | | 東側壁 | 西側壁 | 南側壁 | 北側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 壁長 | 5.5m | 5.6m | 5.5m | 5.6m |
| | 壁高 | 37.1～47.1cm | 3.0～25.2cm | 35.4～38.2cm | 26.9～43.4cm |
| | 壁溝幅 | 6.0～13.0cm | 5.0～13.0cm | 8.0～20.0cm | 5.0～13.0cm |
| | 壁溝深 | 5.5～15.7cm | 4.7～16.4cm | 1.4～ 9.7cm | 4.5～ 9.5cm |

| 形態 | 方形 | 面積 | 32.6m² | 主軸方向 | N125°W |
|---|---|---|---|---|---|
| かまど | 位置 | 南壁西寄り | | 構築素材 | 芯部石組み |

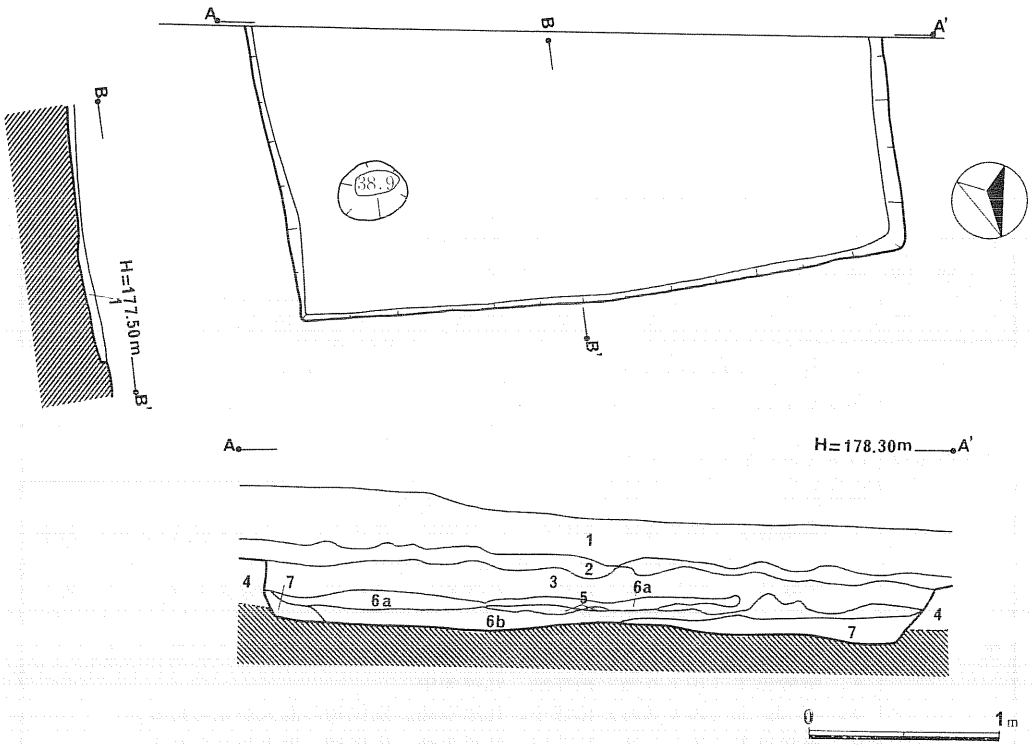
| | |
|---|---|
| プラン確認 | 黄褐色地山面にて、他の遺構（周倒木痕？）と重複した方形プランを確認した。 |
| 壁面の状態 | 壁はしまりがよく、ほぼ垂直に近い立ちあがりをする。 |
| 覆土 | レンズ状の堆積をみせる。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．黒褐色（10ＹＲ2/2）粘性中。孔隙率中。浮石を僅かに含む。<br>2．黒褐色（10ＹＲ2/3）粘性やや強。孔隙率低。かたくしまっている。<br>3．暗褐色（10ＹＲ3/4）粘性中。孔隙率中。<br>4．黒褐色（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率やや高。 |
| 床面 | ほぼ平坦で堅固である。東壁北寄り及び、南壁東寄り付近に若干の焼土範囲を確認している。 |
| 壁溝 | カマド部分を除いて全周する。 |
| 柱穴ピット | 南東偶を除く三偶、南壁の東寄り、西寄り及び、東壁の北寄りの六つの住穴を確認確認している。 |
| カマド | 扁平な川原石を、袖部及び天井部の芯材として構築されたものである。遺存状態は非常によく、また、カマド内、カマド付近より多数の土師器片が出土している。また燃焼部中央付近に、土師器(口縁部欠損)を倒立させて使用した支脚が検出されている。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．暗褐色（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率低。カマド(上部)形成土の残りと思われる。<br>2．にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘性弱。孔隙率低。浮石を僅かに含み、かたくしまっている。<br>3．黒褐色（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。サラサラしていてもろい。<br>4．赤褐色（５ＹＲ4/6）粘性弱。孔隙率低。非常によく焼けている。焼土。<br>5．黄褐色（10ＹＲ5/6）粘性強。孔隙率低。かたくしまっており、カマド形成上の一部と思われる。<br>6．黒褐色（10ＹＲ2/3）粘性弱。孔隙率中。浮石及び焼土を僅かに含む。<br>7．褐　色（10ＹＲ4/6）粘性弱。孔隙率中。ボソボソしている。<br>8．暗褐色（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率低。かたくしまっている。<br>9．褐　色（10ＹＲ4/4）粘性強。孔隙率低。かたくしまっている。<br>10．黒褐色（10ＹＲ2/2）粘性中。孔隙率低。ボソボソしている。<br>11．褐　色(7.5ＹＲ4/4）粘性強。孔隙率中。カマド形成上の一部と思われる。 |
| 遺物とその出土状態 | Ⅳ第10・11図に示す遺物が出土した。遺物出土量は案内Ⅳ遺跡検出遺構中最も多い。土師器甕の破片が大部分であるが、杯が２点と縄文土器数片、石器１点が出土している。 |




Ⅳ第10図　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(1)




Ⅳ第11図　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(2)




Ⅳ第12図　ＳＩ06竪穴住居跡

| Ⅳ第３表 | 挿図番号 | Ⅳ第12図 | 図版番号 | Ⅳ図版８ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＩ06 | 検出地区 | ＭＥ47、48 | |

| | | 東側壁 | 西側壁 | 南側壁 | 北側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| 法量 | 壁長 | (1.6)m | (1.1)m | ―― | 3.2m |
| | 壁高 | (4.7～6.4)cm | (7.3～7.9)cm | ―― | (4.7～6.4)cm |
| | 壁溝幅 | ―― | ―― | ―― | ―― |
| | 壁溝深 | ―― | ―― | ―― | ―― |

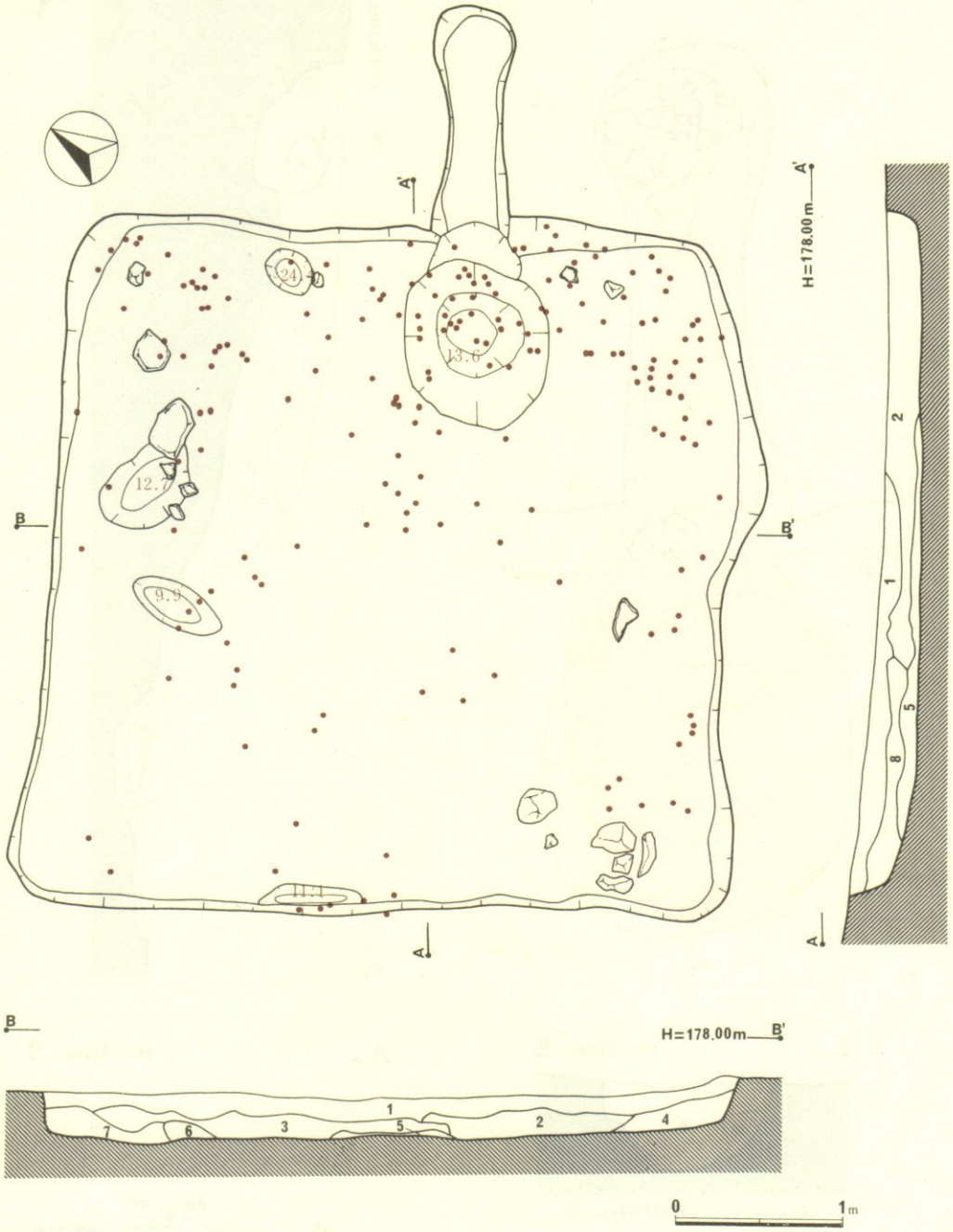
| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 形態 | 方形 | 面積 | (4.2)m² | 主軸方向 | 不明 |
| かまど | 位置 | ―― | | 構築素材 | ―― |
| プラン確認 | 黄褐色土地山面において、浮面を伴なう黒褐色土の方形プランを確認した。 | | | | |
| 壁面の状態 | 掘り込みが浅く、あまりしっかりしていない。 | | | | |
| 覆土 | 1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性弱。孔隙率低、堅く小石を含む。<br>2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率高。<br>3．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率中。<br>4．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性強。孔隙率中。<br>5．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性強。孔隙率低。<br>6a．にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）粘性弱。孔隙率低、火山灰(浮石層)。<br>6b．褐色土（10ＹＲ4/4）粘性弱。孔隙率低、細かい粒子状の火山灰<br>7．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。小石を含む。 | | | | |
| 床面 | ゆるやかであるが凹凸がある。 | | | | |

| Ⅳ第４表 | 挿図番号 | Ⅳ第13～15図 | 図版番号 | Ⅳ図版８・９ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＩ09 | 検出地区 | ＭＣ51、ＭＤ50、51、ＭＥ51 | |

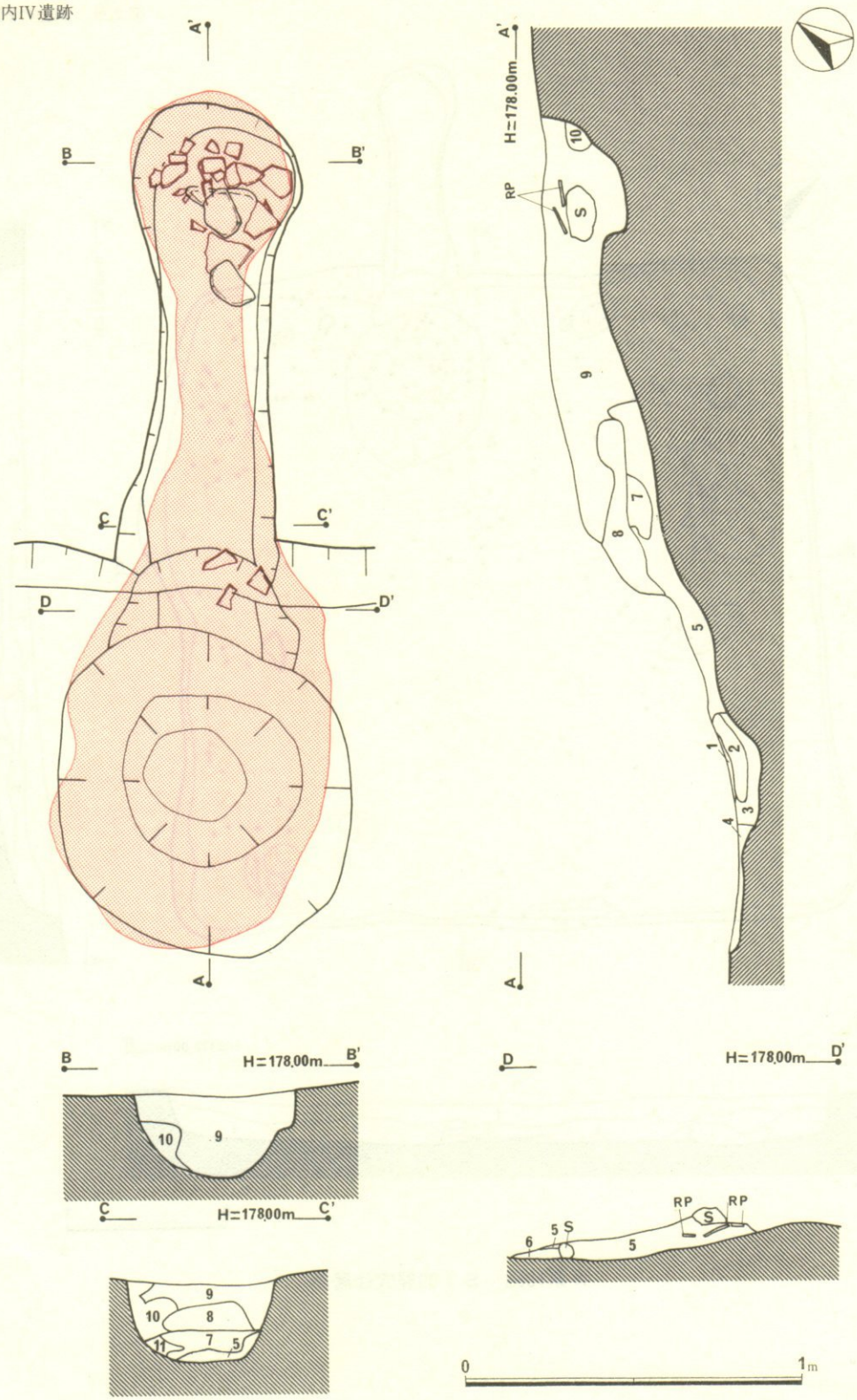
| 法量 | | 北東側壁 | 南西側壁 | 南東側壁 | 北西側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 壁長 | 3.7m | 4.3m | 4.0m | 3.9m |
| | 壁高 | 34.5～54.5cm | 10.4～23.4cm | 27.1～38.0cm | 16.5～43.0cm |
| | 壁溝幅 | | 4～5cm | | |
| | 壁溝深 | | 12.6cm | | |

| 形態 | 方形 | 面積 | 17.3m² | 主軸方向 | N56°E |
|---|---|---|---|---|---|
| かまど | 位置 | 北東壁南東寄り | | 構築素材 | 粘土 |

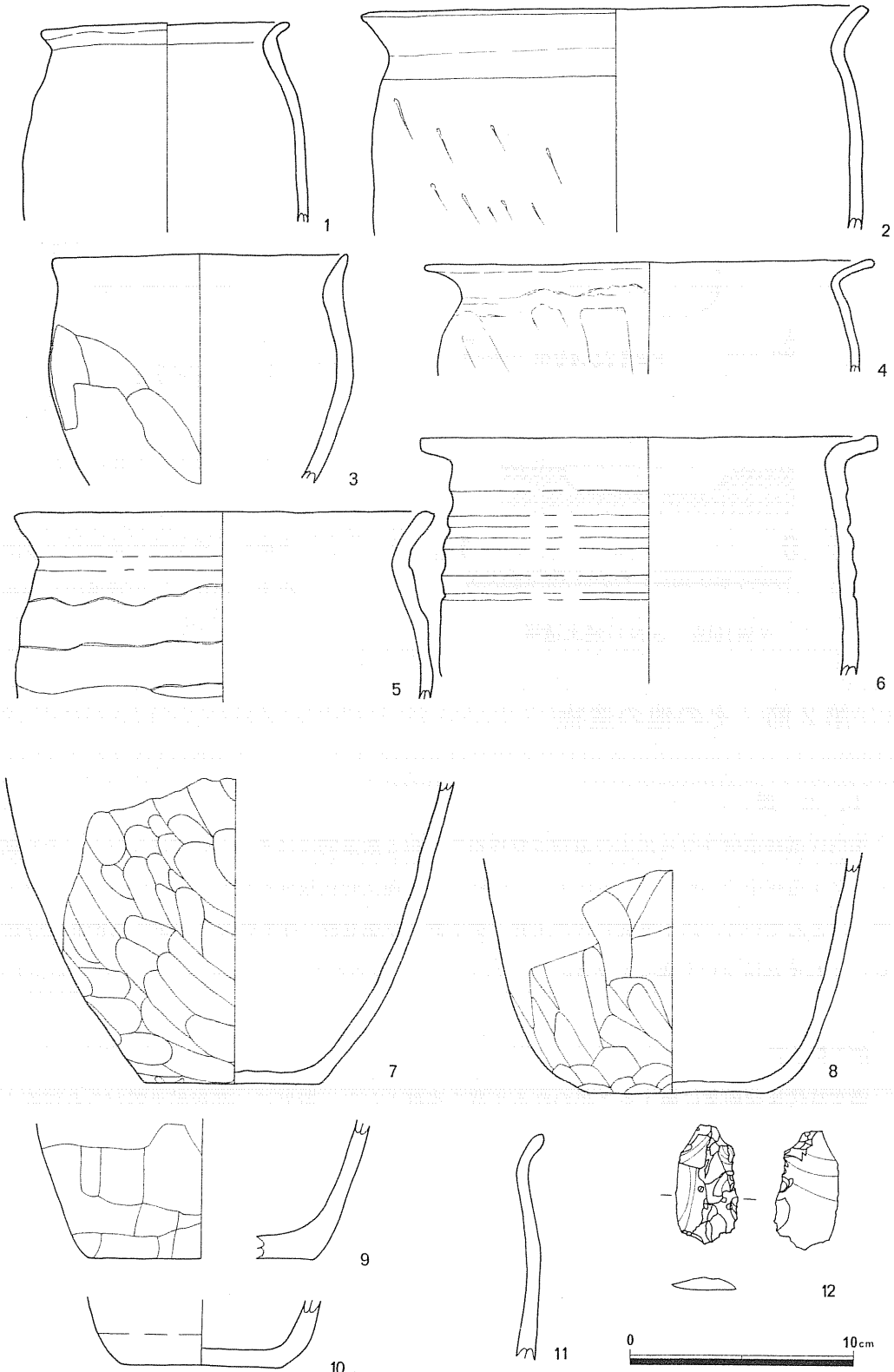
| | |
|---|---|
| プラン確認 | 黄褐色土地山面にて、黒褐色土の方形プランを確認した。 |
| 壁面の状態 | ほぼ垂直に近い立ち上がりをみせる。 |
| 覆土 | 断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。孔隙率低。浮石１㎜～５㎜大混入(２％)、砂質的な黄色土ブロック混入。<br>2．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性強。孔隙率高。浮石若干。黄褐色土ブロック１％と炭化物若干混入。<br>3．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率高。炭化物焼土の混入が見られる。<br>4．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。<br>5．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率高。炭化物の混入が見られる。<br>6．黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘性中。孔隙率高。炭化物、焼土が見られる。<br>7．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率低。炭化物が多く混入している。<br>8．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性強。孔隙率高。黄褐色土粒１％混入。 |
| 床面 | ほぼ平坦で堅固である。 |
| 壁面 | 南西壁中央寄りの一部に検出されている。 |
| 柱穴ピット | 柱穴と認められるものは、北東壁南西寄りに検出されているピットの一つである。その他のピットは木根、撹乱による落土込みと思われる。 |
| カマド | 燃焼部、袖部の遺存状態はあまりよくないが、それに比べて煙道部、煙出口部は掘り込みもしっかりしており、遺存状態は良好である。特に煙出口部は、土師器片及び石を芯材として構築されたものと思われる。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．明褐色土(7.5ＹＲ5/6）粘性弱。孔隙率低。細い砂層。<br>2．暗赤色土（10ＹＲ3/6）粘性弱。孔隙率低。砂層。<br>3．赤黒色と２層の暗赤色土が５対５の割合で混り合っている。<br>4．黒色土（10ＹＲ2/3）粘性強。孔隙率高。<br>5．褐色土(7.5ＹＲ4/4）粘性強。孔隙率中。焼土粒混入。<br>6．黒色土（10ＹＲ1・7/1）酸化鉄。<br>7．暗赤褐色土(2.5ＹＲ3/6）粘性強。孔隙率高。焼土。<br>9．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性中　孔隙率低。炭化物混入。小石混入(５㎜大)。<br>9．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性弱。孔隙率高。<br>10．褐色土(7.5ＹＲ4/6）粘性強。孔隙率低。<br>11．暗褐色土(7.5ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率高。炭化物。焼土混入。 |
| 遺物とその出土状態 | Ⅳ第15図に示す遺物が出土した。ほとんどが土師器甕の破片である。その頸部はくびれの明確なものが多い。 |



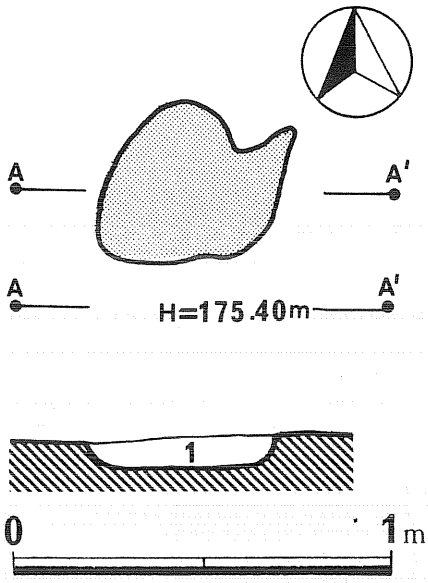

Ⅳ第13図　ＳＩ09竪穴住居跡



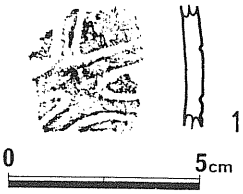

Ⅳ第14図　ＳＩ09竪穴住居跡カマド




Ⅳ第15図　ＳＩ09竪穴住居跡出土遺物




Ⅳ第16図　ＳＮ11焼土遺構




Ⅳ第17図　ＳＮ11焼土遺構遺物

3．時期不明の遺構

**ＳＮ11焼土遺構**　（第16・17図）

ＮＧ55地区より検出された。焼土範囲は46cm×42cmである。上面から縄文時代後期の土器が出土したが、この遺構のものかどうかは不明である。

## 第２節　その他の遺物

### 1．土　器

案内Ⅳ遺跡遺構外から出土の遺物は整理箱で５箱と数量的には多いものではないが、今回調査した４遺跡中では最も出土量が多い。時期的にも縄文時代後期初項から平安時代までバラエティにとんでいる。以下縄文時代の土器を第Ⅰ群及び第Ⅱ群、弥生時代の土器を第Ⅲ群に分類し、それぞれについて記してみる。

**第Ⅰ群土器**

縄文時代後期前葉に属すると思われる土器を本群とした。器形は一部壺形土器がある程度で大部分が鉢形土器である。以下第１類～第11類に分類される。

第１類土器　（Ⅳ第19図３・Ⅳ第21図２～10）

地文として縄文を施した後、沈線で文様を描く。地文は単節ＲＬのものと無節Ｌのものがあり、縦位または斜位に回転施文される。沈線は太めのものと細めのものがある。第19図１は、４単位の波状口縁を持つ土器で、波頂部に沿って２条の沈線を描き、波頂部間でその下部に弧状に沈線を施文する。その下部に２条の沈線を廻し、上部の弧状沈線文に対応して一段と曲線

半径の小さい弧状沈線文を施す。さらにその下に２条の沈線を描く。弧状沈線文の左部と沈線文間は変形Ｓ字状やＣ字状の沈線で連結させる。

第２類土器　（Ⅳ第21図１）

地文として単節ＲＬ縄文を斜位回転施文したのちに、縦位波状沈線文を施したもの。１片のみの出土である。

第３類土器　（Ⅳ第21図11～25）

４単位の小波状口縁を持ち、頸部がややくびれ、口縁がゆるやかに外反する土器である。口縁部は２条の沈線で構成され、両端で弧状に結ばれているもの、片側は離れたままのものがあり、間に円形の沈線文を持つものも多い。その下の口頸部は無文であり、胴上半部にさらに口縁部文様体と同じ文様体を施す。文様体は凸帯部が強調されているものも多い。

第４類土器　（Ⅳ第22図26～64、Ⅳ第23図65～69）

縄文が施文されず、細沈線で入組文や幾何学的文様を施文する土器である。口縁部が肥厚して凸帯となっているもの(27)もある。

第５類土器　（Ⅳ第23図70～81）

磨消縄文手法により、縄文部を凸帯として浮きたたせている土器である。口縁部は波状を呈する。

第６類土器　（Ⅳ第19図４）

４つの波状口縁を呈し、波頂部下には円形や縦位に隆帯を貼りつけ整形後、単節ＲＬ縄文を口唇部は口縁部に沿って横位に、口縁部は縦位に回転施文し、その後箆状工具で太目の沈線が施文されな土器である。

第７類土器　（Ⅳ第23図82）

折り返し口縁を持つ土器で、単節ＬＲ縄文を折り返し部は横位に、胴部は縦位に回転施文している。

第８類土器　（Ⅳ第23図83～88）

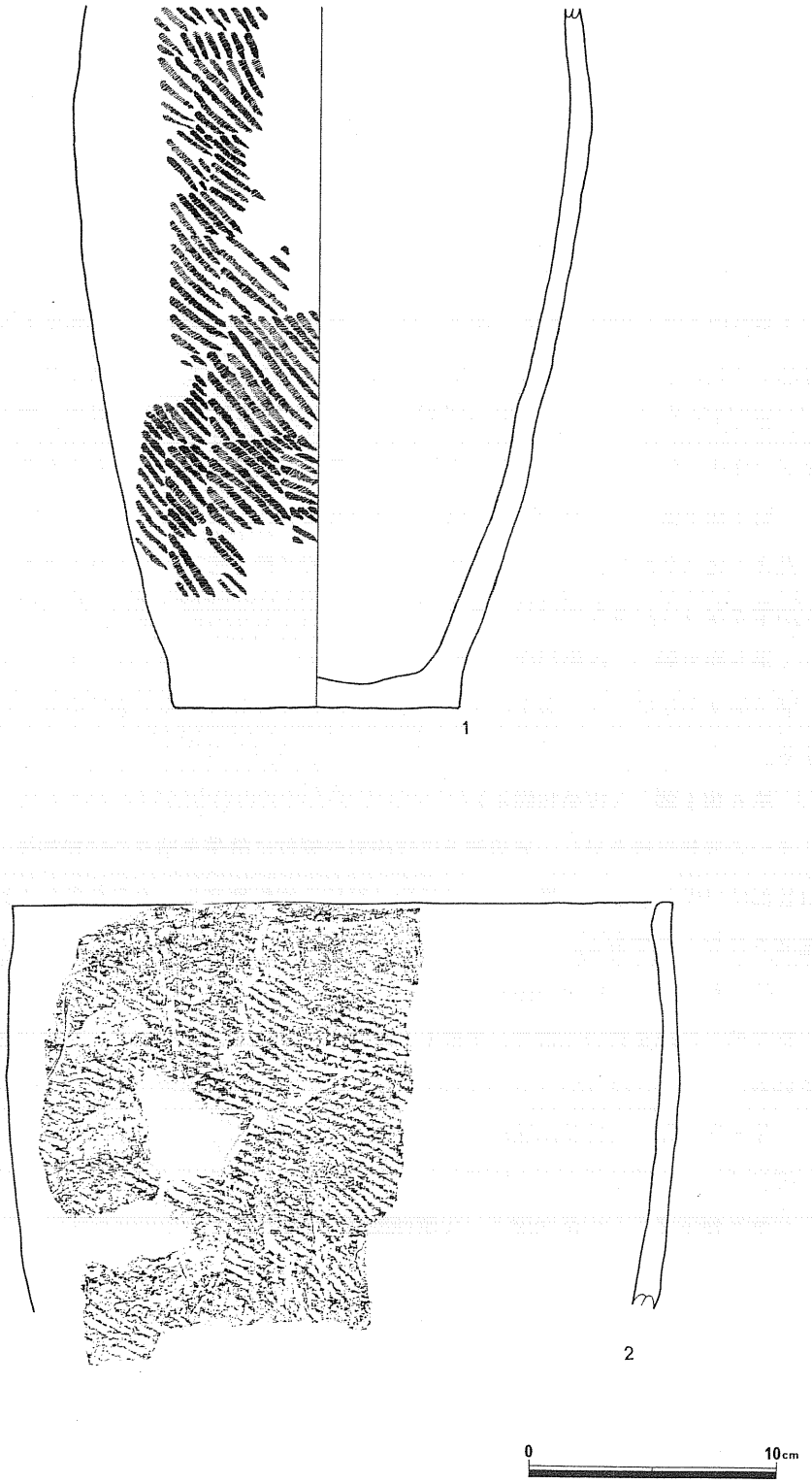
網目状撚糸文を施すものを本類とした。いずれもＲ撚糸文である。

第９類土器　（Ⅳ第19図５・Ⅳ第23図89～104・111）

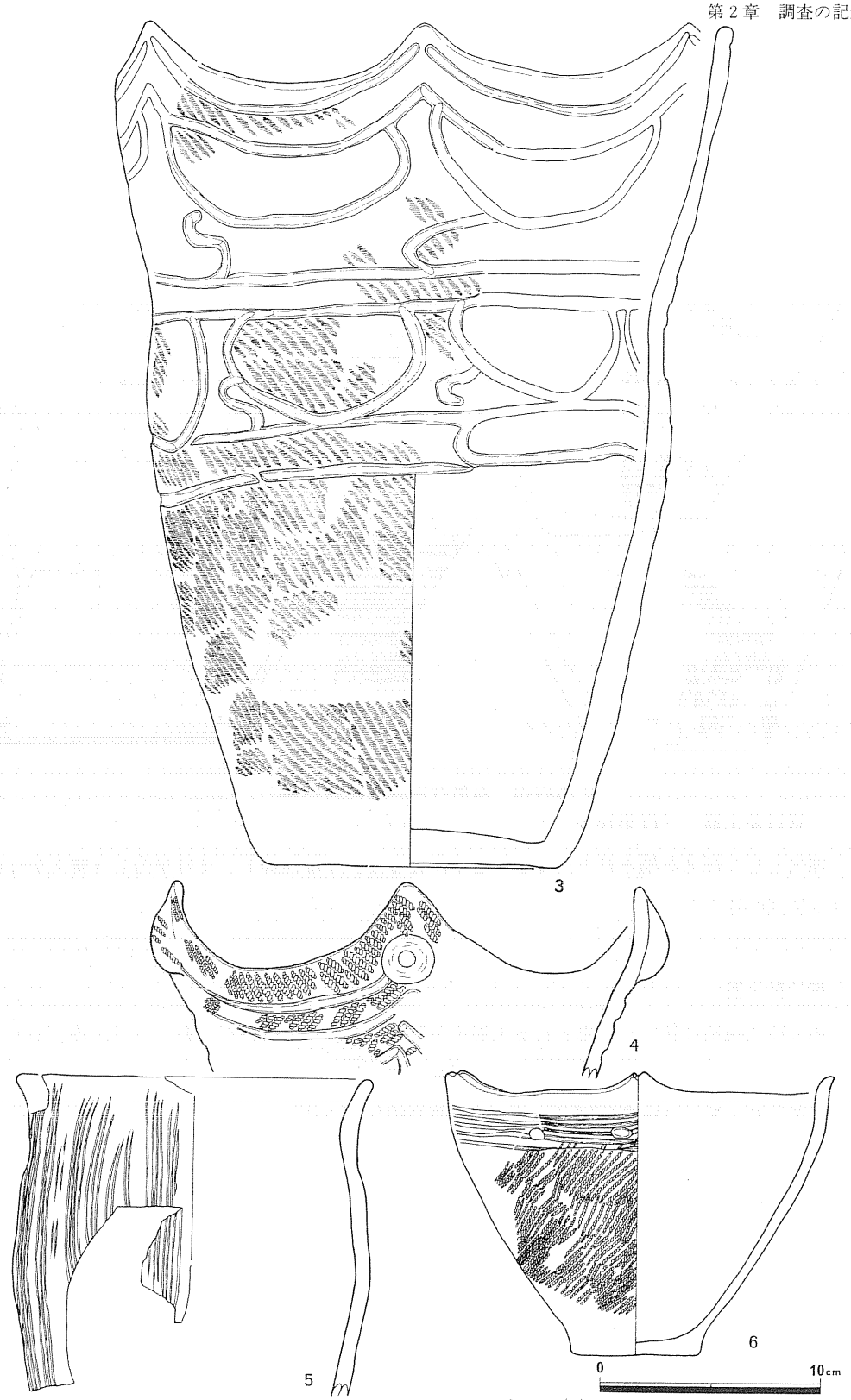
条痕文を施すものを本類とした。条痕間が広いもの（５、89）と狭いものがある。また条痕を直交や斜交させたもの(98～103)もある。

第10類土器　（Ⅳ第23図112・113）

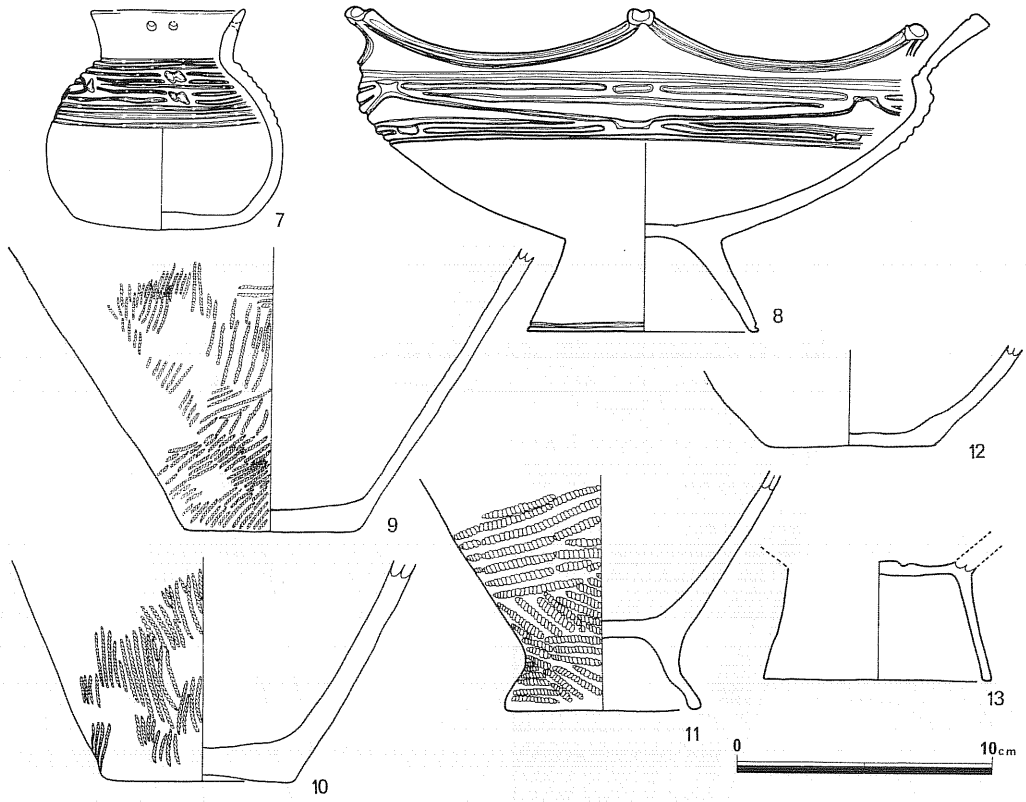
撚糸文を施したものを本類とした。いずれも非常に細かいＲ撚糸文が施される。




Ⅳ第18図　遺構外出土土器実測図(1)




Ⅳ第19図　遺構外出土土器実測図(2)




**Ⅳ第20図　遺構外出土土器実測図(3)**

第11類土器　（Ⅳ第18図１・２）

地文として縄文が施されているものを本類とした。１は無節Ｌ、２は単節ＬＲ縄文がそれぞれ縦位回転施文される。

**第Ⅱ群土器**

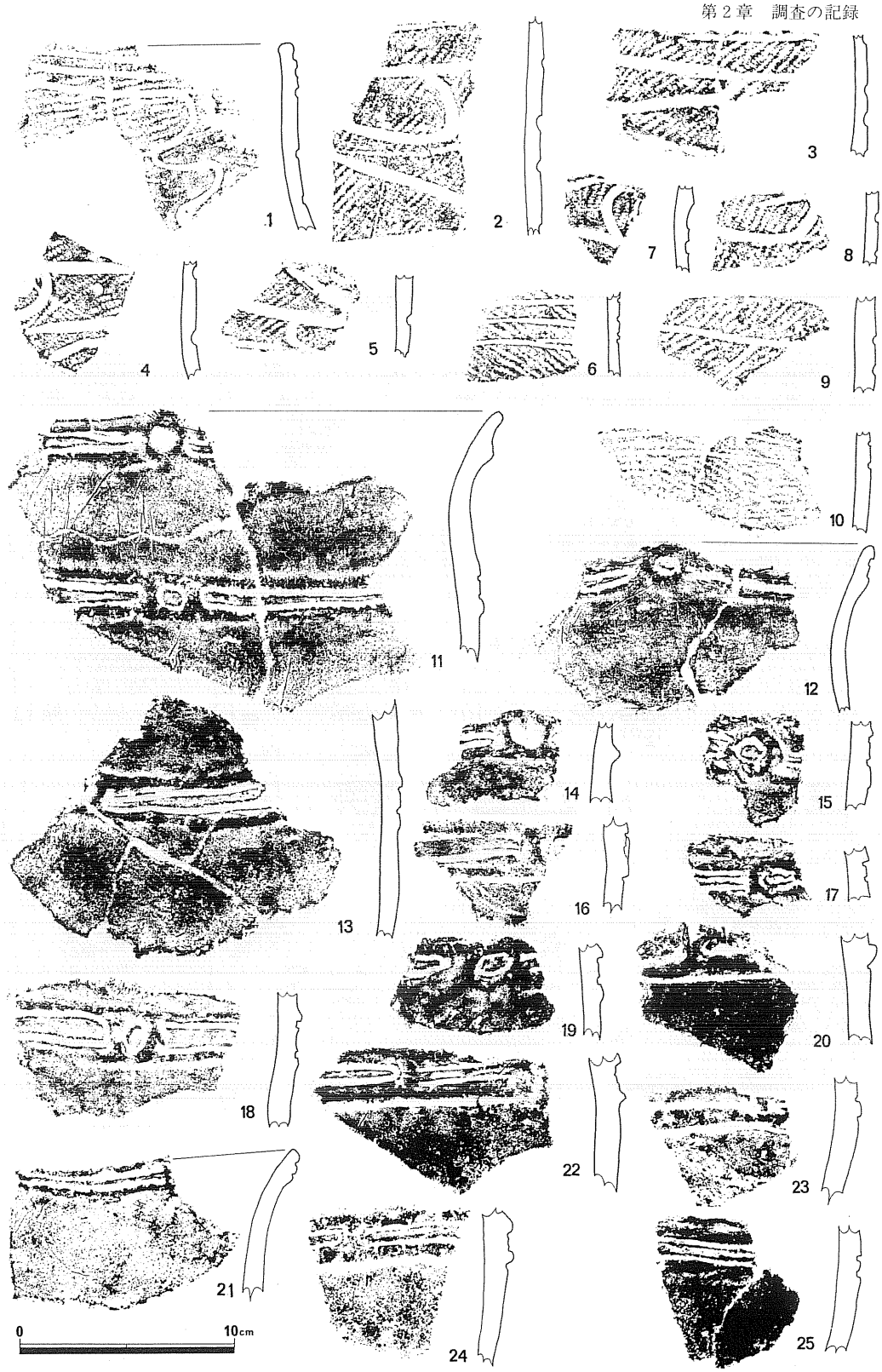
縄文時代晩期に属すると思われる土器を本類とした。器形は鉢形土器、台付土器、壺形土器などバラエティに富む。以下第１類～第６類まで分類される。

第１類土器　（Ⅳ第24図114～121、Ⅳ第25図161・162）

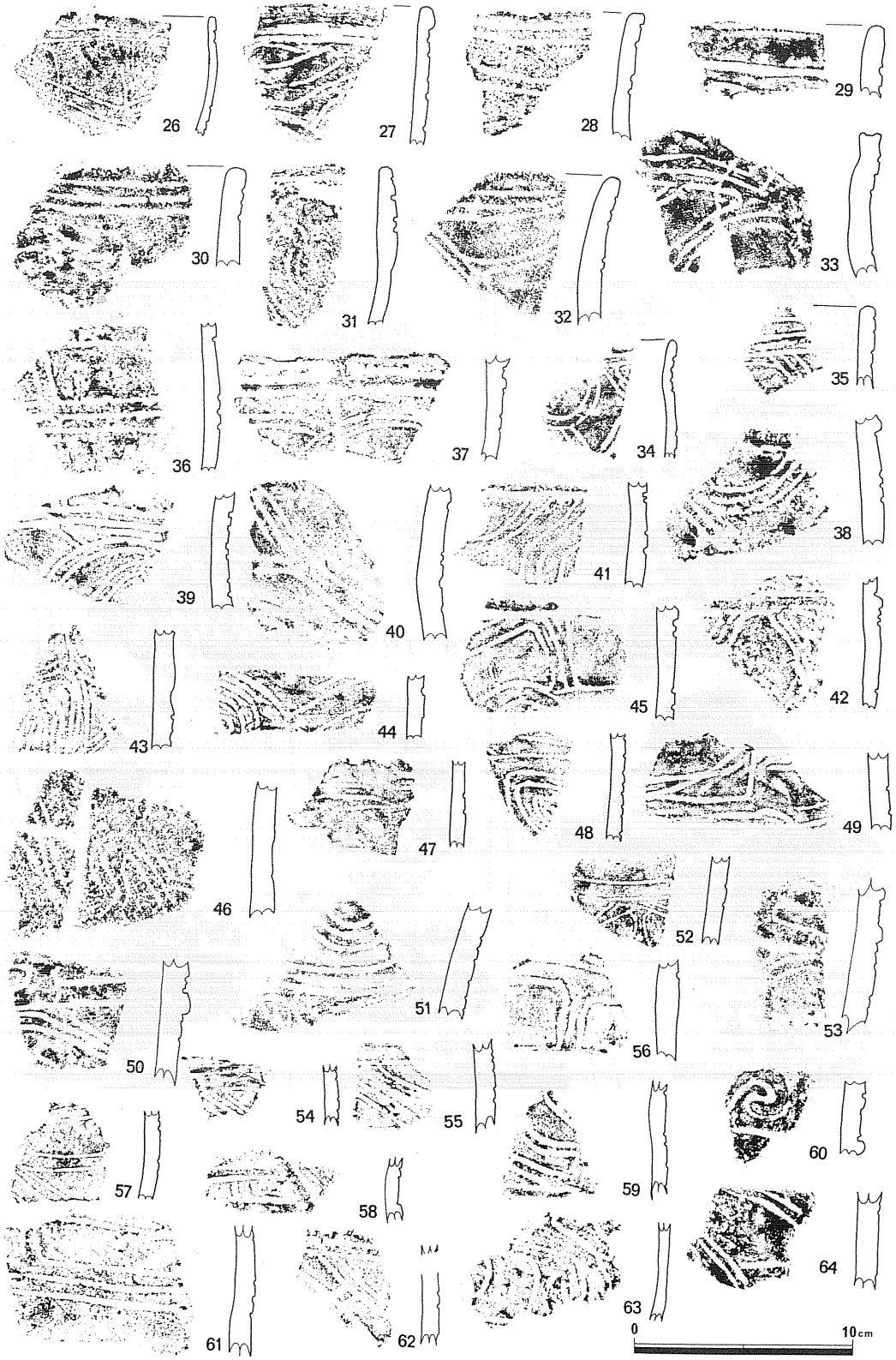
口縁部に２～６条平行沈線を持つ土器である。口縁部にＢ突起を持つもの(114・115)もあり、口唇部に刻目が施されるもの(118）もある。161・162は台付土器の台部であり、１～２条沈線が廻らされる。

第２類土器　（Ⅳ第19図６、Ⅳ第20図７、Ⅳ第24図122～136、149～151、Ⅳ第25図137・163・164）

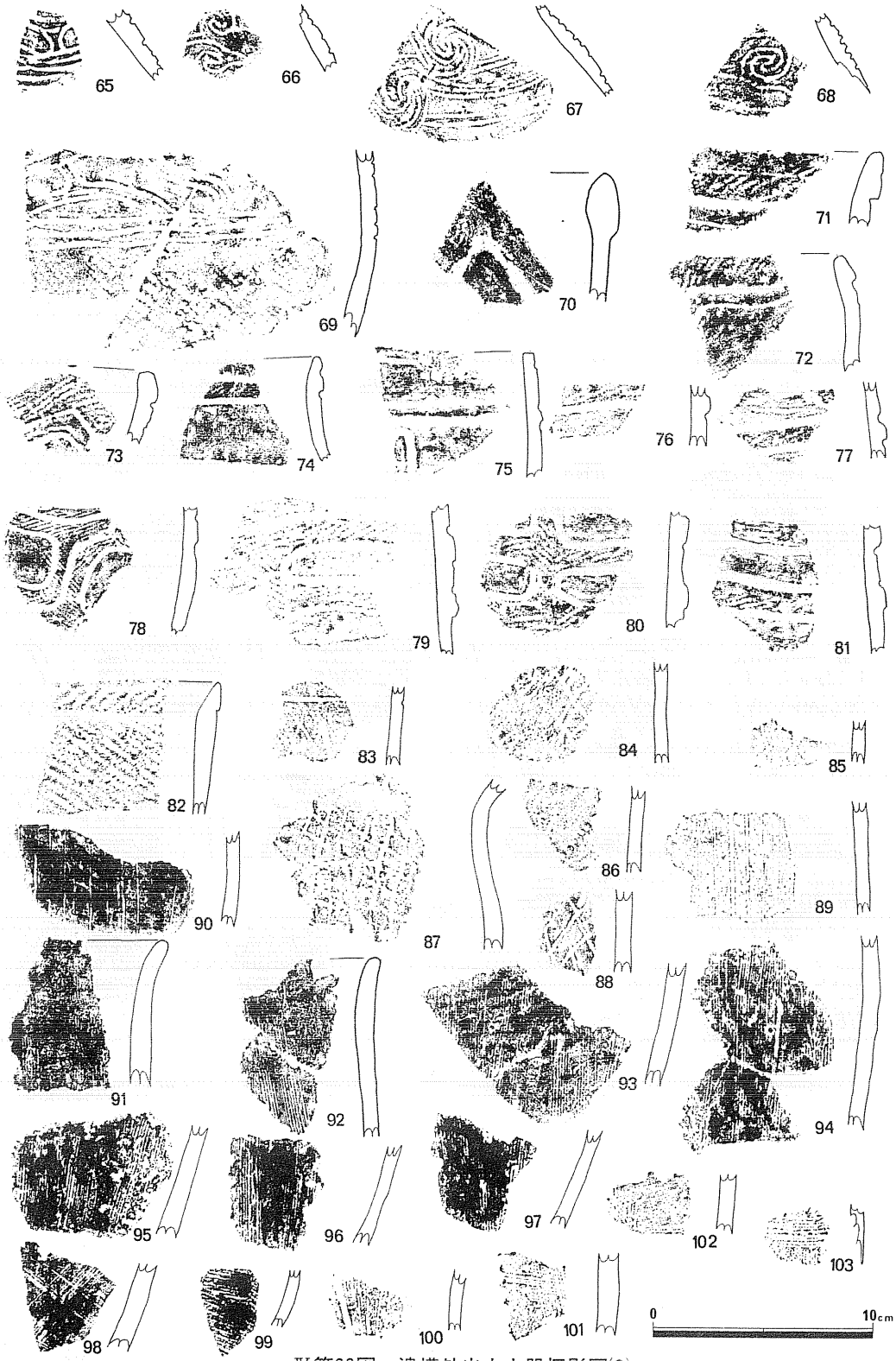
沈線で平行工字文系（平行工字文・平行×字状文）を施す土器を本類とした。



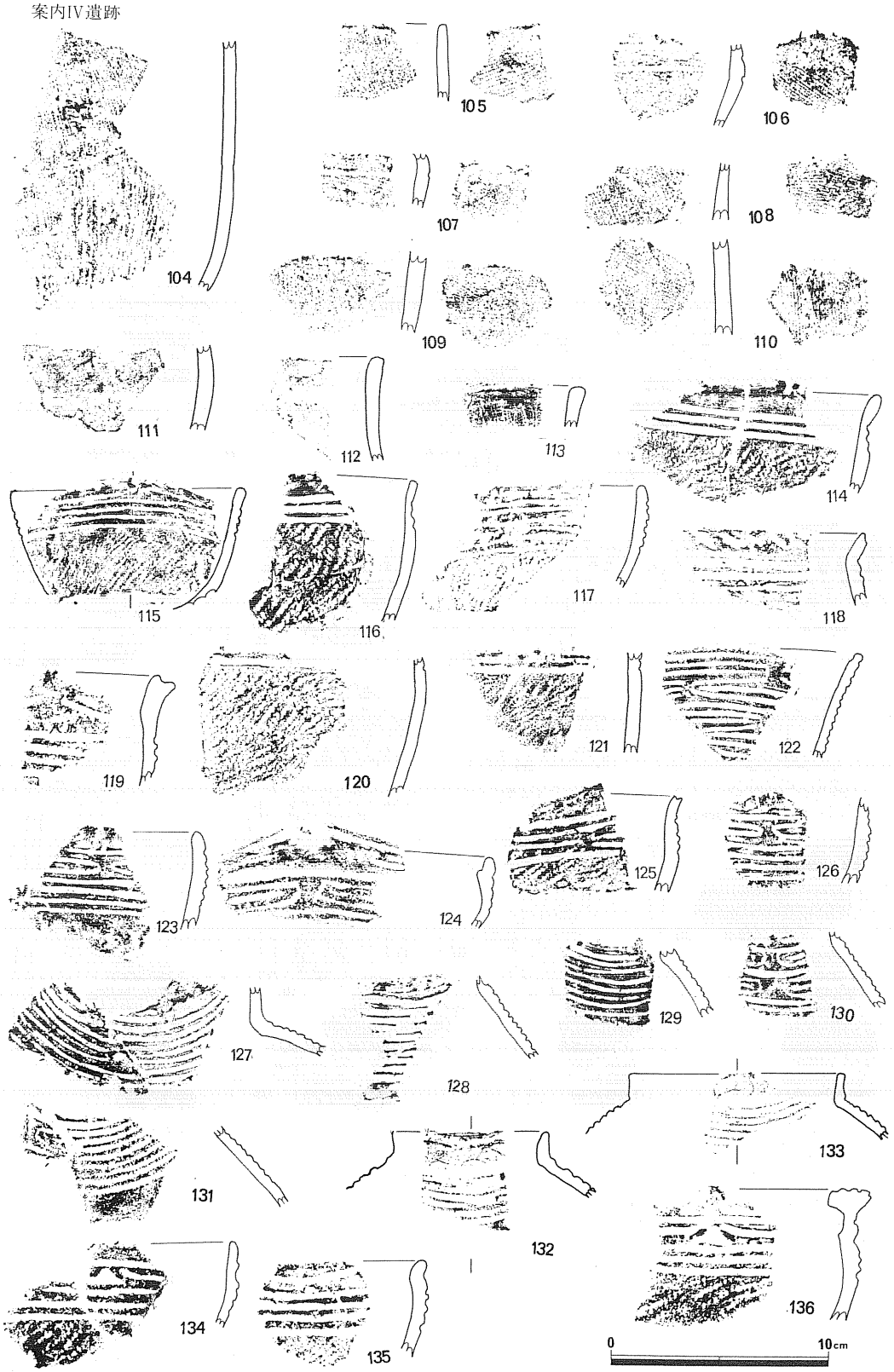

Ⅳ第21図　遺構外出土土器拓影図(1)



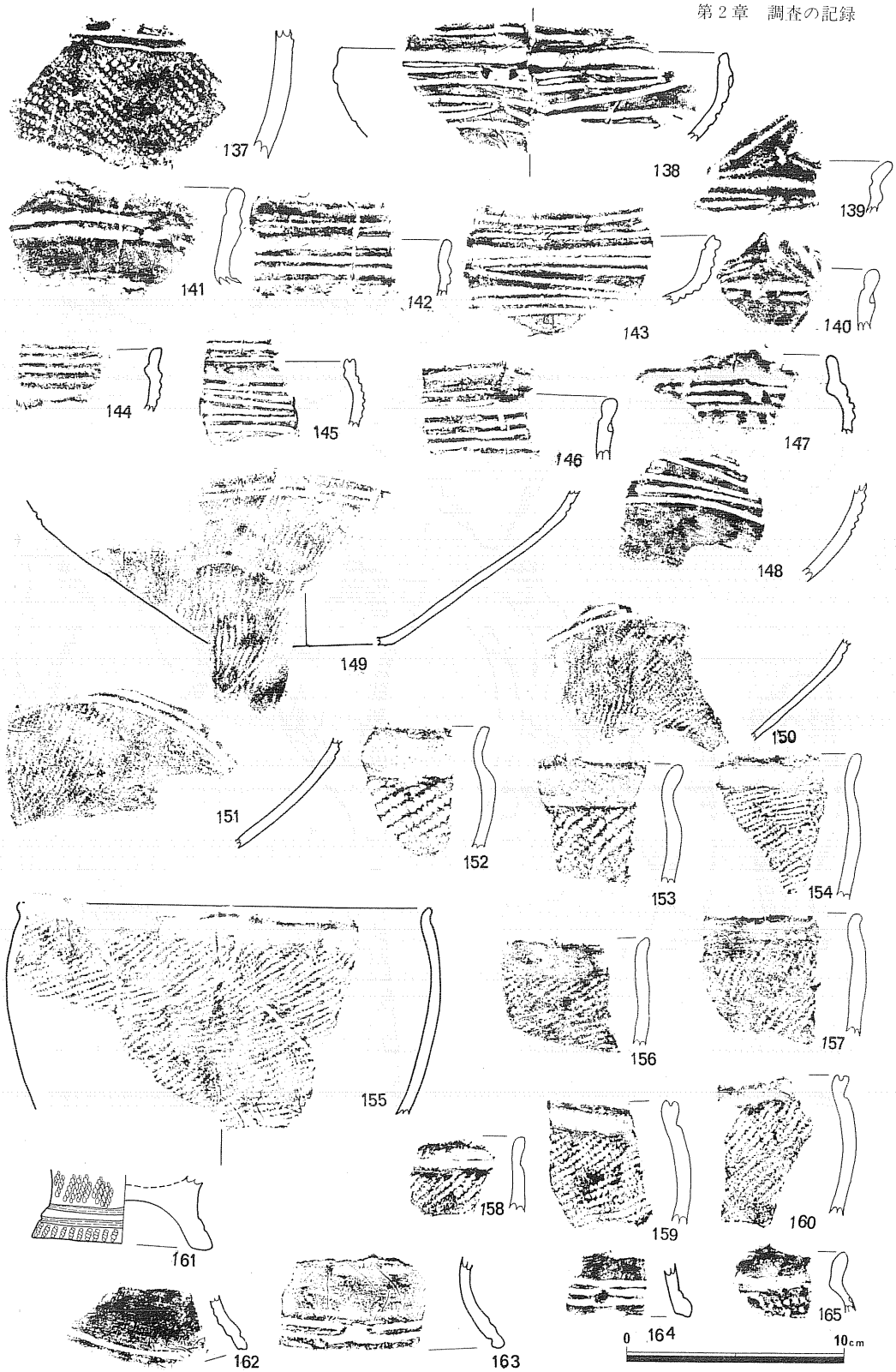

Ⅳ第22図　遺構外出土土器拓影図(2)



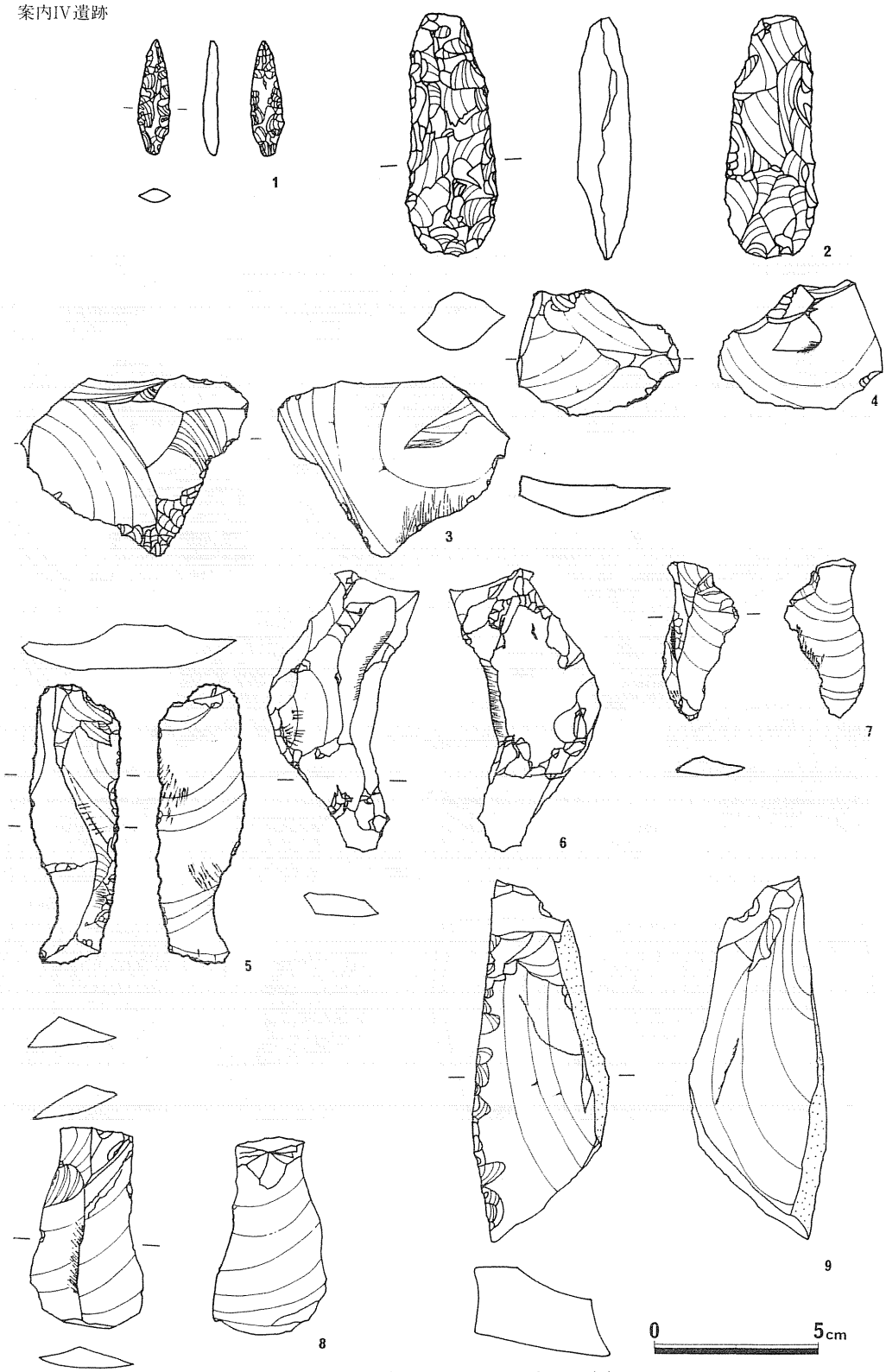

Ⅳ第23図　遺構外出土土器拓影図(3)



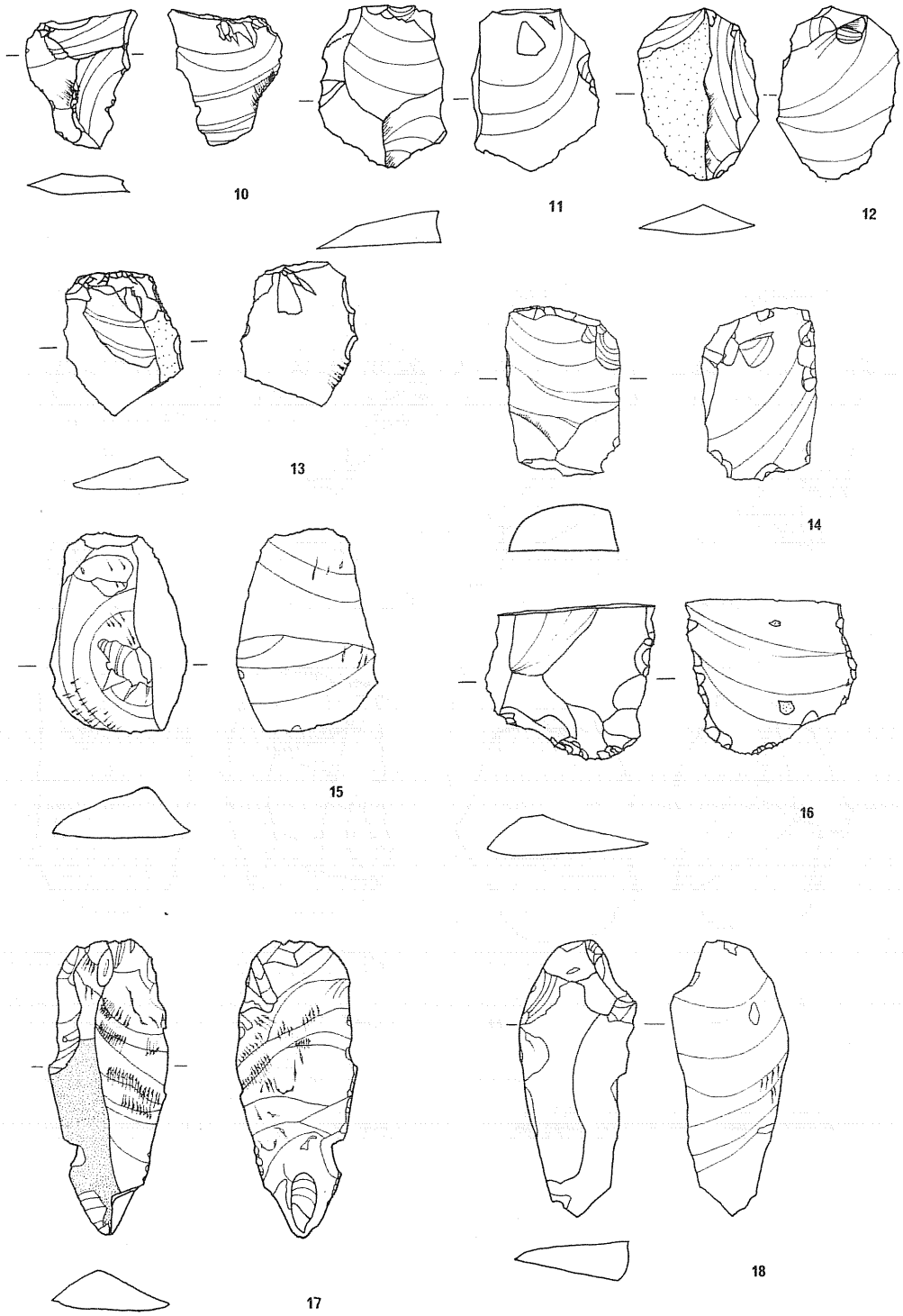

Ⅳ第24図　遺構外出土土器拓影図(4)



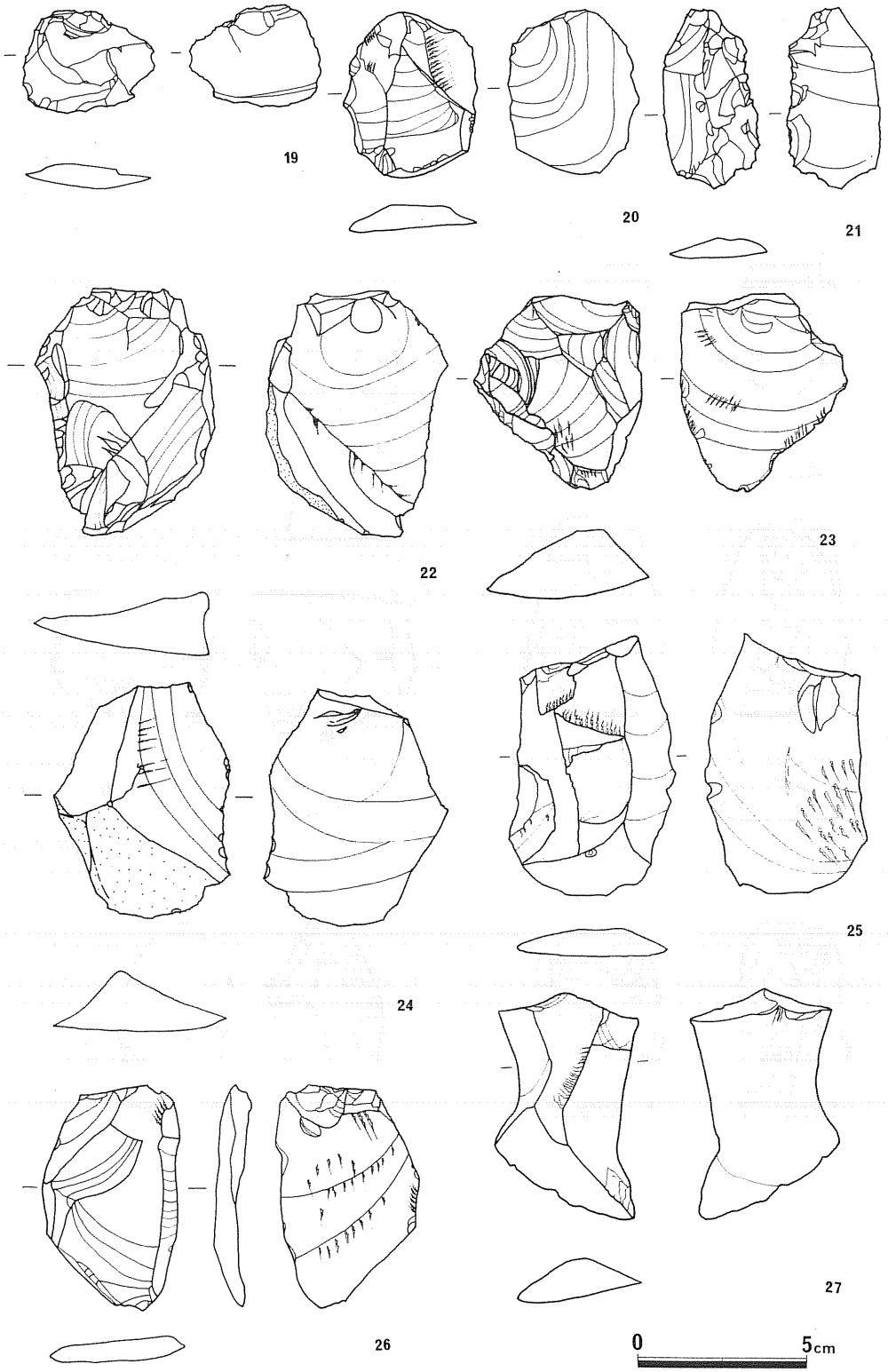

Ⅳ第25図　遺構外出土土器拓影図(5)



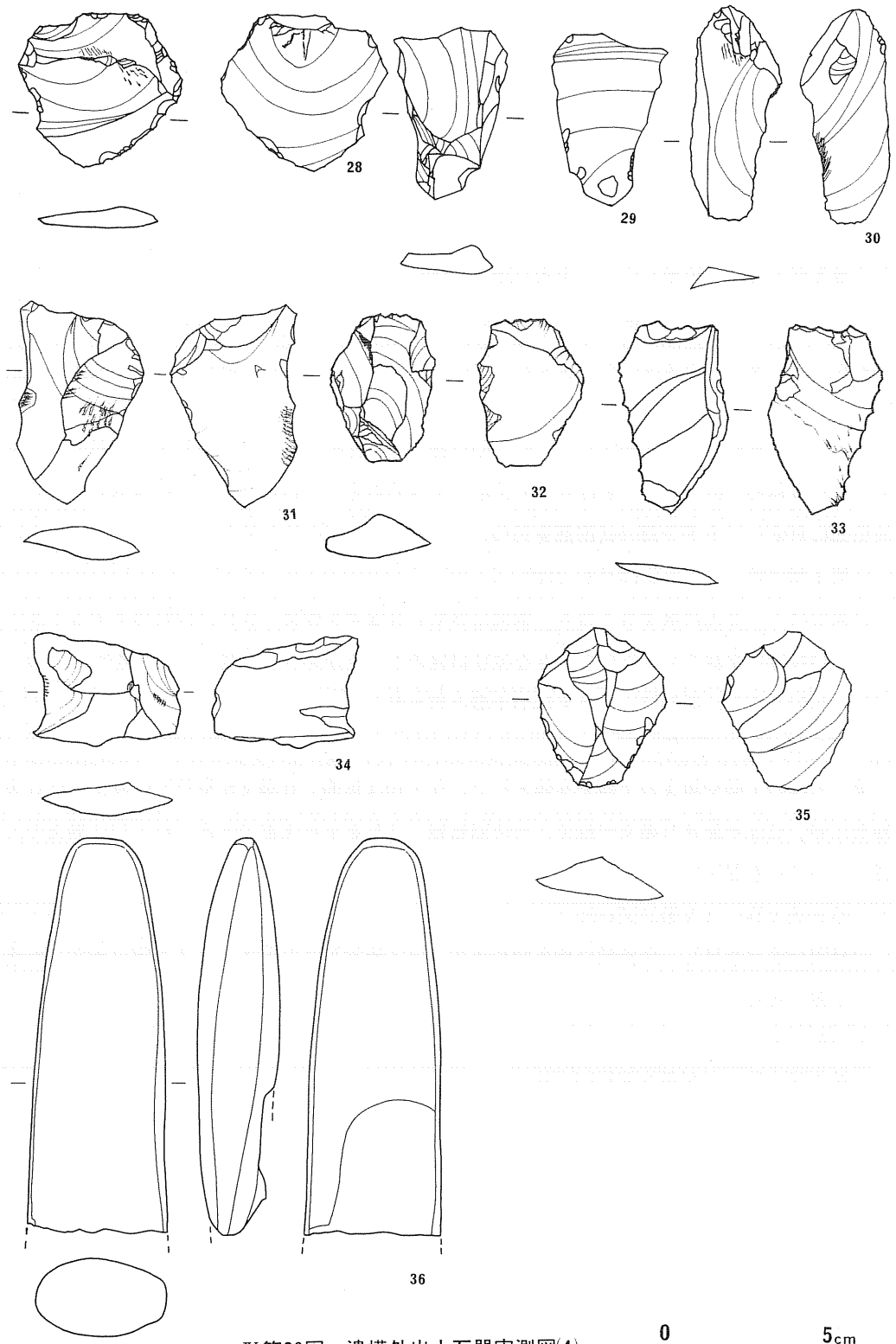

Ⅳ第26図　遺構外出土石器実測図(1)




Ⅳ第27図　遺構外出土石器実測図(2)




Ⅳ第28図　遺構外出土石器実測図(3)




Ⅳ第29図　遺構外出土石器実測図(4)

工字文土器は、縦沈線で短絡させたものは少なく、刺突文（6・7・125・127・132・135・163・164）や三角形沈文（134・136）で短絡されるものが多い。163は壺形土器の口縁部で、口唇部内側にも沈線が廻らされる。164は台付土器の台部である。2本の平行沈線を途中で接触させてX字状とした平行X字状文を施したものもあり、平行沈線が2本のもの（123・126）と3本のもの（122・124・130・131）とがある。平行X字状文土器では浮彫的手法を用いたものはほとんどない。

第3類土器　（Ⅳ第20図8、Ⅳ第25図138～148）

平行沈線および沈線の結節部から左右両側に放射状に三角形の変形工字文が施されるものを本類とした。変形工字文は沈線によるものがほとんどで、単位文様の区切れ目である結節部には削り込みのまくれを利用して2個一対の粘土粒が貼り付けられる。口縁部は山形の波状口縁をもつものと平縁のものとがあり、口唇上や口縁内側に沈線を廻らすものもある。器形は浅鉢形や台付浅鉢形土器が多い。8は6つの頂部に刻みのある波状口縁をもつ台付浅鉢形土器で、波頂部に対応して上下2段の結節部を持つ。

第4類土器　（Ⅳ第25図152～160）

口縁部に1～2cmの無文帯を持ち、胴部に単節ＬＲ縄文を横位、斜位に回転施文する土器である。口縁部は平縁のものとゆるやかな波状口縁のものとがあり、口唇上に沈線を廻すもの（159・160）もある。器形はいずれも鉢形土器と思われる。

第5類土器　（Ⅳ第20図9～13）

縄文のみの土器や無文の土器を本類とした。9・10は単節ＬＲ縄文が横位回転施文される深鉢形土器、11は単節ＲＬ縄文が縦位、斜位回転施文される台付土器である。12・13は無文の土器で、いずれも器厚は薄い。

第6類土器　（Ⅳ第25図165）

口縁部は波状を呈し、口縁部に横方向のナデによる無文帯を形成させ、その下に刺突文を施した土器である。

第Ⅲ群土器

第1類土器　（Ⅳ第24図105～110）

表裏に刷毛目文様を施した土器である。平行沈線が施されるが、個体数が少ないため、全体の器形、文様構成等は不明である。弥生時代終末期のものと思われる。

## 2．石　器

石器の出土点数は37点と少なく、しかもそのほとんどが不定形石器である。Ⅳ第26図～Ⅳ第29図に示す石器が出土した。

石鏃　（Ⅳ第26図1）　凸基有茎鏃に属するもので、石質は頁岩である。

石箆　（Ⅳ第26図２）　両面加工であり、ほぼ左右対称で下方がやや広がり厚い形態をしている。石質は頁岩である。

石錐　（Ⅳ第26図３）　片面加工により細身に尖らせており、石質は頁岩である。

不定形石器　（Ⅳ第26図４～９、Ⅳ第27図、Ⅳ第28図、Ⅳ第29図28～35）　明確な二次調整が認められない剥片を不定形石器として一括した。石質は頁岩か硬質泥岩である。

磨製石斧　（Ⅳ第29図36・37）　36は刃部を欠いているが、どちらも両側縁および頭部ともに研磨された定角式磨製石斧である。石質は36が安山岩、37が緑泥片岩である。

**案内Ⅳ遺跡及び周辺遺跡竪穴住居跡比較表**

| 遺跡名 | 遺構名 | 柱穴 | | | かまど | | | | かまど持つ壁と、持たない壁との比 | 壁溝 | | 遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 不明 | 有 | 不明 | 位置 | 煙道 | | 有 | 無 | |
| 案内Ⅳ | SI 01 | ○ | | | ○ | | 南 | 短 | 1.00 | ○ | | 全て土師器甕。 |
| | SI 03 | ○ | | | ○ | | 南 | 長 | (1.54) | | ○ | 土師器甕が大部分。坏２点。 |
| | SI 06 | | | ○ | | ○ | | | | | ○ | |
| | SI 09 | | | ○ | ○ | | 東 | 長 | 1.02 | | ○ | 土師器甕が大部分。 |
| 案内Ⅴ | SI 02 | | | ○ | ○ | | 東 | 短 | | | ○ | 土師器甕の破片数点出土。 |
| | SI 03 | ○ | | | ○ | | 東 | 長 | | ○ | | 土師器甕が大部分。 |
| | SI 05 | ○ | | | ○ | | 東 | 長 | | | ○ | 土師器甕が大部分。 |
| 縦案内Ⅲ | SI 001 | ○ | | | ○ | | 南 | 長 | 0.97 | ○ | | 土師器甕が大部分。砂底２点。須恵器３点。 |
| | SI 002 | | | ○ | ○ | | 南 | 中 | 0.90 | | ○ | 土師器甕が大部分。坏３点。須恵器３点。砂底１点 |
| | SI 006 | | | ○ | ○ | | 東 | 短 | 0.93 | ○ | | 土師器甕が大部分。砂底１点。須恵器２点。 |
| | SI 009 | | | ○ | ○ | | 西 | 短 | 0.88 | ○ | | 土師器甕が大部分。砂底１点。鉄器１点。 |
| | SI 010 | ○ | | | ○ | | 南 | 長 | 1.00 | ○ | | 土師器甕が大部分。砂底３点。須恵器壺２点。鉄器５点。 |
| | SI 011 | | | ○ | ○ | | 南 | 長 | (0.89) | | ○ | 土師器甕が大部分。砂底２点。須恵器２点。鉄器１点。 |
| | SI 012 | | | ○ | ○ | | 南 | 中 | 0.97 | | ○ | |
| | SI 014 | | | ○ | ○ | | 南 | 中 | 1.08 | ○ | | 土師器甕が大部分。砂底２点。木葉痕１点。須恵器２点。鉄器１点。 |
| | SI 015 | | | ○ | ○ | | 南 | 中 | 1.03 | | ○ | 全て土師器甕。砂底３点。 |
| | SI 016 | ○ | | | ○ | | 南 | 中 | 1.27 | わずか○ | | 全て土師器甕。 |
| | SI 017 | | ○ | | ○ | | 南 | 長 | 0.98 | ○ | | 全て土師器甕。 |
| | SI 018 | | | ○ | ○ | | 南 | 短 | 1.09 | ○ | | 全て土師器甕。 |
| | SI 019 | ○ | | | ○ | | 南 | 長 | 1.01 | ○ | | 土師器甕が大部分。砂底１点。須恵器５点。 |

# 第3章　ま　と　め

案内IV遺跡から検出された遺構は以下のとおりである。縄文時代土壙1基、同埋甕1基、同焼土遺構1基、平安時代竪穴住居跡4軒。

平安時代竪穴住居跡について隣接の遺跡も含めて比較検討してみよう。同じ花輪高位段丘上にある案内III(東北縦貫道関係として調査分)、案内V遺跡から平安時代の竪穴住居跡が数軒検出されており、これらと比較して表にまとめたのが下記の表である。重複が認められるのは案内IIIのSI010と011のみであるが、平面形でみてみると壁の長さが長く隅も角ばったものと壁が短く隅が丸いものの2タイプが認められ、柱穴も壁寄りのものと壁からやや離れたものがある。かまどをみても位置が東、西、南とあり、煙道部も短く急激に立ち上がるものと長くゆるやかなものとその中間のものがある。以上のことからみてこの地域は平安時代において何時期かにわたり居住されていたと思われる。また、遺跡名では案内III、V、VIとしたものの、これら遺跡間においてほぼ同時期に営まれた竪穴住居跡もあると思われる。

本遺跡でも遺構の検出こそないものの台地縁辺部から縄文時代の遺物が多数出土しており、この点では案内V、北ノ林I、北の林II遺跡などとともに縄文時代の遺構は地形を考慮して台地縁辺部に、平安時代の遺構は台地内部に構築されるといったパターンがみられる。

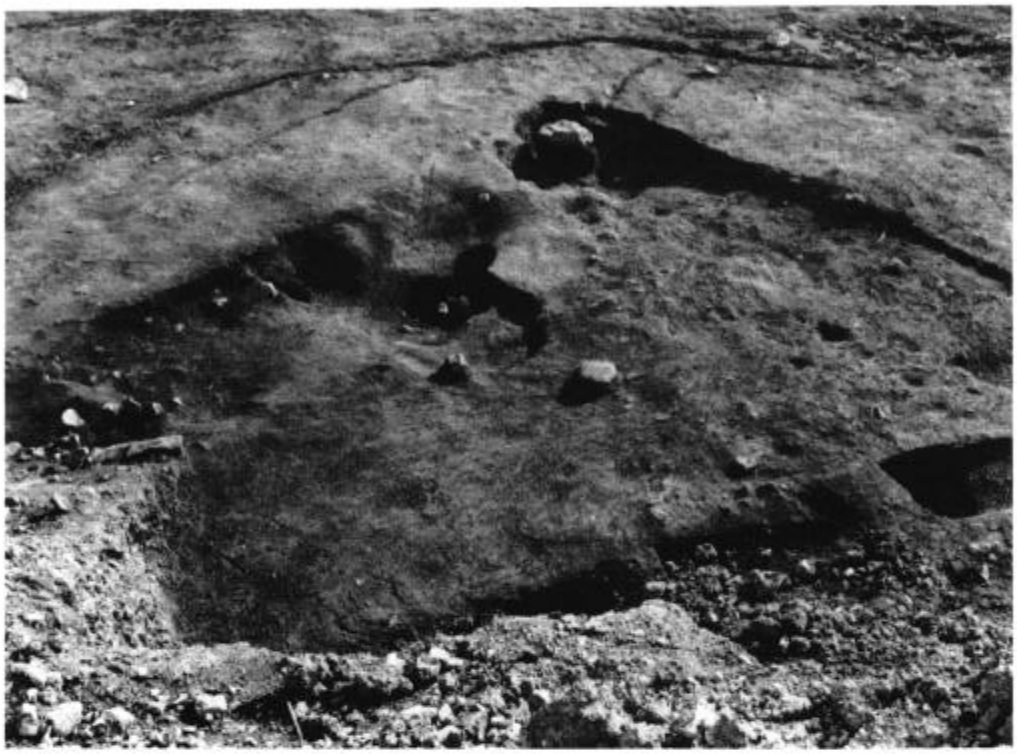
案内付近は数多くの調査がなされたとは言っても、すべて道路建設に関わる調査のためごく一部を細長く発掘したにすぎない。そのため台地に構成される遺跡の分布パターンが上記のようであるとすれば、案内IV遺跡の西南側に縄文時代、東側には平安時代の遺構群が分布していると思われる。

Ⅳ図版1　案内Ⅳ遺跡航空写事　（左が南）

Ⅳ図版２　案内Ⅳ遺跡近景　上　発掘前　（西►東）
下　発掘後　（西►東）

Ⅳ図版3　上　ＳＫ12土壙　（東→西）
　　下　ＳＲ16埋甕　（東→西）

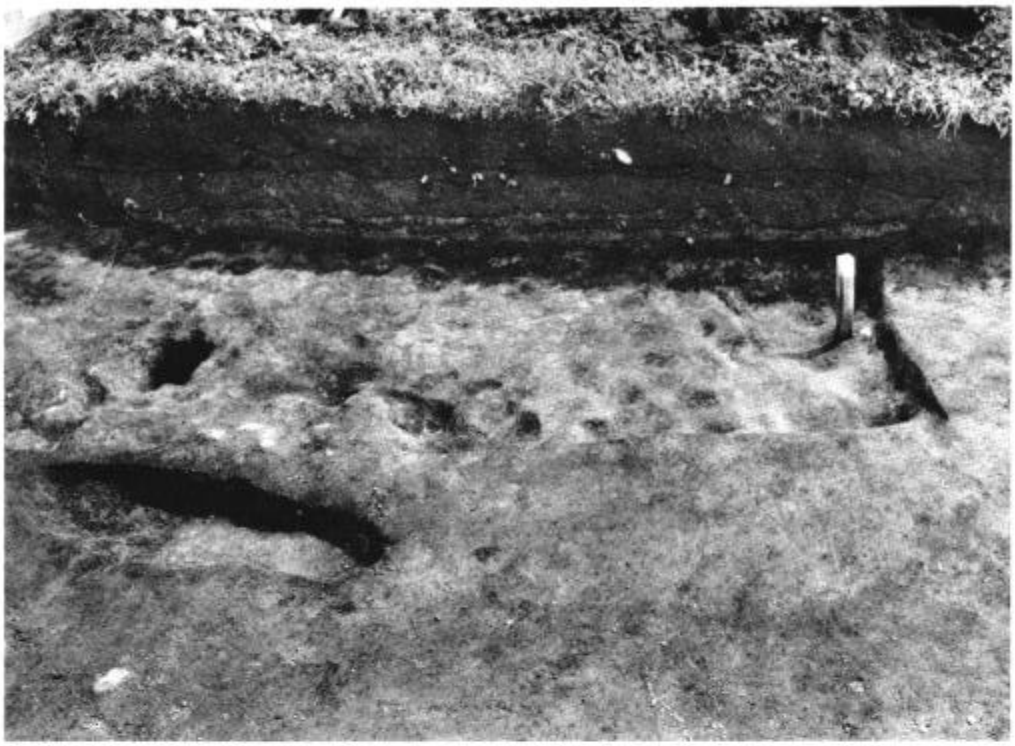
Ⅳ図版4　縄文時代遺物出土状態　左上　MF51
右上　MF54
左下　NF56
右下　OA57

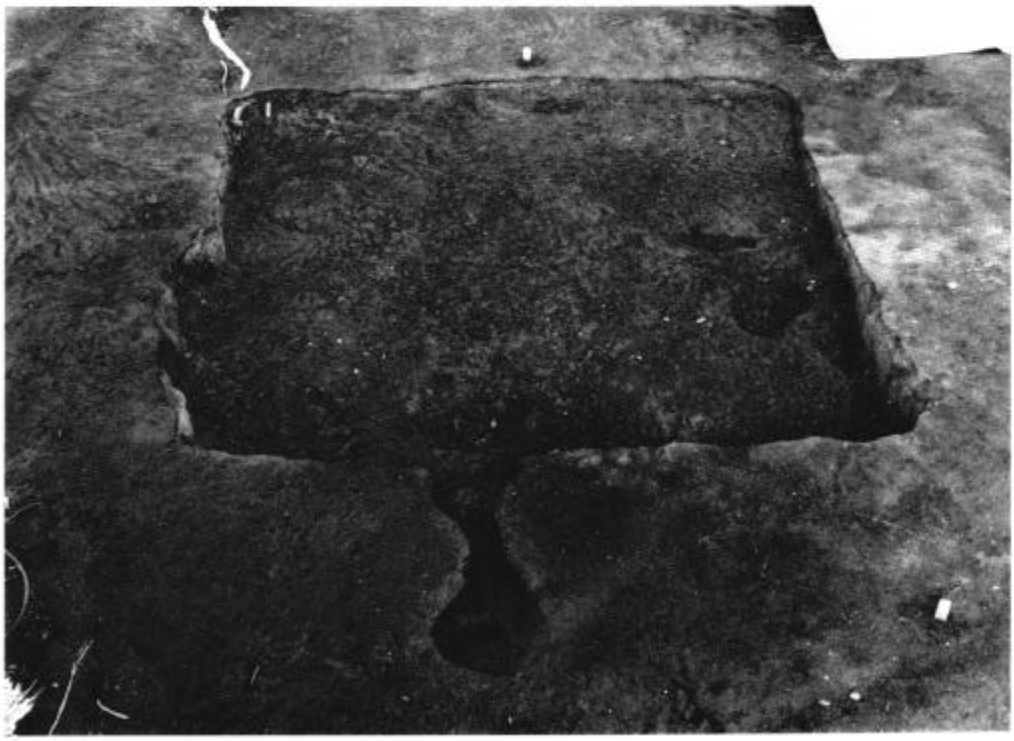


Ⅳ図版5　S I 01竪穴住居跡　上　完掘
左下　かまど
右下　遺物出土状態

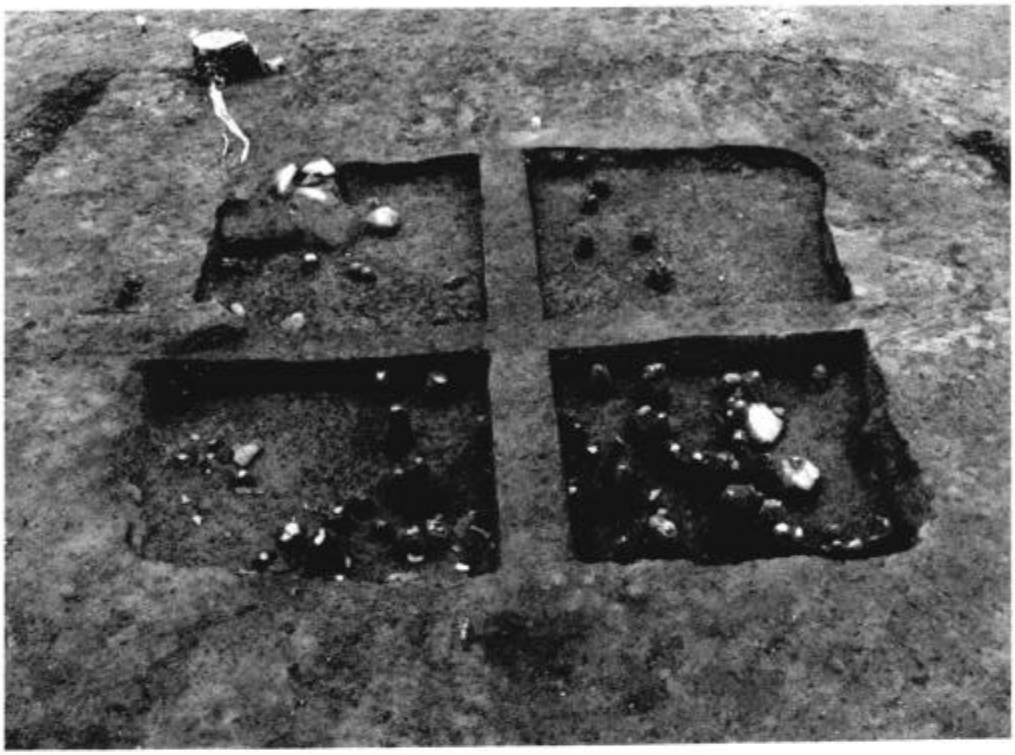
Ⅳ図版6　Ｓ１03竪穴住居跡　上　完掘（北東→南西）
下　遺物出土状態

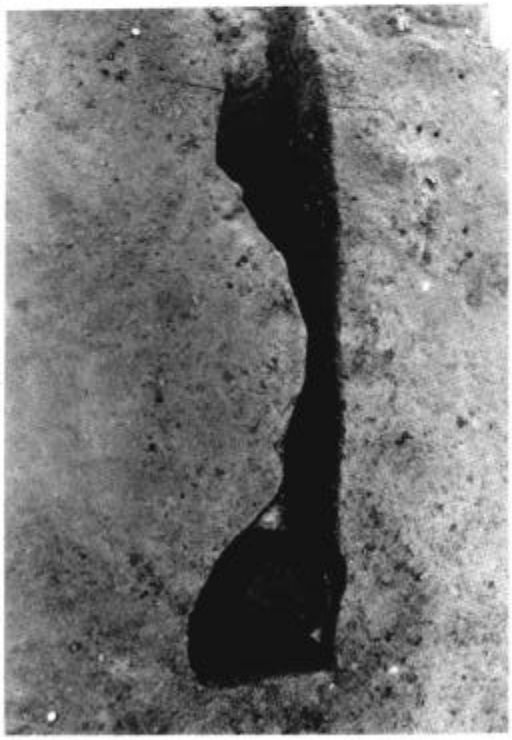
Ⅳ図版７　Ｒ１03竪穴住居跡かまど　上　検出状態（北←南）
下　完　掘（西←東）



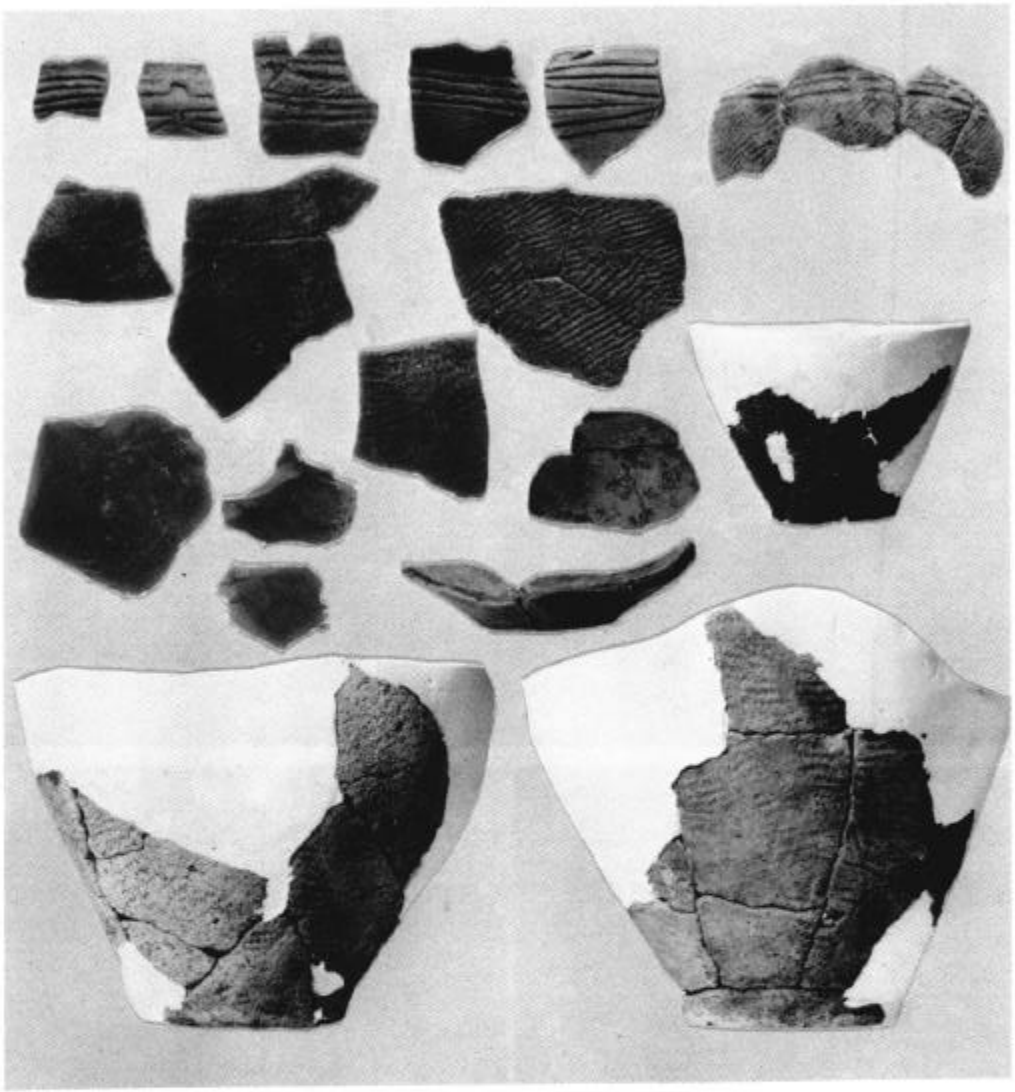


Ⅳ図版8　上　S I 06竪穴住居跡　（北←南）
　　下　S I 09竪穴住居跡　（北←南）



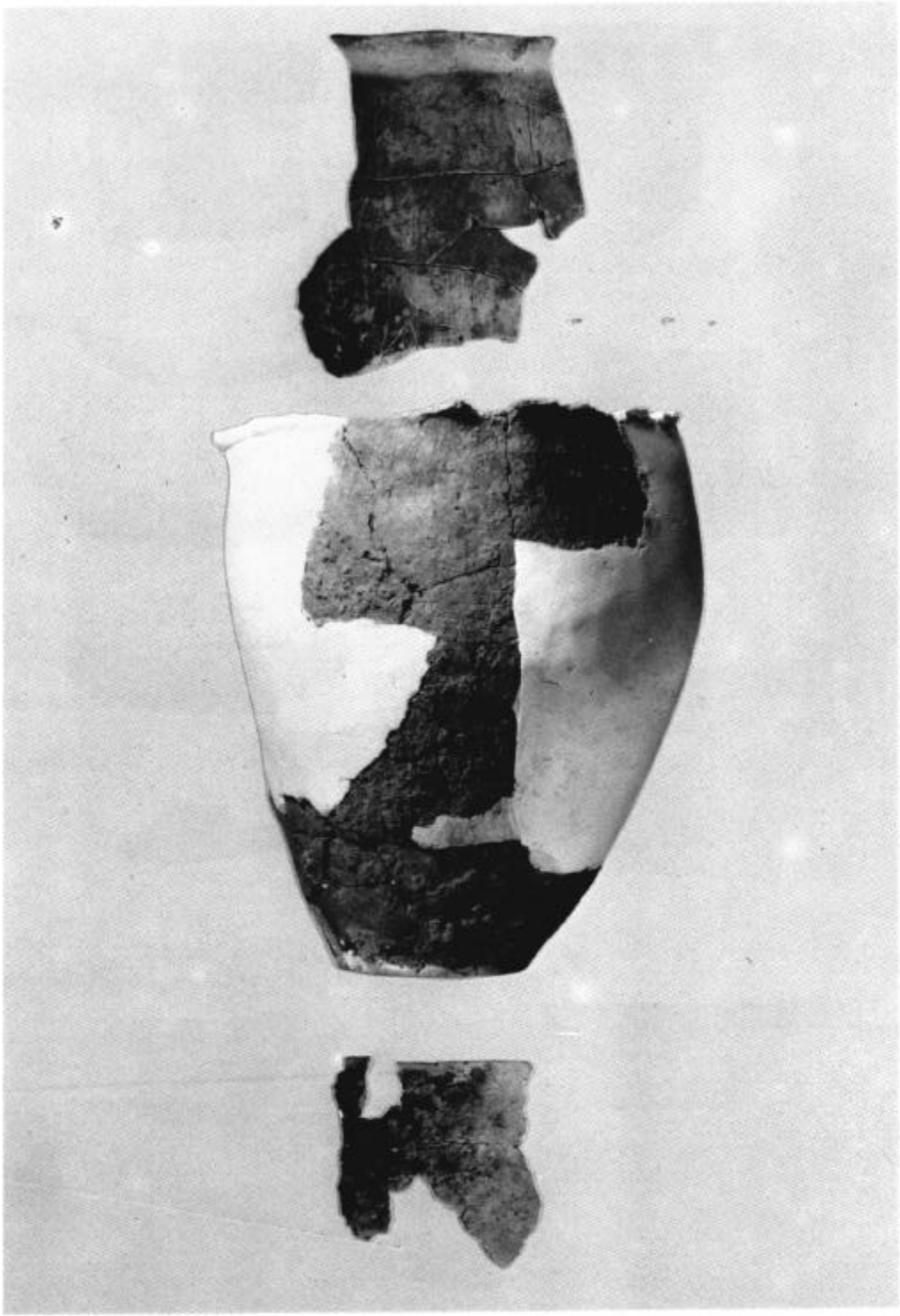


Ⅳ図版９　Ｓ１09竪穴住居跡　上　遺物出土状態
左下　かまど検出面
右下　煙道部断面

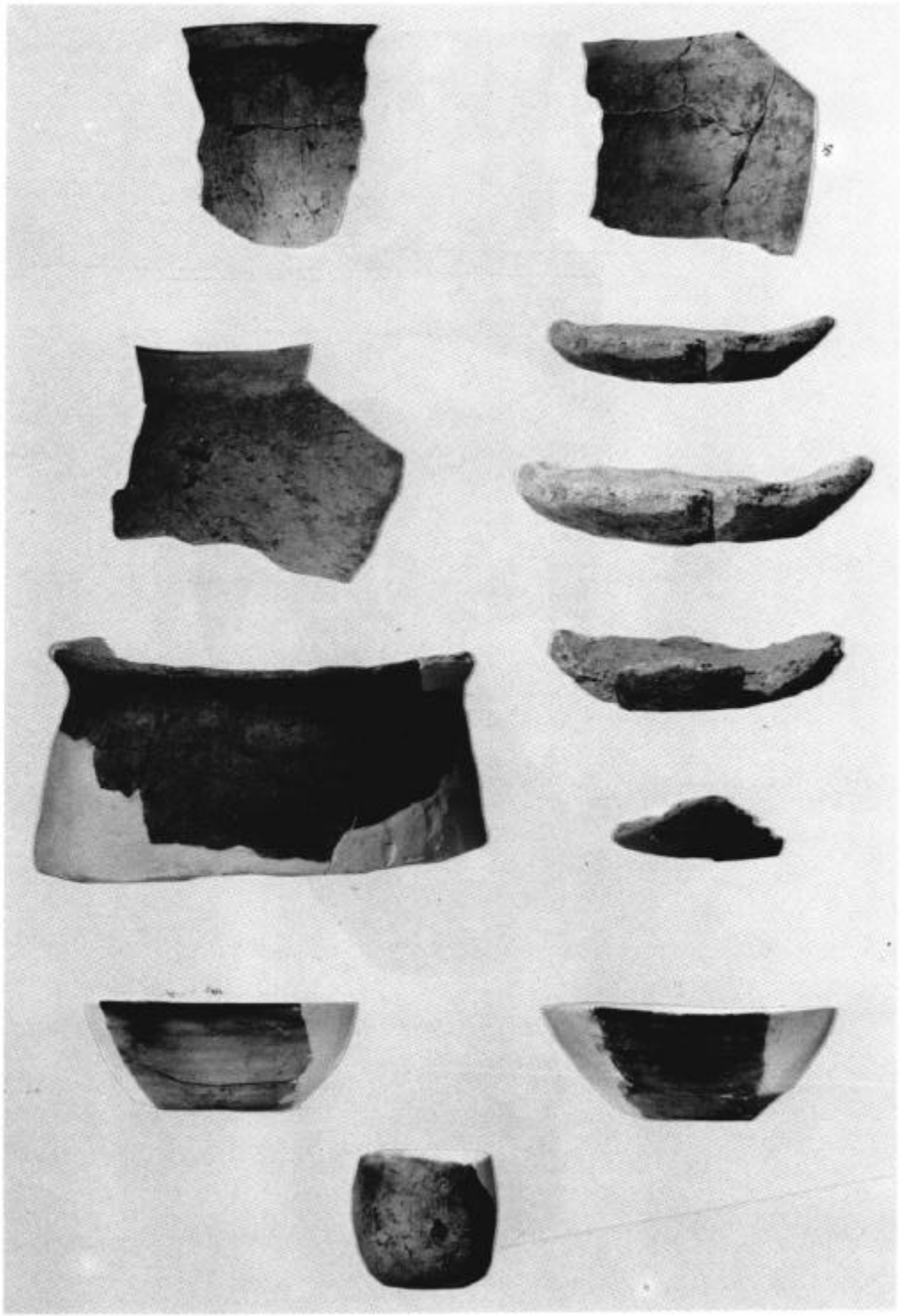


Ⅳ図版10　上　ＳＫ12土壙出土土器

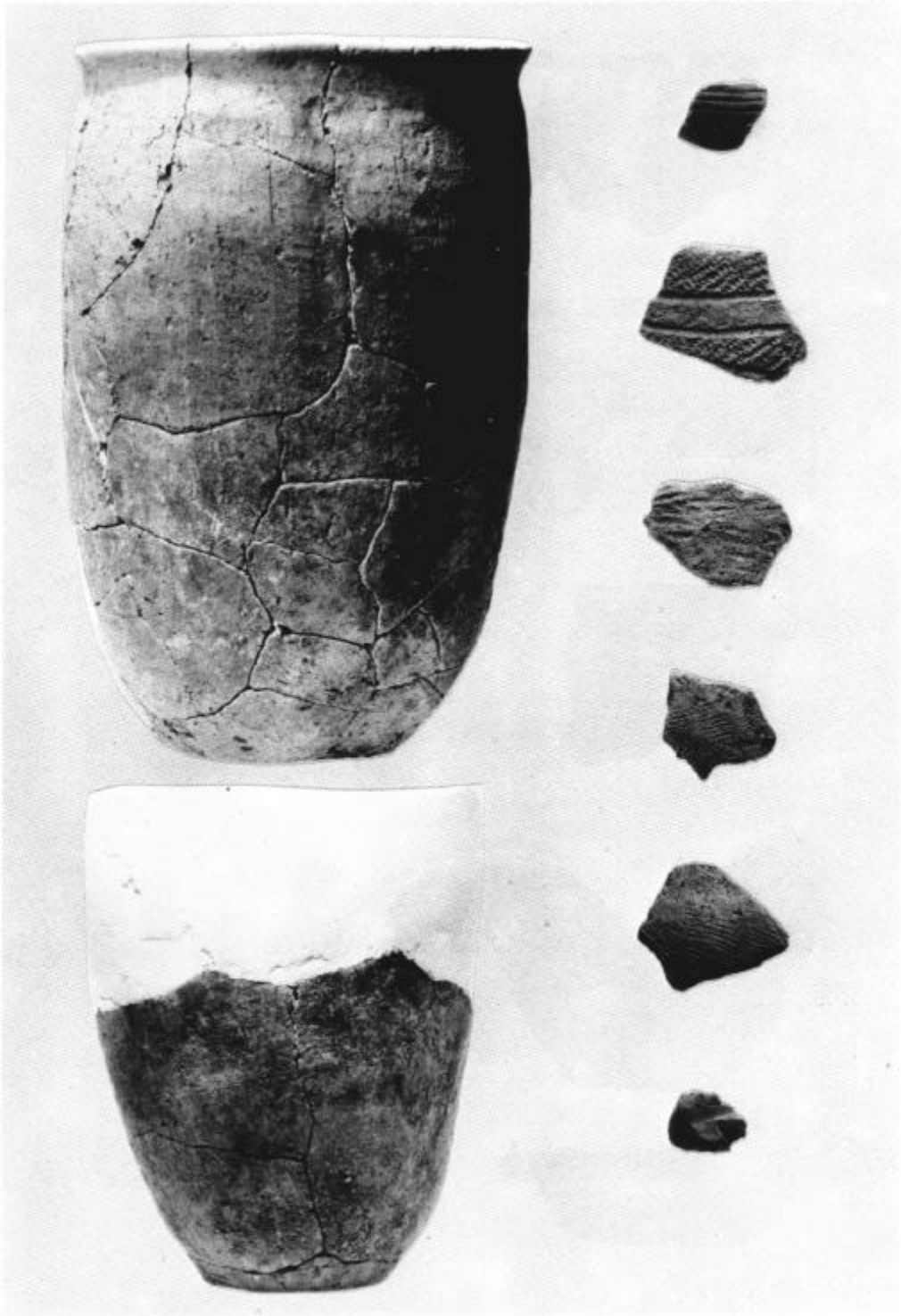
　　下　ＳＲ16埋甕



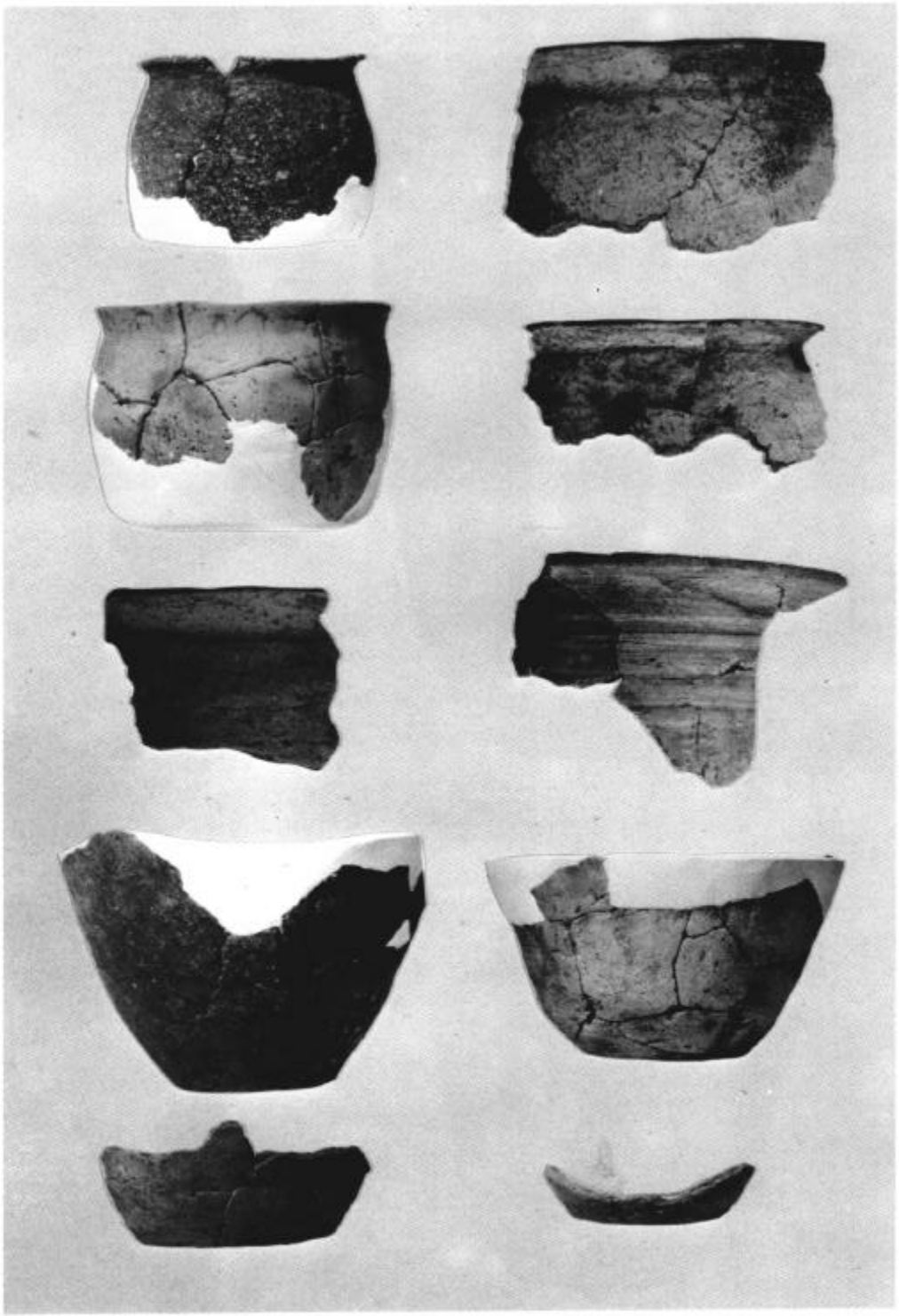
Ⅳ図版11　S－01竪穴住居跡出土土器



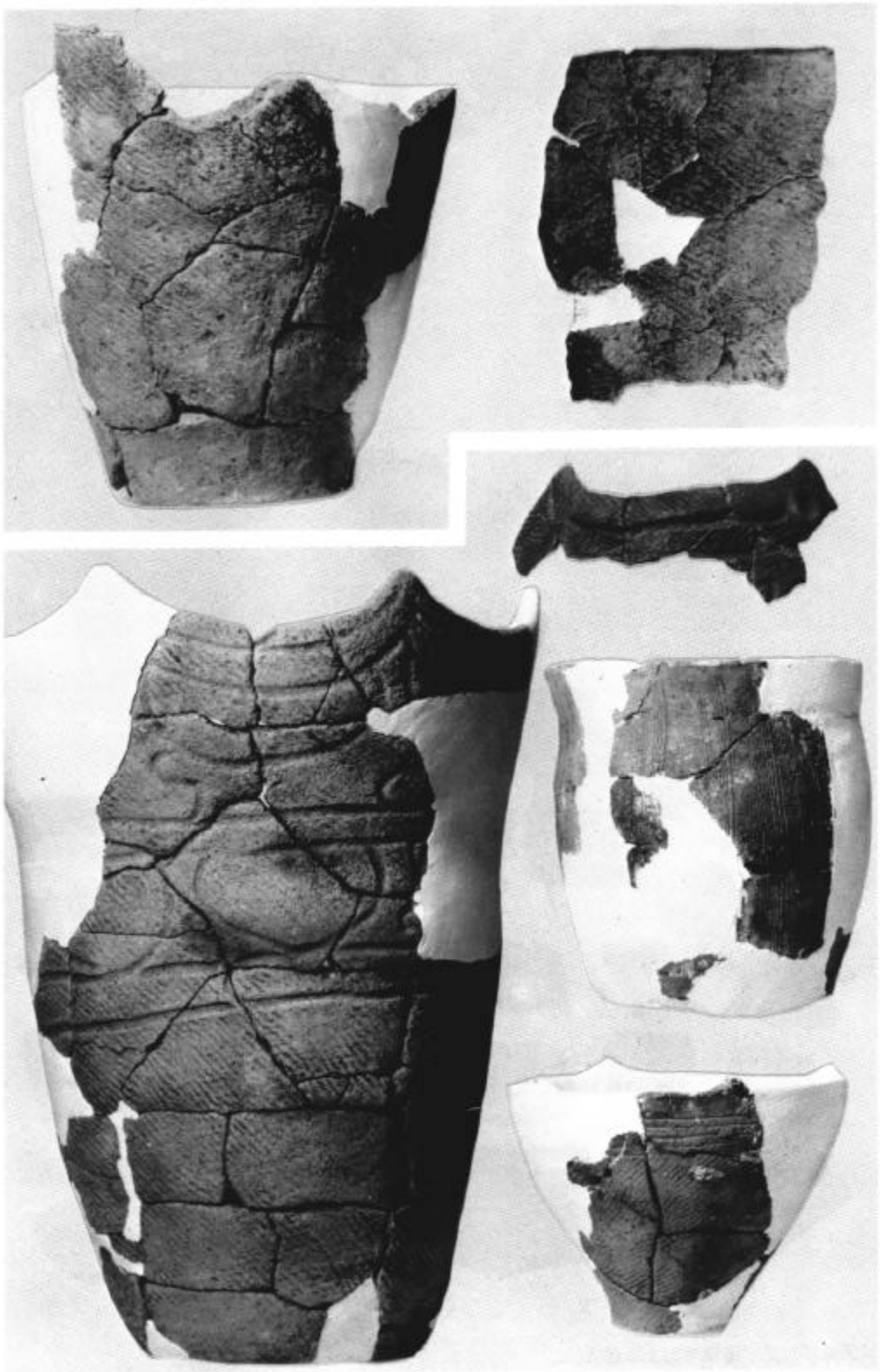
Ⅳ図版12　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(1)



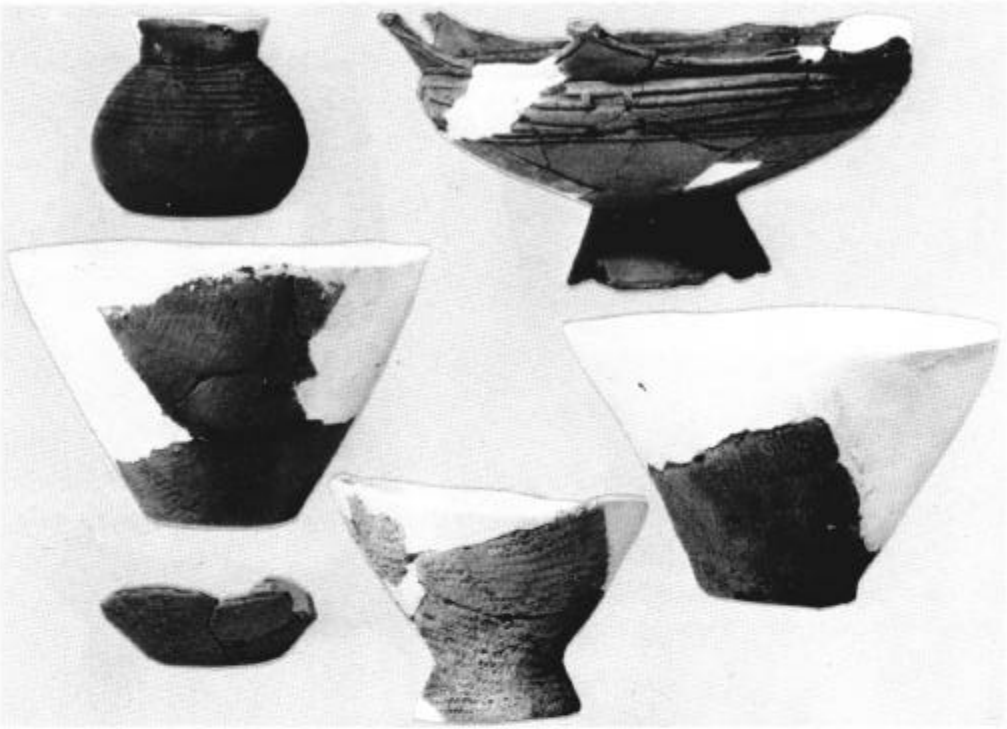
Ⅳ図版13　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物(2)

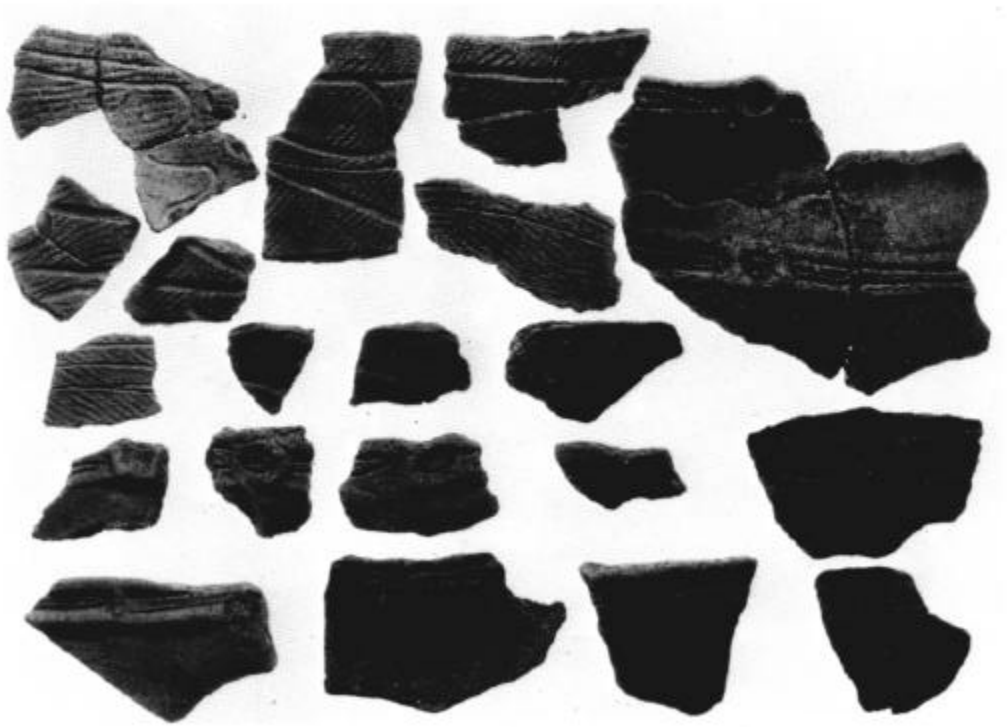


Ⅳ図版14　ＳＩ09竪穴住居跡出土遺物

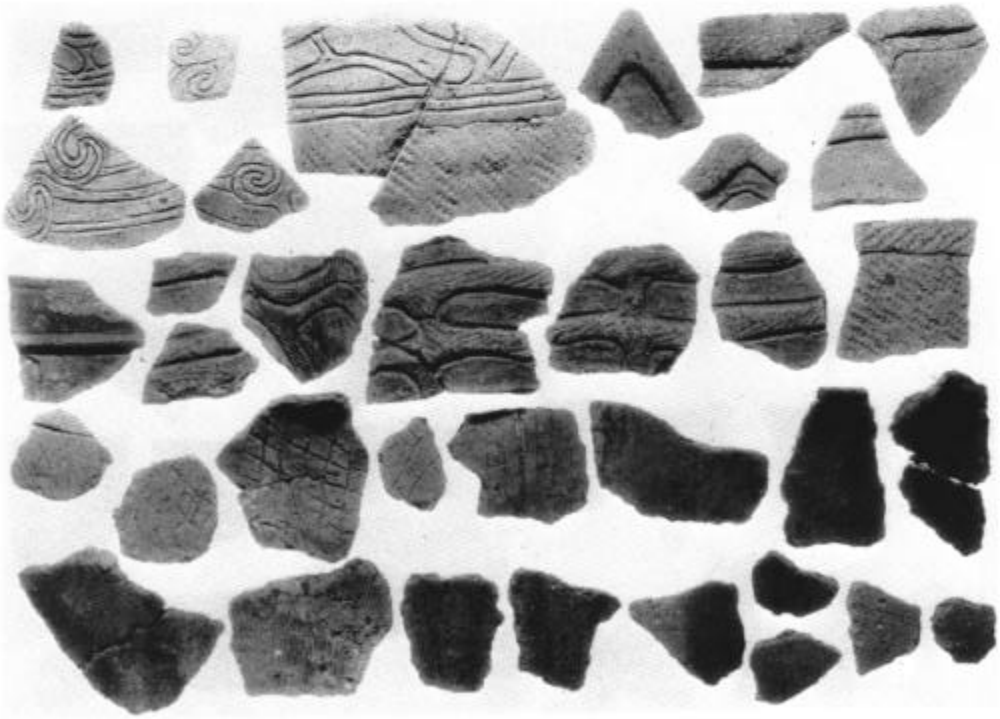


Ⅳ図版15　上　遺構外出土土器(1)
　　下　遺構外出土土器(2)

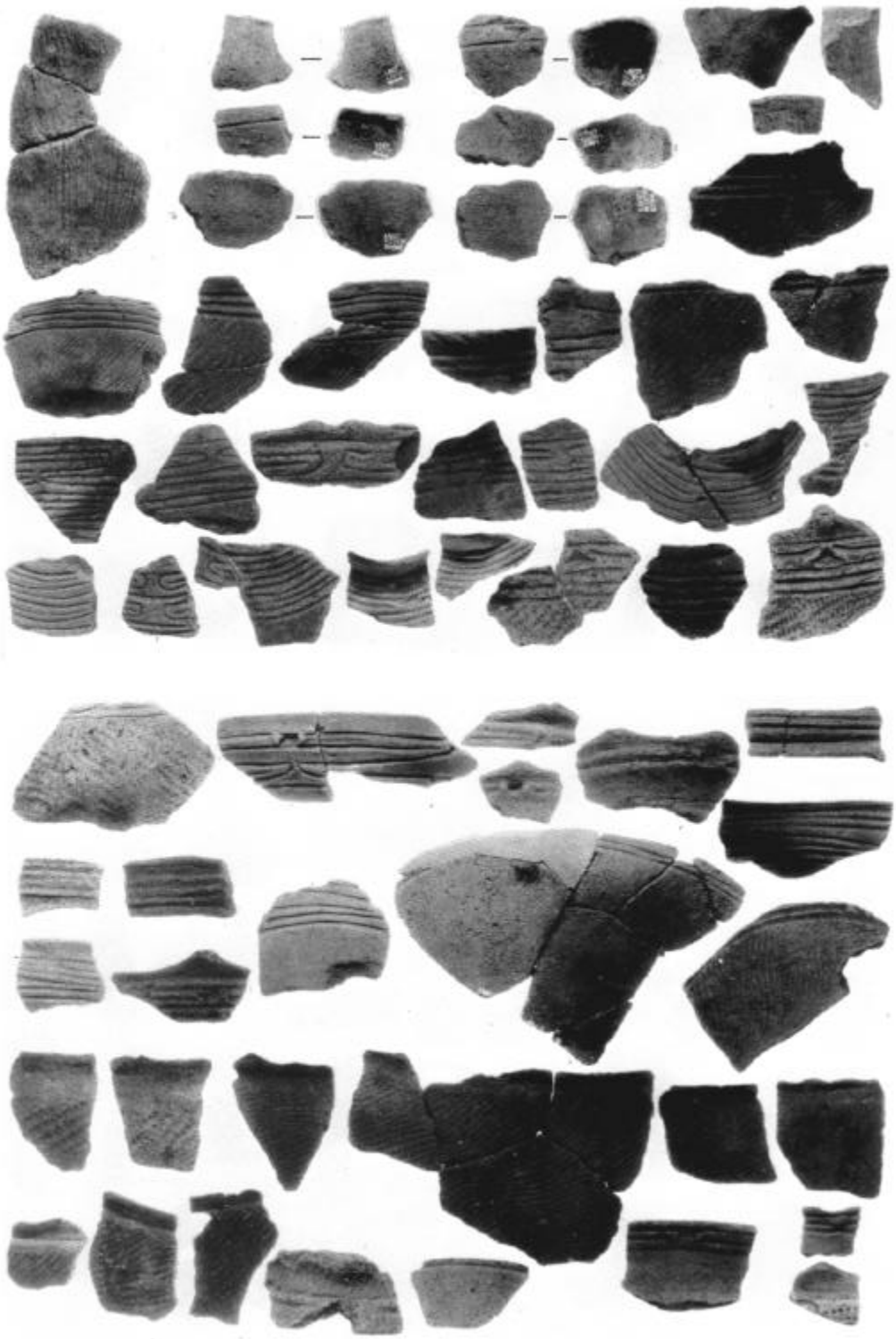




Ⅳ図版16　上　遺構外出土土器(3)
　　下　遺構外出土土器(4)



Ⅳ図版17　上　遺構外出土土器(5)
　　下　遺構外出土土器(6)



Ⅳ図版18　上　遺構外出土土器(7)
　　下　遺構外出土土器(8)

Ⅳ図版19　上　遺構外出土石器(1)
　　下　遺構外出土石器(2)

Ⅳ図版20　上　遺構外出土石器(3)
　　下　遺構外出土石器(4)

# 案内V遺跡

| | |
|---|---|
| 遺跡番号 | No.3 |
| 所在地 | 鹿角市花輪字案内26番地他 |
| 調査対象面積 | 4,800m² |
| 調査面積 | 2,970m² |
| 調査期間 | 昭和57年7月7日～10月9日 |
| | 昭和58年4月25日～6月3日 |

# 第1章　調 査 の 概 要

## 第１節　遺跡の概観

### １．遺跡の層序

案内Ｖ遺跡は斜面上に位置しており、傾斜のきつい所では土層の流出や盛土も多くみられた。大湯浮石層の遺存状態も悪く、あっても薄く、欠如した箇所が多かった。ただし、ＳＸ08風倒木痕においては70cmにおよぶ数回の堆積がみられた。地山までの深さは40～80cm程であり、大きくは５層に分けられる。第Ｉ層黒褐色土：表土（５～30cm)。第II層黒褐色土：大湯軽石を若干含む平安時代遺物包含層（10～20cm)。第III層：にぶい黄橙色土：大湯浮石層（０～５cm)。第IV層黒褐色土：上面から弥生時代の遺物、中、下面から縄文時代の遺物が出土（30～40cm)。第Ｖ層黄褐色土：地山。

### ２．遺構の分布

Ａ地区西部ではほぼ東西に並んで平安時代竪穴住居跡が３軒検出された。いずれも南へ下だる斜面の傾斜がややゆるくなった部分に構築されている。東部は縄文時代の遺構が集中して検出された。フラスコ状ピットは３基重複も含めて集中度が高く、縁辺部に構築されていた。このことはＢ地区の縁辺部の土壙群についても同様の事が言える。

Ｂ地区では、北部と南部の傾斜のゆるい部分にまばらに遺構が分布した。

Ａ、Ｂ両地区を通じて言える特徴としては、北部のややゆるい傾斜のところに土壙が構築され、その下の傾斜の急なところは遺構が分布せず、傾斜がゆるくなったところに竪穴住居跡が構築され、南の縁辺部にフラスコ状ピットが構築されていることである。

### ３．遺物の出土状態

Ａ地区西部ではＳＩ03・05竪穴住居跡から土師器甕が大量に出土した以外は、まとめて出土したところはなかった。Ａ地区東部では、主に南側縁辺部で縄文時代土器や弥生時代土器がまとまって出土した。フラスコ状ピット内からの出土は、ＳＫＦ16の10点程である。その他のフラスコ状ピットから遺物は出土しなかった。

Ｂ地区でも南側縁辺部に遺物の集中する所が何か所かみられたが、総じて言うと遺物は少なく、まばらに一様に出土するという状態であった。

## 第２節　調査の方法

案内Ｖ遺跡は工事の都合上２回に分けて発掘を行うこととなり、東をＡ地区、西をＢ地区と呼ぶこととした。

昭和57年度はＡ地区から調査にはいり、４ｍ×４ｍのグリッド法をとることとしたが、遺構の分布状態をみるため、まず２ｍのトレンチを東西に入れた。そしてかまどらしい焼土の検出された西側の区域は千鳥掘りにし、さらに拡張していった。また東部のトレンチにも、遺構・遺物の集中する箇所があったので、その部分も拡張した。排土場所がなかったため、中央部の遺物の検出されない部分と東側にベルコンで排土した。

昭和58年度は東部のＢ地区の調査を行った。Ｂ地区の遺構番号は101から付すこととした。Ｂ地区はきつい斜面部分が多く、北側の高い方から始めた。掘り進めたところ、一様に遺構が分布していたため、ほぼ全面的に発掘を行った。基準杭は昨年残しておいたものをそのまま東側に拡張して使用した。

グリッドの名称は南北基線にあたるアルファベット２文字と東西基線にあたる２桁の数字の組み合わせを用いることとし、北もしくは西へ行くにしたがい進むものとした。遺構の実測は４ｍ毎のグリッド杭を用いて簡易遣り方測量を用い、原則として1/20、かまど等必要に応じて1/10を用いた。レベルは20ｍ毎のレベル基準杭を用いた。遺構配置図は平板測量によってＳ＝1/100で作成した。

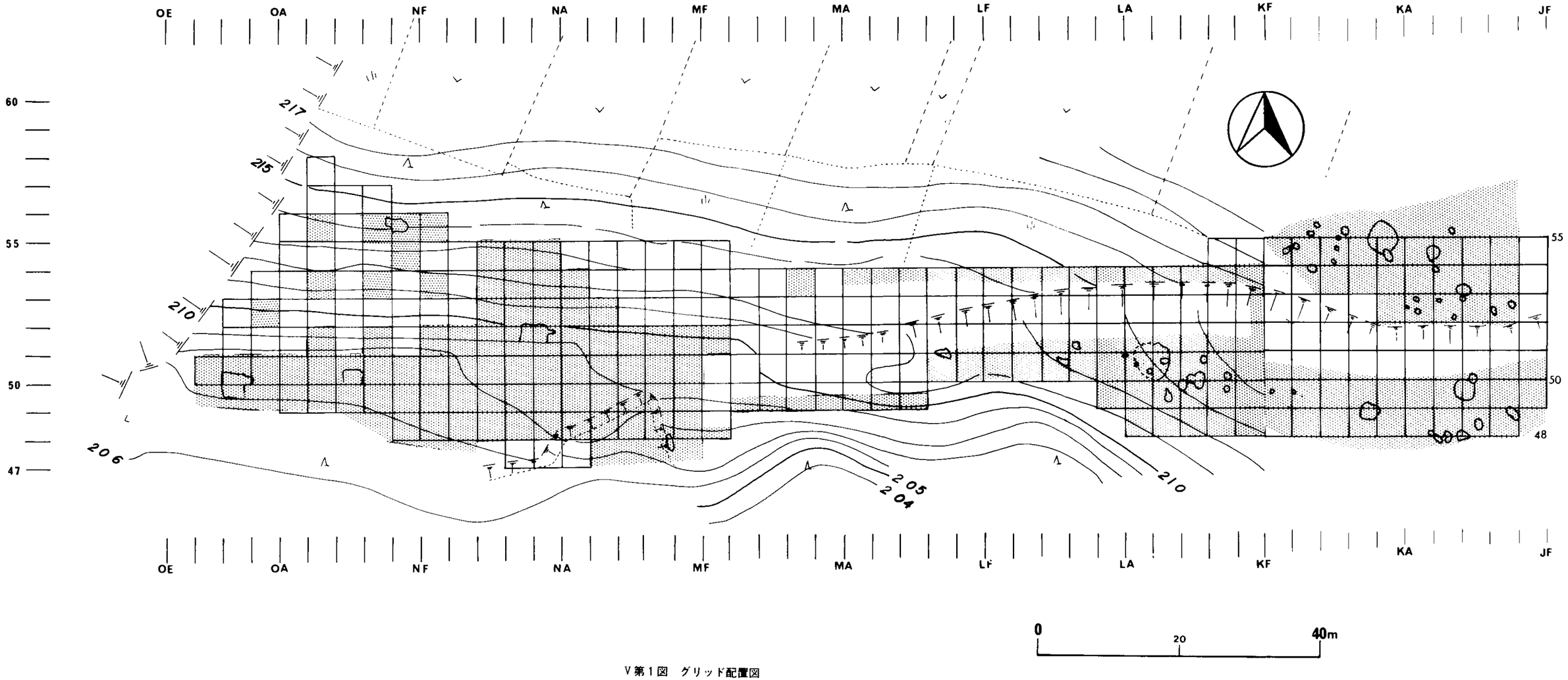
## 第３節　調査の経過

案内Ｖ遺跡の調査は工事の都合上２か年に分けて行うこととし、昭和57年７月７日～10月９日にＡ地区、昭和58年４月25日～６月３日にＢ地区の順で行った。

昭和57年７月７日に熊谷調査員及び補佐員、作業員がはいり、案内Ｖ遺跡の調査を開始した。斜面のため実面積が広かったので、東西に細長くトレンチを数本入れて遺構の検出されたところを広げていくことにした。

７月30日にＮＧ55付近よりＳＫ01を検出、さらに31日～８月２日にかけて平安時代の竪穴住居跡を検出、ＳＩ02・03とした。19日に土器埋設石組炉をもつ縄文時代の竪穴住居跡を検出、ＳＩ04とした。21日、熊谷班の補佐員３名が能代へ帰った。31日に平安時代の竪穴住居跡を検出、ＳＩ05とした。

９月２日からは一部の作業員を先行させて案内VI遺跡の調査にはいった。14日には終了している案内III遺跡とともに航空撮影を行った。30日には東部より数個の黒色土の落ちこみプラン




Ⅴ第1図　グリッド配置図

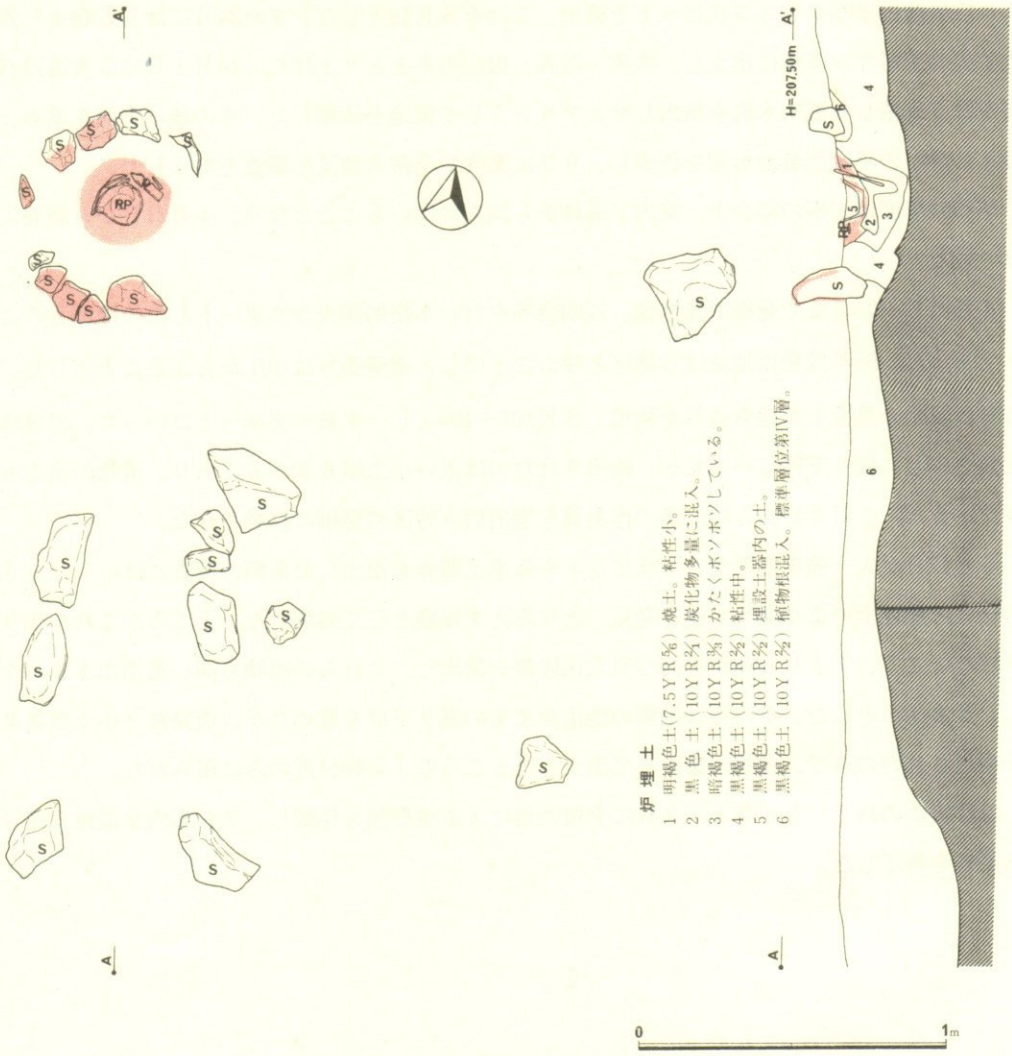
を検出、ＳＫＦ10～16および18とした。さらにその西方より石囲炉を検出し、ＳＩ17とした。６日住居跡内よりフラスコ状ピットを検出、これをＳＫ19とした。また24日にはＫＧ49より弥生時代の土器片が多量に出土し、実測・写真、撮影のあととり上げた。10月１日には大湯浮石層が厚く堆積した風倒木痕を検出しサンプリングして鑑定を依頼した。その後は実測を進め、最後に 1/200 の平板測量地形図を作成し、９日に案内Ｖ遺跡Ａ地区の調査を終了した。

昭和58年度は工事の都合上、案内Ｖ遺跡から調査にはいることとなり、４月21日から調査にはいった。

４月21日～23日まで発掘の諸準備、説明会等を行い本格的調査がスタートしたのは25日のことであった。58年度発掘地域はＢ地区と呼ぶことにし、遺構番号は101からふることとした。27日に数個の黒色土の落ち込みを検出、ＳＫ101～103とし、半截・実測へとはいった。以後は北側を中心に掘り下げていったが、検出されたのは浅い小土壙６基のみであり、遺物の出土も少なかった。５月６日からは一部の作業員を案内VIＡ地区の発掘に移動させた。

５月12日から、前年度フラスコ状ピットや弥生土器等を出土した南側の調査にはいった。５月16日Ⅳ層埋土中より縄文土器を発見、とりあえず埋甕として処理した。ところがこれを掘り下げたところ、下より石囲炉を持つ竪穴住居跡を検出し、これらの遺物も同一遺構出土とみなし、ＳＩ111とした。その後は南側の地山面までの掘り下げを進めたが、道路跡と小土壙数基が検出されたのみで、遺物が集中して出土したところもＪＧ49付近のみに限られた。

ほぼ実測の終了した６月１～３日に平板測量による地形図を作製し、３日案内Ｖ遺跡Ｂ地区の調査を終了した。




Ⅴ第2図　S I 04竪穴住居跡

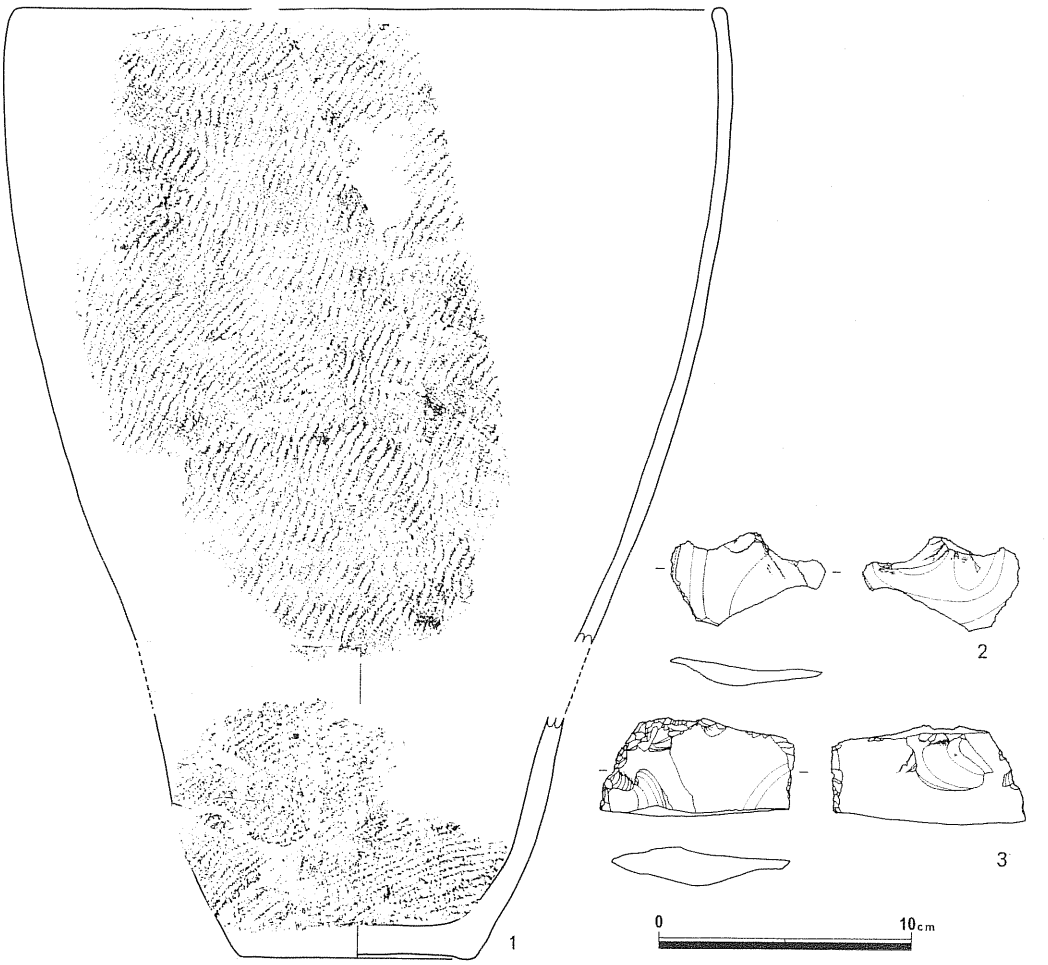
# 第2章　調 査 の 記 録

## 第1節　発見遺構と遺物

### 1．縄文時代竪穴住居跡

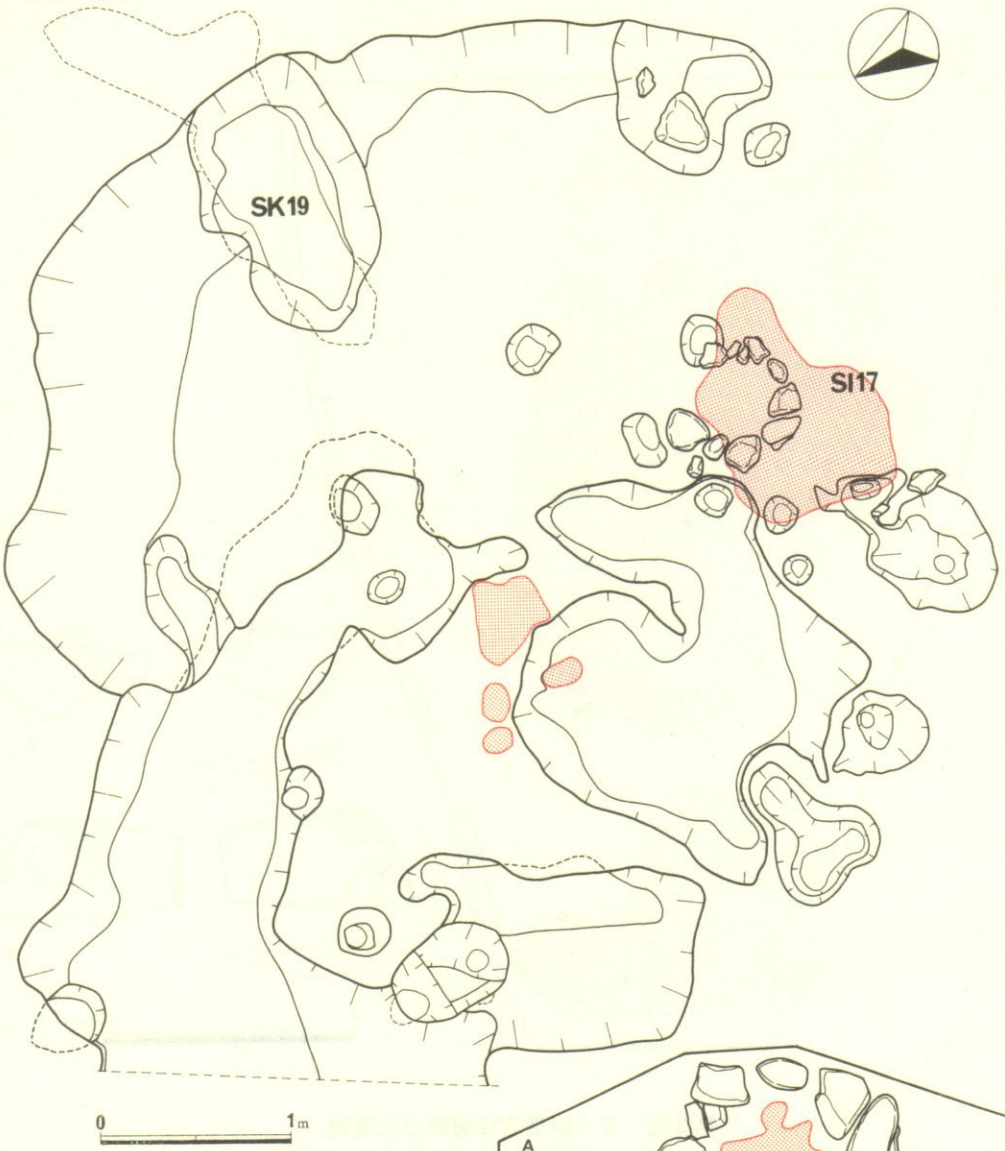
**S I 04竪穴住居跡**　（Ⅴ第2・3図　図版2）

MG47・48地区から第Ⅳ層中面で検出された。たまたま土層観察にいれた48ラインのトレン

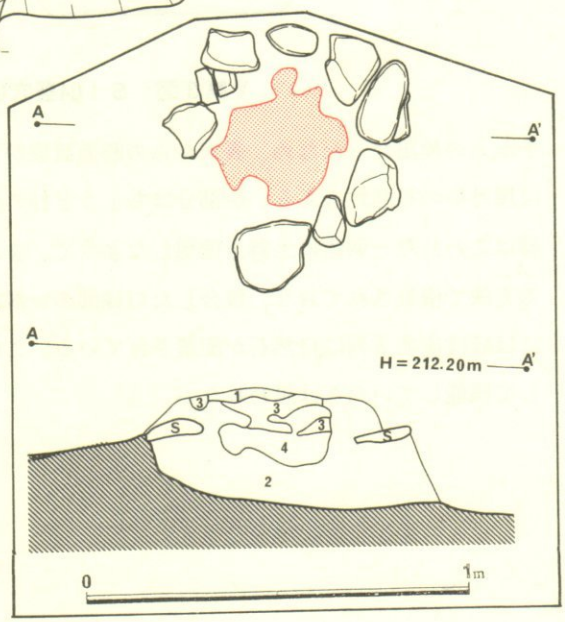



**Ⅴ第３図　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物**

チからの検出だったため、表土からの断面観察ができたが、それでも壁は確認されず、あるいは屋外炉の可能性もある。炉部分はちょうど杉の根の真下にあり、破損がひどかった。埋設土器はこわれた一個体の土器を使用したようで、まわりに口縁部を埋めて中央部に底部を配置する方法で構築されており、接合した口縁部の一部は倒位に置いて使用されていた。また、南側にはほぼ南北２列に自然石が配置されている。この配石は焼けた痕がまったくみられず、炉として機能していたとは思われない。




炉部分拡大図▶




Ⅴ第4図　ＳＩ17竪穴住居跡

**ＳＩ17竪穴住居跡**　（Ｖ第４図　図版３）

ＫＩ50、ＫＪ50・51地区から第Ⅳ層面で検出された。第Ⅳ層中位の縄文時代晩期遺物包含層の面で石組炉及び焼土を検出した。しかし、黒色土面での検出のため壁、柱穴等を確認することは困難であった。このため地山上面まで掘り下げたが、新しい風倒木痕による撹乱などのため床面と思われる部分の凹凸が激しく、竪穴住居跡に確実に付属すると確認されたピット等もなかった。遺物についても炉検出面から縄文時代晩期の遺物が出土しているが、この竪穴住居跡出土のものと確定できなかった。

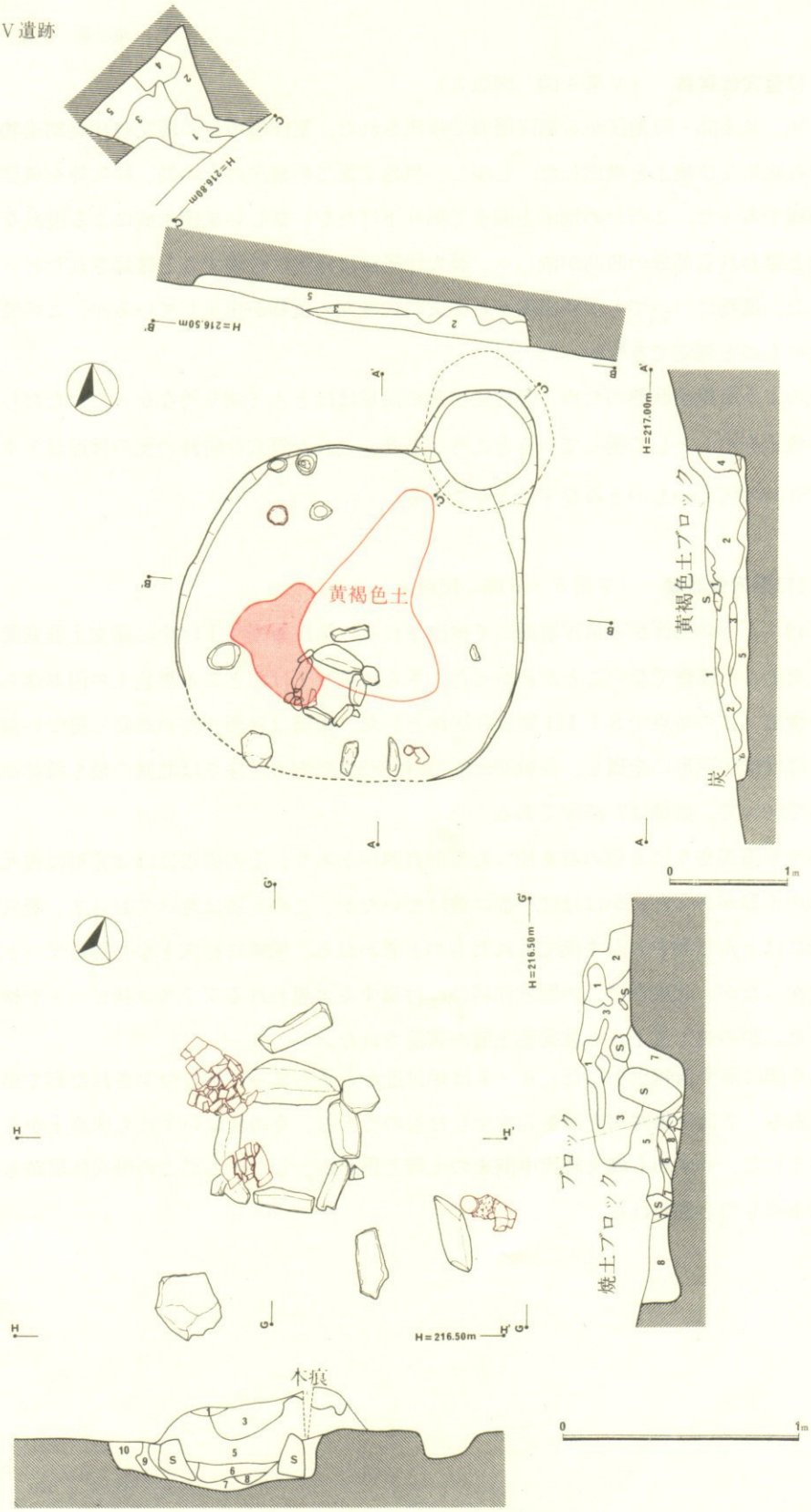
以上のような検出状態のため、竪穴住居跡の法量はほとんど測り得なかった。ただし、ピットが炉周辺を中心として廻っているところがあり、これが竪穴住居跡の壁の付近だとすると、径約450㎝の円形のものとみなすことができる。

**ＳＩ111竪穴住居跡**　（Ｖ第５・６図　図版４・５）

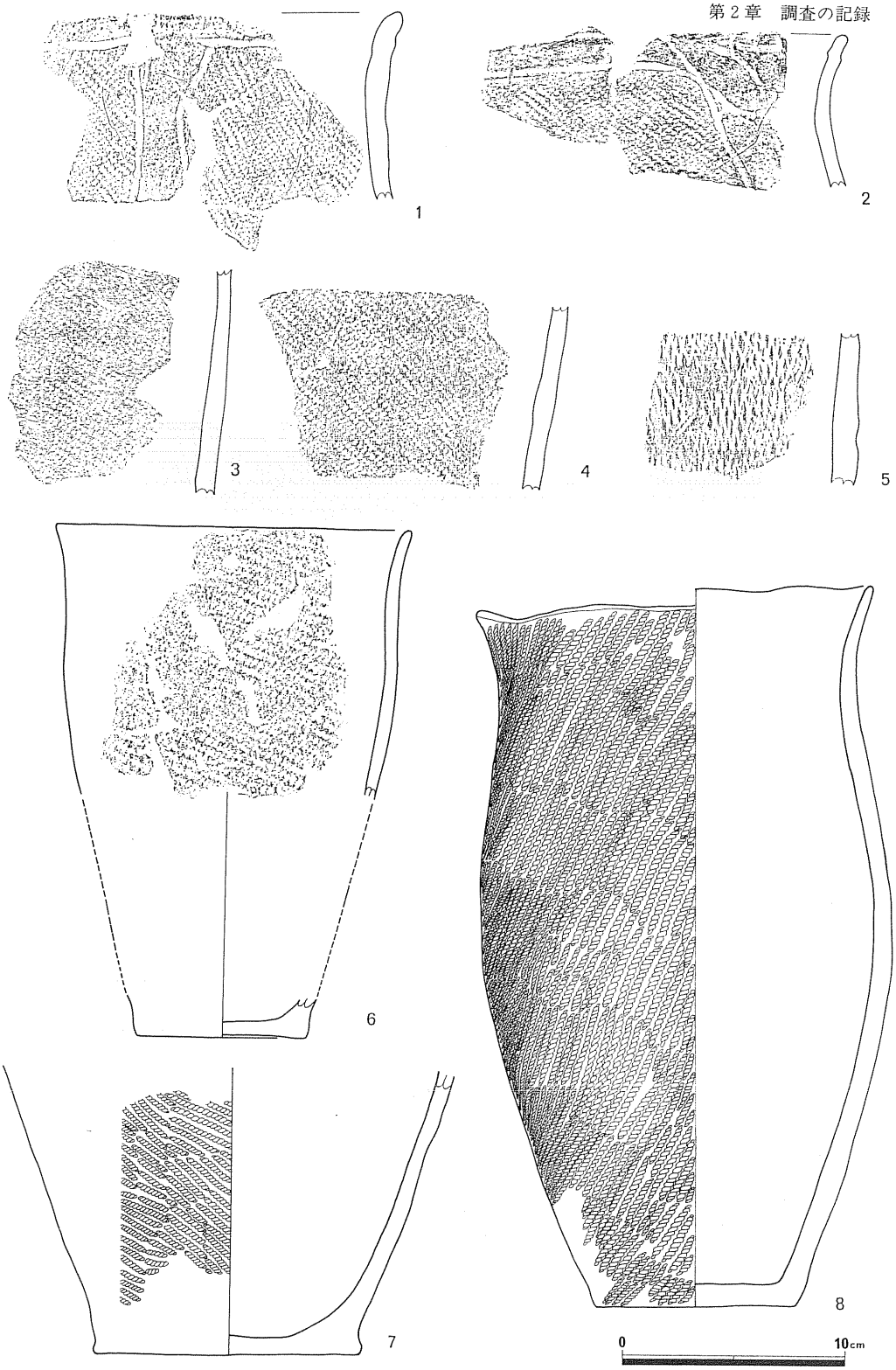
ＪＨ49、ＪＩ49地区から第Ⅳ層面にて検出された。第Ⅳ層掘り下げ中に縄文土器底部を出土、半截したところ埋甕でないことがわかった。さらに掘り下げたところ黒色土の円形落ち込みプランを検出、この時点でＳＩ111竪穴住居跡とした。南側は斜面のため確認し得ない箇所もあった。ほぼ壁が円形に全周し、長軸295㎝、短軸283㎝である。深さは北側の最も確認面の高いところで50㎝で、面積は7.85㎡である。

中央やや南西寄りに６個の石を使った方形石囲炉があり、その周辺にほぼ完形に復元できる２個体の土器があった。炉はほぼ一面に焼けていたが、この土器は焼けておらず、竪穴住居跡廃棄後にほとんど間をおかず棄てられたものと思われる。明確に柱穴となり得るピットは検出されなかったが、北東部にこの竪穴住居跡に付属すると思われるフラスコ状ピットが検出された。また、炉の焼土直上から黄褐色土層が確認された。

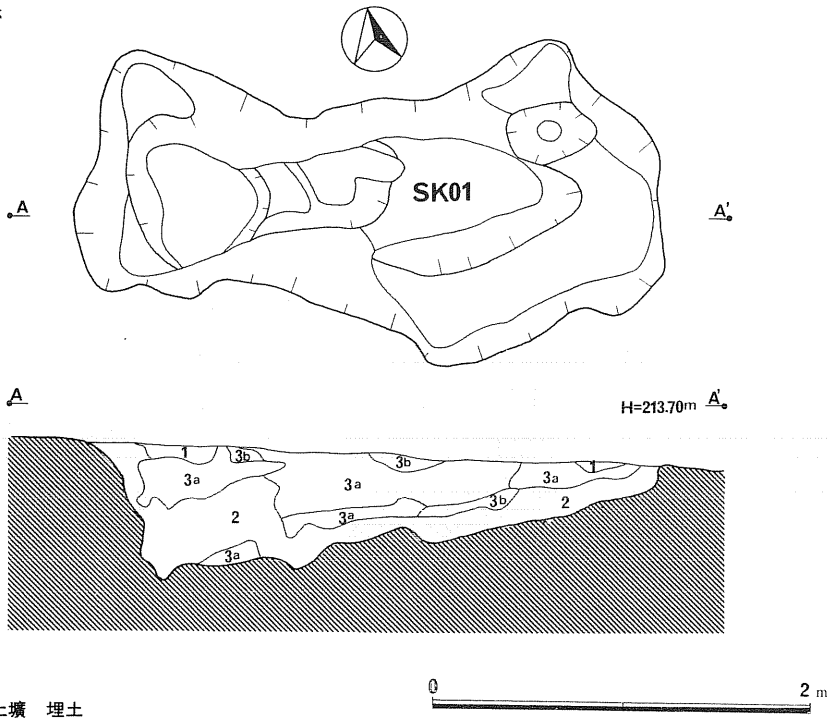
Ｖ第６図に示す遺物出土した。６・８は炉付近からまとまって押しつぶされた形で出土したものである。７は住居跡床上面から出土したものである。その他はいずれも床直上からバラバラに出土した。いずれも縄文時代中期末の土器と思われ、したがってこの竪穴住居跡も縄文時代中期末のものと思われる。




**Ⅴ第5図　ＳＩ111竪穴住居跡**

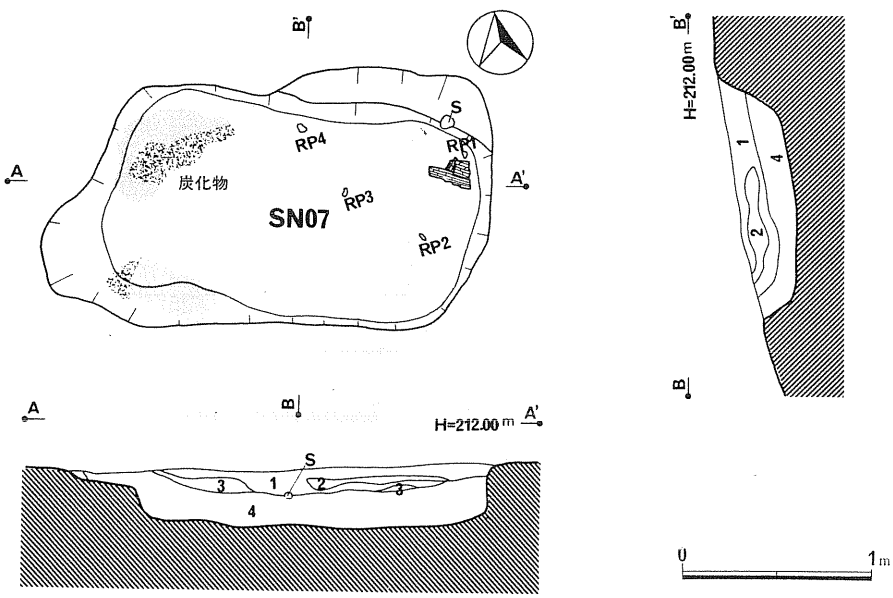



Ⅴ第６図　ＳＩ111竪穴住居跡出土遺物




Ⅴ　ＳＫ01土壙　埋土
1．黒 色 土（10ＹＲ½）粘性弱。孔隙率低。炭化物混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ¾）粘性強。孔隙率低。
3．Ａ灰オリーブ（５ＹＲ⅝）
　　Ｂオリーブ(2.5ＹＲ⅘)　浮石。

Ⅴ第７図　ＳＫ01土壙




Ⅴ　ＳＫ07土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ⅔）粘性中。孔隙率中。固くしまっている。
2．黒褐色土（10ＹＲ⅔）粘性中。孔隙率中。径１～３㎜のパミスを混入。
3．にぶい黄褐色土（10ＹＲ⅝）　浮石層。
4．黒褐色土（10ＹＲ⅔）粘性中。孔隙率中。径１～５㎜のパミスを若干と炭化物を混入。

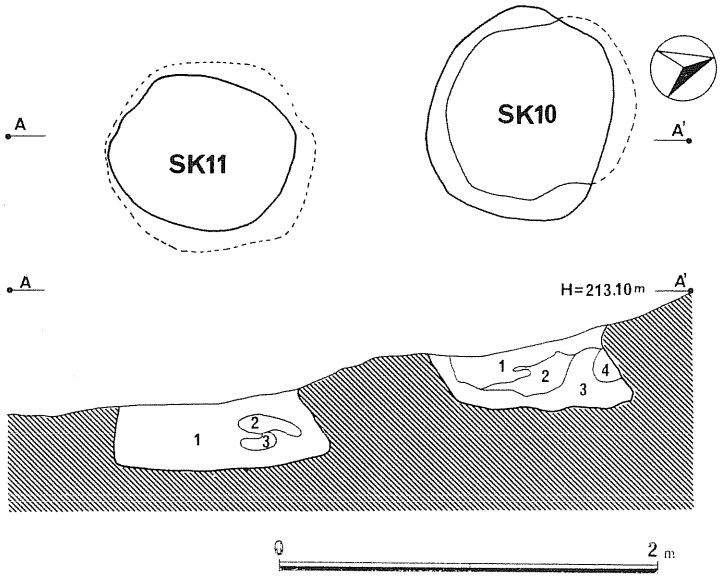
Ⅴ第８図　ＳＫ07土壙

| V第１表 | 挿図番号 | V第７図 | 図版番号 | V図版６ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ01 | 検出地区 | ＮＦ55、ＮＧ55 | |
| 法量 長軸 | 305cm | 短軸 | 90cm | |
| 法量 深さ | 72cm | 面積 | 3.7m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | Ｎ－65°－Ｗ | |
| 時期 | 大湯軽石層の混入がみられることから平安時代以降のものと思われる。 | | | |

| V第２表 | 挿図番号 | V第８・11図 | 図版番号 | V図版６ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ07 | 検出地区 | ＬＣ50 | |
| 法量 長軸 | 250cm | 短軸 | 123cm | |
| 法量 深さ | 34cm | 面積 | 2.8m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | Ｎ－69°－Ｅ | |
| 時期 | 不明 | | | |

| V第３表 | 挿図番号 | V第９図 | 図版番号 | V図版７ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫＦ10 | 検出地区 | ＫＧ50 | |
| 法量 長軸 | 115cm | 短軸 | 95cm | |
| 法量 深さ | 45cm | 面積 | 0.9m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | Ｎ－3°－Ｗ | |
| 時期 | 不明 | | | |

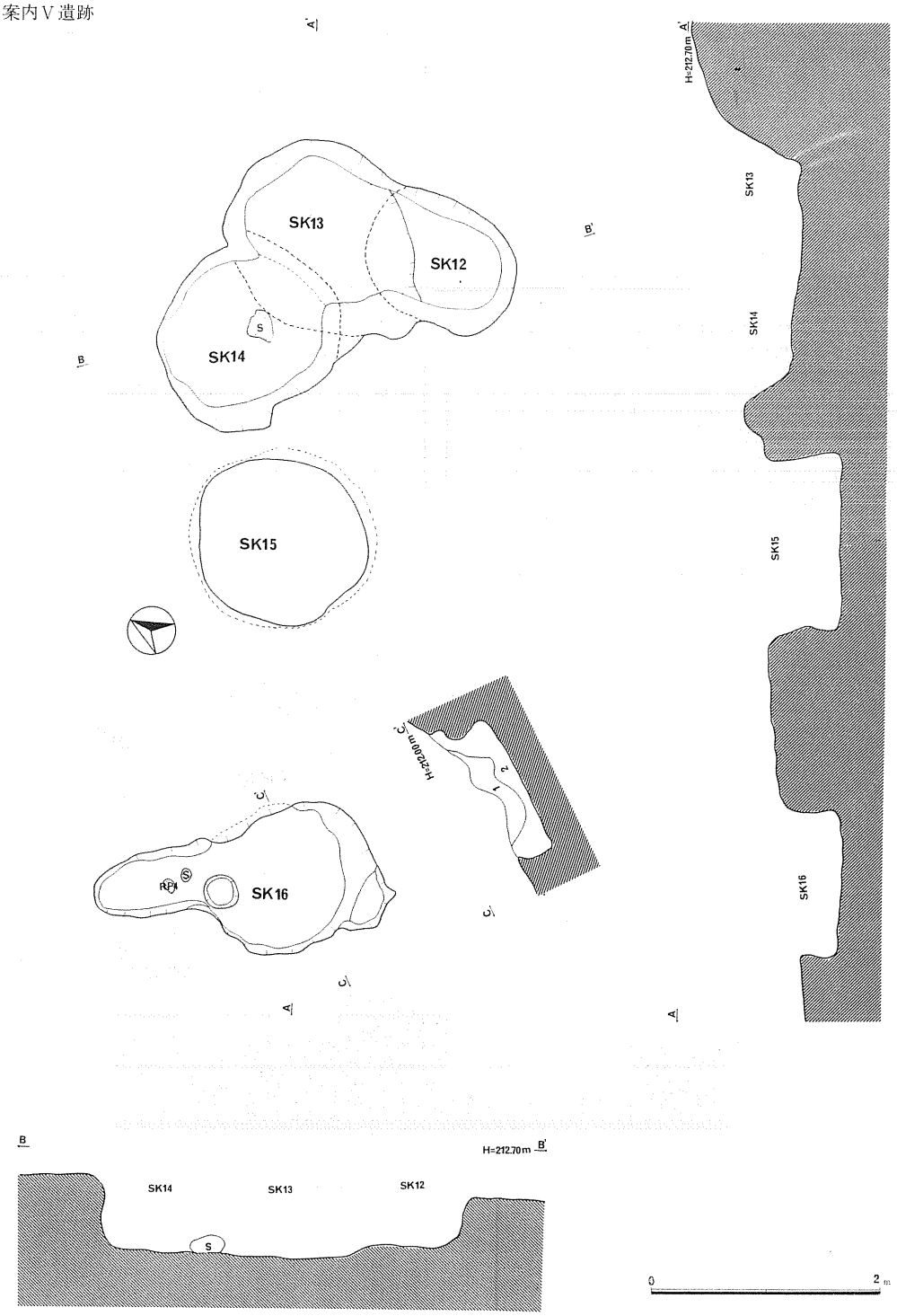
| V第４表 | 挿図番号 | V第９図 | 図版番号 | V図版７ |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫＦ11 | 検出地区 | ＫＧ49 | |
| 法量 長軸 | 100cm | 短軸 | 86cm | |
| 法量 深さ | 47cm | 面積 | 0.7m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | Ｎ－31°－Ｅ | |
| 時期 | 不明 | | | |




V　ＳＫ10土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率低。明黄褐色土粒子をわずかに混入。
2．黒色土（10ＹＲ3/1）粘性中。孔性中。孔隙率中。明黄褐色土粒子をわずかに混入。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。明黄褐色土粒子を多量に混入。
4．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。
5．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率低。

V　ＳＫ11土壙　埋土
1．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率低。黄褐色土粒子をわずかに混入。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率低。黄褐色土粒子をわずかに混入。
3．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性中。孔隙率低。黄褐色土粒子をわずかに混入。

**V第９図　ＳＫＦ10・11フラスコ状ピット**

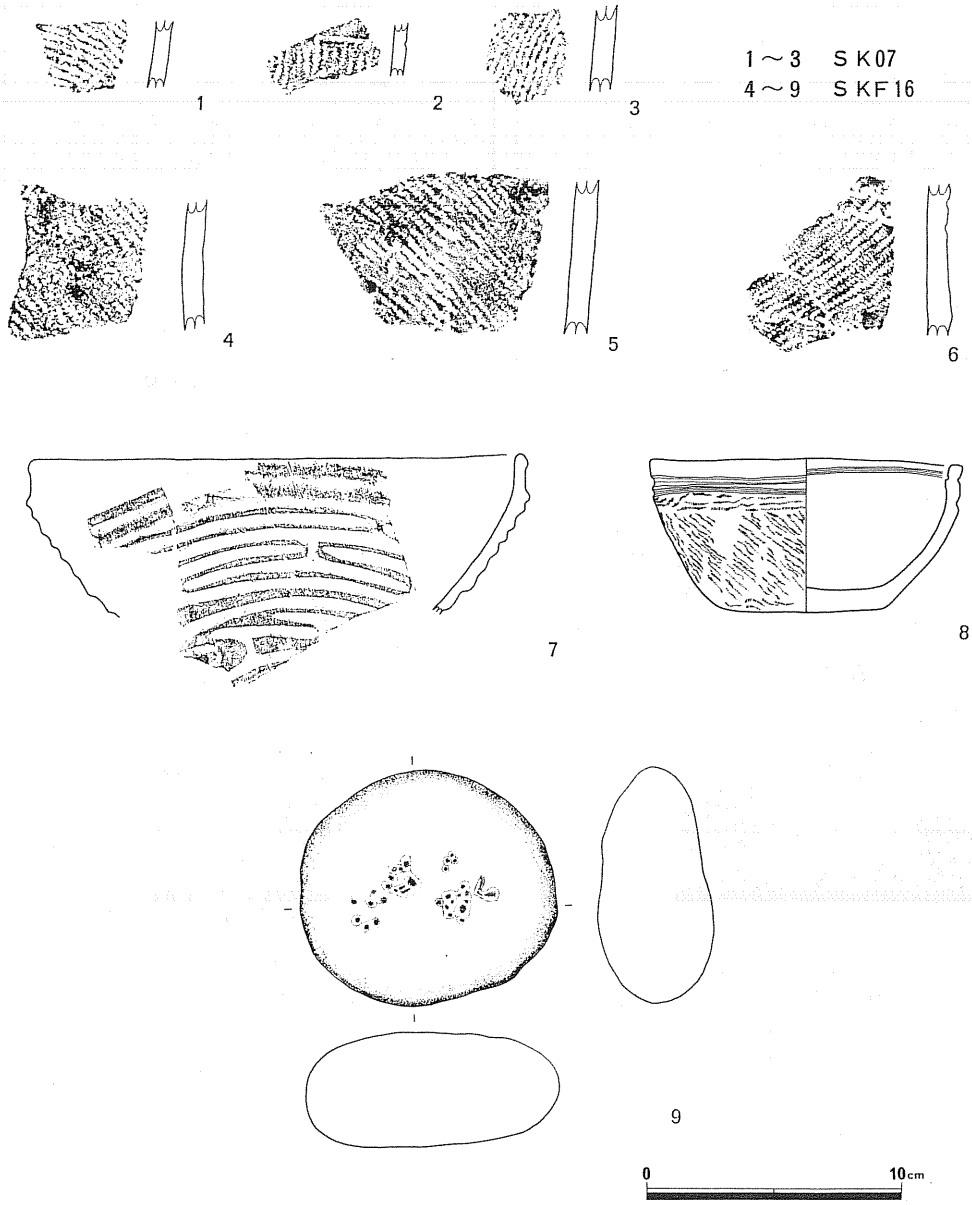



Ⅴ　ＳＫ16土壙　埋土
1．黒色土（10ＹＲ 1/1）粘性中。孔隙率低。しまっている。
2．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性中。孔隙率低。黄褐色土粒子を若干混入。

Ⅴ第10図　ＳＫＦ12・13・14・15・16フラスコ状ピット

| V第５表 | 挿図番号 | V第10図 | 図版番号 | V図版 7・8 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ12 | 検出地区 | ＫＨ49 | |
| 法量 長軸 | (140cm) | 短軸 | (108cm) | |
| 法量 深さ | 45cm | 面積 | (1.3m²) | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N—26°—E | |
| 時期 | 不明 | | | |

| V第６表 | 挿図番号 | V第10図 | 図版番号 | V図版 7・8 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ13 | 検出地区 | ＫＨ49・50 | |
| 法量 長軸 | (200cm) | 短軸 | (160cm) | |
| 法量 深さ | 60cm | 面積 | (2.5m²) | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N—10°—E | |
| 時期 | 不明 | | | |




V第11図　土壙内出土遺物

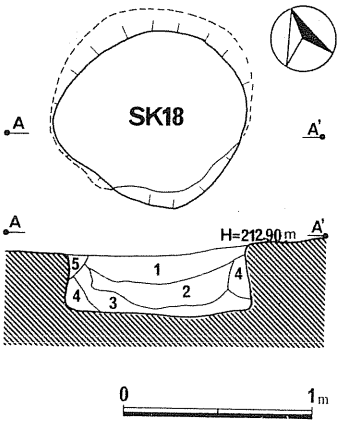
| Ⅴ第7表 | 挿図番号 | Ⅴ第10図 | 図版番号 | Ⅴ図版 7・8 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ14 | 検出地区 | ＫＨ49・50 | |
| 法量 長軸 | (155cm) | 短軸 | 145cm | |
| 法量 深さ | 63cm | 面積 | (2.1m²) | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－2°－E | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ⅴ第8表 | 挿図番号 | Ⅴ第10図 | 図版番号 | Ⅴ図版8 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ15 | 検出地区 | ＫＨ49、ＫＩ49 | |
| 法量 長軸 | 163cm | 短軸 | 146cm | |
| 法量 深さ | 65cm | 面積 | 1.8m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－32°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ⅴ第9表 | 挿図番号 | Ⅴ第10・11図 | 図版番号 | Ⅴ図版 7・8 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ16 | 検出地区 | ＫＪ49 | |
| 法量 長軸 | 246cm | 短軸 | 125cm | |
| 法量 深さ | 56cm | 面積 | 2.3m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－40°－W | |
| 時期 | 弥生時代？ | | | |
| 遺物出土状況 | Ⅴ第11図4～9に示す土器が出土した。7は縄文時代晩期後葉、8は弥生時代前葉のものと思われる。 | | | |

| Ⅴ第10表 | 挿図番号 | Ⅴ第12図 | 図版番号 | Ⅴ図版 7・9 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ18 | 検出地区 | ＫＨ50 | |
| 法量 長軸 | 102cm | 短軸 | 86cm | |
| 法量 深さ | 35cm | 面積 | 0.8m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－64°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

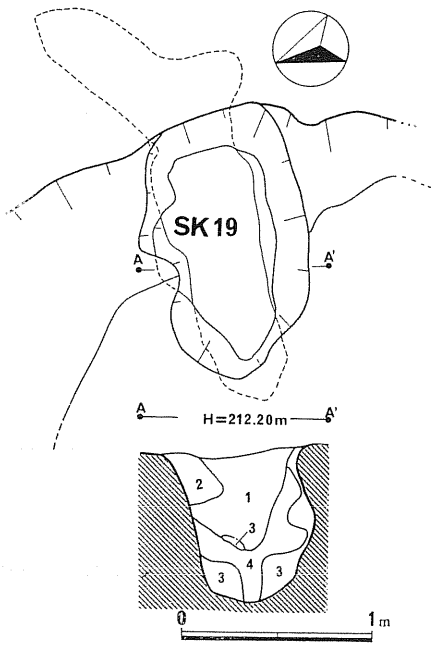
| Ⅴ第11表 | 挿図番号 | Ⅴ第13図 | 図版番号 | Ⅴ図版9 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ19 | 検出地区 | ＫＩ50 | |
| 法量 長軸 | 143cm | 短軸 | 68cm | |
| 法量 深さ | 83cm | 面積 | 1.1m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－75°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |




Ⅴ　ＳＫ18土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性中。孔隙率低。
　　明黄褐色土粒子を若干混入。
2．黒　色　土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率中。
　　明黄褐色土粒子を極くわずかに混入。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。
　　明黄褐色土粒子を多量に混入。
4．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。
5．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率低。

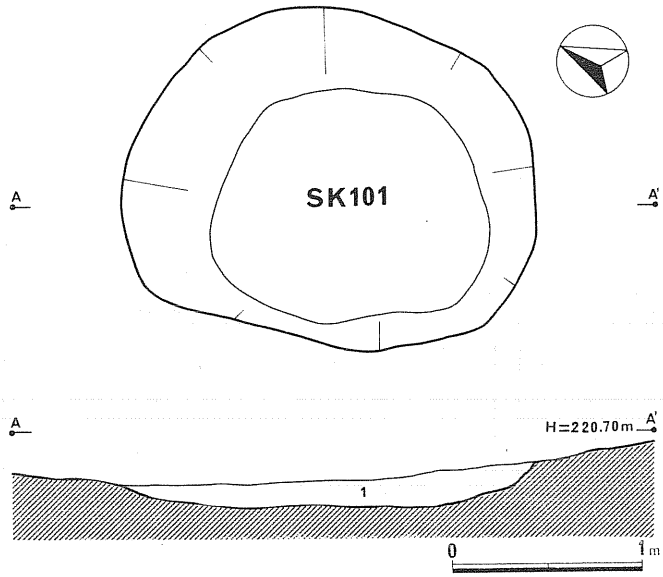
**Ⅴ第12図　ＳＫ18土壙**




Ⅴ　ＳＫ19土壙　埋土

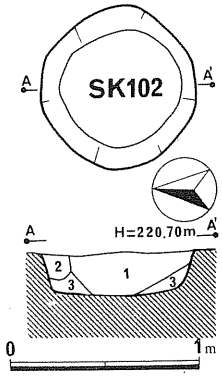
1．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。
　　黄褐色土粒子を若干混入。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。
　　黄褐色土粒子を若干混入。
3．にぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）粘性中。孔隙率高。
　　浮石層。
4．褐　色　土（10ＹＲ4/4）粘性強。孔隙率低。
　　10ＹＲ5/6　黄褐色土を若干混入。

**Ⅴ第13図　ＳＫ19土壙**

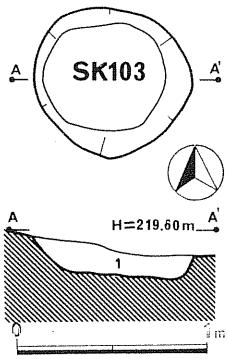



Ⅴ第14図　ＳＫ101土壙

Ⅴ　ＳＫ101土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性弱。
　　孔隙率低。小礫を若干含む。



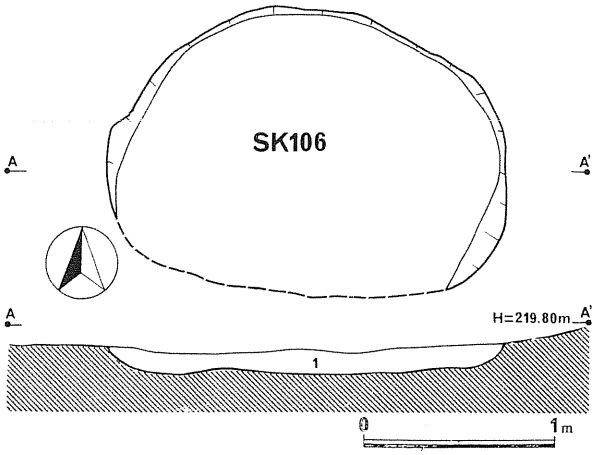

Ⅴ第15図　ＳＫ102土壙




Ⅴ第16図　ＳＫ103土壙

Ⅴ　ＳＫ102土壙　埋土
1．黒　色　土（10ＹＲ 1.7/1）
　　粘性中。孔隙率中。
　　ボソボソ。
2．黒　色　土（10ＹＲ 1.7/1）
　　粘性中。孔隙率中。
　　１層中に地山の黄褐色土
　　がブロック状に混入。
3．黒褐色土　（10ＹＲ3/2）。
　　粘性中。孔隙率中。

Ⅴ　ＳＫ103土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。
　　孔隙率低。黄褐色土ブロ
　　ックわずかに混入。




Ⅴ第17図　ＳＫ106土壙

Ⅴ　ＳＫ106土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。
　　孔隙率中。黄褐色土ブロ
　　ック１％及び礫を若干混
　　入。

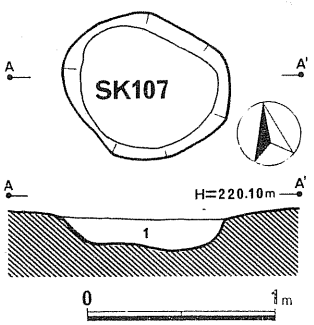
| Ｖ第12表 | 挿図番号 | Ｖ第14図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ101 | 検出地区 | ＪＩ54、ＪＪ54 | |
| 法量 長軸 | 216cm | 短軸 | 173cm | |
| 法量 深さ | 18cm | 面積 | 3.2m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－18°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ｖ第13表 | 挿図番号 | Ｖ第15図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ102 | 検出地区 | ＪＩ55 | |
| 法量 長軸 | 87cm | 短軸 | 83cm | |
| 法量 深さ | 22cm | 面積 | 0.6m² | |
| 形態 | 円形 | 主軸方向 | N－88°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ｖ第14表 | 挿図番号 | Ｖ第16図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ103 | 検出地区 | ＫＣ55、ＫＤ55 | |
| 法量 長軸 | 83cm | 短軸 | 81cm | |
| 法量 深さ | 16cm | 面積 | 0.6m² | |
| 形態 | 円形 | 主軸方向 | N－63°－E | |
| 時期 | 不明 | | | |

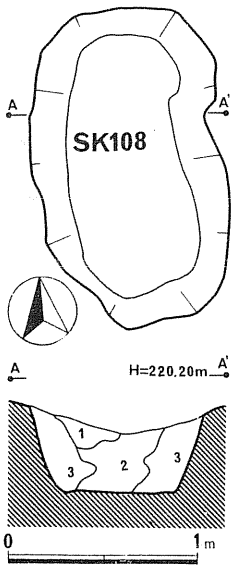
| Ｖ第15表 | 挿図番号 | Ｖ第17図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ106 | 検出地区 | ＪＨ53、ＪＩ53 | |
| 法量 長軸 | 211cm | 短軸 | 154cm | |
| 法量 深さ | 14cm | 面積 | 2.7m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－71°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ｖ第16表 | 挿図番号 | Ｖ第18図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ107 | 検出地区 | ＪＩ53、ＪＪ53 | |
| 法量 長軸 | 90cm | 短軸 | 74cm | |
| 法量 深さ | 18cm | 面積 | 0.6m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－63°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |




Ｖ第18図　ＳＫ107土壙

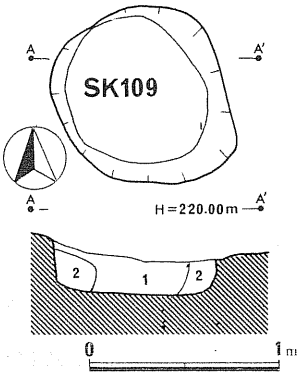
Ｖ　ＳＫ107土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。小礫若干混入。




Ｖ第19図　ＳＫ108土壙

| Ｖ第17表 | 挿図番号 | Ｖ第19図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ108 | 検出地区 | ＫＡ54 | |
| 法量 長軸 | 166cm | 短軸 | 98cm | |
| 法量 深さ | 43cm | 面積 | 1.5m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－20°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ｖ　ＳＫ108土壙　埋土
1．黒色土（10ＹＲ3/1）粘性中。孔隙率中。パサパサ。
2．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。地山土若干混入。

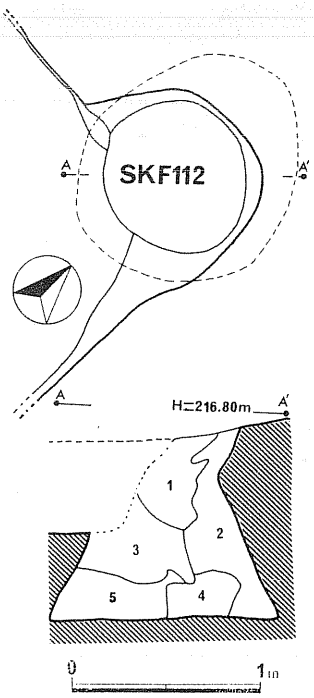



Ⅴ第20図　ＳＫ109土壙

| Ⅴ第18表 | 挿図番号 | Ⅴ第20図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ109 | 検出地区 | ＪＧ52 | |
| 法量 長軸 | 105cm | 短軸 | 96cm | |
| 法量 深さ | 23cm | 面積 | 0.8m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－90°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫ109土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性弱。孔隙率低。黄褐色土ブロック１％及び軽石が若干混入。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子を混入。ボロボロ。

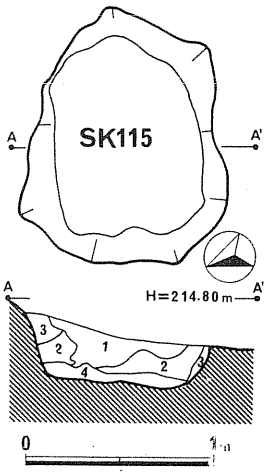



Ⅴ第21図　ＳＫＦ112フラスコ状ピット

| Ⅴ第19表 | 挿図番号 | Ⅴ第21図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫＦ112 | 検出地区 | ＪＨ49、50 | |
| 法量 長軸 | 80cm | 短軸 | 75cm | |
| 法量 深さ | 104cm | 面積 | 0.5m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－32°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫＦ112土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。孔隙率低。炭化物及びパミス若干混入。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子混入。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子１％混入。
4．明黄褐色土（10ＹＲ6/8）粘性弱。孔隙率低。同色の土がブロック状で混入。
5．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。黄褐色土ブロック１％混入（３層と同層と思われるが、色調を観察すると３層より若干ではあるが明るい。）

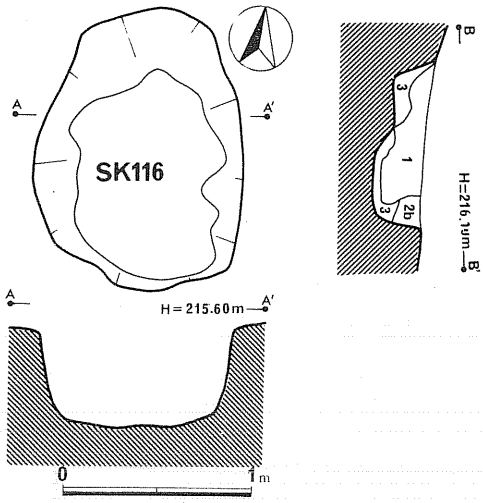



Ⅴ第22図　ＳＫ115土壙

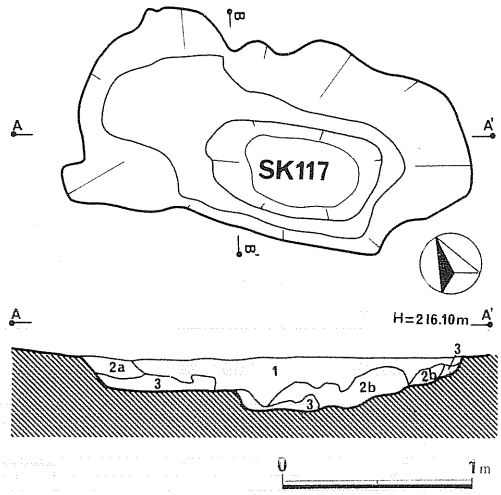
| Ⅴ第20表 | 挿図番号 | Ⅴ第22図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ115 | 検出地区 | ＫＡ49、50、ＫＢ49、50 | |
| 法量 長軸 | 130cm | 短軸 | 100cm | |
| 法量 深さ | 37cm | 面積 | 1.2m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－61°－E | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫ115土壙　埋土

1．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率中。ポソポソ
2．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子若干混入。
3．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。固くしまっている。
4．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性強。孔隙率低。固くしまっており地上の土が多量に混入。




Ⅴ第23図　ＳＫ116土壙



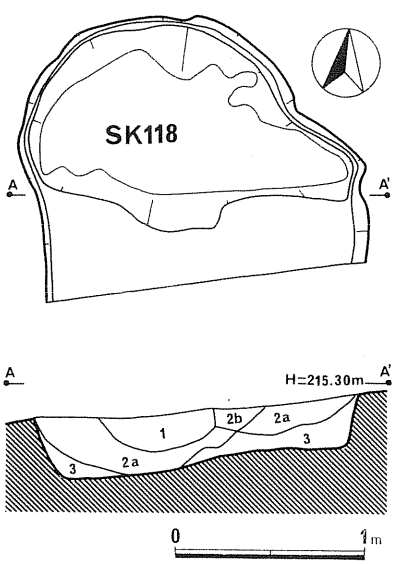

Ⅴ第24図　ＳＫ117土壙

| Ⅴ第21表 | 挿図番号 | Ⅴ第23図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ116 | 検出地区 | ＪＨ48 | |
| 法量 長軸 | 151cm | 短軸 | 112cm | |
| 法量 深さ | 32cm | 面積 | 1.4m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－2°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ⅴ第22表 | 挿図番号 | Ⅴ第24図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ117 | 検出地区 | ＪＧ48、ＪＧ49 | |
| 法量 長軸 | 211cm | 短軸 | 96cm | |
| 法量 深さ | 28cm | 面積 | 2.0m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－40°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫ117土壙　埋土

1．黒色土（10ＹＲ 1/1）粘性中。孔隙率中。やわらかい。
2a．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。黄褐色土が混っている。
2b．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性強。孔隙率中。黄褐色土が多量に混入。
3．黄褐色土（10ＹＲ5/8）粘性強。孔隙率中。ボソボソ。

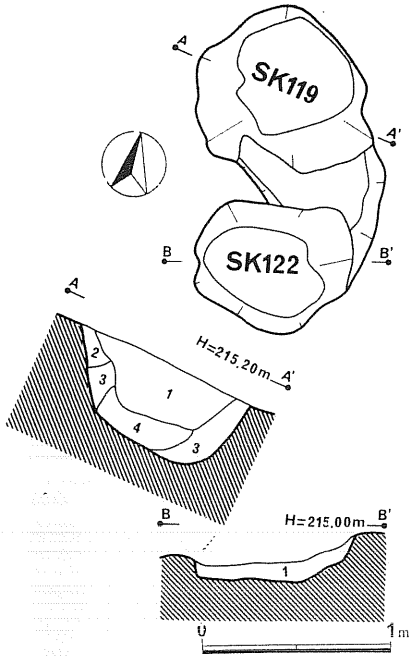



Ⅴ第25図　ＳＫ118土壙

| Ⅴ第23表 | 挿図番号 | Ⅴ第25図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ118 | 検出地区 | ＪＨ47、48、ＪＩ47、48 | |
| 法量 長軸 | 183cm | 短軸 | 114cm | |
| 法量 深さ | 32cm | 面積 | 1.7（境界までの面積）m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | 不明 | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫ118土壙　埋土

1．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率中。
2a．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子をわずかに混入。
2b．黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘性強。孔隙率中。黄褐色土が小ブロック状に混入。
3．褐色土（10ＹＲ4/4）粘性強。孔隙率低。非常に固くしまっている。



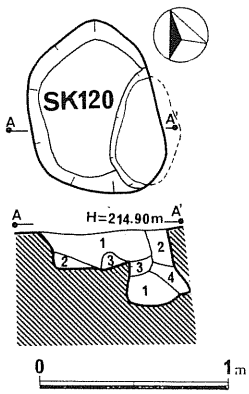

Ⅴ第26図　ＳＫ119・122土壙

| Ⅴ第24表 | 挿図番号 | Ⅴ第26図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ119 | 検出地区 | ＪＩ48 | |
| 法量 長軸 | 100cm | 短軸 | 70cm | |
| 法量 深さ | 95cm | 面積 | 0.5m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－30°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫ119土壙　埋土
1．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子をわずかに混入。
2．褐色土（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率中。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。
4．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。ボソボソ。

| Ⅴ第25表 | 挿図番号 | Ⅴ第26図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ122 | 検出地区 | ＪＩ47 | |
| 法量 長軸 | 80cm | 短軸 | 73cm | |
| 法量 深さ | 25cm | 面積 | 0.5m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－87°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

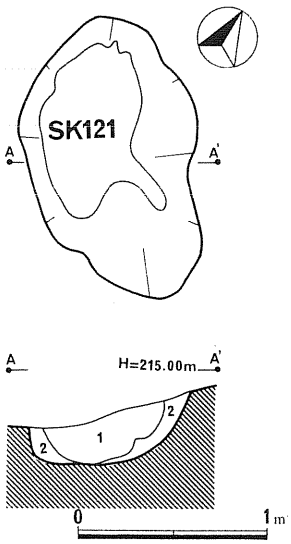
Ⅴ　ＳＫ122土壙　埋土
1．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率高。やわらかい。




Ⅴ第27図　ＳＫ120土壙

| Ⅴ第26表 | 挿図番号 | Ⅴ第27図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ120 | 検出地区 | ＪＪ48 | |
| 法量 長軸 | 94cm | 短軸 | 70cm | |
| 法量 深さ | 55cm | 面積 | 0.6m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－30°－E | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅴ　ＳＫ120土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。ボソボソ。
2．褐色土（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率低。地山の土が混入。
3．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。ボソボソ。焼土わずかに混入。
4．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒子をわずかに混入。




Ⅴ第28図　ＳＫ121土壙

| Ⅴ第27表 | 挿図番号 | Ⅴ第28図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ121 | 検出地区 | ＪＩ47、48、ＪＪ47、48 | |
| 法量 長軸 | 125cm | 短軸 | 94cm | |
| 法量 深さ | 45cm | 面積 | 1.1m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－40°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

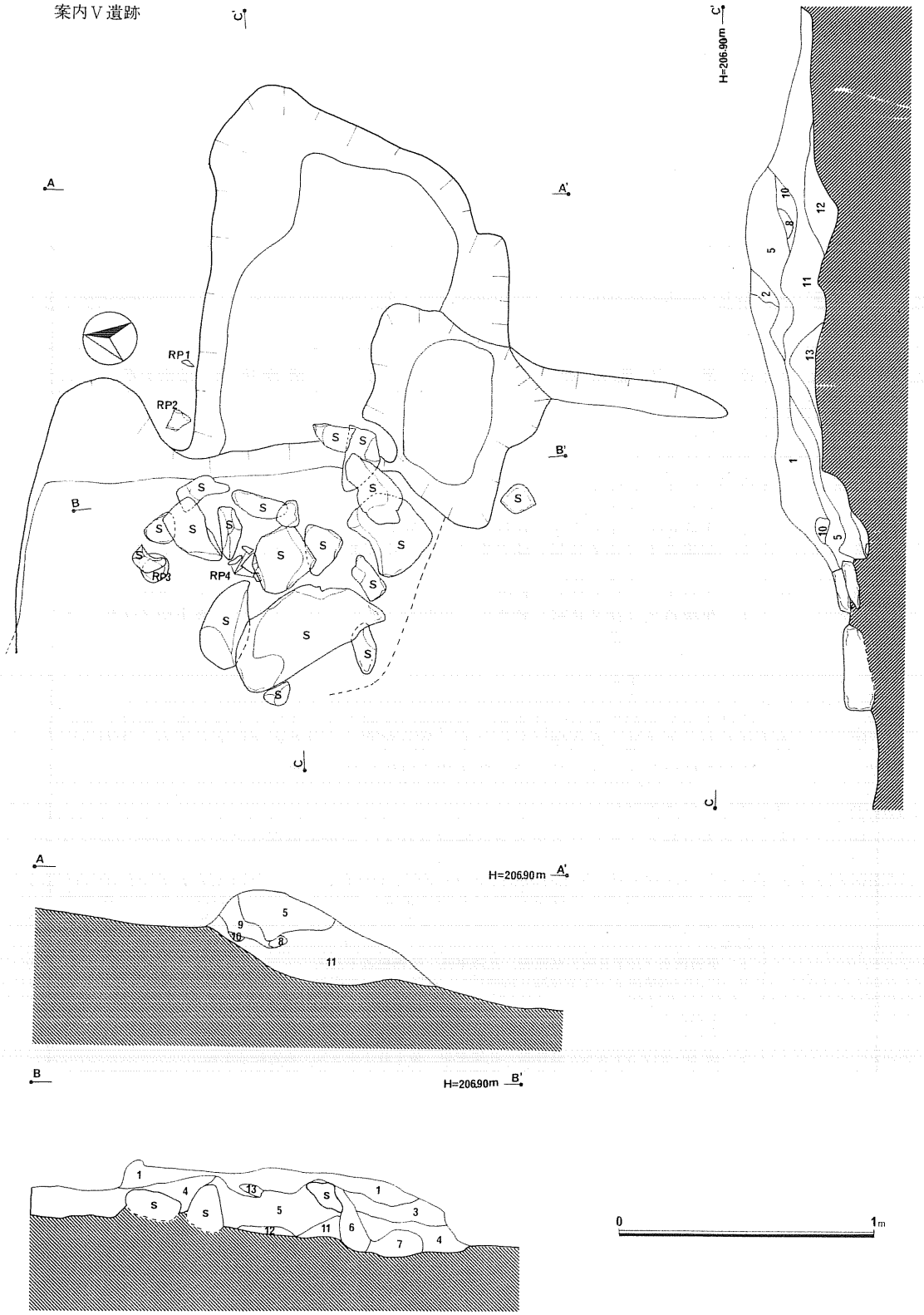
Ⅴ　ＳＫ121土壙　埋土
1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。パミスがわずかに混入。
2．褐色土（10ＹＲ3/4）粘性弱。孔隙率低。

Ⅴ第29図　ＳＩ02竪穴住居跡

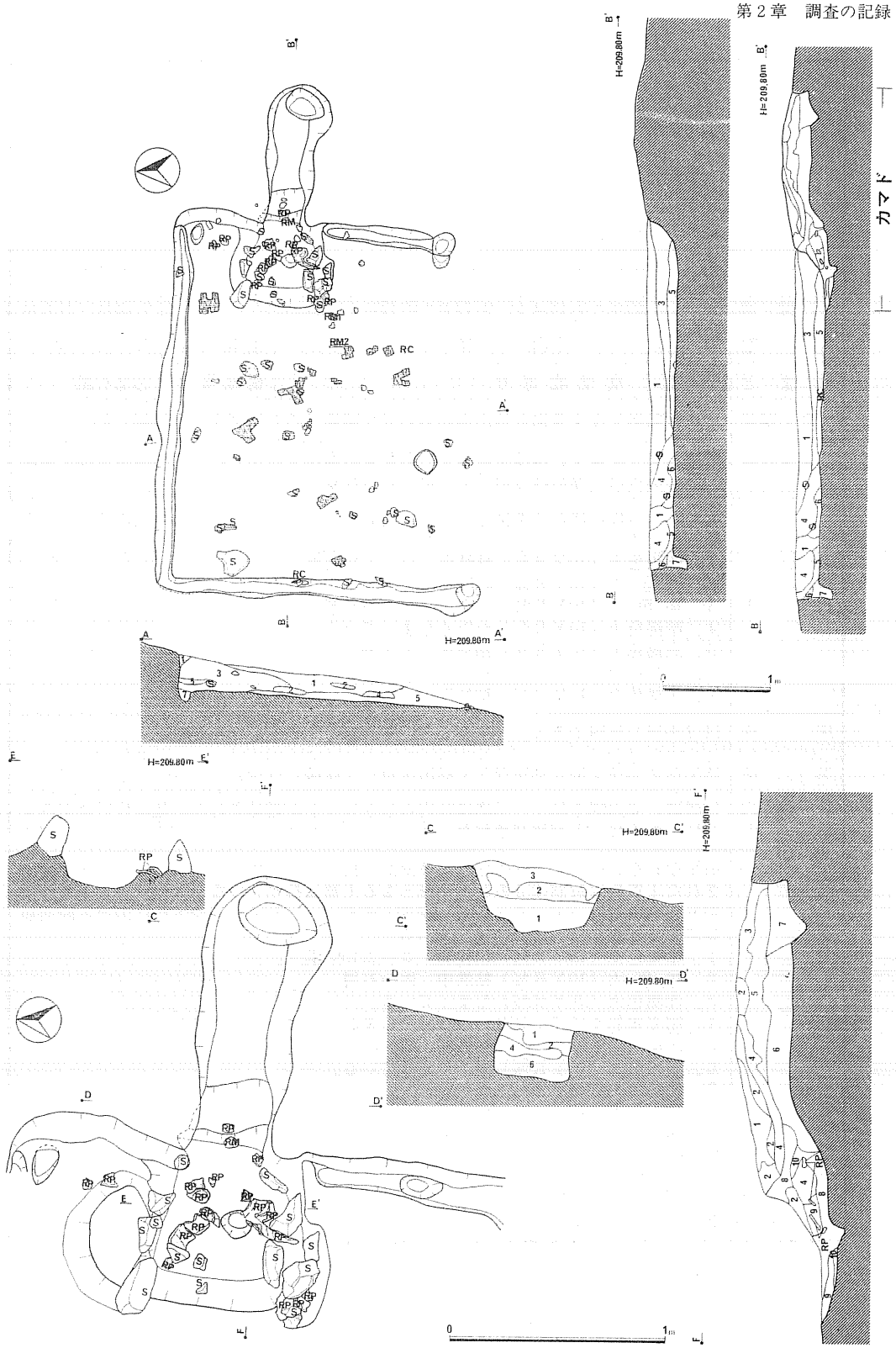
| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| Ｖ第28表 | 挿図番号 | Ｖ第29・30図 | | 図版番号 | 図版11 |
| 遺構名 | ＳＩ02 | 検出地区 | ＯＡ50、ＯＢ49、ＯＢ50、ＯＣ49、ＯＣ50 | | |

| 法量 | | 東側壁 | 西側壁 | 南側壁 | 北側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 壁長 | (2.65m) | 3.21m | (2.18m) | 3.25m |
| | 壁高 | 0.09m～0.34m | 0.23m～0.32m | 0.06m～0.12m | 0.20m～0.42m |
| | 壁溝幅 | ―― | ―― | ―― | ―― |
| | 壁溝深 | ―― | ―― | ―― | ―― |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 形態 | 方形 | 面積 | 12.69m² | 主軸方向 | N－88°－W |
| かまど | 位置 | 東壁北寄り | | 構築素材 | 芯部石組 |
| プラン確認 | | | | | |
| 壁面の状態 | しまりがよく、ほぼ垂直に近い立ち上がりをしている。東壁及び南壁の一部が確認されなかった。 | | | | |
| 覆土 | 断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘性中。炭化物３％。焼土粒子２％。混入土は柔かい。<br>2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘石層である。炭化物１％。土は締りがなくボソボソしている。<br>3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。炭化粒子１％。浮石30％。混入土は締っている。<br>4．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性中。炭化粒子５％。ローム５％。焼土粒子１％。土は柔かい。<br>5．黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘性中。極小粒～小粒ローム５％。焼土粒子３％。やや柔かい。 | | | | |
| 床面 | ほぼ平坦で堅固である。住居跡、西南隅の床面より、マウンド状の焼土範囲が確認された。その他、北西隅においても、焼土範囲が確認されている。また、北壁沿に広い範囲にわたって、カヤ状の炭化物が確認されている。 | | | | |
| 壁溝 | 確認されなかった。 | | | | |
| 柱穴ピット | はっきり柱穴と思われるピットは確認されず、北壁中央寄りにピットが一つ確認された。 | | | | |
| カマド | 扁平な石を芯材として構築されたものである。煙道部及び煙出口部における焼土範囲が広く確認された。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘性弱。孔隙率低。植物根若干混入。<br>2．にぶい赤褐色土（５ＹＲ4/4）粘性なし。孔隙率高。炭化物なし。焼土粒子極大３％。白色粒子１％。<br>3．黒褐色土(2.5ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。粒子大２％。<br>4．黒褐色土(7.5ＹＲ2/2）粘性中。孔隙率低。粒子極大２％。植物根多量混入。<br>5．褐色土(7.5ＹＲ4/4）粘性弱。孔隙率中。焼土粒子中５％。白色粒子１％。<br>6．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性中。孔隙率低。粒子小１％。焼土粒子中１～２％。植物根若干混入。<br>7．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率中。粒子小１％。炭化物２％。<br>8．黄褐色土（10ＹＲ5/6）粘性強。孔隙率中。ロームブロックである。焼土粒子中１％。白色粒子中１％。　粒子小３％。植物根なし。炭化物なし。<br>9．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性弱。孔隙率中。植物根若干混入。焼土粒子大１％。炭化物極大３％。<br>10．黄褐色土（10ＹＲ5/6）粘性なし。孔隙率中。<br>11．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性弱。孔隙率低。炭化物中１％。焼土粒子大３％。白色粒子１％。植物根多量。<br>12．黄褐色土（10ＹＲ4/6）粘性弱。孔隙率低。粒子小１％。炭化物焼土全々なし。<br>13．褐色土（10ＹＲ4/4）粘性弱。孔隙率低。粒子中２％。植物根若干混入。 | | | | |




Ⅴ第30図　ＳＩ02竪穴住居跡カマド



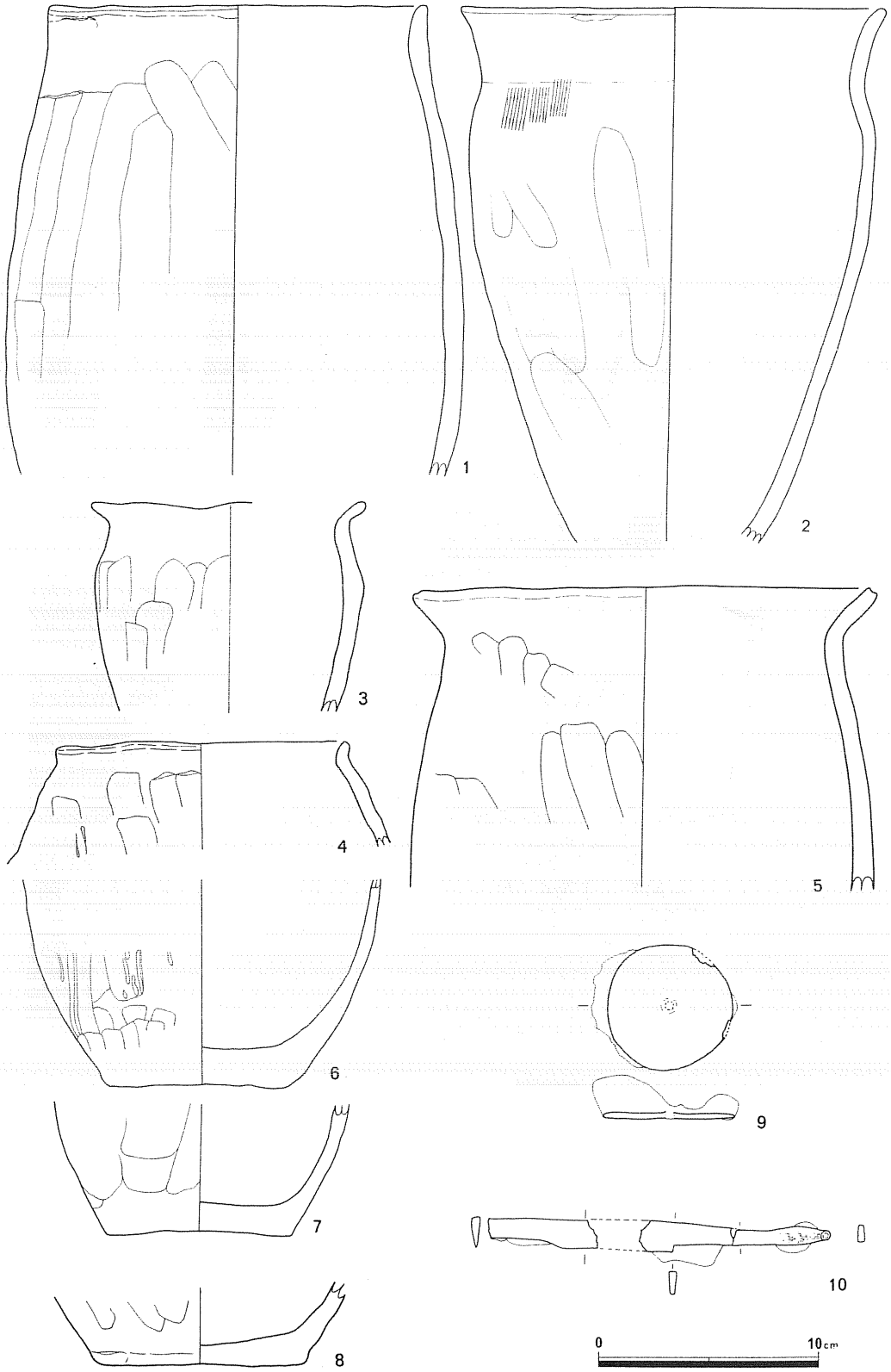

Ⅴ第31図　ＳＩ03竪穴住居跡

| Ｖ第29表 | 挿図番号 | Ｖ第31・32図 | 図版番号 | Ｖ 図版12 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＩ03 | 検出地区 | ＮＡ51、ＮＡ51、ＮＢ52 | |

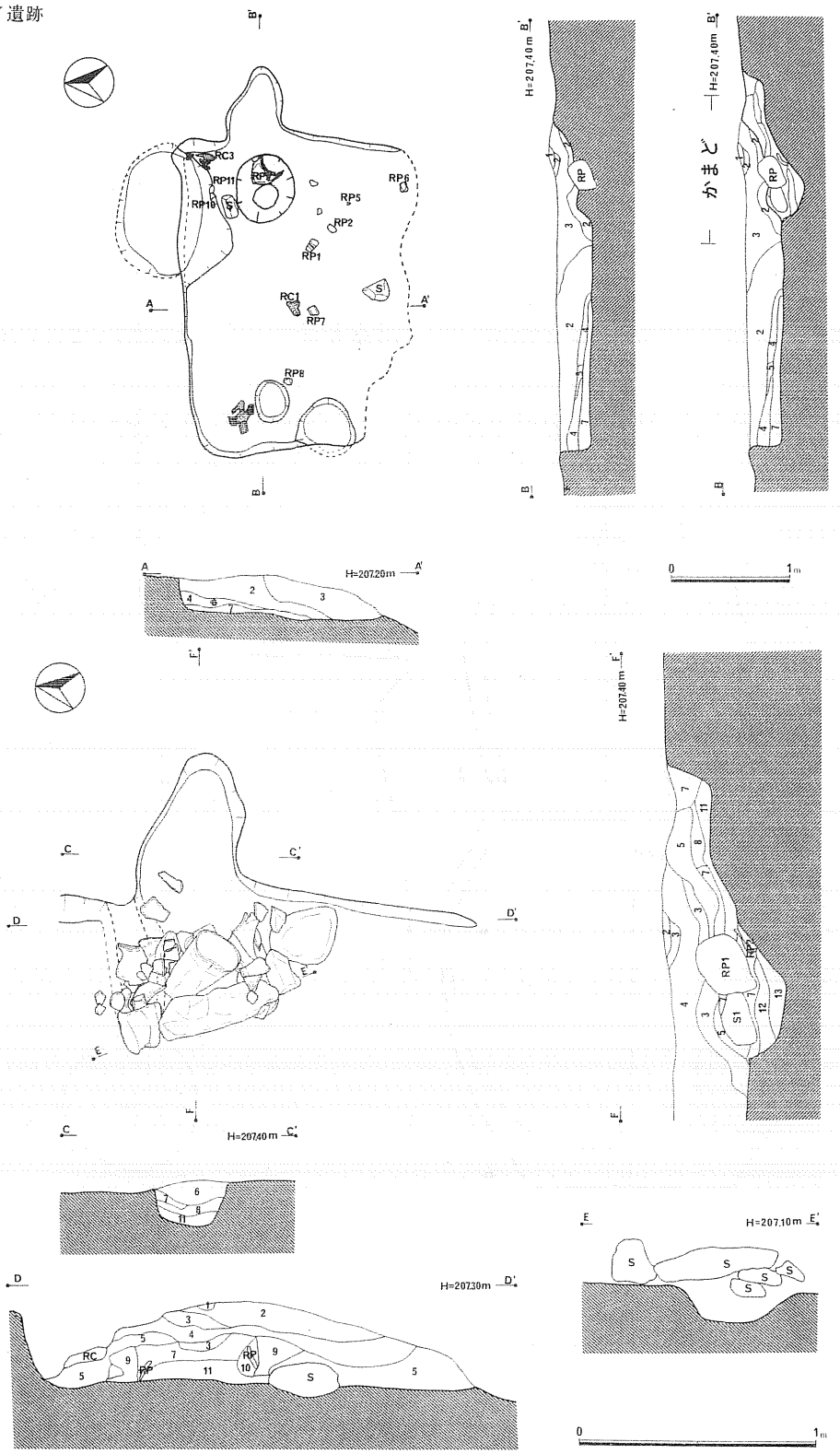
| 法量 | | 東側壁 | 西側壁 | 南側壁 | 北側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 壁長 | 2.59m | 3.03m | ―――― | 3.56m |
| | 壁高 | 0.18m～0.36m | 0.04m～0.23m | ―――― | 0.32m～0.37m |
| | 壁溝幅 | 0.05m～0.10m | 0.08m～0.17m | ―――― | 0.04m～0.12m |
| | 壁溝深 | 0.09m～0.18m | 0.10m～0.15m | ―――― | 0.08m～0.09m |

| 形態 | 方形 | 面積 | 10.79m² | 主軸方向 | N―85°―W |
|---|---|---|---|---|---|
| かまど | 位置 | 東壁北寄り | | 構築素材 | 芯部石組 |

| | |
|---|---|
| プラン確認 | 南に緩傾斜をなす黄褐色地山面において、暗褐色の方形プランを確認した。 |
| 壁面の状態 | 壁はしまりがよく、ほぼ垂直に立ちあがる斜面にて検出されたため南壁全部が確認できなかった。原形は方形であったと思われる。 |
| 覆土 | 北から南へ緩い傾斜で堆積している。断面視察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．暗褐色土（10ＹＲ4/3）粘性弱、ローム10%混入。<br>2．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性中。<br>3．褐色土（10ＹＲ4/4）粘性中。かたい石層。<br>4．暗褐色土（10ＹＲ3/3）かたくしまっている。<br>5．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。炭化物混入。<br>6．黒褐色土（10ＹＲ2/2）粘性弱。かたい。<br>7．黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘性なし。ポロポロしている。しまりなし。 |
| 床面 | ほぼ平坦で堅固である。 |
| 壁溝 | 西壁及び北壁全部と東壁カマド以南において確認された。 |
| 柱穴ピット | 住居跡、北西隅を除く、三隅に柱穴らしきピットが確認された。他に住居跡南西よりに一つのピットが確認された。 |
| カマド | 扁平な石を芯材として構築された煙道部の長いカマドである。またカマド内で検出された土器片は数個体分あり、完形となる土器は検出されなかった。カマド北側袖部分外にマウンド状になった焼土範囲が確認されている。カマド内における断面観察による埋土の状態は次の通りである。<br>1．暗褐色土（10ＹＲ4/3）粘性弱。ローム10%混入。<br>2．褐色土（10ＹＲ4/4）粘性中。固い石層。<br>3．赤褐色土（5ＹＲ4/8）しまっている。<br>4．暗赤褐色土(7.5ＹＲ3/4)（焼土)少し柔かい。<br>5．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性弱。固い。<br>6．暗褐色土（10ＹＲ3/3）固くしまっている。<br>7．黒褐色土(7.5ＹＲ2/2）柔かい。<br>8．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。柔かい焼土粒混入。<br>9．赤褐色土（5ＹＲ4/6）粘性強。しまっている。<br>10．暗褐色土(7.5ＹＲ3/4）粘性中。柔かい焼土粒混入。 |
| 遺物とその出土状態 | Ｖ第32図に示す遺物が出土しました。ほとんどが土師器甕の破片である。9は紡錘車の円盤部である。 |




Ⅴ第32図　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物



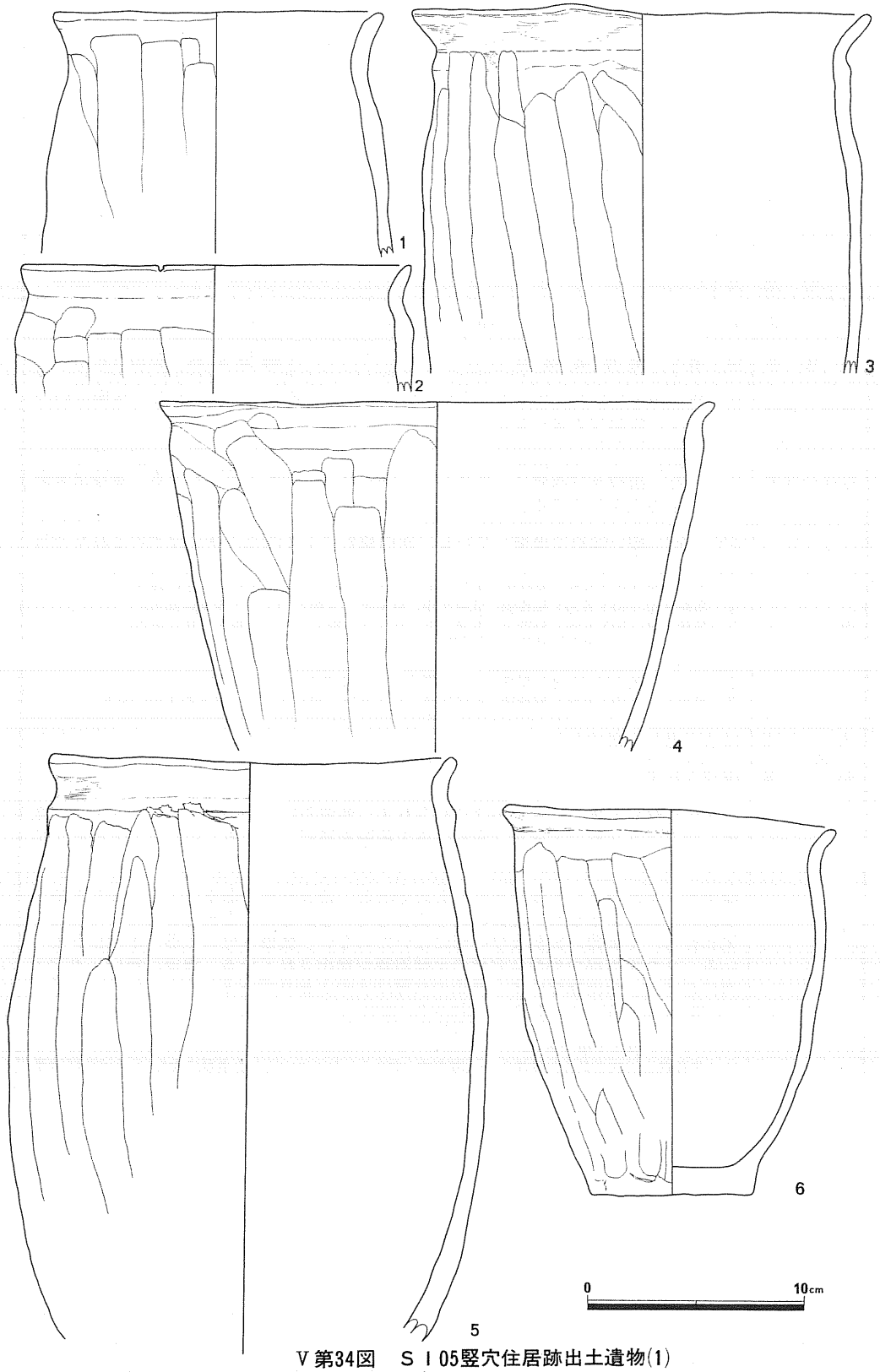

Ⅴ第33図　ＳＩ05竪穴住居跡

| V第30表 | 挿図番号 | V第33～35図 | 図版番号 | V図版13 |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | S I 05 | 検出地区 | NH－50 | |

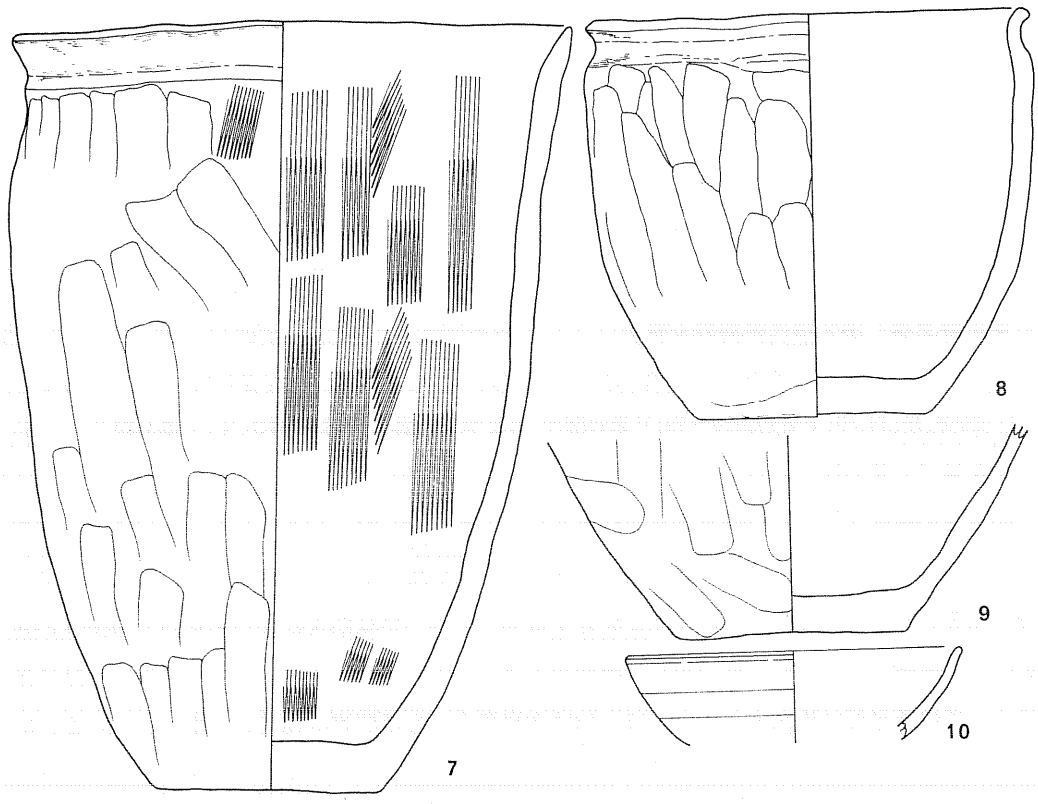
| 法量 | | 東側壁 | 西側壁 | 南側壁 | 北側壁 |
|---|---|---|---|---|---|
| | 壁長 | (1.96m) | (1.28m) | ―― | 2.50m |
| | 壁高 | 0.02m～0.41m | 0.06m～0.25m | ―― | 0.22m |
| | 壁溝幅 | ―― | ―― | ―― | ―― |
| | 壁溝深 | ―― | ―― | ―― | ―― |

| 形態 | 方形 | 面積 | 5.09m² | 主軸方向 | N－87°－E |
|---|---|---|---|---|---|
| かまど | 位置 | 東壁北寄り | | 構築素材 | 芯部石組 |

| | |
|---|---|
| プラン確認 | 南に緩傾斜をなす黄褐色土地山上面にて、プランを確認した。しかし、南側は削平が著しく、確認できないところもあった。 |
| 壁面の状態 | 南に緩傾斜をなす面に構築された住居跡のため西壁の一部と南壁の一部が確認されなかった。南壁及び西壁はしまりよく、垂直に近い立ち上がりをする。東壁は垂直に近い立ち上がりをするが、しまりはあまりよくない。 |
| 覆土 | 北から南へ緩い傾斜で堆積している。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．黒褐色土（10YR2/2）粘性中。孔隙率低。径1～5mmのペミスを極わずかに混入。<br>2．黒褐色土（10YR2/2）粘性弱。孔隙率中。径0.5～5mmのパミスを多量に混入。<br>3．黒褐色土（10YR2/3）粘性中。孔隙率低。径1～3mmのパミスを極わずかに混入。<br>4．黒褐色土（10YR2/3）粘性中。孔隙率中。径1～2mmのパミス混入。<br>5．褐色土（10YR4/4）粘性なし。孔隙率中。パミス塊混入。<br>6．にぶい黄色土(2.5Y6/3）粘性なし。孔隙率中。パミス塊混入。<br>7．黒褐色土（10YR2/2）粘性中。孔隙率低。10YR5/6　褐色土ブロックをわずかに混入。 |
| 床面 | ほぼ平坦で堅固である。 |
| 壁溝 | 確認されず。 |
| 柱穴ピット | はっきり柱穴と思われるものは確認されず、西壁沿に２つのピットと、S I 05の北壁を切るような形で土壙状（底部に焼土範囲を確認している）のピットを確認している。 |
| カマド | 扁平な石を芯材として構築されたものである。遺存状態が非常によく、天井部袖部共に芯材の石が構築当時に近い形で遺存している。また、支脚として用いられたと思われる。土師器の底部及び完形にはいたらない、数個体分の土器片が検出されている。また燃焼部中央部に完形の土師器甕が検出されている。煙道は短い。カマド内における、断面観察による埋土の状態は次のとおりである。<br>1．褐色土(7.5YR4/6）粘性小。孔隙率中。焼土。<br>2．黒褐色土（10YR2/2）粘性中。孔隙率低。径1～5mmのパミスを極僅かに含む。S I 05住居跡覆土1層である。<br>3．黒褐色土（10YR2/2）粘性小。孔隙率中。径0.5～5mmのパミスを多量に含む。S I 05住居跡覆土2層である。<br>4．黒褐色土（10YR2/3）粘性中。孔隙率低。径1～3mmのパミスを僅かに含む。S I 05住居跡覆土3層である。<br>5．黒褐色土（10YR2/3）粘性中。孔隙率低。径1～2mmのパミスを極僅かに含む。<br>6．褐色土（10YR4/4）粘性大。孔隙率低。カマド形成(上部)土と思われる粘質土。<br>7．赤褐色土（5YR4/6）粘性小。孔隙率低。焼土　粘質土が焼けたものと思われる。<br>8．褐色土(7.5YR4/4）粘性小。孔隙率低。焼土。ボソボソしている。<br>9．褐色土（10YR4/4）粘性大。孔隙率低。カマド袖形成土。粘質土。<br>10．暗赤褐色土（5YR3/6）粘性大。孔隙率低。焼土。カマド袖形成土が焼けたもの。<br>11．暗褐色土(7.5YR3/4）粘性中。孔隙率低。焼土。ボソボソして柔かい。<br>12．褐色土(7.5YR4/4）粘性中。孔隙率中。10YR5/6赤色の焼土を含む。<br>13．暗赤褐色土（5YR5/8）粘性小。孔隙率低。シルト質、10YR5/6、赤色の焼土を含む。 |
| 遺物とその出土状態 | V第34・35図に示す遺物が出土した。遺物はかまど付近から集中して出土しており、土師器甕の破片がほとんどであるが、坑も１点出土している。 |




Ⅴ第34図　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物(1)




Ｖ第35図　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物(2)

## 第２節　その他の遺物

### １．土　器

**第Ｉ群土器**…縄文時代前期初頭の土器（Ｖ第39図１、２、３、４、６、７、９）

各種の縄文原体を使用している。原体の種類により類別が可能であるが、ここでは一括し各資料について述べる。

１はＲＬとＬＲの単節の撚りの異なる原体を全面に回転させている。その結果、各原体の条が交叉し網目状を呈する。またところどころに綾絡文も観察される。胎土に砂粒は含まれるが、繊維は含んでいない。２はＬＲの原体２本を結束第１種の方法により結び合せ回転施文している。胎土に多量の繊維を含む。３はＬＲの原体を縦位に回転施文している。胎土に多量の繊維を含む。４はＬＲとＲＬの二本の原体を結束第１種により結び合せ、羽状縄文を表出させている。器面では殆ど結束部しか回転されていない。胎土に繊維を含む。６はＲＬの縄にＲの縄を右回り方向に螺施状に巻きつけた原体を回転させて異条斜縄文を表出させている。胎土に砂粒

を含むが繊維は含まない。7、9は、断面形が三角形になる口縁部破片。頸部に無文帯を挟んでＬＲ縄文が施文される。胎土に繊維を含む。以上の土器の内面は比較的丁寧にヘラ状工具で磨かれている。

**第Ⅱ群土器**…縄文時代前期中葉の土器（Ⅴ第39図５）

この１片のみである。破片上部にはＬＲの縄の綾絡文が、その下部全面にＬの撚糸文が施されている。胎土には繊維を多く含み、内面は横方向の指頭による調整がなされる。

**第Ⅲ群土器…縄文時代中期の土器**

{Ⅴ第39図10～17、Ⅴ第36図１、Ⅴ第39図18、Ⅴ第40図30、31、Ⅴ第39図19、Ⅴ第40図20～27、Ⅴ第40図28、29、32、33、Ⅴ第40図36～38、Ⅴ第41図39～46、Ⅴ第37図５、Ⅴ第37図３、４、Ⅴ第38図７}

第１類（Ⅴ第39図10～17）

絡縄体の圧痕文により口縁部文様が構成される土器。10、11、12の３片と13、14の２片はそれぞれ同一個体である。口縁は弁状突起をもった波状口縁となるが、14のように頂部が二叉に分かれる例や、16、17のように単に山形となる例がある。口縁部文様は16を除いて絡縄体の側面圧痕を基調とし、口縁上端や頸部の隆帯上では縦位置に連続して押圧し、文様帯内では口縁に沿って数条平行に施文する。10、11、12は文様帯内でも縦位置に連続して施文している。口縁部の突起下には、10、11のようにリボン状の突起、13、14のように橋状の突起、17のようにボタン状の突起、16のように縦位の粘土紐による隆線等が貼付される。そして、そのそれぞれには文様帯内に施文しているのと同一の原体が押圧されている。16は文様帯内に施文されるのはＬＲの縄の側面圧痕である。体部の文様は斜行縄文が施されるが、10～12及び15ではその横位回転、13、14はＬＲの縦位回転、16はＬＲの横位回転によって施文されている。胎土には極く僅かに繊維を含む。内面は丹念にヘラ状工具により磨かれている。

第２類（Ⅴ第36図１、Ⅴ第39図18、Ⅴ第40図30、31）

文様帯内に短い原体の圧痕により瓜形文列を施す土器。Ⅴ第36図１は四個の弁状突起をもつ波状口縁の土器である。口縁上端と頸部に粘土紐の隆帯が貼付され文様帯を形成する。文様帯内には、ＬとＲの二本の原体と一組として瓜形文が施文される。また文様帯の上下の隆帯に沿った部分、文様帯上下の隆帯上、口縁部突起から垂下する波状の隆帯上にもこの二本の原体が一組で押圧されている。体部は０段多条のＬＲ原体の末端を結んだ綾絡文と斜縄文を施している。Ⅴ第39図18は文様帯内の瓜形文が０段多条のＲ原体を使って施文されている。文様帯下限を画している隆帯上にはＬ原体を縦位に連続して施している羽状縄文が施される。Ⅴ第40図30、31、34は弁状突起の突起部分であるが、粘土紐貼付による隆帯と原体の側面圧痕により文様が構成されている。使用されている原体はＲの撚りのものである。この種の土器では胎土に砂粒を含むが、繊維は混入されない。内面は丁寧にヘラ状工具で磨かれている。

第３類（Ｖ第39図19、Ｖ第40図20～27）

粘土紐貼付による隆帯と、それに沿った棒状工具による刺突列で文様構成される土器。Ｖ第39図19、Ｖ第40図20～26は同一個体である。粘土紐は口縁上端で鋸歯状に貼付され、口縁下の文様帯内では水平に貼付される。刺突列は文様帯内の水平に貼付された粘土紐の間に施される。隆帯上にも刻目が施されるが、Ｖ第40図27では原体の側面圧痕が縦位に連続して押圧されている。胎土に砂粒を含むが、繊維は混入されない。内面は丹念にヘラ状工具により磨かれている。

第４類　（Ｖ第40図28、29、32、33）

地文に縄文を施し、粘土紐貼付の隆帯で文様を構成する土器。口縁部の資料Ｖ第40図28、29では、口縁は平縁となるようである。粘土紐は口縁上端では鋸歯状あるいは格子目状に貼付される。口縁下～体上半では斜位に交叉させて文様を作っている。隆帯上には29、33、Ｖ第36図２のように縄文が回転されることもある。地文として用いられている縄文は28、32ではＬＲの横位回転、29、33ではＲＬの横位回転、Ｖ第36図２ではＲＬＲの右上―左下の斜位回転施文による。この種の土器でも胎土に砂粒を含むが繊維は混入されない。内面はヘラ状工具により調整。

第５類　（Ｖ第40図36～38、Ｖ第41図39～46、Ｖ第37図５）

充塡縄文によって文様が構成される。全体の器形はＶ第37図５が示すように、口縁がやや外反し、体上半部ですぼまり、体下半部で膨むようである。沈線は粗雑なものが多い。Ｖ第40図36は小形の土器であるが、口縁～体上半部に弧状の沈線により文様を描き、そのところどころに棒状工具による刺突文を施している。第37図５、第40図37、38は同一個体である。沈線によって区画された無文部分に所謂魚鰭状の貼付文が付けられている。また、第40図41のように刺突列を縄文部分の周縁にめぐらした例もある。充塡される縄文はＬＲとＲＬの両原体がある。胎土には砂粒が混入される。焼成は良好である。

第６類　（Ｖ第37図３・４、Ｖ第38図７）

全体の器形は第５類と同様、口縁部が外反し体上半部がすぼまり体下半部が膨らむ。器面全体に斜行縄文が施される。Ｖ第37図４、Ｖ第38図７のように口縁部に無文帯が設けられることもある。縄文は３者ともＲＬ原体を用いて施文している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

**第Ⅳ群土器**…縄文時代後期の土器

｛Ｖ第40図35、Ｖ第41図47～52、Ｖ第41図53、Ｖ第41図65、Ｖ第37図６、Ｖ第41図54～56、Ｖ第38図９～11、Ｖ第41図57～59｝

第１類（Ｖ第40図35、Ｖ第41図47、48、49、50、51、52）

地文に縄文を施し、沈線文による文様構成がなされる。沈線は太く、曲線的にひかれる。地文に用いられる原体にはＬＲとＲＬの両者がある。胎土は細砂粒を含む。焼成は良好で堅緻な仕上りとなっている。

第２類　（Ｖ第41図53）

格子目状撚糸文を施した土器、原体はＬの撚りのものを用いる。

第３類　（Ｖ第41図65）

刺突文の施される土器。比較的先端の鋭い工具による刺突文が列をなして施されている。

第４類　（Ｖ第37図６、Ｖ第39図８、Ｖ第41図54、55、56）

粗製の土器である。Ｖ第37図６のように口縁部に無文帯を設ける例、Ｖ第41図54、55のように口縁以下全面に縄文の施される例、またＶ第41図56のように口縁部に平行沈線をめぐらす例などがある。縄文はＬＲとＲＬの両者がある。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

底部資料　（Ｖ第38図９、10、11、Ｖ第41図57、58、59）

第Ⅳ群土器の底部資料。第41図58は網代痕、59は笹葉状圧痕を残す。

**第Ⅴ群土器**…縄文時代晩期の土器（Ｖ第38図８）

口唇上に一条沈線がめぐり、その外面に刻目が施される。口縁部の文様帯は、数条の平行沈線と沈線凹部に施された刺痕列によって構成される。体部はＬＲの縄文が施される。胎土は精選された粘土を用いている。焼成は良好で堅緻な仕上りとなっている。

**第Ⅵ群土器**…弥生時代以降の土器（Ｖ第38図12、Ｖ第41図60、61、62、63、64）

第１類　（Ｖ第38図12）

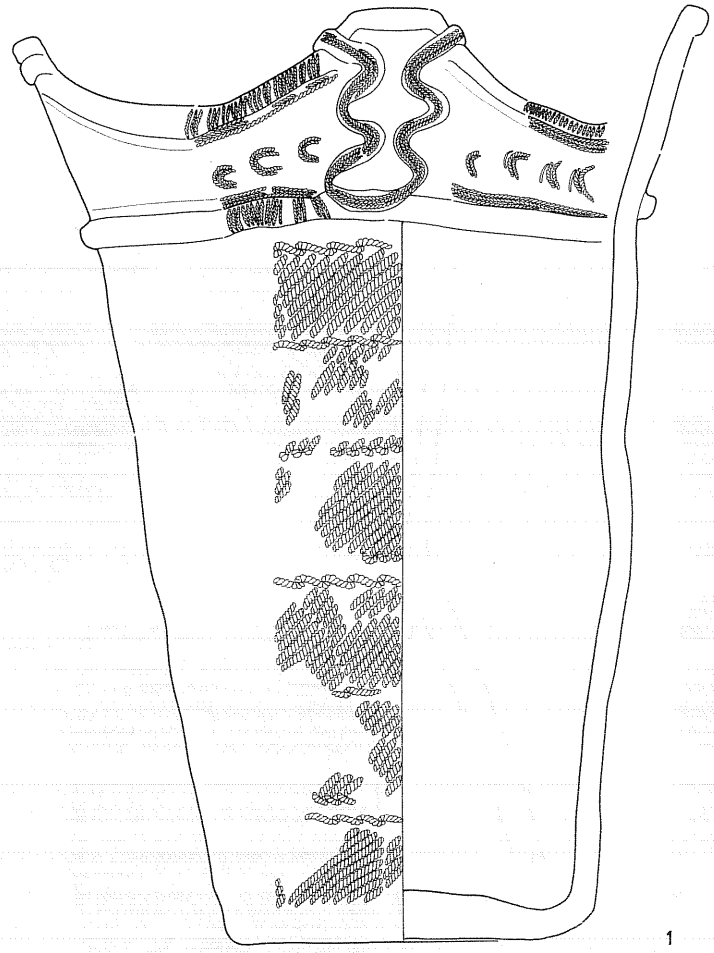
地文として縄文を施文し、沈線により文様を描いた土器。口唇外面は指頭の圧痕により小波状を呈し、上端には縄文が回転施文される。口縁部の文様帯には二条の平行沈線がめぐり、その下に連続する弧状沈線がひかれる。体上半部の文様帯は、上下限を二条の平行沈線で画し、上限に接して平行沈線により連続する弧線が二重にひかれる。また下限に接しても逆向きに弧線がひかれる。さらに下限の沈線の下にも口縁部文様帯と同様弧線がひかれる。地文にはＲＬ原体を用いるが、体上半部の文様帯内では横位回転、口縁部、体下半部では左上一右下の方向で回転して施文している。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

第２類　（Ｖ第41図60、61、62、63、64）

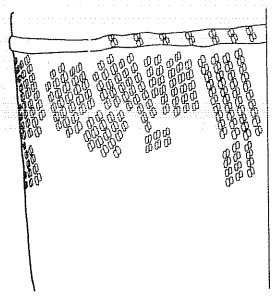
撚糸文を施文する土器。原体はＲの撚りのものを用いる。器厚は薄手で胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

## ２．石　器

遺構外からは計12点の石器が出土している。その内訳は石鏃１点（Ｖ第42図１…平基有茎鏃）、不定形石器３点（Ｖ第42図２～４）、凹石（Ｖ第42図５）、磨石（Ｖ第42図６・７、Ｖ第43図12）、有孔石製品（Ｖ第43図８）、磨製石斧（Ｖ第43図９…刃部破損）、石棒（Ｖ第43図10…頭部のみ残存。頭頂部に三又文、周縁に３か所の掘り込み）、敲き石（Ｖ第43図11）である。



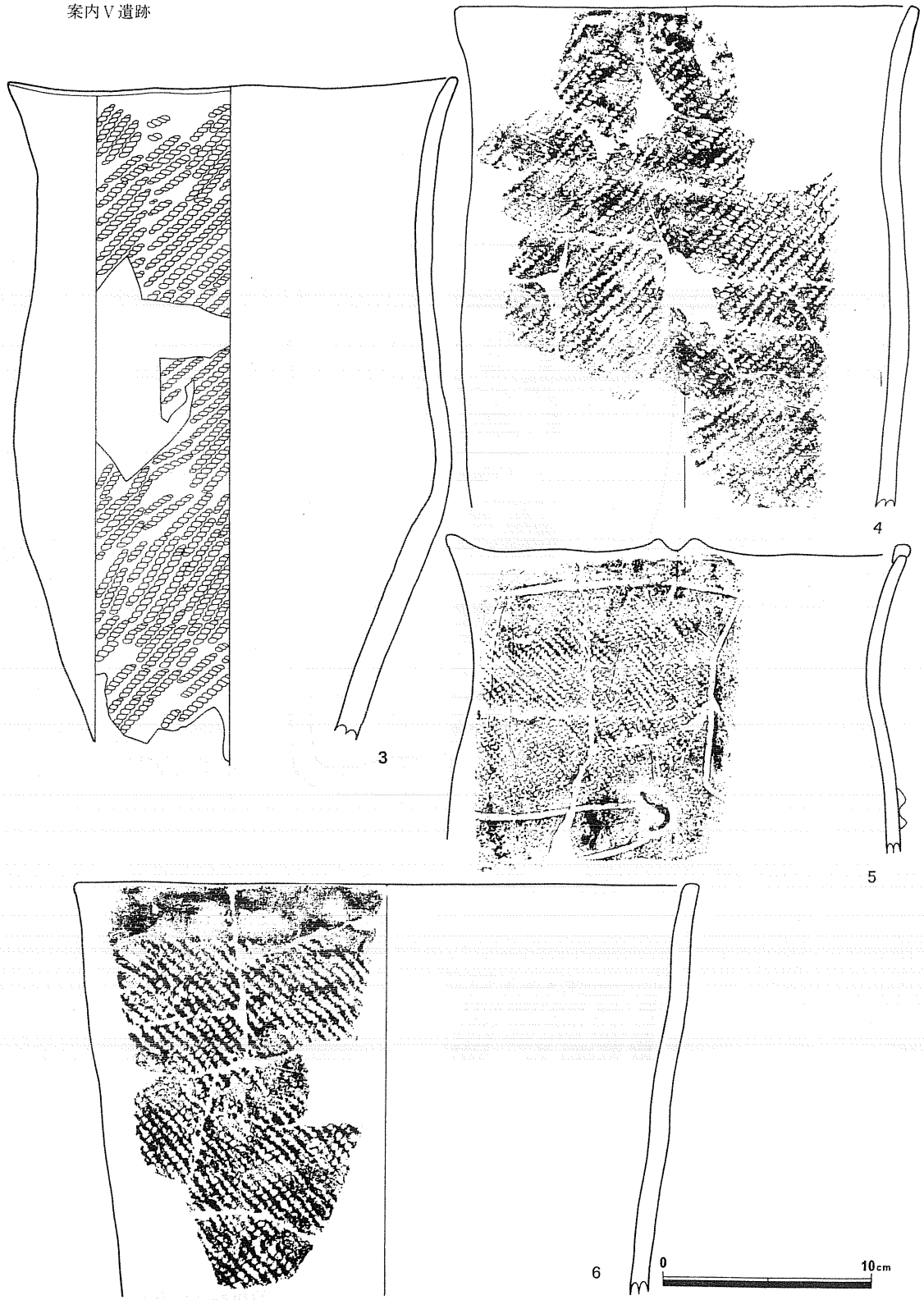
1



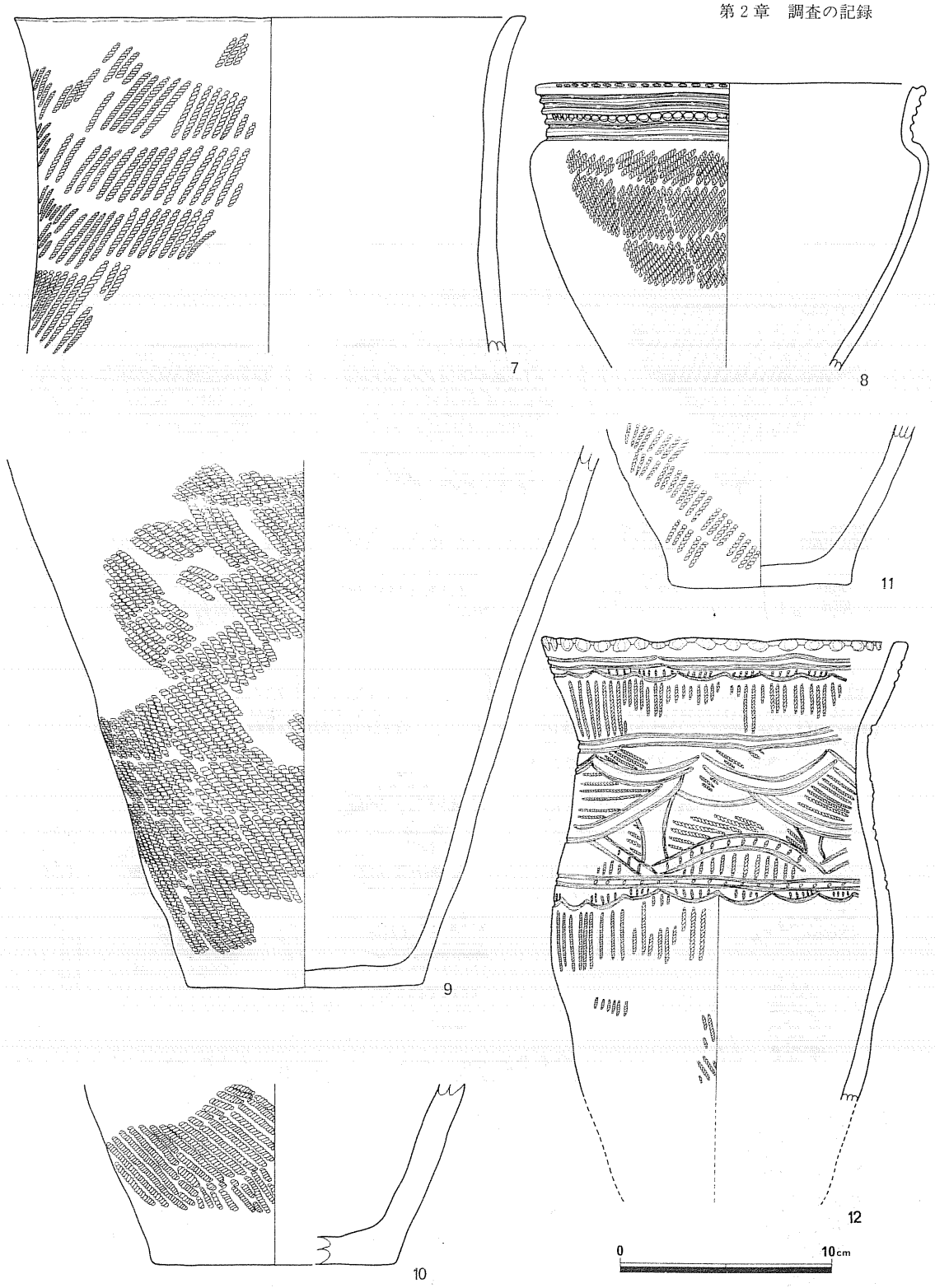
2

0　10cm

Ⅴ第36図　遺構外出土土器実測図(1)




Ⅴ第37図　遺構外出土土器実測図(2)

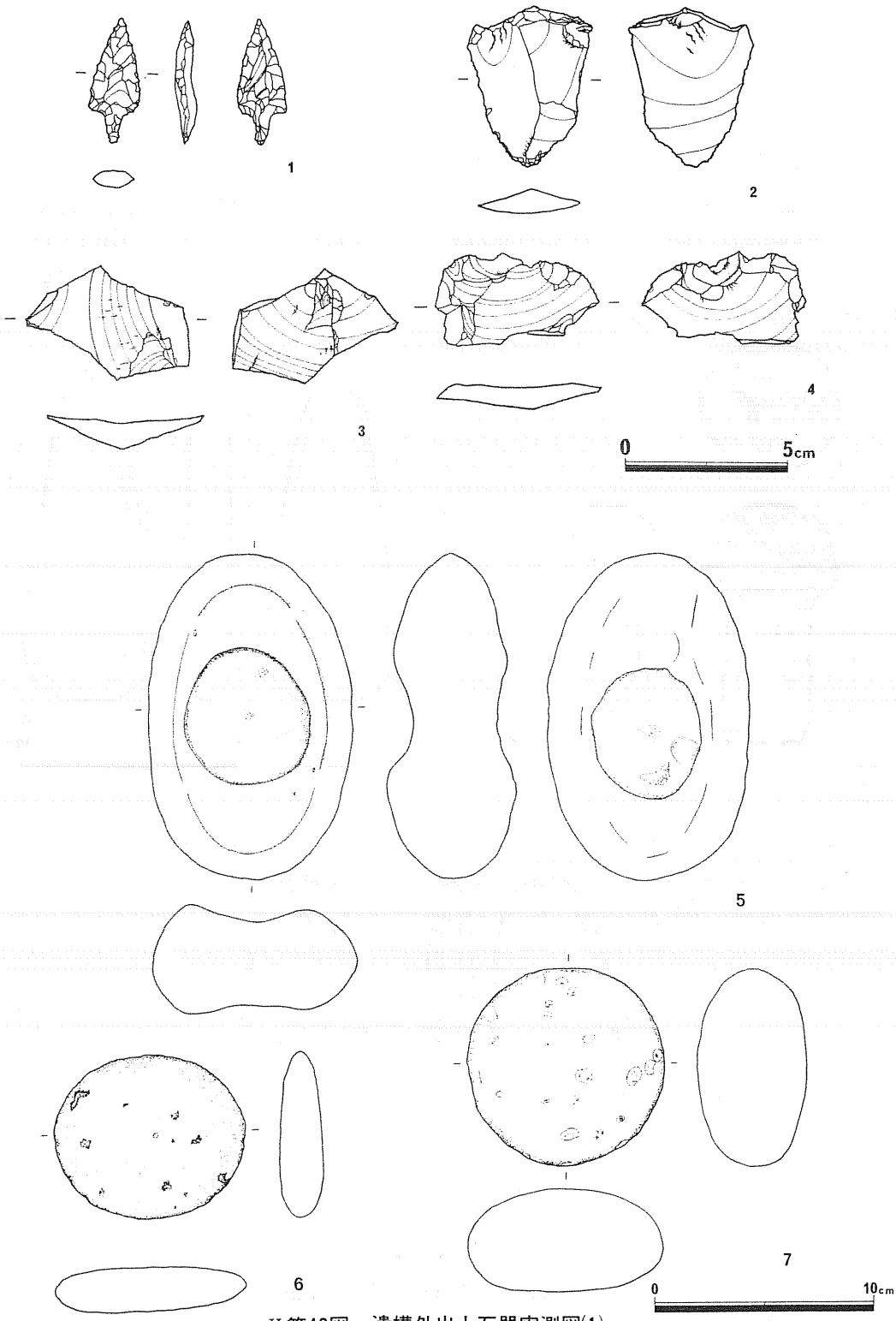



Ⅴ第38図　遺構外出土土器実測図(3)

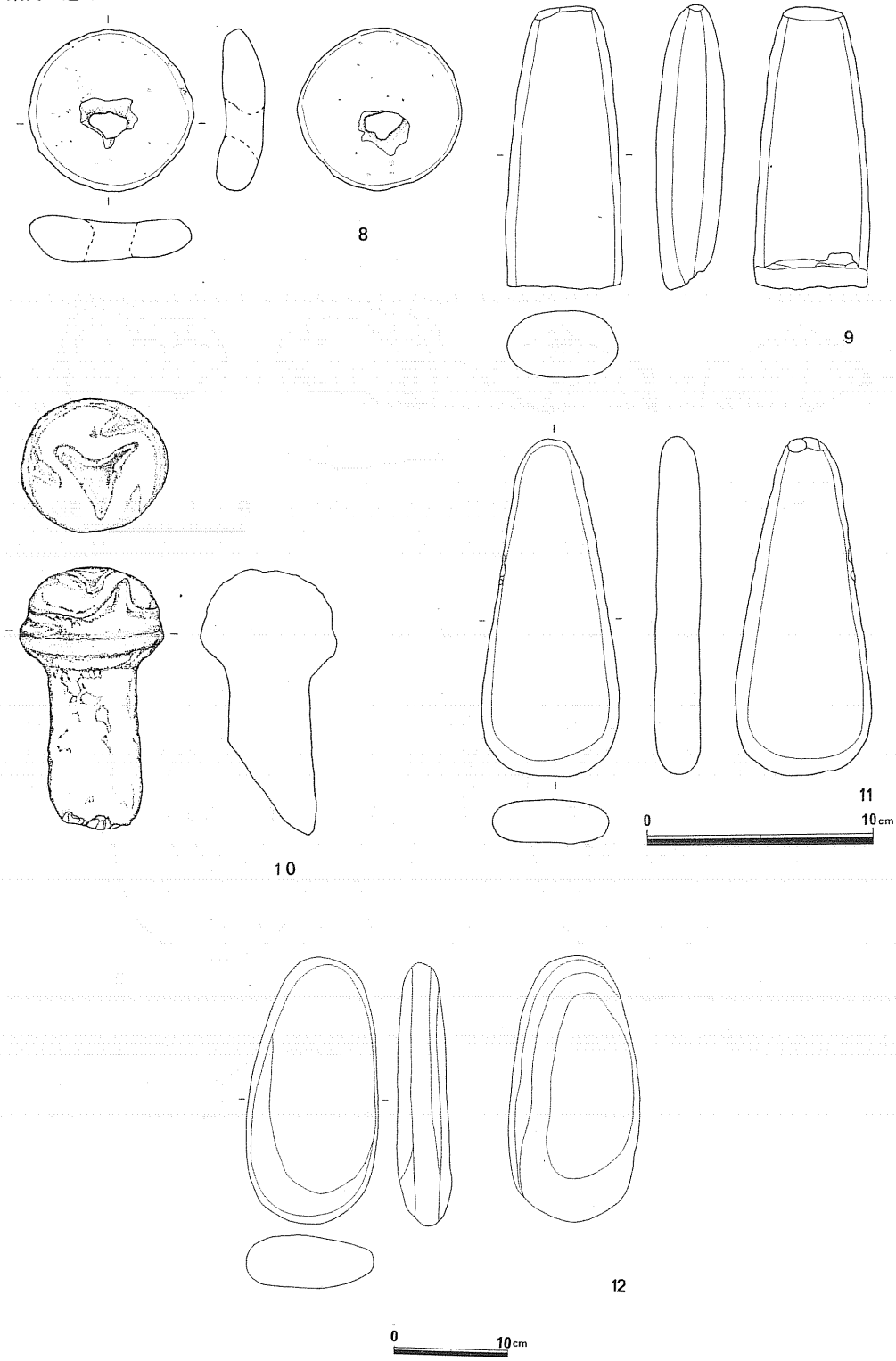
Ⅴ第39図　遺構外出土土器拓影図(1)

Ⅴ第40図　遺構外出土土器拓影図(2)

Ⅴ第41図　遺構外出土土器拓影図(3)




Ⅴ第42図　遺構外出土石器実測図(1)




Ⅴ第43図　遺構外出土石器実測図(2)

# 第3章　ま　と　め

案内Ⅴ遺跡は、A・B両地区で2年にわたる調査の結果、次の遺構が検出された。縄文時代竪穴住居跡3軒(A地区2、B地区1)、フラスコ状ピット9基(A地区8、B地区1)、平安時代竪穴住居跡3軒(A地区3)、土壙18基(A地区3、B地区15)、道路跡1である。以下各遺構毎に若干の考察をつけ加えたい。

**縄文時代竪穴住居跡**

3軒検出されており、炉の形態は石囲炉2、土器埋設石囲炉1である。また削平が著しく、壁が不明確な住居跡も多かった。

**フラスコ状ピット**

9基検出されたが、A地区とB地区のものは性格が異なる。A地区のものは集中して検出されており、3基が重複していた。またSK16から縄文時代晩期の遺物が出土しており、その他のフラスコ状ピットもほぼその時期のものと思われる。

**平安時代竪穴住居跡**

いずれもA地区から3棟検出されており、すべて東側にかまどを持つ。主軸方向もほぼ同じであり、縦貫道の案内Ⅲ遺跡検出のものとも類似点が多い。

また遺構外出土の土器群を分類したものを型式的な編年にあててみると以下のようになる。

**第Ⅰ群土器**：長七谷地第Ⅳ群土器。本遺跡例の口縁部資料は花積下層式土器に類似し、長七谷地報文に記されているように、そのⅢ群、Ⅳ群に時期的変差のないことを示していると言えよう。

**第Ⅱ群土器**：円筒下層a式土器。

**第Ⅲ群土器第1類**：円筒上層a式土器。地域的な変差をもつ土器も含まれる。

**第Ⅲ群土器第2類**：円筒上層b式土器。

**第Ⅲ群土器第3類**：円筒上層c式土器。

**第Ⅲ群土器第4類**：円筒上層d式土器。

**第Ⅲ群土器第5類**：大木10式土器。ただし、仙台湾周辺に典型的な大木10式土器とはかなりおもむきが異っている。その影響下に成立した土器と思われる。

**第Ⅲ群土器第6類**：第5類と同様である。

**第Ⅳ群土器第1類**：前十腰内Ⅰ式土器。

**第Ⅳ群土器第2類**：第1類に伴う土器。

**第Ⅳ群土器第3類**：この種の土器については類例を知らない。

**第Ⅴ群土器**：大洞$C_2$式土器。

**第Ⅵ群第1類**：小坂B式土器。小坂地域での該期の土器型式は奥山潤、安保彰両氏によって設定され、奈良修介、豊島昂両氏によって追認されている。その後、県内で確認された例がなく他地域との比較により今後検討したい。

**第Ⅵ群第2類**：小坂X式土器。青森県内では鳥海山式と呼称されている。

# 別編Ⅰ　秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵跡および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析

東北大学農学部
庄子貞雄
山田一郎

## 1．分析方法

1次鉱物組成分析用の試料は、火山灰全体の場合はそのまま篩で0.1—0.2mm部分を採取し、次いでテトラブロムエタン（比重2.96）で重鉱物部分と軽鉱物部分に区分した。軽石部分の分析用試料ははじめに分離した軽石を軽く粉砕した後、火山灰の場合と同じように重鉱物と軽鉱物の2つの部分に分けた。各部分の鉱物組成は、それぞれ200～300粒検鏡し、その結果を粒数%でしめした。

火山ガラスの形態はスポンジ状、繊維状、扁平状、顆粒状の4種に区分した。スポンジ状は無色で鋭角な多数の突起をもつガラスであり、内部に小気胞の多いものから少ないものまで含めた。繊維状ガラスは無色であたかも繊維が束状になったようにみえるものである。扁平状ガラスは無色で扁平であり、スポンジ状や繊維状ガラスより厚みがある。顆粒状ガラスは茶褐色から黒褐色であり、多数の微晶を有する角塊状のガラスである。

火山灰中の磁鉄鉱の特定の化学成分を定量することにより、火山灰の岩質判定や噴出源の同定が有効であることが、庄子ら[1),2)]により明らかにされているので、これを供試火山灰にも適用した。磁鉄鉱の化学分析用の試料は、火山灰全体の場合はそのまま、分離された軽石は乳鉢で十分粉砕した後、磁石で磁鉄鉱を分離した。さらに不純物を除くため、メノウ乳鉢で磨砕した磁鉄鉱を水の入ったビーカーに入れ、マグネティクスターラーで回転しながら浮遊物を除去した。この操作を浮遊物がなくなるまでくり返した。次にこの磁鉄鉱を分解し、Fe、Ti、Zn、Vを定量した。

## 2．分析結果

1) 1次鉱物組成（表1）

はりま館遺跡のNo.2（MB75—MD75、第1層）は本質物である軽石が大部分である。一方同遺跡のNo.7（MB75—MD75、第6層）は類質物である多量の岩片を含んでいる。このため、No.7は試料全体の分析と、試料より分離した軽石部分とに分けて分析した。大岱ⅡのNo.9（TW45、OPⅡNo.—11、第2層）案内Ⅴ（1ANⅤ、SX08、第4層）および払田柵のNo.21（D

ＨＴＨ、第49次ＫＤ37）の各試料も、同様に火山灰全体と、軽石部分に分けて分析した。平鹿遺跡のNo.22（８ＨＫ、ＤＯ２）は細粒な火山灰であったので、全体部分のみを分析した。

はりま館遺跡のNo.２の重鉱物部分は全体の４％と少なく、その組成はシソ輝石と磁鉄鉱と少量の普通輝石から成る。軽鉱物組成は無色火山ガラスが圧倒的に多く、その形態は大部分がスポンジ状である。軽鉱物中には少量の斜長石が含まれている。同遺跡のNo.７の軽石部分は、重鉱物含量ともNo.２とまったく同様の鉱物組成をしめす。これに対し、同遺跡のNo.７の全体部分は、重鉱物中に少量の角閃石が含まれている。また軽鉱物組成は斜長石が26％と軽石部分より多く、火山ガラスも顆粒状のものが大部である。

大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵の各遺跡の各試料の全体部分の１次鉱物組成は、はりま館遺跡のNo.７の全体部分と同様の結果である。そして、これらの遺跡の各試料より分離した軽石部の１次鉱物組成も、はりま館遺跡のNo.２およびNo.７の軽石部と同様の結果である。ただし、案内Ⅴ遺跡の全体部分の重鉱物含量が34％と高い値になっているが、これは案内Ⅴ遺跡の概要にも記してあるように、火山灰が降下後、移動堆積したためと考えられる。

平鹿遺跡の火山灰は全体部分を分析したにもかかわらず、その１次鉱物組成は、軽石部分とほぼ同様の結果となっている。このことは、同遺跡の火山灰は、大部分本質物から成ることをしめている。

2)磁鉄鉱の化学組成（表２）

各遺跡の分析試料は、はりま館遺跡の部分にはNo.２とNo.７の全体と軽石部分、大岱Ⅱ遺跡ではNo.９の試料全体と軽石部分、および案内Ⅴ遺跡ではNo.17の全体、払田柵跡遺跡ではNo.21の全体、平鹿遺跡ではNo.22の全体である。

Shoji[2)]らは日本各地より採取した新鮮な軽石やスコリア中に含まれる磁鉄鉱の化学分析を行い磁鉄鉱中のZn/Fe＋Ti値が高い程、火山灰は珪長質であり、逆にV/Fe＋Ti 値が高い程火山灰は苦鉄質であることをしめした。

各試料のZn/Fe＋TiおよびV/Fe＋Ti値をShoji[2)]らのV—Znベルト上にプロットすると、払田柵のNo.21以外は全て、火山灰は流紋岩質となる。ただし、これらの試料で平鹿遺跡のものだけはZn/Fe＋Ti値がやや低く、V/Fe＋Ti値がやや高くなっている。磁鉄鉱は湿性条件下では変質しやすい。払田柵遺跡は水田状態の湿性状態にあったため、この遺跡の火山灰中の磁鉄鉱は変質を受けているものとおもわれる。

磁鉄鉱の化学組成からみると、火山灰ははりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴの各遺跡のものと平鹿遺跡のものの２つに区分できる。払田柵遺跡の火山灰は、磁鉄鉱が変質を受けているため区分不可能である。

## 3　考察とまとめ

東北地方とくに青森県、岩手県および宮城県の多くの古代遺跡中に珪長質な灰白色の火山灰が見出されている。井上ら[3]はそれらを十和田－a（To—a、大池による名称[4]—青森県の東半部に広く分布する）、秋田焼石軽石(AYP、岩手県中央部に分布)胆沢火山灰（岩手県南部に分布）、灰白色火山灰（宮城県一帯に分布）に区分した。しかしこれらの中で胆沢火山灰と灰白色火山灰は同じ火山灰の可能性が強い。

さて秋田県の遺跡火山灰と井上らの4火山灰との関係は以下の通りである。

**はりま館の火山灰**

No.2は、磁鉄鉱の化学組成はTo—a(Fe%＝55～60%、Ti%＝10%、ZnおよびV≒1000ppm)ときわめて似ている。しかし、1次鉱物組成はTo—a火山灰（重鉱物含量は5%以下、重鉱物組成はシソ輝石≒50%、普通輝石≒20%、磁鉄鉱≒30%であり、軽鉱物組成は無色火山ガラスが圧倒的でそのうちの半分以上が扁平状ガラスである）とは次の点で異っている。火山ガラスの形態はTo—aは扁平が大部分であるが、No.2はスポンジ状が大部分である。No.2の普通輝石含量はTo—aより少なく、磁鉄鉱含量はTo—aよりも多い。従って、No.2の火山灰はTo—aとは異るものとおもわれる。

同遺跡のNo.6の火山灰は、岩片が多量に含まれること、および火山ガラスは顆粒状のものが多いことなどからTo—aとは区別される。

従って、はりま館遺跡のNo.2とNo.6の火山灰はTo—aの噴出直前に十和田カルデラより噴出した大湯軽石とおもわれる。

**大岱Ⅱ遺跡と案内Ⅴ遺跡の火山灰**

大岱Ⅱ遺跡、案内Ⅴ遺跡の火山灰も、岩片が多量に含まれること、火山ガラスは顆粒状のものが大部分であること。そして軽石中の火山ガラスもスポンジ状が多いことなどからTo—aとは区別され、大湯軽石とおもわれる。

**払田柵跡の火山灰**

払田柵遺跡の火山灰は、腐植がかなり含まれており純粋でないこと。また湿性条件にあったため磁鉄鉱が変質しているとおもわれることなどから、井上らの4火山灰との対比は難しい。従って今後払田柵遺跡の近辺の丘陵地の遺跡または土壌中の新鮮な火山灰を用い分析する必要がある。

**平鹿遺跡の火山灰**

平鹿遺跡の火山灰は宮城県一帯に認められる灰白色火山灰（重鉱物含量は5%以下、重鉱物組成はシソ輝石≒60%、普通輝石≒20%、磁鉄鉱≒20%、軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的でその形態は大部分がスポンジ状である。磁鉄鉱の化学組成は、Fe＝55～60%、Ti＝10%、Zn＝

1000ppm、V≒2000ppm）と１次鉱物組成、磁鉄鉱の化学組成ともきわめて類似しており、灰白色火山灰と同一の火山灰と思われる。なお灰白色火山灰の年代は、10世紀前半と推定されている[5]。

## 4　引用文献

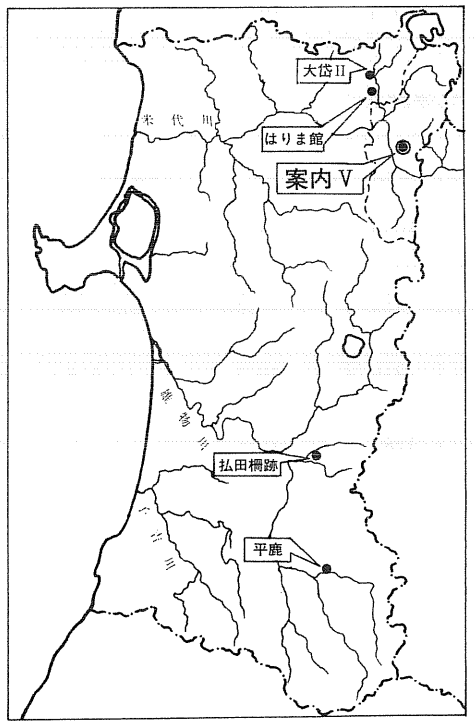

1）庄子貞雄、小林進介、増井淳一(1974)、火山灰中の強磁性鉱物の化学組成と噴出源との関係について、岩鉱誌、69．P110～120

2）Shoji S., Kobayashi S., Yamada I., and Masui J. (1975) Reiation ships between the Geochemistory and Ferromagnetic Component and the Chemical Properties of Air-born Pyroclastic Materials, J. Japan. Assoc. Min. Petr. Eco. Geol., 70．P12～24.

3）井上克弘、山田一郎(1982)、東北地方における奈良～平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて、岩手県文化財調査報告書、第72集、P442～459

4）大池昭二(1972)、十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究11、P228～235

5）白鳥良一(1980)、多賀城跡出土土器の変遷、宮城県多賀城跡調査研究所紀要、７．P１～38


火山灰採取遺跡地図

| 遺跡名 | 所在地 | 報告書 |
|---|---|---|
| はりま館 | 鹿角郡小坂町小坂 字下上ノ山 | 東北縦貫自動車道 発掘調査報告書X |
| 大岱 II | 鹿角郡小坂町小坂 字大岱 | 東北縦貫自動車道 発掘調査報告書XI |
| 案内 V | 鹿角市花輪字案内 | 本書 |
| 払田柵 | 仙北郡仙北町払田<br>仙北郡千畑村本堂城廻 | 払田柵跡調査事務所年報 |
| 平鹿 | 平鹿郡増田町増田 字平鹿 | 平鹿遺跡発掘調査報告書 |

## 表1　一次鉱物組成（粒数%）

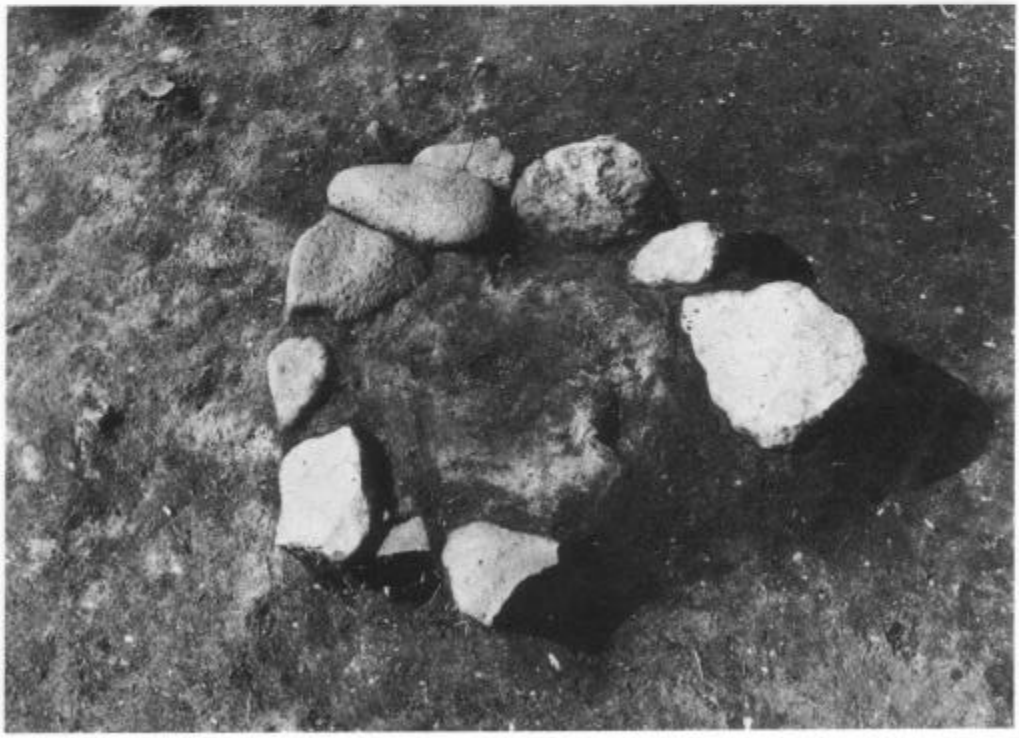
| 遺跡名 | 試料名 | 重鉱物組成 シソ輝石 | 普通輝石 | 普通角閃石 | 磁鉄鉱 | 軽鉱物組成 火山ガラス(形態別) スポンジ | 繊維 | 扁平 | 顆粒 | 斜長石 | 石英 | 重鉱物含量(重量%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| はりま館 | No. 2 TW35 MB75～MD75 第1層 | 46 | 4 | | 50 | 82 | 10 | 1 | 2 | 4 | | 4 |
| | No. 7 TW35 MB75～MD75 第6層 | 37 | 9 | 3 | 52 | 3 | 17 | 6 | 66 | 26 | | 9 |
| | No. 7 TW35 MB75～MD75 第6層軽石 | 43 | 2 | | 55 | 78 | 11 | 1 | 1 | 9 | | 6 |
| 大岱Ⅱ | No. 9 TW45 No.11 第2層 | 36 | 9 | 17 | 55 | | 3 | 3 | 70 | 24 | 1 | 10 |
| | No. 9 TW45 No.11 第2層軽石 | 46 | 7 | 17 | 46 | 76 | 8 | 17 | 17 | 16 | | 6 |
| 案内Ⅴ | No.17 1A～VSX08 第4層 | 30 | 7 | 17 | 63 | 13 | 1 | 6 | 64 | 15 | 1 | 34 |
| | No.17 1ANVSX08 第4層軽石 | 43 | 3 | | 55 | 91 | 4 | 1 | | 4 | | 3 |
| 払田柵 | No.21 DHTH第49次 KD37 | 57 | 15 | 17 | 27 | 2 | 1 | 7 | 60 | 28 | 1 | 10 |
| | No.21 DHTH第49次 KD37軽石 | 52 | 11 | 1 | 36 | 77 | 3 | | 16 | 2 | 1 | 1 |
| 平鹿 | No.22 8HK SKI002 | 48 | 18 | 17 | 33 | 54 | 6 | 7 | 18 | 14 | 17 | 4 |

## 表2　磁鉄鉱の化学組成

| 遺跡名 | 試料名 | FFe (%) | Ti (%) | Zn (ppm) | V (ppm) | $\frac{Zn}{Fe+Ti}(\times10^{-4})$ | $\frac{V}{Fe+Ti}(\times10^{-3})$ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| はりま館 | No. 2 TW35 MB75～MD75 第1層 | 56.58 | 9.90 | 1094 | 1050 | 16.5 | 1.6 |
| | No. 7 TW35 MB75～MD75 第6層 | 65.70 | 7.41 | 1408 | 1294 | 19.36 | 1.87 |
| | No. 7 TW35 MB75～MD75 第6層 軽石 | 59.62 | 10.00 | 1272 | 1215 | 18.3 | 1.8 |
| 大岱Ⅱ | No. 9 TW45 No.11 第2層 | 59.72 | 6.96 | 1274 | 1281 | 19.1 | 1.92 |
| | No. 9 TW45 No.11 第2層 軽石 | 59.03 | 10.10 | 1320 | 1203 | 19.1 | 1.7 |
| 案内Ⅴ | No.17 1ANV SX08 第4層 | 59.73 | 7.86 | 1196 | 1102 | 17.7 | 1.6 |
| 払田柵 | No.21 DHTH 第49次 KD37 | 52.15 | 14.41 | 782 | 1248 | 11.8 | 1.9 |
| 平鹿 | No.22 8HK SKI002 | 57.23 | 10.67 | 1015 | 2009 | 15.0 | 3.0 |

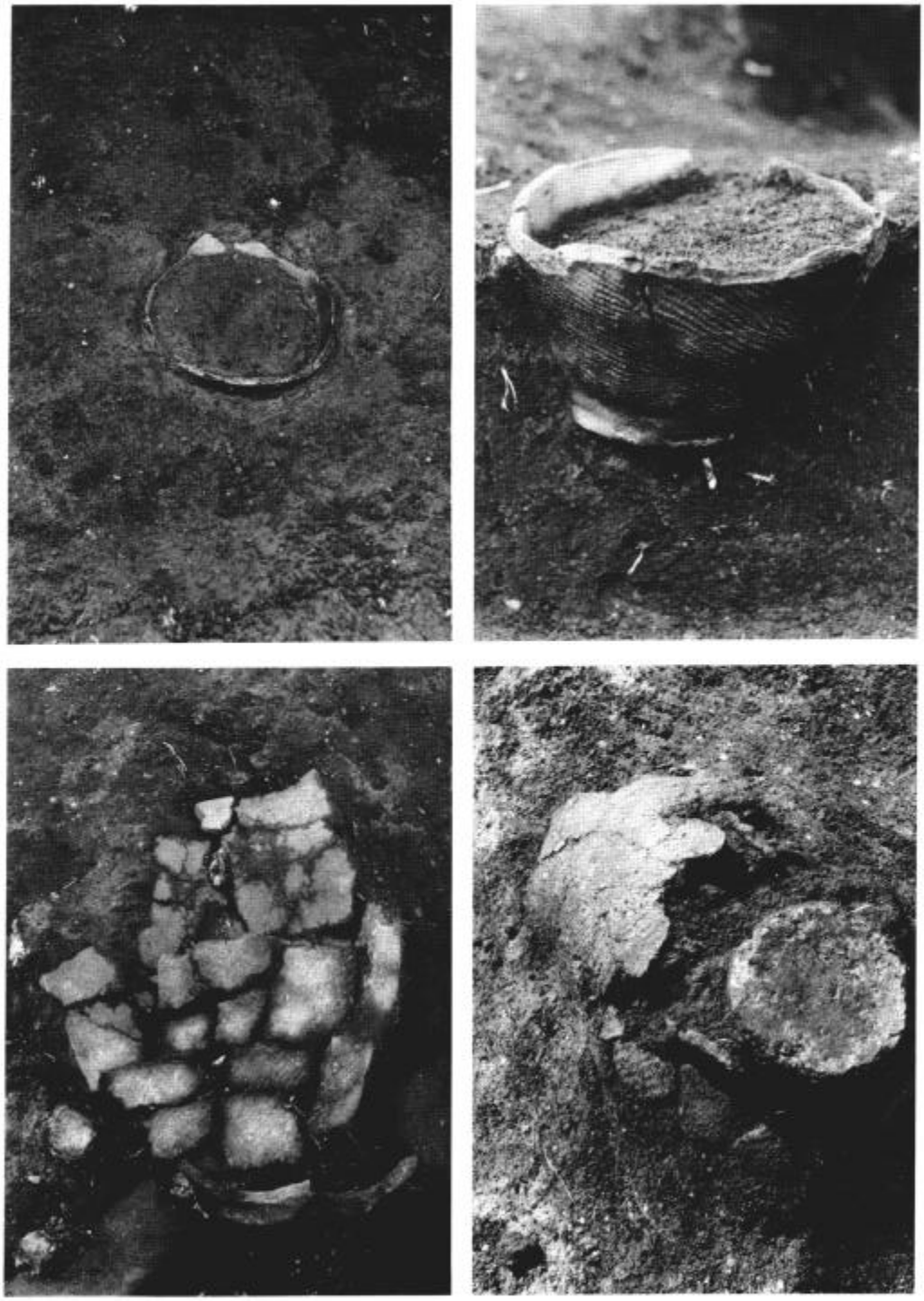
Ⅴ図版1　案内Ⅴ遺跡近景　上　A地区（東→西）
下　B地区（東→西）

Ⅴ図版２　Ｓ１04竪穴住居跡　上　完掘（南→北）
下　炉　（東→西）



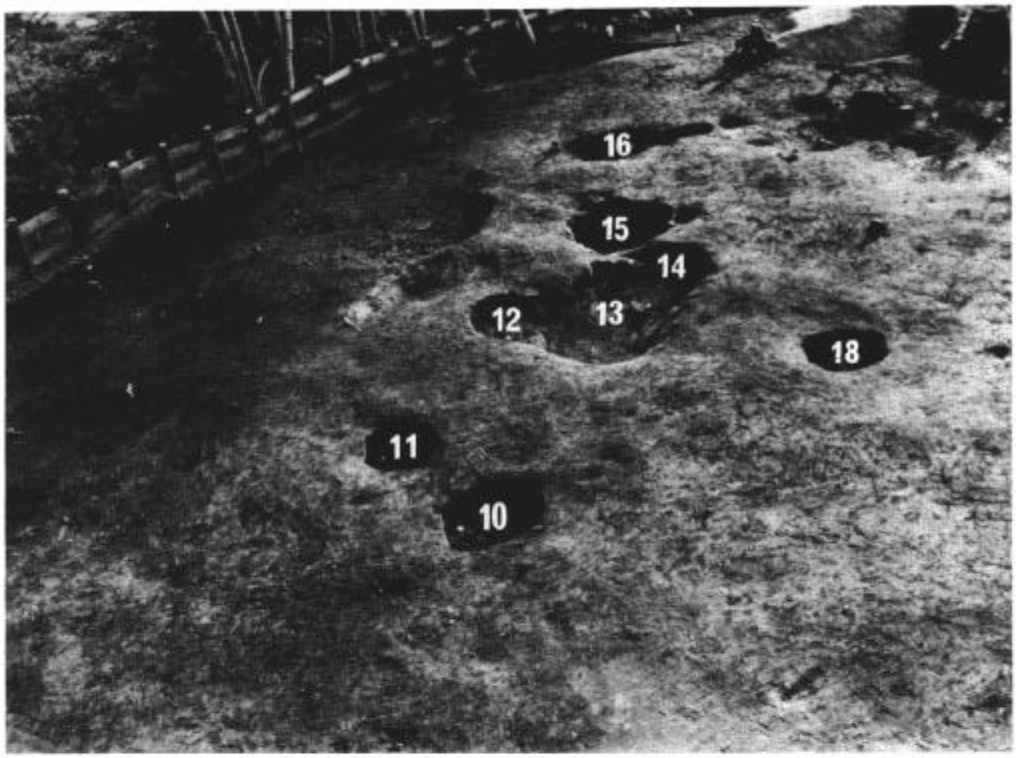
V図版3　R I 17竪穴住居跡　上　完掘（北▸南）
　　下　炉　（東▸西）

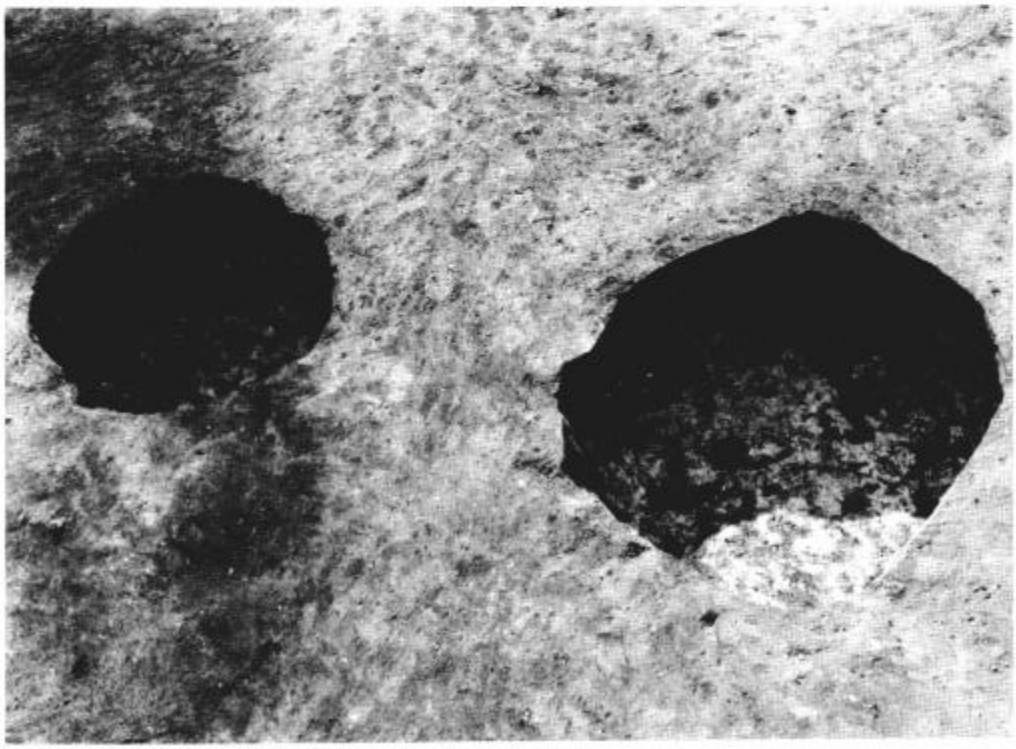
V図版4　S I 111竪穴住居跡　上　完掘（北→南）
下　炉　（南→北）



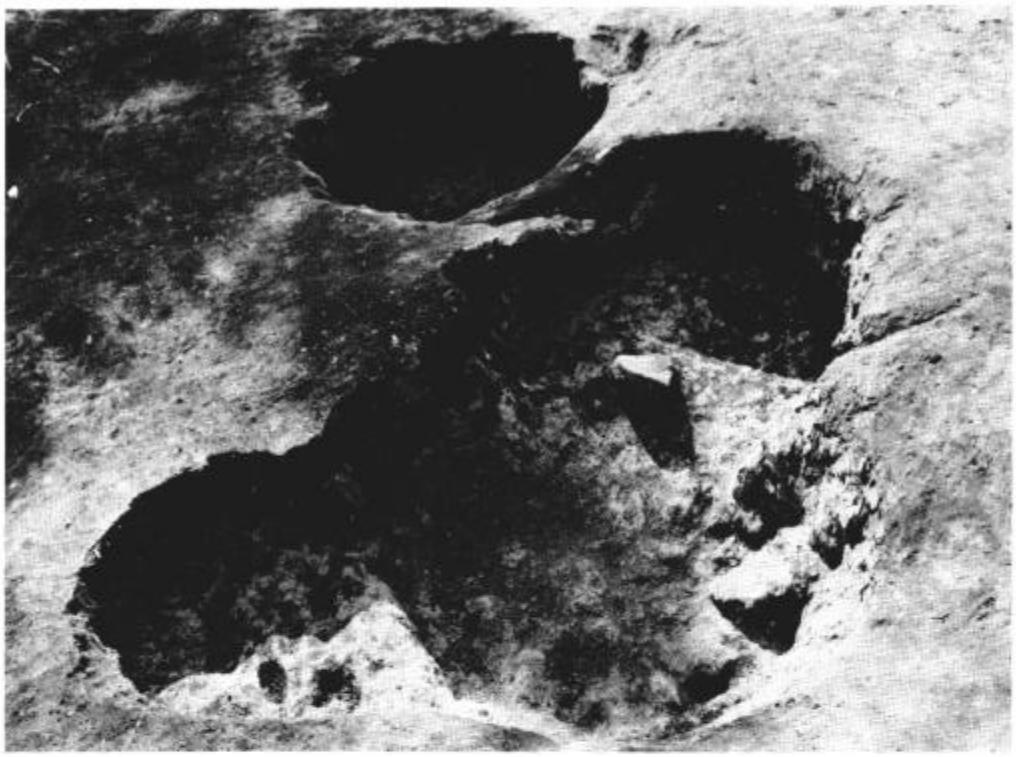
Ⅴ図版5　ＳＩ111竪穴住居跡・遺物出土状態

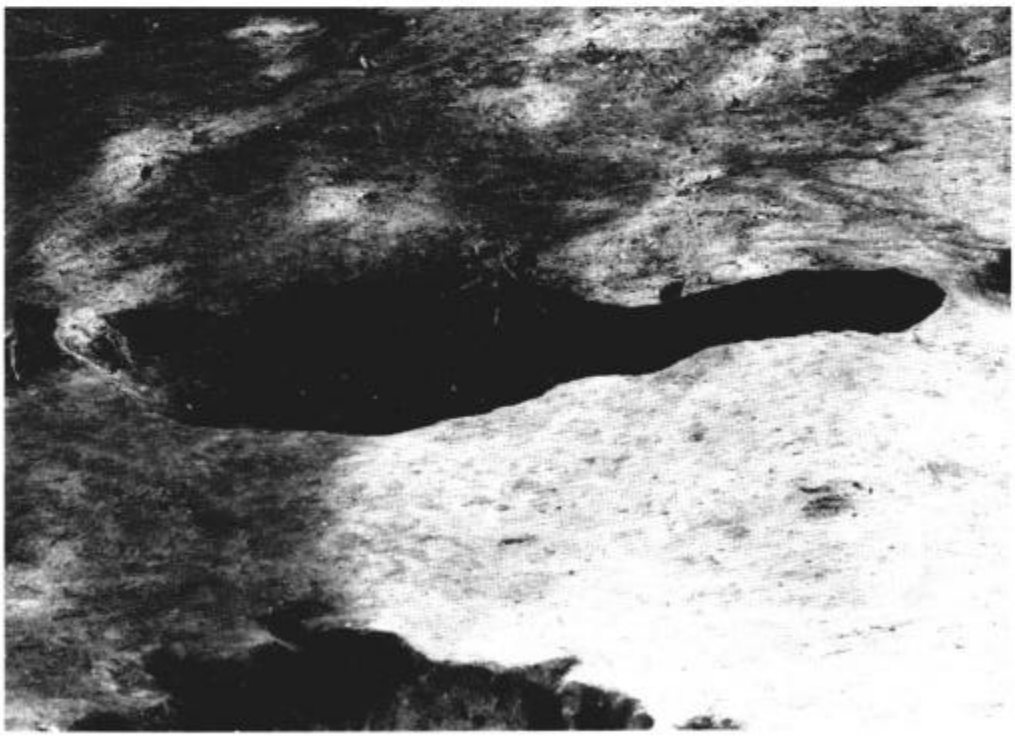
Ⅴ図版6　上　ＳＫ01土壙　（南東←北西）
　　下　ＳＫ07土壙　（東←西）



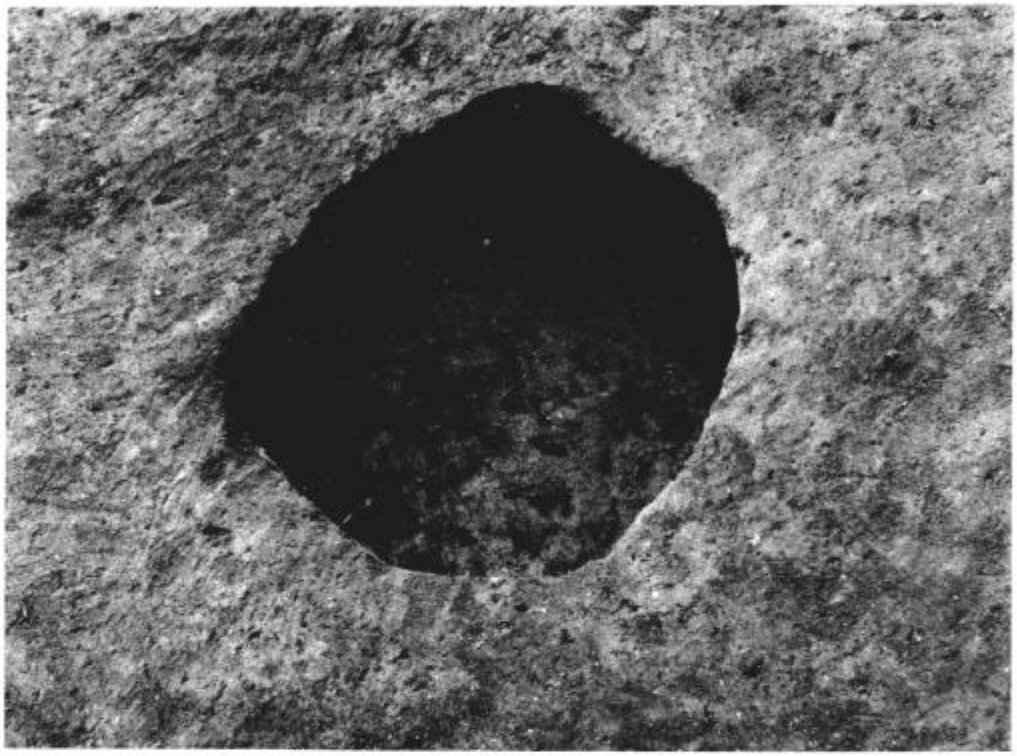



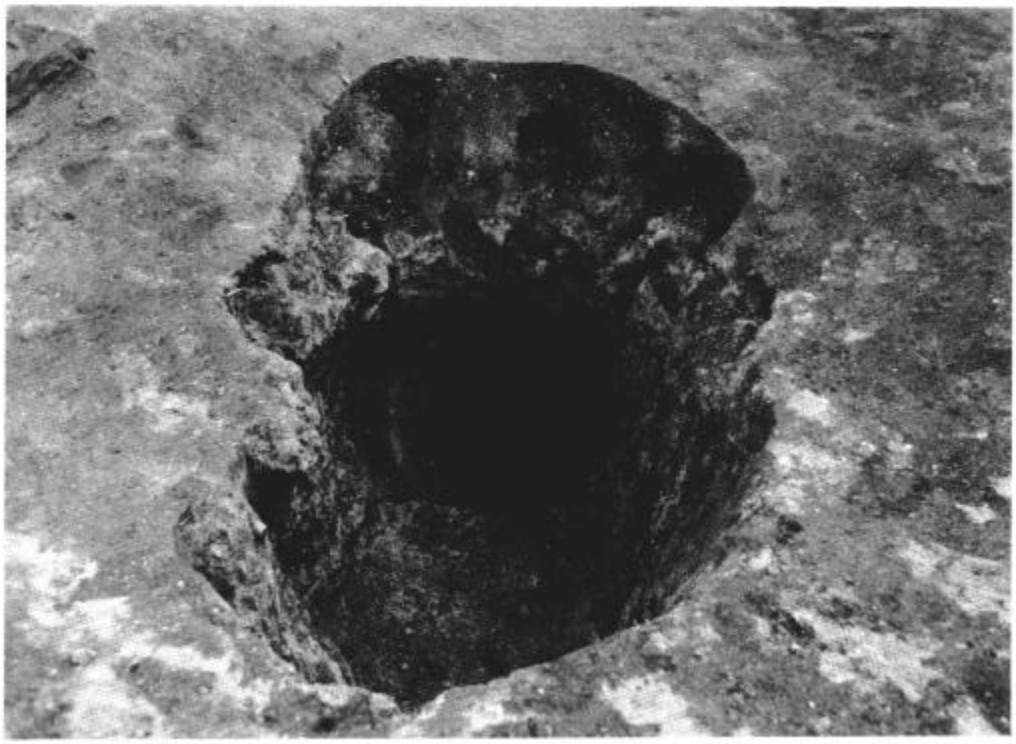
V図版7　上　フラスコ状ピット群近景　（東←西）
　　下　ＳＫＦ10･11フラスコ状ピット　（東←西）



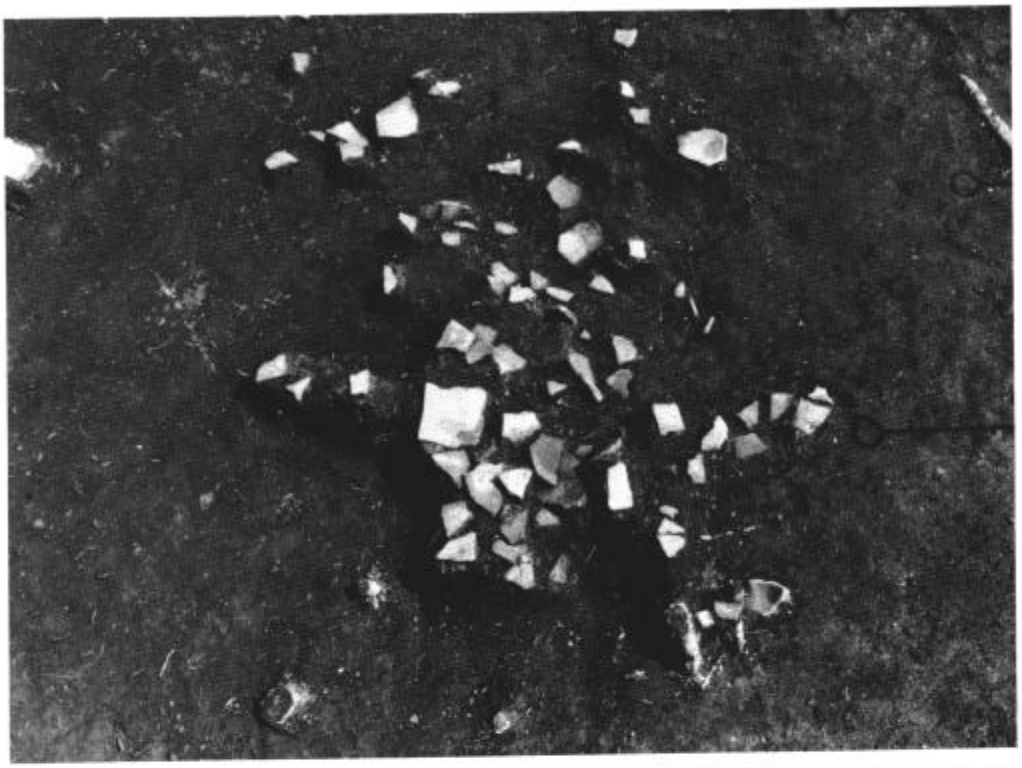


Ⅴ図版8　上　ＳＫＦ12～15フラスコ状ピット　（東←西）
　　下　ＳＫＦ16フラスコ状ピット　（北東←南西）

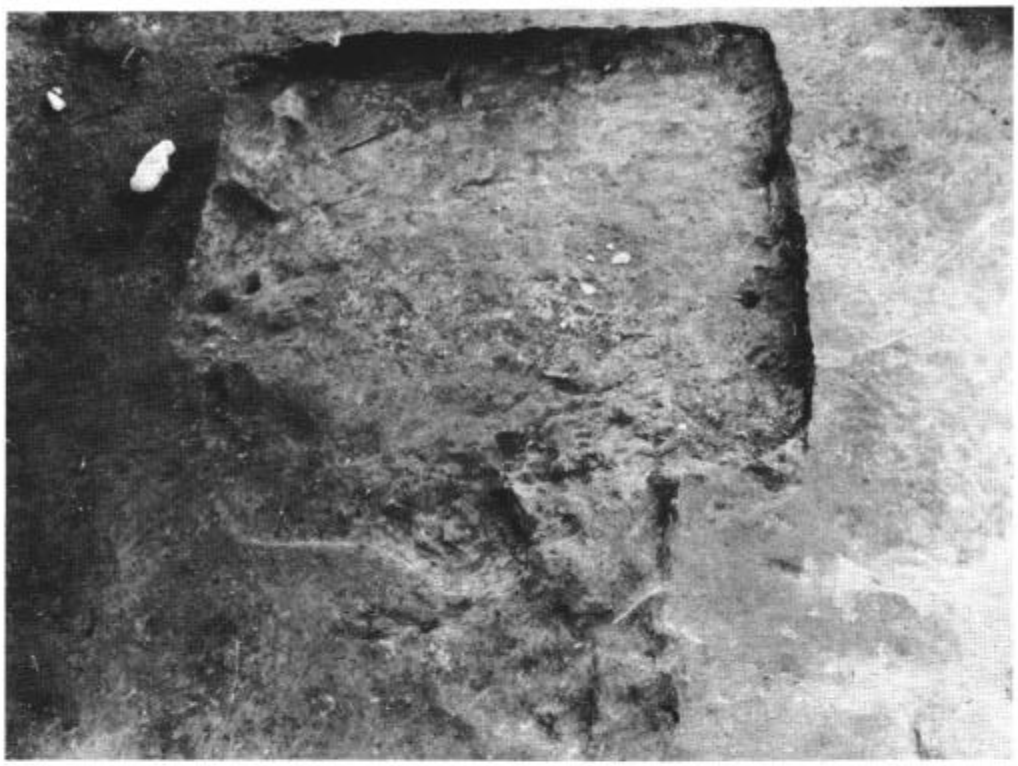


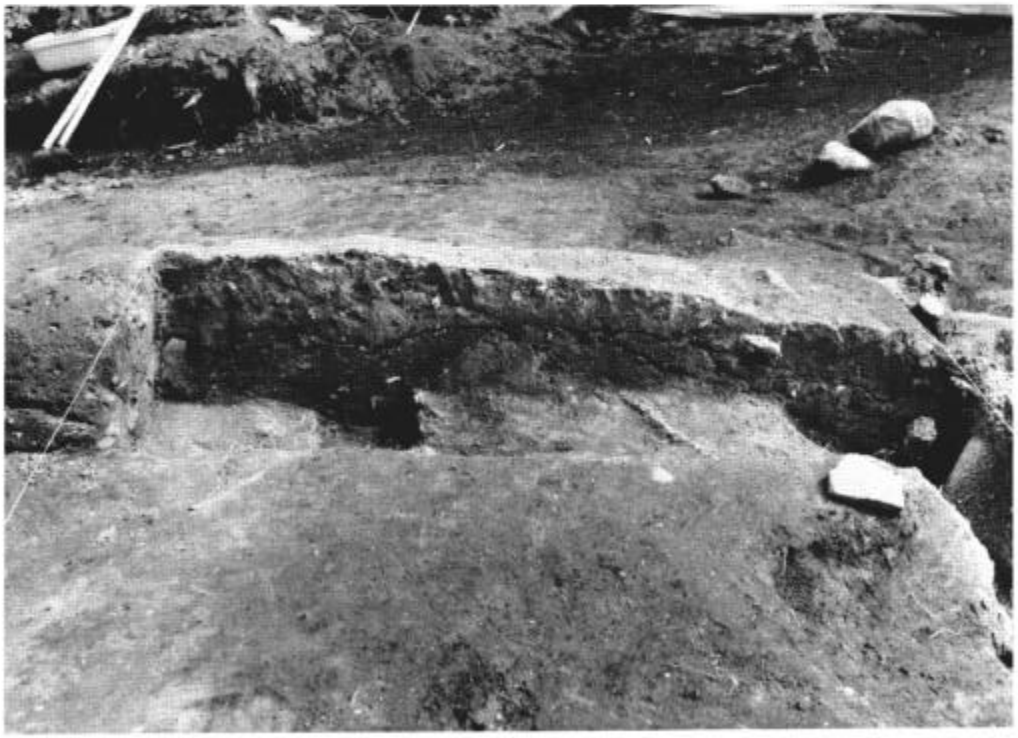


V図版9　上　ＳＫＦ18フラスコ状ピット　（東→西）
　　下　ＳＫＦ19フラスコ状ピット　（西→東）



V図版10　上　縄文時代遺物出土状態　（JF49）
　　下　弥生時代遺物出土状態　（KG49）

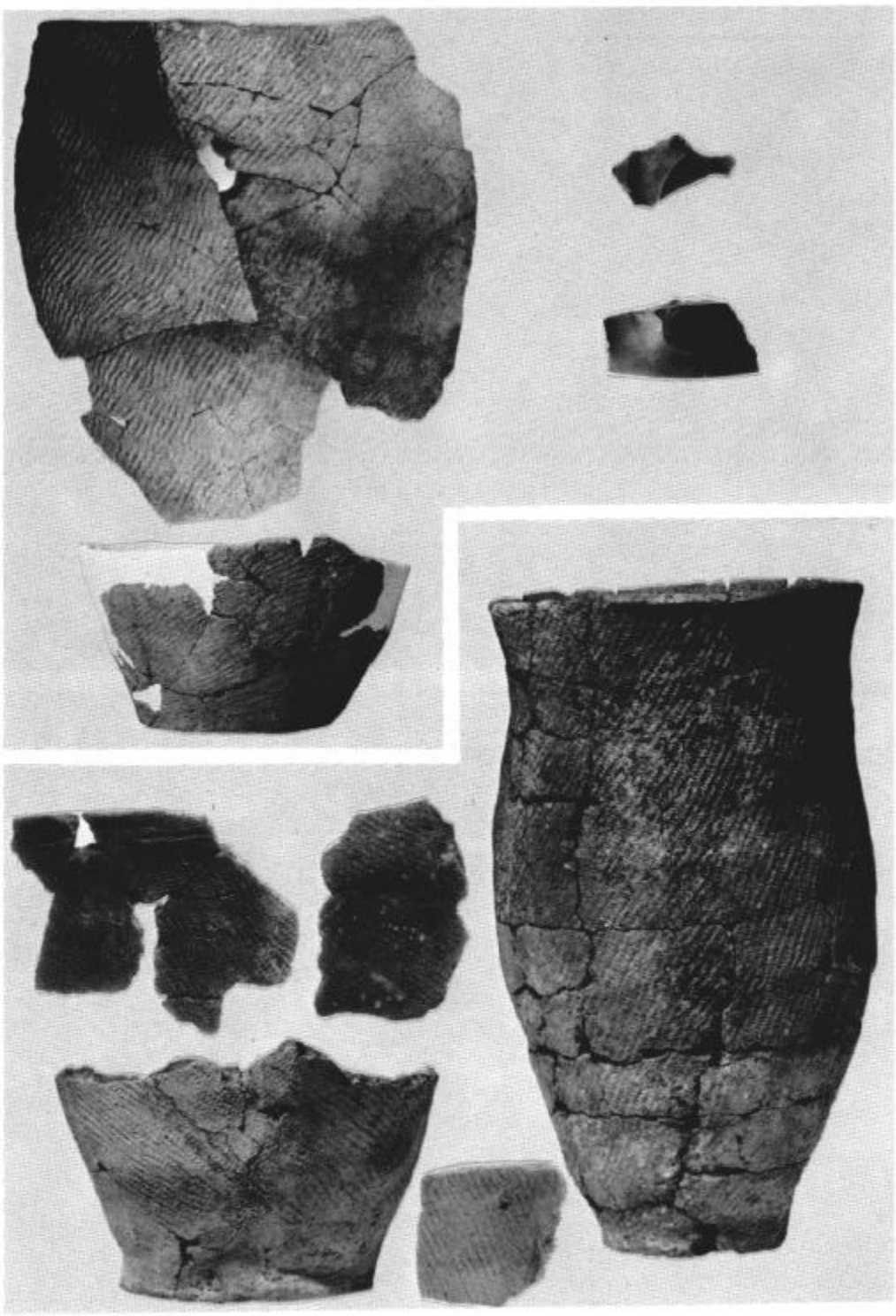




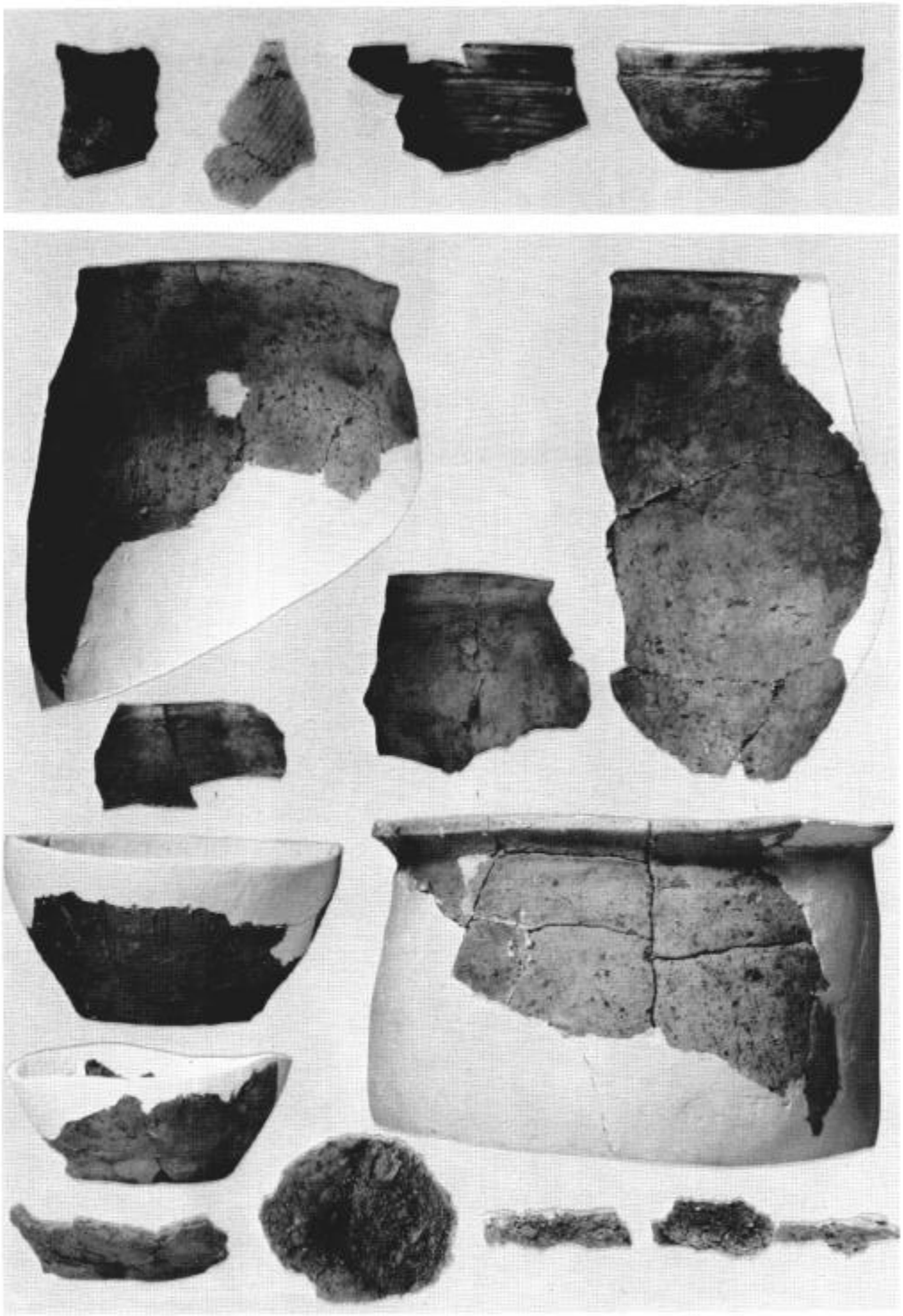
V図版11　S I 02竪穴住居跡　上　完　掘（東→西）
下　かまど（北と南）

V図版12
S I 03竪穴住居跡
上 完 掘 (西→東)
下 かまど (西→東)

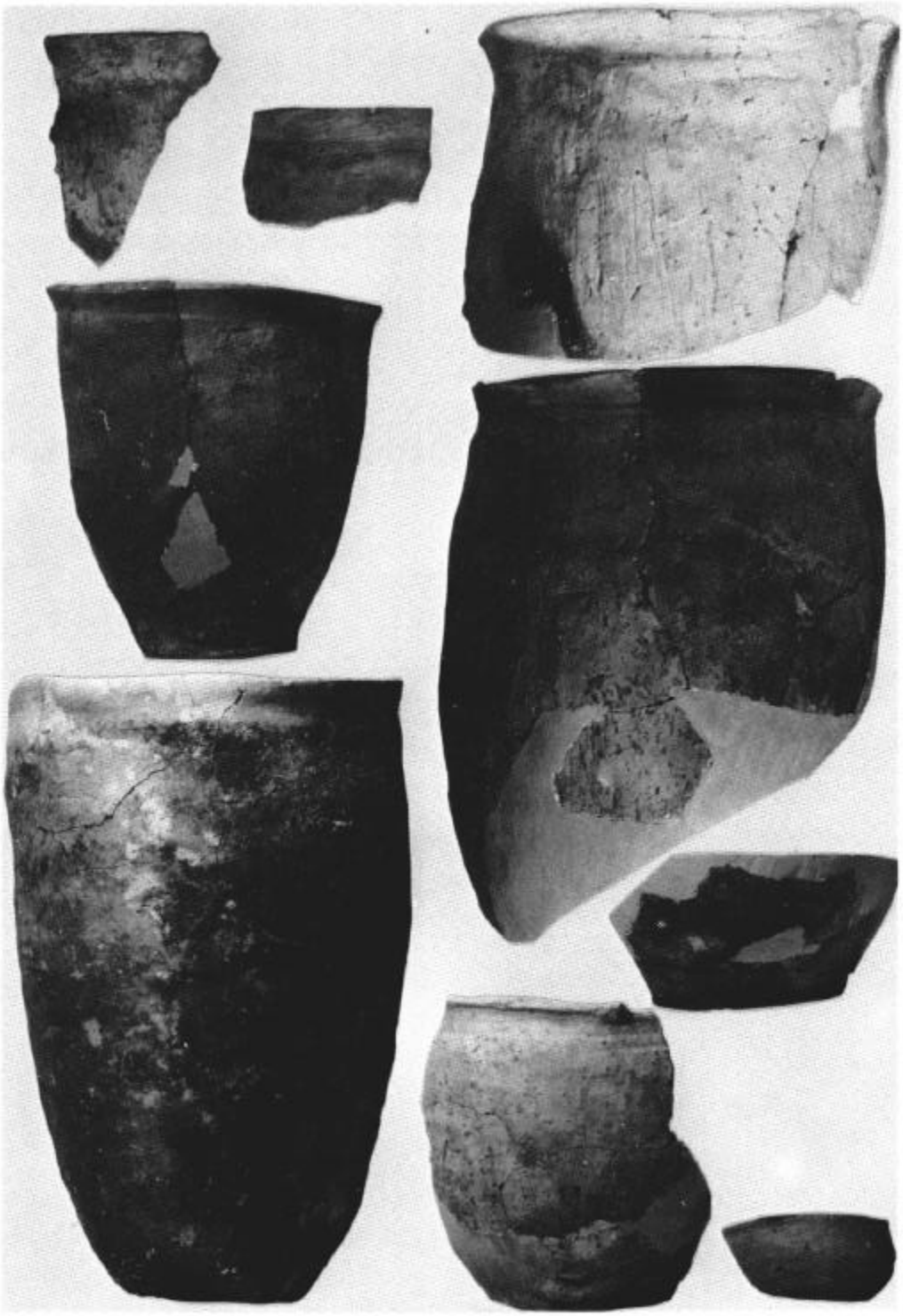
V図版13　S I 05竪穴住居跡　上　完　掘（西→東）
下　かまど内土器出土状態（西→東）



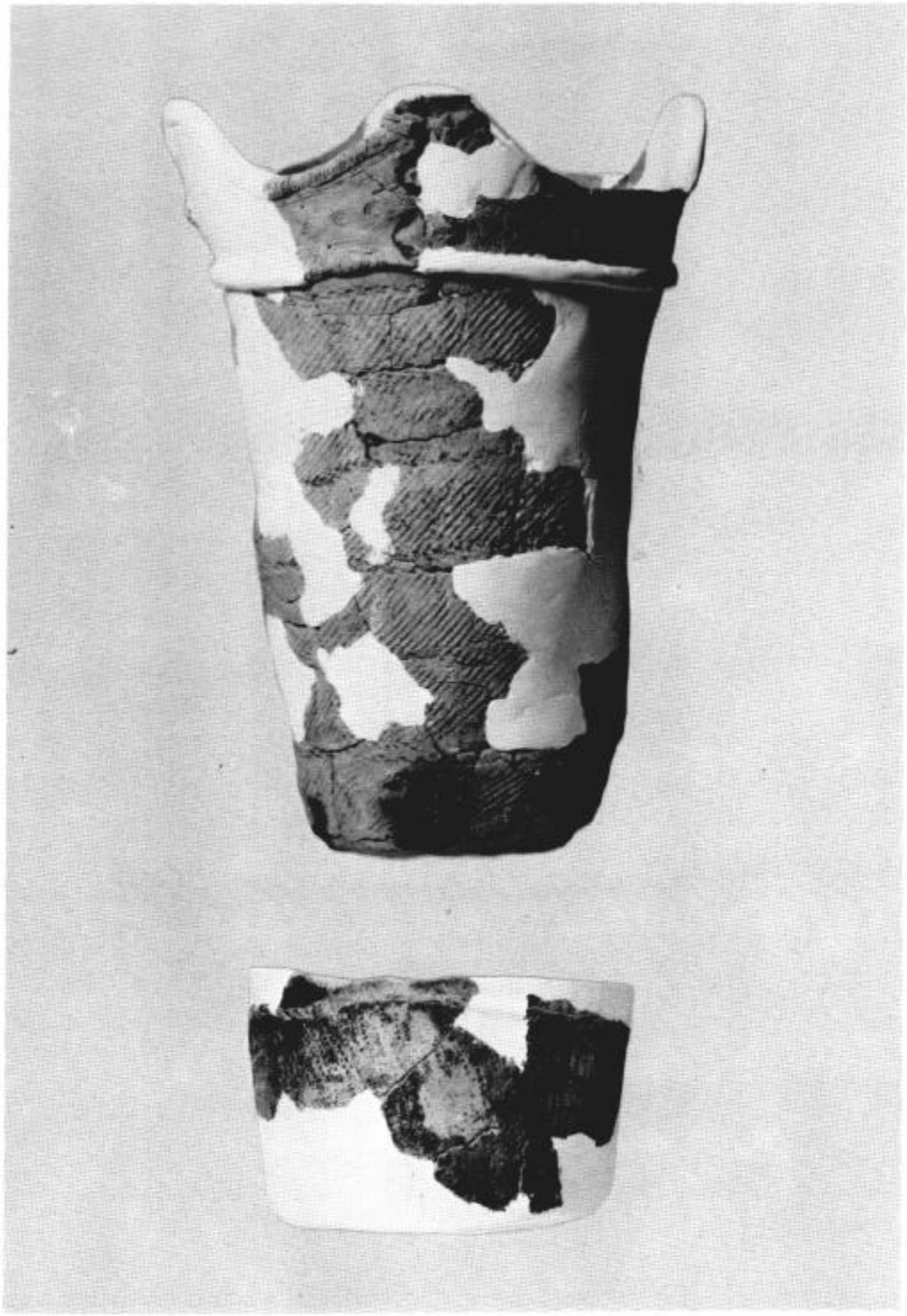
Ⅴ図版14　上　ＳＩ04竪穴住居跡出土遺物
　　下　ＳＩ111竪穴住居跡出土遺物



Ⅴ図版15　上　土壙内出土遺物
　　下　ＳＩ03竪穴住居跡出土遺物

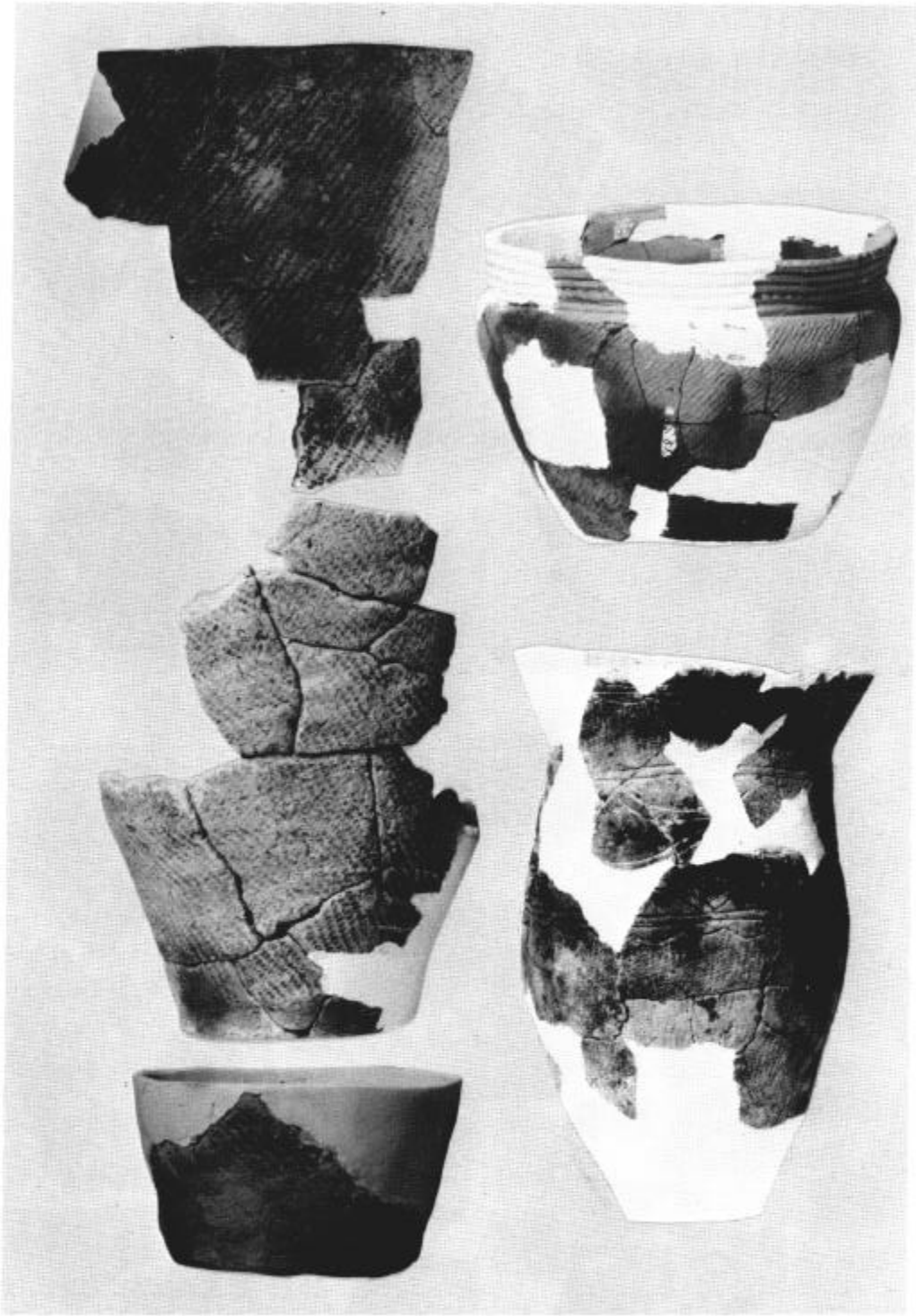


Ⅴ図版16　ＳＩ05竪穴住居跡出土遺物

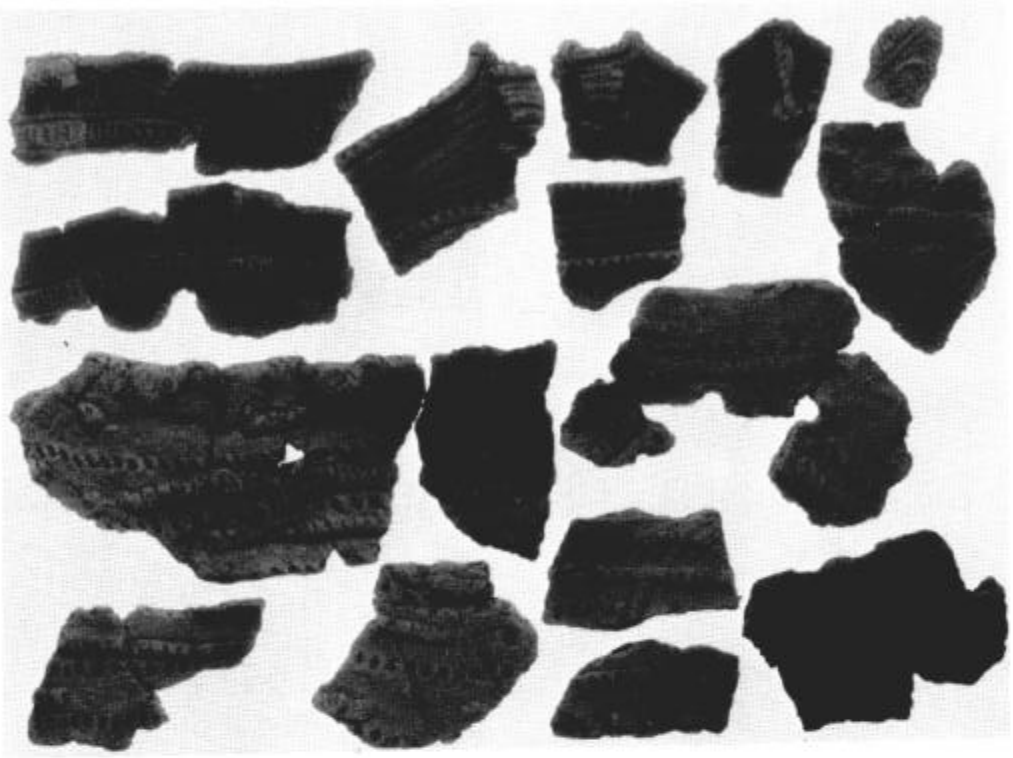


V図版17　遺構外出土土器(1)

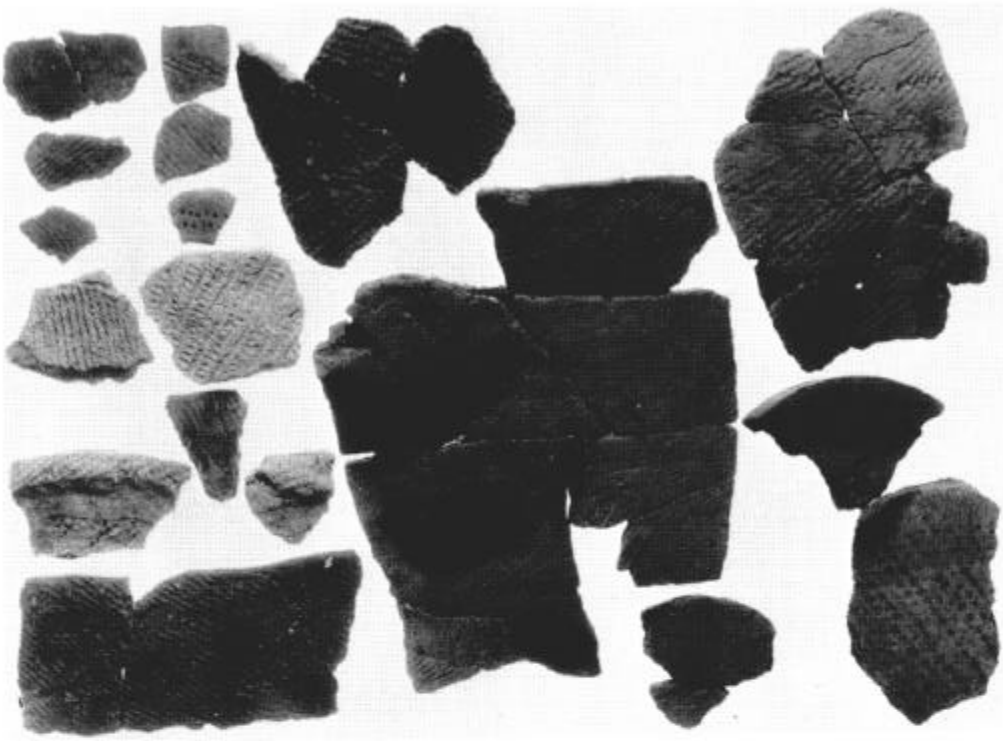
Ⅴ図版18　遺構外出土土器(2)

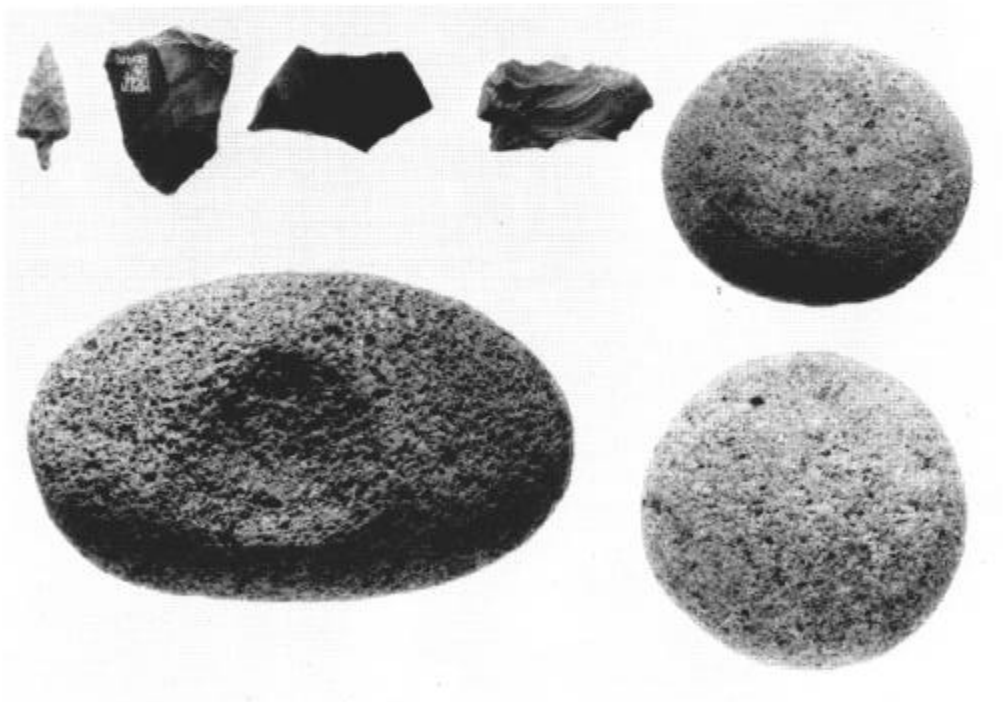


V図版19　遺構外出土土器(3)

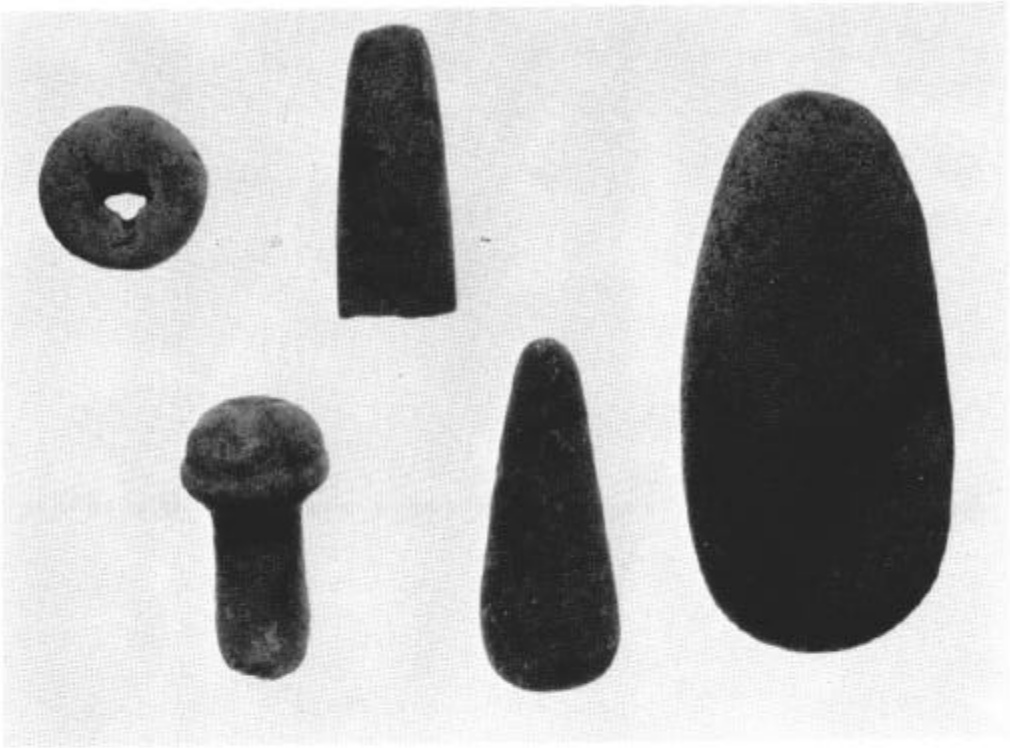


V図版20　上　遺構外出土遺物(1)
　　下　遺構外出土遺物(2)





V図版21　上　遺構外出土土器(3)
　　下　遺構外出土石器(1)



V図版22　上　遺構外出土石器(2)
　　下　調査風景

# 案内Ⅵ遺跡

| | |
|---|---|
| 遺跡番号 | No.4 |
| 所在地 | 鹿角市花輪字案内102番地他 |
| 調査対象面積 | 12,600m² |
| 調査面積 | 7,240m² |
| 調査期間 | 昭和57年9月2日～10月22日 |
| | 昭和58年5月6日～7月21日 |
| | 昭和58年8月18日～9月30日 |

# 第1章　調 査 の 概 要

## 第１節　遺跡の概観

### １．遺跡の層序

案内VI遺跡は東西延長540ｍもあり、遺跡の層序もかなりの地区差がある（第１図参照）。

Ａ地区西端部では表土も薄く、20cm程ですぐ地山に至る。Ａ地区西部～中央部にかけては、やや厚く表土が40～50cm程となり、この部分は機械によって排土した。Ａ地区東部は縄文時代の竪穴住居跡が集中して検出された箇所であるが、原地形で最も高い位置にあたり、開墾時に削平が著しく、住居跡の壁も検出できない状態であり表土は20cm程で地山に至った。Ａ地区東端部は谷地となっており、地山までは50cm程であるが湧水が激しい地区であった。

Ｂ地区西部は案内VI遺跡中最も土層の状態の良好なところであった。ＬＪ53付近における層位は第Ｉ層黒色土：表土（40cm）。第II層黒色土：大湯浮石粒を含む。平安時代遺物包含層（20cm）。第III層にぶい黄橙色土：大湯浮石層。部分的には欠如しているところもある（５～15cm）。第IV層黒褐色土：平安時代及び縄文時代遺物包含層。あまり混入物を含まない（30～40cm）。第Ｖ層黄褐色土：地山漸移層。遺構の確認面（10cm）。第VI層黄褐色土：地山。粘質土。Ｂ地区東部にいくにつれ徐々に表土は薄くなり、東端部では20cm程となる。

Ｃ地区にはいると地山までの深さはまたやや厚くなり、30～40cm程となり、東端部では地山まで１ｍと深くなる。また東端部の一部では15cmの厚さで大湯浮石層が７回以上堆積していた箇所もみられた。

### ２．遺構の分布

案内VI遺跡で検出された遺構は縄文時代竪穴住居跡５軒、土壙16基、フラスコ状ピット３基、Ｔピット１基、埋甕１基、溝跡２条、焼土遺構５基、柱穴２基、掘立柱建物跡１棟、道路跡１である。

面積に比べると遺構数は決して多い方とは言えないが、遺構が集中した箇所がいくつかみられた。ＱＦ80付近は削平が著しかったもののややまとまって遺構が検出された。ＮＣ63付近は最も遺構の集中して検出された箇所であるが、削平が著しく住居跡の壁も確認されない箇所があった。表採によりこの北東部から多量の遺物が出土しており、この地域に遺構が広がっているようであった。ＩＣ20付近にも土壙、ピットが集中してみられた。

3．遺物の出土状態

遺物の出土量はコンテナ6箱程度と少ない方である。遺構内からの出土はその遺構によってバラツキがあるが、最も多いＳＫ105でも50片程と少なく、遺物のまったく出土しなかった遺構も多かった。遺構外出土遺物もそれほど集中する箇所はなく、遺構の集中する箇所の周辺からの出土がほとんどであった。

## 第2節　調査の方法

案内VI遺跡は花輪高位段丘の頂部に広がる約8万㎡の遺跡と推定されるが、調査はその極一部を幅20ｍ程で細長く調査したにすぎない。また、調査は工事の都合上3回に分けて行われることとなった。このため、遺跡を西からＡ～Ｃ地区と分けることにした。

昭和57年度は中央のＢ地区の調査であった。Ｂ地区西方に任意の基準点を定めてこれをＭＡ50とし、南北基線はアルファベット文字の組み合わせ、東西基線は2桁の数字とし、これらを組み合わせた南東隅の交点をグリッド名（ＭＡ50、ＫＪ49など）とした。排土場所がないことから排土はＡ、Ｃ地区に捨てた。また、東側は削平されていることがわかったので2ｍのトレンチを入れるにとどめた。

昭和58年度はまずＡ地区から調査を始めた。Ａ地区の遺構番号は101から付すこととした。試掘の結果、Ａ地区西側の表土が若干厚いことが確認されたので、西側はバックホーによる機械排土を行った。その後に昨年残しておいたＢ地区の基準杭をもとにＡ地区にも4×4ｍのグリットを導いた。また、東側にもＢ地区の排土が残されたままだったので、これもバックホーにより排土した。

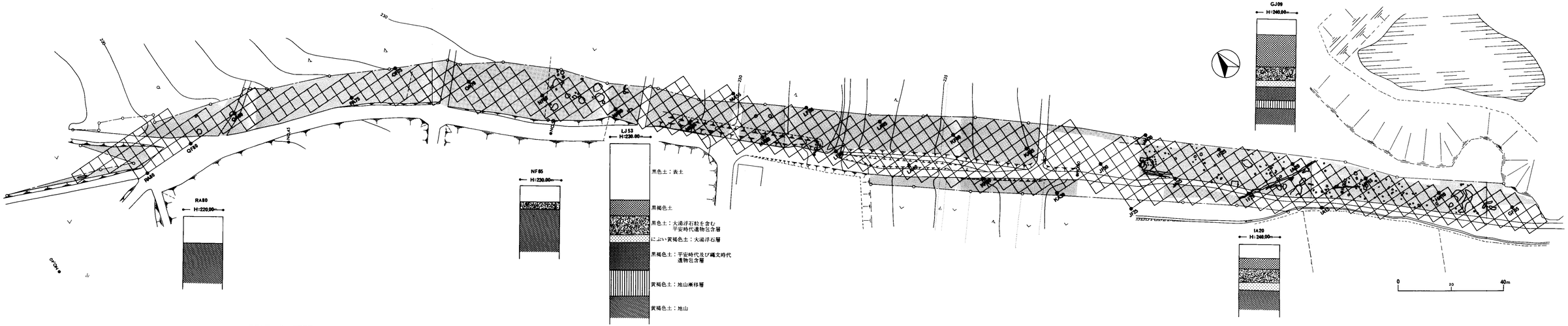
一旦案内IV遺跡にはいり、8月下旬から最後のＣ地区の調査にはいった。Ｃ地区の遺構番号は201から付すこととした。Ｃ地区も排土場所がなかったため東側に土留めを作り、そこに排土した。Ｃ地区の市道南側は遺構が検出されなかったので、一部の調査にとどめた。

遺構の実測は、業者委託により打設したグリッド杭及び20ｍ毎のレベル基準杭を基に間尺で原則1/20で行った。また炉、埋甕などは必要に応じて1/10でとった。遺構配置図は平板測量により遺構の集中している箇所は1/100、その他1/200で行った。

## 第3節　調査の経過

案内VI遺跡は工事の都合上3回に分けて調査を行った。

昭和57年9月2日、案内Ｖ遺跡の作業員を約20名分離して、案内VI遺跡の発掘を開始した。




Ⅵ第1図　グリッド配置図

Ｂ地区西側より表土の掘り下げにはいったが排土場所がないため市道南側を最初に掘り下げた。表土は予想を上回り１ｍ程もあるため、とりあえず北側に２ｍのトレンチを入れ、全体の土層状態を把握することとした。その結果、東側はそれほど深くないことがわかった。

21日からは高橋修補佐員が調査に参加した。その後、地山への掘り下げを続けるが、遺構は検出されず、遺物の土器量も極めて少ない。28日には大湯浮石層の残りの良いＬＪ53の土層の剝ぎ取りを行った。

10月９日、案内Ｖ遺跡の調査が終了し、全員案内Ⅵ遺跡にはいる。12日、焼土遺構を確認ＳＮ01とするが、近世のものとわかる。18日、柱穴とみられるＳＫ07､08を検出､実測を行った。同日には航空撮影も行う。19～21日には来年度発掘調査区域の下刈りなどの整備を行った。22日に器材、遺物等を埋蔵文化財センターに搬出し、昭和57年度分(Ｂ地区)の調査を終了した。

昭和58年度は５月６日からＡ地区の調査にはいった。西側は表土が厚いため機械排土することとし、一旦作業員は全員案内Ｖ遺跡にはいり、９～11日に行った。11日からＡ地区西端部の調査にはいり、12日石囲炉を検出ＳＩ101とした。19日Ｔピットを検出、ＳＫＴ102とした。24～26日にかけては３基の土壙を検出し、ＳＫ103～105とした。その後機械排土を行ったＡ地区西側を東方向へ拡張していったが、遺構は検出されなかったので、分布調査で遺物の確認されているＡ地区東側からも平行して表土掘り下げにはいり、６月１日に２軒の石組炉を持つ竪穴住居跡を検出、ＳＩ106、107とした。遺構の集中しているこの箇所を拡張していくこととし、さらに竪穴住居跡、土壙、フラスコ状ピットなどを検出しそれぞれ遺構番号を順に付していった。15日、東北大学農学部庄子貞雄教授、山田一郎助手が来跡し、大湯浮石のサンプリングを行った。30日～７月３日残るＡ地区東側を機械排土するため一旦調査を中断した。４日から調査を再開し、６日にはＣ地区東端に土留めのネット工事を行った。７日機械排土の終了したＡ地区東端部の表土剝ぎにはいった。11日には航空撮影を行った。13日埋甕を検出、ＳＲ126とした。Ａ地区東端部の遺構はこれのみであり予想されたＢ地区の柱穴に続く遺構も検出されなかった。その後はＡ地区東端部の風倒木痕を掘り下げ、21日にＡ地区の調査を終了した。

調査の都合上６月23～27日に西側の一部を掘り下げて中断していたＣ地区の調査を本格的に再開したのは８月23日であった。排土場所が限られているため西端部と中央部の２班に分かれて､それぞれ東側に表土剝ぎ区域を広げていった。26日､西部より遺構があいついで検出され201から遺構番号を付していった。以後も表土剝ぎ区域を拡大していったが東部では小ピットが検出されたのみであった。９月10日に航空撮影を行った。14日東部で大湯浮石層が何回かにわたり堆積した箇所を検出、サンプリングと実測を行った。26日実測をほぼ終了し、平板による遺構配置図の作成にかかった。28・29日器材の清掃及び点検を行い、30日に器材の搬出、プレハブの撤去を行い、２か年にわたる案内Ⅵ遺跡の発掘調査を終了した。

# 第2章　調 査 の 記 録

## 第1節　発見遺構と遺物

### 1．縄文時代竪穴住居跡

**ＳＩ101竪穴住居跡**　（VI第２図　図版４）

ＱＣ79・80・ＱＤ79、80地区から黄褐色土地山上面において、石組炉を検出した。この地区は耕作地として堆積土が削平されており炉に付随すべく壁面、床面、柱穴等は確認できなかっ

VI第２図　ＳＩ101竪穴住居跡

た。

石自体は熱による変色が見られるが、炉内や炉付近からの出土遺物は検出されず、時代確定となる材料は全くなかった。

**ＳＩ106竪穴住居跡**　（VI第３図　図版５）

ＮＣ64､65・ＮＤ64･65地区から地山上面の数センチ上層にて石囲炉の露出部を確認し、さらに掘り広げたところでこの石囲炉に付随する壁を確認した。南側は斜面のため確認し得ない箇所もあったが、長軸 366 cm、短軸 322 cmである。深さは北側の最も深いところで26cmで、面積は10.1m²程度である。

壁はしまりがよく、垂直に近い立ちあがりをするが、一部に木根の痕が見られる。

炉は、中央やや南西寄りに５個の石を使った方形石囲炉があり、その内部からはわずかながら炭化物、焼土を確認した。この住居跡に伴うピットは検出されなかった。

出土した遺物は第３図１、２の波状口縁部の波頂部と思われる土器片である。外面はＲＬ縄文原体を施文し、１条の沈線を口縁部に廻らしているものと思われる。波頂部内面には鰓状の隆起が認められる。１、２とも縄文後期ごろの土器と思われる。

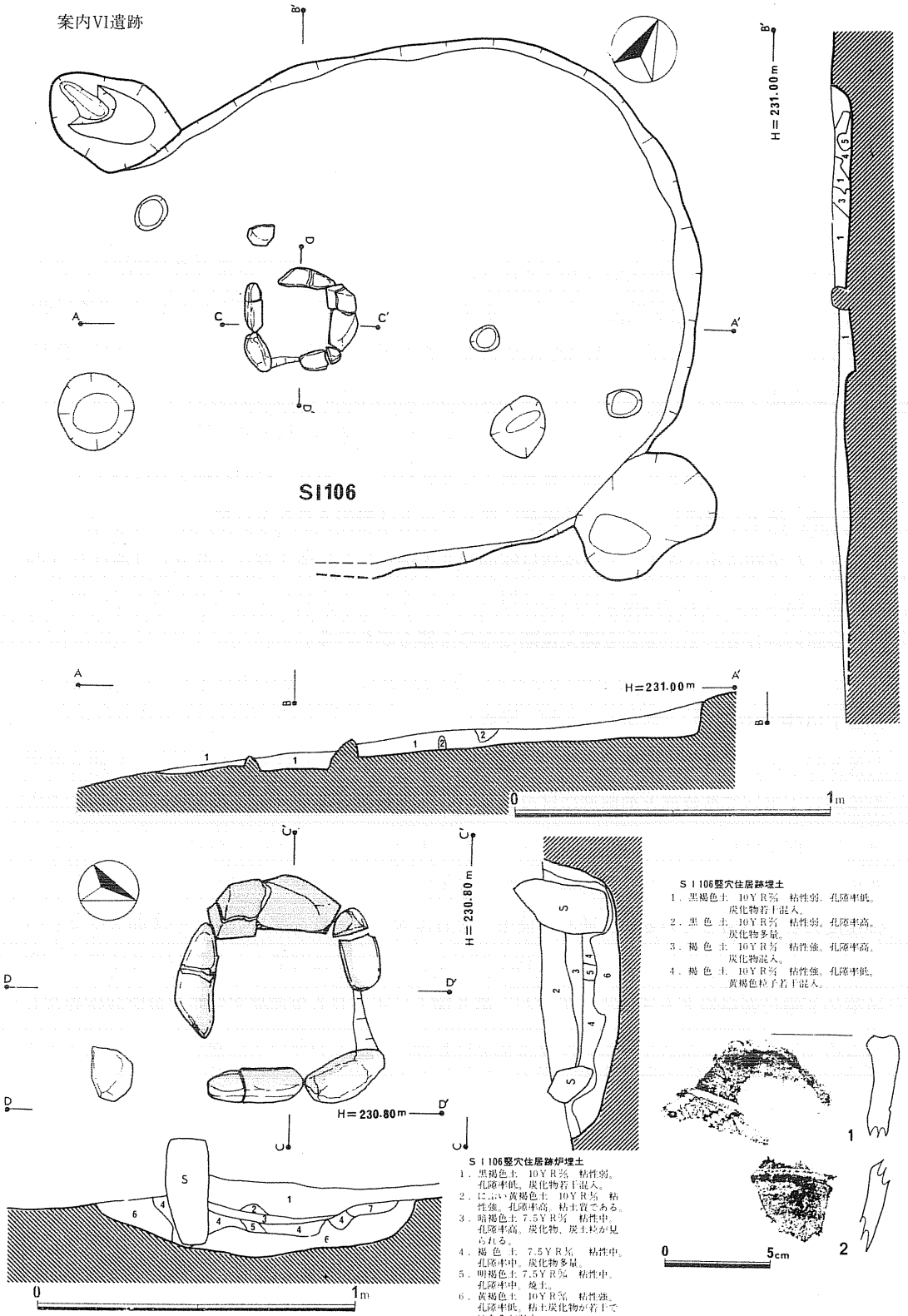
**ＳＩ107竪穴住居跡**　（VI第４・５図　図版６）

ＮＢ65、ＮＣ65地区より地山上面で石組複式炉を検出した。炉はＵ字形を呈し、９個の偏平な川原石を用いて燃焼部と前庭部に区分している。本複式炉の燃焼部93×71cm前庭部70× 101 cm、炉の構築材料としている石は偏平な川原石を用いたもので、特に燃焼部が焼けて赤褐色に変色しもろいものであった。焼土はこの部分に集中している。最大石63×33cm、最小石７×７cm程度の石を使用しているが、囲石に使用した石は大きめの石を配列し、その隙間を小さい石でふさいでいる。炉内から出土した遺物は全くなかったが炉に付随すると思われる土器片が燃焼部の北側に数種類まとまって出土した。第５図１～４はＲＬ単節縄文原体を縦位回転施文したものである。５はＬＲ単節縄文原体を縦位回転施文したのち綾絡文が施されている。縄文中期末の大木９か10式期のものと思われる。

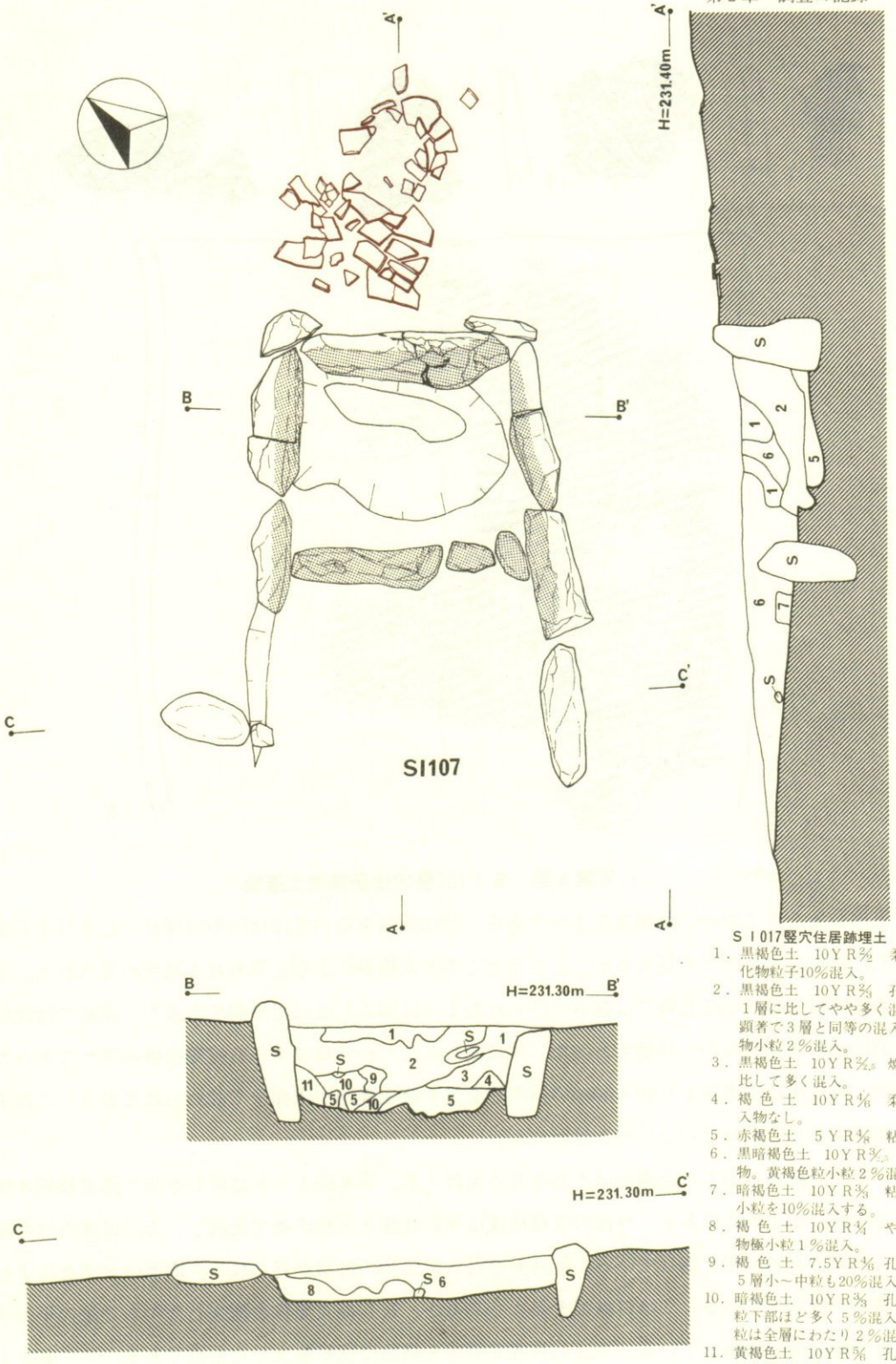
検出したこれらの複式炉、土器片をまとめ、考察すると本竪穴住居跡は縄文時代中期末葉のものと推測できる。

**ＳＩ112竪穴住居跡**　（VI第６図　図版７）

ＮＡ62、63地区より地山上面で楕円形を呈する黒色のプランを確認した。本住居跡南側部分は斜面のため確認し得なかったが、残存する部分での法量は、長軸 345 cm、短軸 265 cm、壁は最



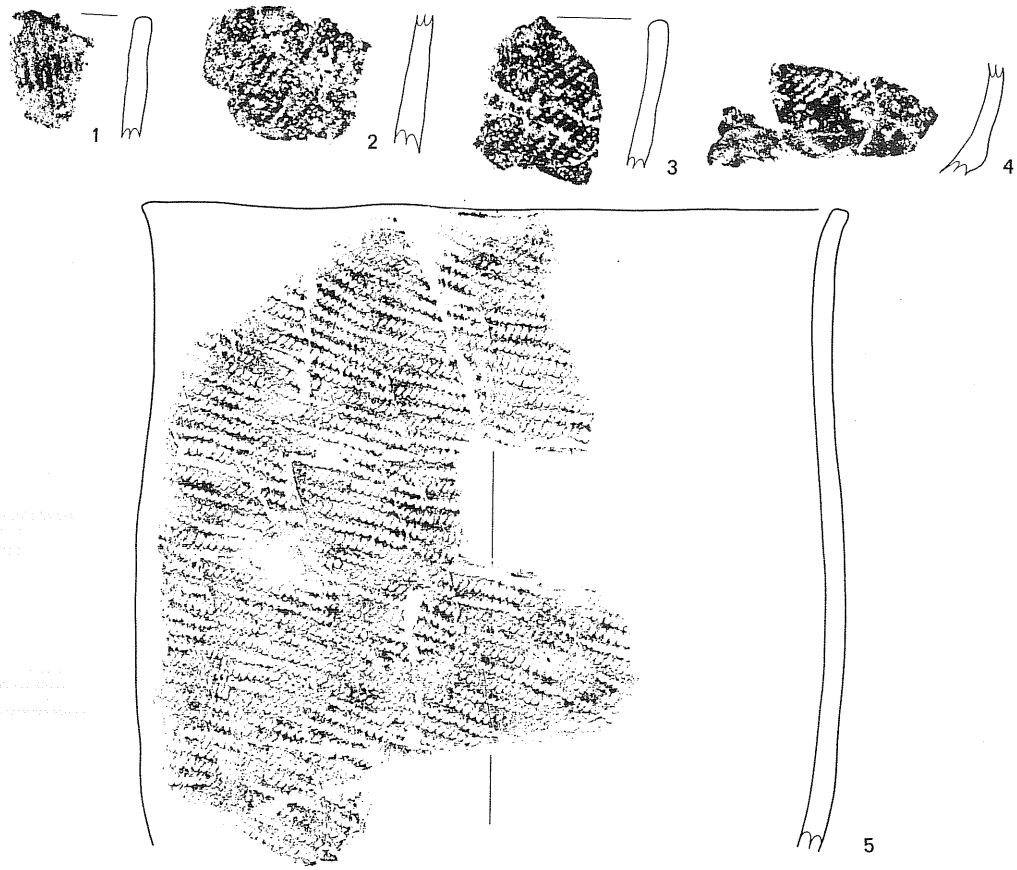

VI第3図　S I 106竪穴住居跡




**ＳＩ017竪穴住居跡埋土**

1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　柔かい焼土粒。炭化物粒子10%混入。
2．黒褐色土　10ＹＲ3/3　孔隙率低。焼土粒１層に比してやや多く混入。下部は特に顕著で３層と同等の混入量となる。炭化物小粒２%混入。
3．黒褐色土　10ＹＲ2/2.5　焼土粒１・２層に比して多く混入。
4．褐色土　10ＹＲ4/6　柔かくほとんど混入物なし。
5．赤褐色土　５ＹＲ4/8　粘性強。焼土。
6．黒暗褐色土　10ＹＲ2/2.5　柔かい土、炭化物。黄褐色粒小粒２%混入。
7．暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性弱。炭化物極小粒を10%混入する。
8．褐色土　10ＹＲ4/4　やや柔かい。炭化物極小粒１%混入。
9．褐色土　7.5ＹＲ4/6　孔隙率低。焼土。５層小～中粒も20%混入。
10．暗褐色土　10ＹＲ3/3　孔隙率高。焼土小粒下部ほど多く５%混入。炭化物小～中粒は全層にわたり２%混入。
11．黄褐色土　10ＹＲ5/6　孔隙率高。焼土小～中粒２%混入。

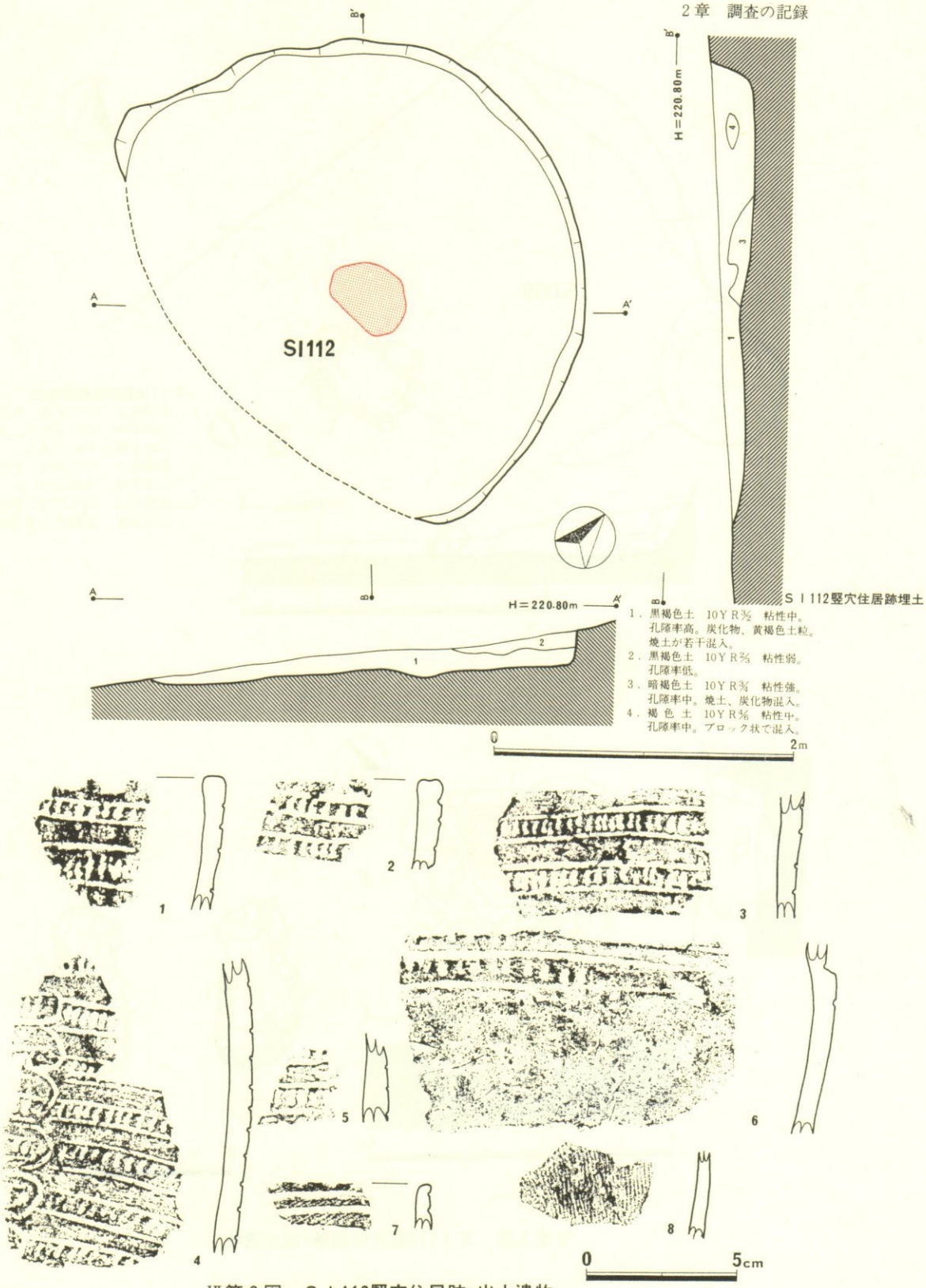
Ⅵ第４図　ＳＩ107竪穴住居跡



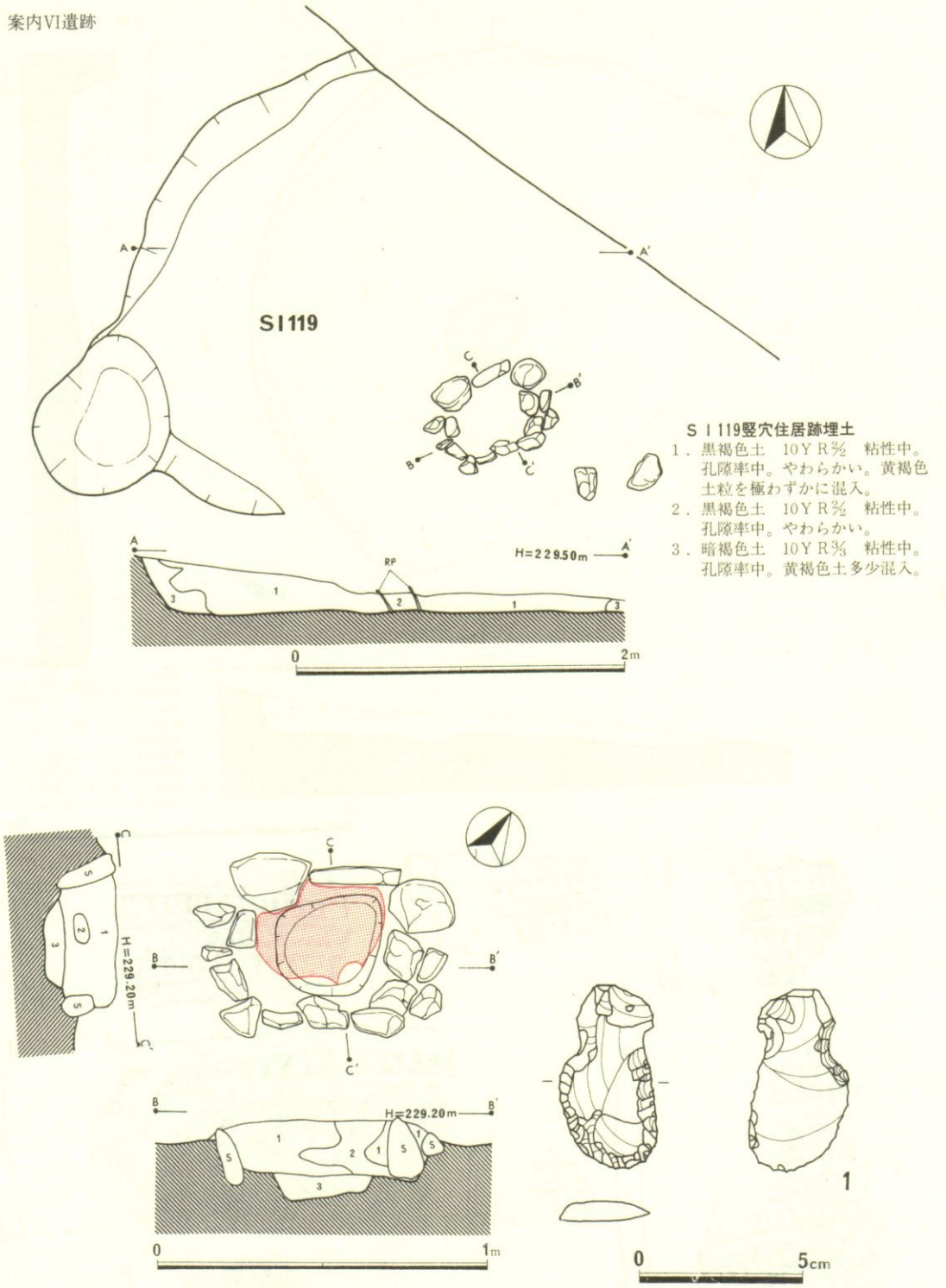

VI第5図　S I 107竪穴住居跡出土遺物

も深いところで33cm、面積は7.1㎡である。壁は南側を除いてほぼ円形に回り、しまりよく垂直に近い立ちあがりを見せるが、ところどころで木根等によると思われる撹乱が見られた。床面は中央を境にして北側では踏みつけられたように固くしまって平坦であるが、南側では比較的凹凸のある軟らかい状態であった。炉に関してはこれを構成する石材等は検出されなかったが、本住居跡中央部より60×40cmの楕円形を呈す焼土範囲が床面上で認められており、これを地床炉として用いていたものと思われる。

本住居跡から出土した遺物は土器片8点を数える。第6図1～6は鉢形を呈す縄文後期末葉と思われる土器片である。外面の文様構成は平行沈線と入組沈線で区画し、その区画内は半截竹管による刺突列を施している。区外面に煤状炭化物の付着が見られる。内面はミガキによる調整が施されている。7は口縁部土器片であるが、RL縄文原体を施文したのち2条の平行沈線で縄文帯を区画している。8はLR縄文原体を斜位に回転施文したものである。7、8とも外面にわずかながら煤状炭化物の付着が見られる。内面はミガキによる調整である。




VI第6図　S I 112竪穴住居跡・出土遺物



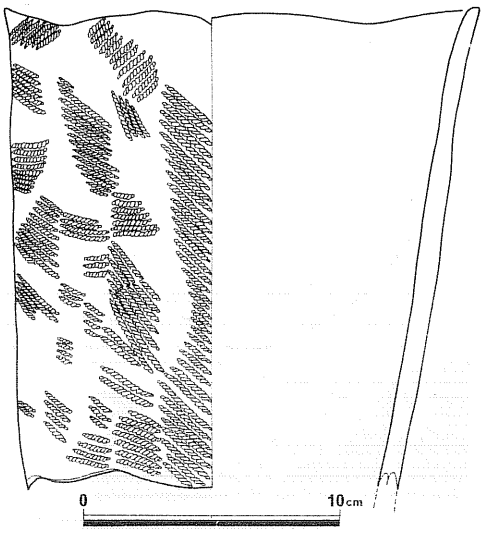

**S I 119竪穴住居跡埋土**

1．黒褐色土　10YR2/2　粘性中。孔隙率中。やわらかい。黄褐色土粒を極わずかに混入。
2．黒褐色土　10YR2/2　粘性中。孔隙率中。やわらかい。
3．暗褐色土　10YR3/4　粘性中。孔隙率中。黄褐色土多少混入。

VI第7図　S I 119竪穴住居跡・出土遺物

**ＳＩ119竪穴住居跡**（第７・８図　図版８）

ＭＩ60・61・ＭＪ60、61地区より地山上面にて円形石囲炉を検出し、さらにこの炉の西側において炉に付随すると思われる一部の壁を確認した。壁はＳＫ122土壙と重複して検出したが、新旧関係は判明しなかった。南・東側においては耕作等による削平をうけて検出できなかったが、残存する部分での深さは38cmである。主軸方向はＮ23°Ｗである。



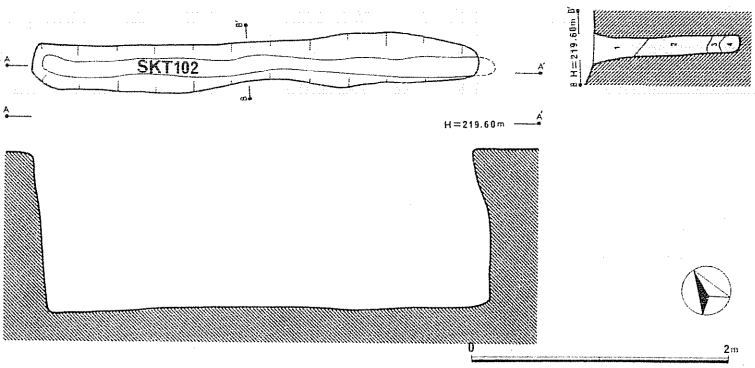

Ⅵ第８図　ＳＩ119竪穴住居跡出土遺物

石囲炉は15個の角礫を用いて、方形に近い形に構築されたものである。石囲炉内部は全面に渡って焼けており、焼土炭化物、灰が見られた。

本住居跡から出土した遺物は土器片が数点、石器が１点にのぼるが第８図は胴上部以上の土器片の出土が見られる。外面はＬＲ縄文原体を縦位、横位、斜位に回転施文し、内面はミガキによる調整が施されている。縄文時代後期のものと思われる。第７図１は石匙と思われる石器である。表裏とも細かい調整を施して刃部を形成している。石質は頁岩である。土器片は炉の北西より床面上と思われるところから正立して出土している。本住居跡の使用時期を考察すれば縄文後期のものと思われる。

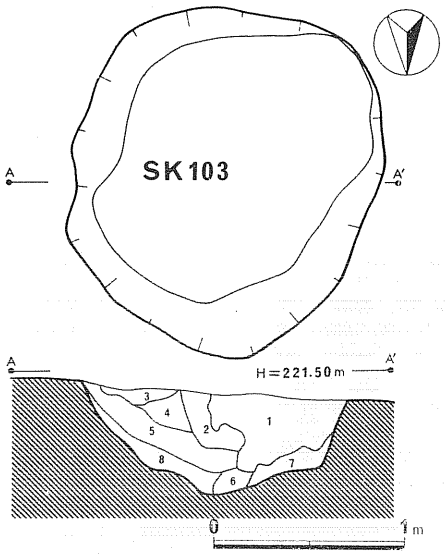
| Ⅵ第１表 | 挿図番号 | Ⅵ第９図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | SKT102 | 検出地区 | ＲＥ83、ＲＦ83 | |
| 法量 | 長軸 | 351cm | 短軸 | 29cm |
| | 深さ | 67cm | 面積 | 1.3㎡ |
| 形態 | 不整楕円形 | | 主軸方向 | Ｎ－61°－Ｗ |
| 時期 | 不明 | | | |

## ２．土壙・Ｔピット・フラスコ状ピット




Ⅵ　ＳＫＴ102　Ｔピット
埋土
1．黒色土（10ＹＲ3/1）粘性中。孔隙率中。ボソボソしている。
2．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。黄褐色粒をわずかに含む。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。ボソボソしている。
4．黄褐色土（10ＹＲ5/6）粘性強。孔隙率高。地山の土がくずれたものと思われる。

Ⅵ第９図　ＳＫＴ102Ｔピット

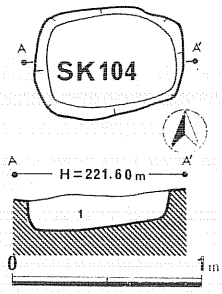



Ⅵ第10図　ＳＫ103土壙

| Ⅵ第２表 | 挿図番号 | Ⅵ第10・21図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ103 | 検出地区 | ＱＤ80 | |
| 法量 | 長軸 | 195cm | 短軸 | 162cm |
| | 深さ | 60cm | 面積 | 2.4m² |
| 形態 | 不整楕円形 | | 主軸方向 | N－2°－E |
| 時期 | 縄文時代後期前葉 | | | |
| 遺物出土状況 | 遺物は全部で４点を数える。Ⅵ第21図１は胴部に細かい単節ＬＲ縄文原体を横位回転し、２条の沈線を施して無文帯と縄文帯を区画している。内面はミガキによる調整が施されている。Ⅵ第21図２は単節ＬＲ縄文原体を横位回転施文したのち、１条ないし２条の沈線で縄文帯を区画した土器片である。いずれも縄文後期前葉の土器片と思われるが１層よりまとまりなく出土した。 | | | |

Ⅵ　ＳＫ103土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）孔隙率低。黄褐色中大粒10%混入。遺物包含層。
2．にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/4）
3．明黄褐色土（10ＹＲ6/6）砂粒状でかたくしまった土。
4．黄褐色土（10ＹＲ5/8）３層に比しては若干やわらかいが固くしまった土３層が30%程混入。
5．黒褐色土（10ＹＲ3/2＋黄褐色土10ＹＲ5/8）黄褐色土大粒、黒褐色土大粒がまじりあった土。しまりがあまり良くない。人為的に埋め戻されたような土。若干固めで粒子が細かく混入。
6．黒褐色土（10ＹＲ3/2＋黄褐色土10ＹＲ5/8）｝黄褐色土大
7．黒褐色土（10ＹＲ3/2＋黄褐色土10ＹＲ5/8）｝粒。黒褐色土大粒がまじりあった土。しまりがあまり良くない。人為的に埋め戻されたような土、６は、黒褐色土の割合が高い。７は６よりさらに高い。
8．黄褐色土（10ＹＲ5/8）しまりのよい粘質土。
9．黄褐色土（10ＹＲ5/4）地山。

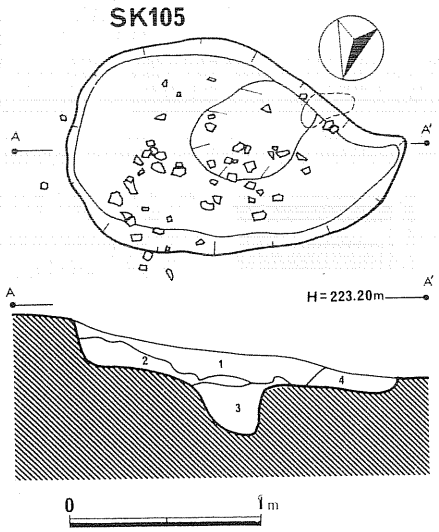



Ⅵ第11図　ＳＫ104土壙

| Ⅵ第３表 | 挿図番号 | Ⅵ第11図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ104 | 検出地区 | ＱＤ81 | |
| 法量 | 長軸 | 78cm | 短軸 | 57cm |
| | 深さ | 20cm | 面積 | 0.6m² |
| 形態 | 不整楕円形 | | 主軸方向 | N－3°－E |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅵ　ＳＫ104土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）孔隙率高。黄褐色土小粒１%混入。

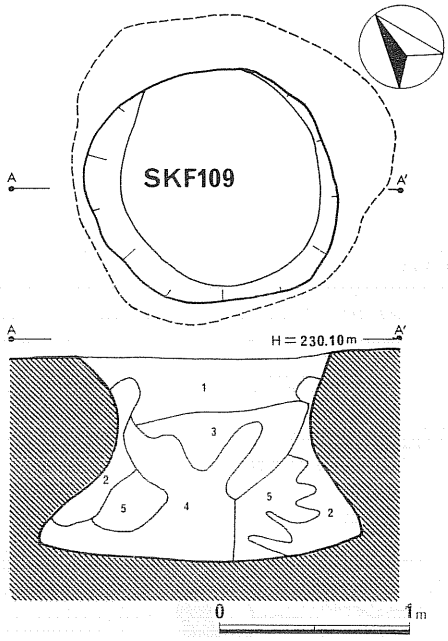



Ⅵ第12図　ＳＫ105土壙

| Ⅵ第４表 | 挿図番号 | Ⅵ第12・21図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ105 | 検出地区 | ＱＡ79、80 | |
| 法量 | 長軸 | 179cm | 短軸 | 116cm |
| | 深さ | 68cm | 面積 | 1.7m² |
| 形態 | 不整楕円形 | | 主軸方向 | N－7°－E |
| 時期 | 縄文時代中期 | | | |
| 遺物出土状況 | Ⅵ第21図４～８に示す土器が出土した。いずれれ単節ＲＬ縄文を縦位回転施文している。 | | | |

Ⅵ　ＳＫ105土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）孔隙率中。黄褐色土極小粒少量混入。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）孔隙率中。主に下部に極く薄く帯状に黒褐色土が混入する。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）孔隙率高。黄褐色土極小粒少量混入。２層も中～大粒状に少量混入。
4．暗褐色土（10ＹＲ3/4）地山への漸移層的層。２層が小～中粒状に少量混入。
5．黄褐色土（10ＹＲ5/6）地山。

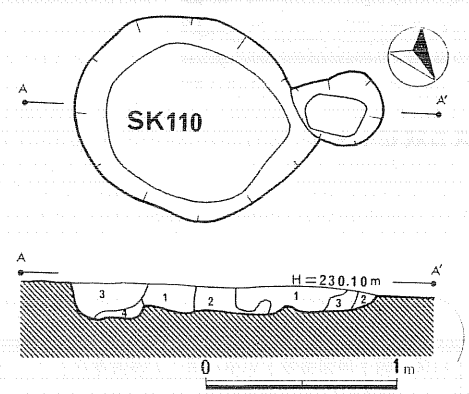



Ⅵ第13図　ＳＫＦ109フラスコ状ピット

| Ⅵ第５表 | 挿図番号 | Ⅵ第13図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫＦ109 | 検出地区 | ＮＣ63、ＮＤ63 | |
| 法量 長軸 | 179cm | 短軸 | 116cm | |
| 法量 深さ | 68cm | 面積 | 1.7m² | |
| 形態 | 円形 | 主軸方向 | N－7°－E | |
| 時期 | 縄文時代？ | | | |

Ⅵ　ＳＫＦ109土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率低。小礫、黄褐色土粒。炭化物若干量混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ3/6）粘性弱。孔隙率高。
3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率低。炭化物軽石若干量混入。
4．黒褐色土（10ＹＲ3/2。３層と同層と思えるが黄褐色粒の混入量が３層よりも多いため区別した。
5．暗褐色（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率高。炭化物、黄褐色土ブロック１％混入。




Ⅵ第14図　ＳＫ110土壙

| Ⅵ第６表 | 挿図番号 | Ⅵ第14図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ110 | 検出地区 | ＮＣ62、ＮＣ63 | |
| 法量 長軸 | 130cm | 短軸 | 104cm | |
| 法量 深さ | 18cm | 面積 | 1.1m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－43°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

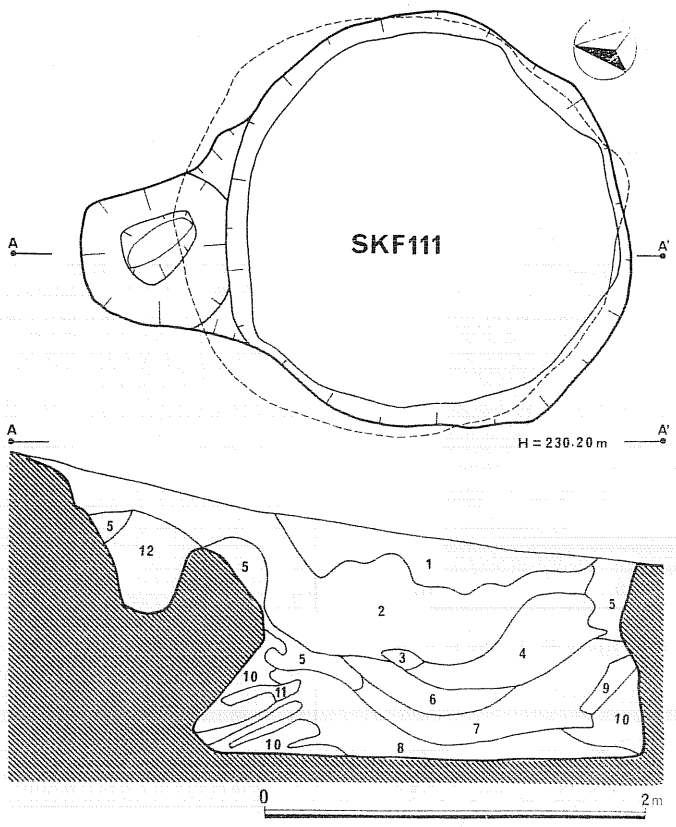
Ⅵ　ＳＫ110土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率低。炭化物若干。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率低。礫若干混入。
3．黒褐色土（10ＹＲ2/1）粘性弱。孔隙率高。黄褐色土ブロック10％混入。炭化物若干混入。
4．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性強。孔隙率低。

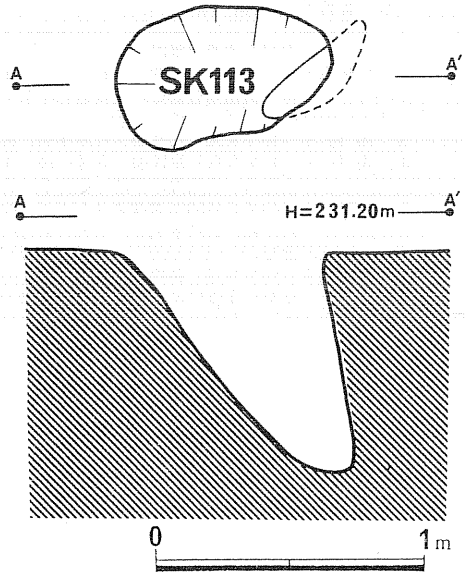
| Ⅵ第７表 | 挿図番号 | Ⅵ第15・21図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫＦ111 | 検出地区 | ＮＢ62、ＮＣ62 | |
| 法量 長軸 | 223cm | 短軸 | 218cm | |
| 法量 深さ | 163cm | 面積 | 3.7m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N－40°－E | |
| 時期 | 縄文時代晩期 | | | |
| 遺物出土状況 | Ⅵ第21図９に示す土器片１片が出土した。細い単節ＲＬを横位回転施文したのち４条の平行沈線を施す。 | | | |

Ⅵ　ＳＫＦ111土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ2/1）粘性強。孔隙率高。１～３㎜大のパミス若干量混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。小礫、パミス、炭化物を含む。黄褐色土がブロック状で混入。
3．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性弱。孔隙率低。砂礫層。
4．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性強。孔隙率高。炭化物、焼土混入。炭化物は下部に混入多く含む。
5．暗褐色土（10ＹＲ3/4 50％黄褐色土10ＹＲ5/6 50％）粘性強。孔隙率高。パミス、炭化物を若干量含む。
6．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率低。この層に炭化物が多量に混入している。黄褐色粒１％混入。
7．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率低。炭化物がわずかながら見られる。
8．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性弱。孔隙率低。黄褐色土粒（１～２㎜大）を含む。
9．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性弱。孔隙率中。砂質的層である。
10．褐色土（10ＹＲ4/6）粘性強。孔隙率高。やわらかい層である。
11．暗褐色土（10ＹＲ3/3）褐色土10ＹＲ4/6が50％混入。
12．黒色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。黄褐色土粒が全体的に少量混入。

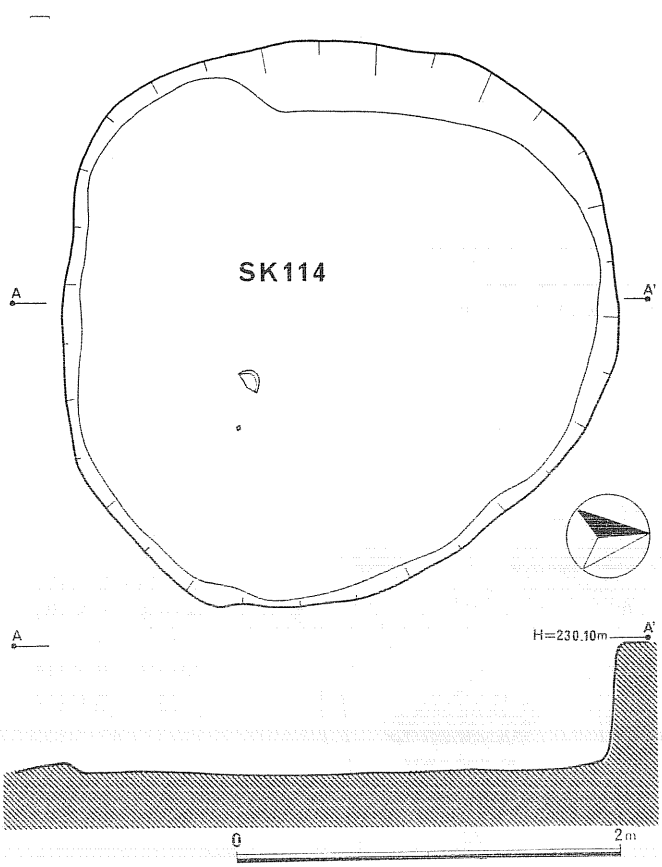



VI第15図　ＳＫＦ111フラスコ状ピット

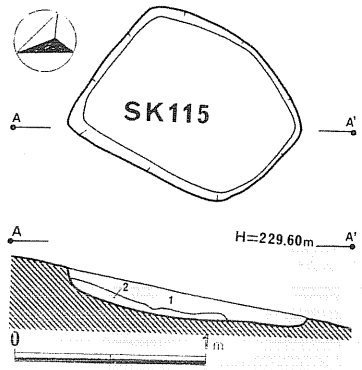



| VI第８表 | 挿図番号 | VI第16図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ113 | 検出地区 | ＮＡ64、ＮＢ64 | |
| 法量 長軸 | 80cm | 短軸 | 50cm | |
| 法量 深さ | 80cm | 面積 | 0.5m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N—50°—W | |
| 時期 | 不明 | | | |

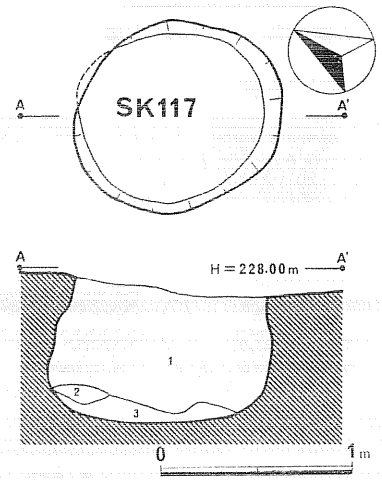
VI第16図　ＳＫ113土壙




Ⅵ第17図　ＳＫ114土壙




Ⅵ第18図　ＳＫ115土壙




Ⅵ第19図　ＳＫ117土壙

| Ⅵ第９表 | 挿図番号 | Ⅵ第17・21図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ114 | 検出地区 | ＮＡ61、62、ＮＢ61 | |
| 法量 長軸 | 295cm | 短軸 | 290cm | |
| 法量 深さ | 56cm | 面積 | 7.3m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | Ｎ－88°－Ｗ | |
| 時期 | 縄文時代前期 | | | |
| 遺物出土状況 | Ⅵ第21図12は、ＬＲ単節縄文原体を横位回転と縦位回転によって施した縄文後期前葉の円筒下層ｄ式と考えられる。 | | | |

| Ⅵ第10表 | 挿図番号 | Ⅵ第18図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ115 | 検出地区 | ＮＡ61 | |
| 法量 長軸 | 123cm | 短軸 | 107cm | |
| 法量 深さ | 14cm | 面積 | 0.8m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | Ｎ－22°－Ｅ | |
| 時期 | 不明 | | | |

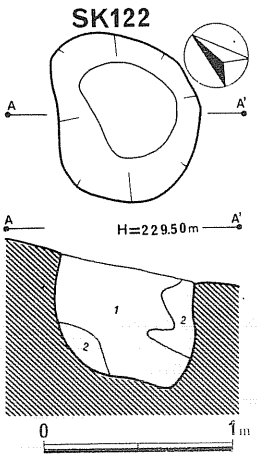
| Ⅵ第11表 | 挿図番号 | Ⅵ第19・21図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ117 | 検出地区 | ＮＦ62 | |
| 法量 長軸 | 105cm | 短軸 | 103cm | |
| 法量 深さ | 74cm | 面積 | 1m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | Ｎ－21°－Ｗ | |
| 時期 | 縄文時代後期 | | | |
| 遺物出土状況 | Ⅵ第21図13は、網目状撚糸文を施した縄文後期前葉の土器と思われる。 | | | |

**Ⅵ　ＳＫ115土壙　埋土**

1．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性弱。孔隙率低。植物根若干混入。非常に固くしまっている。
2．暗オリーブ褐色土(2.5Ｙ3/3）粘性中。孔隙率中。砂粒をわずかに含み固くしまっている。

**Ⅵ　ＳＫ117土壙　埋土**

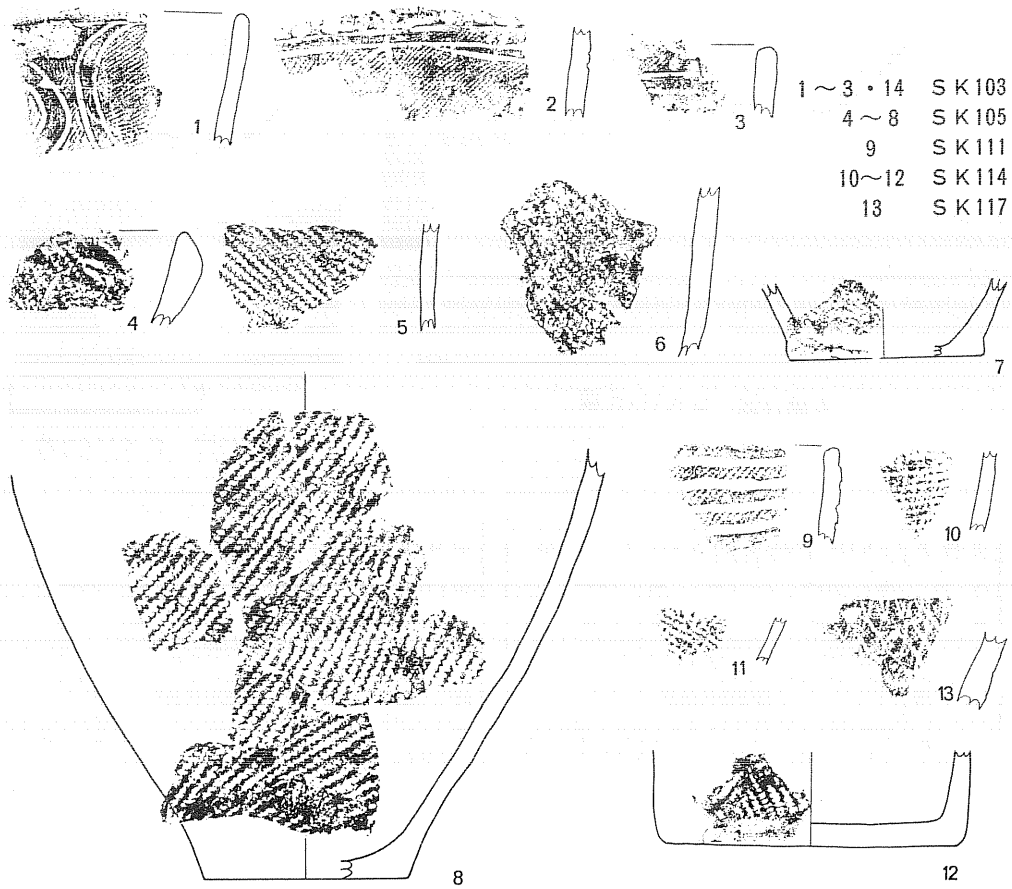
1．黒色土（10ＹＲ3/1）粘性中。孔隙率高。黄褐色土ブロック１％混入。炭化物若干混入。
2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性強。孔隙率中。黄褐色土粒を含む。
3．褐色土（10ＹＲ4/4）粘性弱。孔隙率低。細砂細砂混入。黄褐色土粒混入。

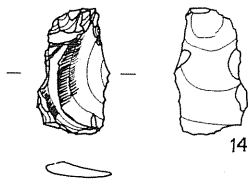



| VI第12表 | 挿図番号 | VI第20図 | 図番番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | SK122 | 検出地区 | MI60 | |
| 法量 長軸 | 95cm | 短軸 | 85cm | |
| 法量 深さ | 78cm | 面積 | 0.9m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N−25°−E | |
| 時期 | 不明 | | | |

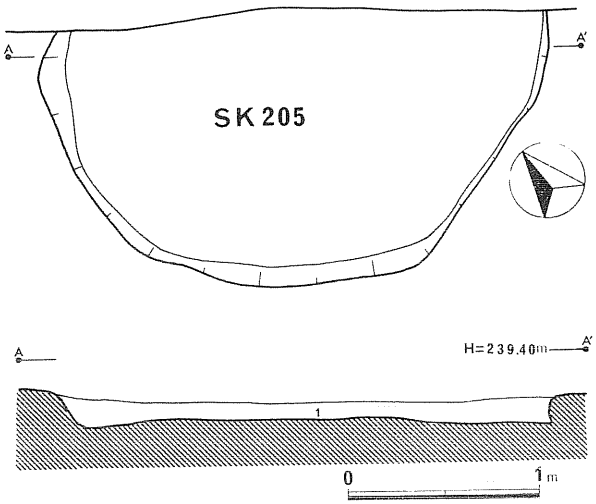
VI　SK122土壙　埋土
1．暗褐色土（10YR3/3）粘性中。孔隙率中。黄褐色土がわずか混入。
2．暗褐色土（10YR3/4）粘性中。孔隙率中。黄褐色土を多量に含む。

VI第20図　SK122土壙




VI第21図　A地区土壙内出土遺物



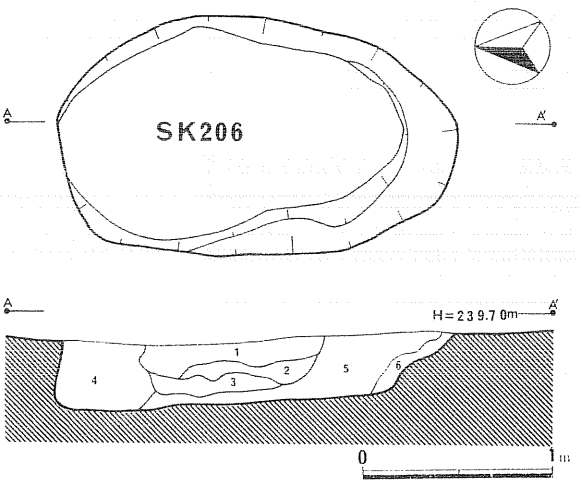

Ⅵ　ＳＫ205土壙　埋土

1．黒 色 土（10ＹＲ2/1）粘性強。孔隙率高。炭化物若干混入。

Ⅵ第22図　ＳＫ205土壙

| Ⅵ第13表 | 挿図番号 | Ⅵ第22図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ205 | 検出地区 | １Ｄ24、１Ｅ24 | |
| 法量 長軸 | (270cm) | 短軸 | | |
| 法量 深さ | 13cm | 面積 | (3.1m²) | |
| 形態 | 不整円形？ | 主軸方向 | | |
| 時期 | 不明 | | | |

| Ⅵ第14表 | 挿図番号 | Ⅵ第23図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ206 | 検出地区 | １Ｃ18、19 | |
| 法量 長軸 | 209cm | 短軸 | 126cm | |
| 法量 深さ | 35cm | 面積 | 2.3m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－0°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |




Ⅵ　ＳＫ206土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性弱。孔隙率中。固くしまっている。黄褐色土粒を２％混入。

2．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。しまっている。黄褐色土粒を１％混入。

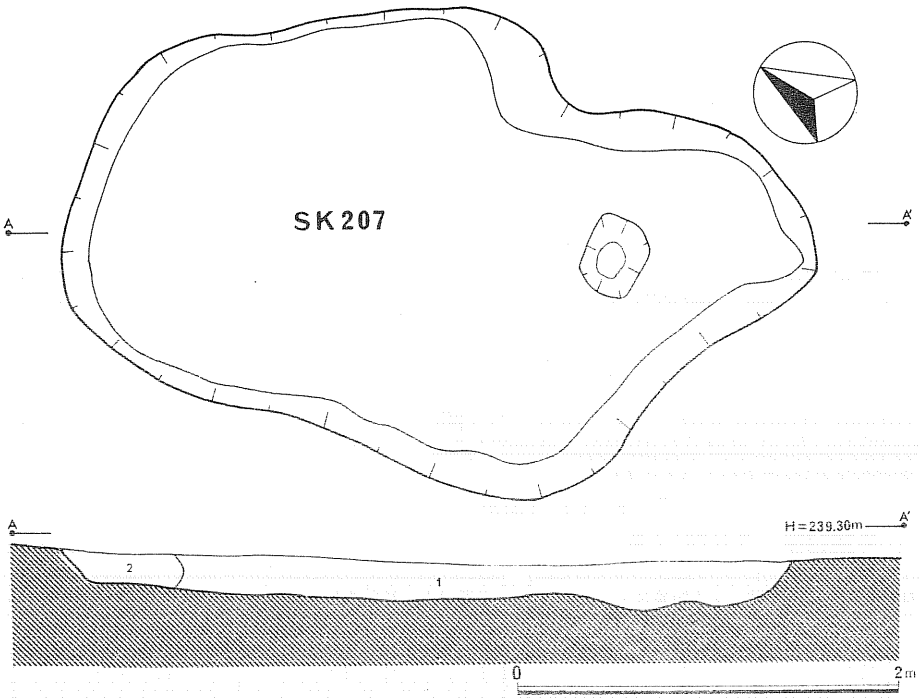
3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。孔隙率中。ややしまっている。黄褐色土粒を１％混入。

4．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率中。黄褐色土粒及びブロックを50％混入。撹乱か？。

5．黒 色 土（10ＹＲ2/1）粘性弱。孔隙率中。パサパサしている。

6．黒褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率中。壁の崩落したもの。

Ⅵ第23図　ＳＫ206土壙

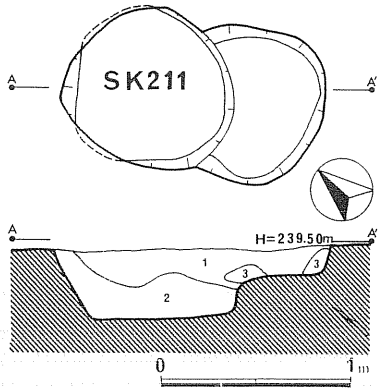



Ⅵ第24図　ＳＫ207土壙

| Ⅵ第15表 | 挿図番号 | Ⅵ第24・31図 | | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ207 | | 検出地区 | ＩＤ22 | |
| 法量 | 長軸 | 400cm | 短軸 | 215cm | |
| | 深さ | 25cm | 面積 | 6.9㎡ | |
| 形態 | 不整楕円形 | | 主軸方向 | N－30°－W | |
| 時期 | 縄文時代後期 | | | | |
| 遺物出土状況 | 土器片は全部で49点を数える。Ⅵ第30図１～３は細かいＬＲ単節縄文原体を横位回転と斜位回転に施文したのち、２条のＳ字状沈線を施した土器片である。４は波状口縁部分の一部と思われるが、ＬＲ単節縄文原体を斜位回転によって施文し、口唇部の波状に沿って、下部に２㎜から３㎜程度の太さの沈線で無文帯と縄文帯を区画し、さらに沈線の波頂部に刺突を加えた土器片である。５、15～17は細かいＬＲ単節縄文原体を横位回転施文した土器片で、半円筒状の工具と思われるもので左回りに、刺突列を加えたのち1.5㎜から３㎜程度の沈線を施文している。７a、７bは同一の土器片であるが、７bは７aを展開したものである。この土器片は円筒状を呈すが、異形台付土器と思われる。直径は８cmを計る。外面は1.5㎜～３㎜程度の太さの平行と曲線から構成される沈線のみによって施文されている。10・11はＬＲ単節原体を横位回転し、口唇下部に１条の横沈線を施して、縄文帯を区画している。13は台付土器の胴下部と思われる。外面はＬＲ単節縄文原体を施文し、２条の平行と曲線の沈線で無文帯と縄文帯を区画している。19はＬＲ単節縄文原体を施文し、４㎜程度の太さの横沈線で縄文帯を区画している。これらはいずれも、縄文後期中葉の土器と思われ、加曽利Ｂ式併行期のものと考えられる。20は網目状撚糸文を施した縄文後期前葉のものと思われる。６は口唇部の下方に刺突と沈線を施文している。石器は、24の不定形剥片石器が出土した。石質は頁岩である。器体の縁辺の一部に調整が見られる。 | | | | |

Ⅵ　ＳＫ207土壙　埋土

１．黒色土（10ＹＲ2/1）粘性強。孔隙率低。黄褐色土粒子をわずかに含む。

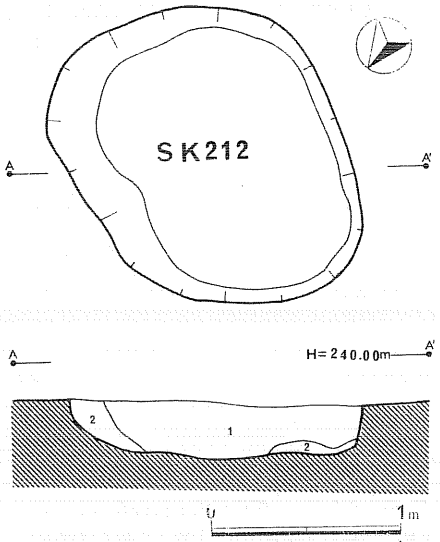



Ⅵ第25図　ＳＫ211土壙

| Ⅵ第16表 | 挿図番号 | Ⅵ第25図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ211 | 検出地区 | ＩＢ20、21 | |
| 法量 長軸 | 91cm | 短軸 | 82cm | |
| 法量 深さ | 38cm | 面積 | 1.1㎡ | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－35°－W | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅵ　ＳＫ211土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性中。孔隙率低。黄褐色土粒（1㎜～3㎜大）少量混入。炭化物若干混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。孔隙率高。黄褐色土ブロック10%程度含む。炭化物若干量混入。
3．暗褐色土（10ＹＲ3/4）粘性弱。孔隙率中。黄褐色土粒子を含む。
4．黄褐色土（10ＹＲ5/6）粘性弱。孔隙率低。炭化物若干。
5．明褐色土(7.5ＹＲ5/8）粘性弱。孔隙率低。焼土。

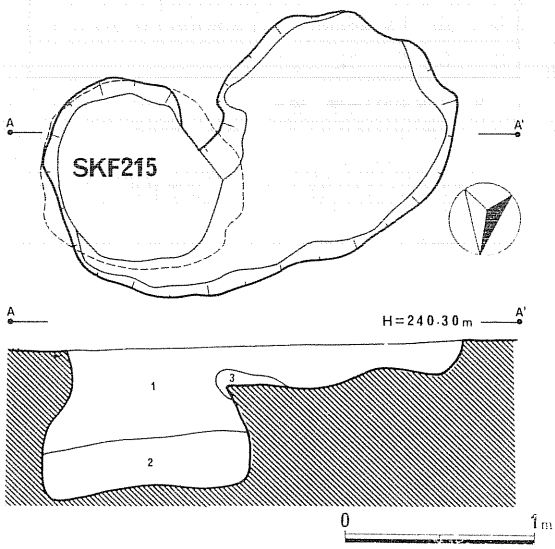



Ⅵ第26図　ＳＫ212土壙

| Ⅵ第17表 | 挿図番号 | Ⅵ第26･31図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ212 | 検出地区 | ＨＪ、ＩＡ18 | |
| 法量 長軸 | 184cm | 短軸 | 137cm | |
| 法量 深さ | 30cm | 面積 | 2.2㎡ | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－20°－E | |
| 形期 | 縄文時代後期 | | | |
| 遺物出土状況 | 第30図25、26、29、31はＬＲ単節縄文原体を施文し、２条の平行沈線を加えた磨消縄文手法を用いる。27、30はＬＲ単節縄文原体を縦位に回転施文しており、胎土中に砂礫の混入が見られる。28はＲＬ単節縄文原体を縦位回転施文した土器片である。いずれも縄文後期の土器片と考えられる。第31図32は、不整形剥片石器である。縁辺の調整は施されていない。 | | | |

Ⅵ　ＳＫ212土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。孔隙率中。褐色土粒若干混入。きめが細かい。
2．褐色土（10ＹＲ3/4）粘性強。孔隙率中。黒褐色土が若干混入している。

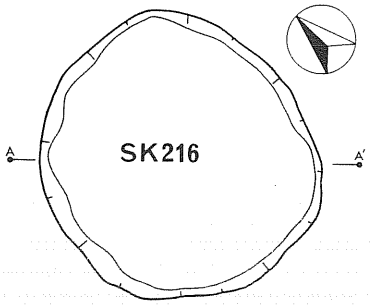



Ⅵ第27図　ＳＫＦ215フラスコ状ピット

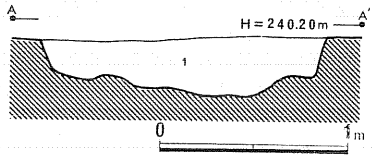
| Ⅵ第18表 | 挿図番号 | Ⅵ第27図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ215 | 検出地区 | ＨＦ14 | |
| 法量 長軸 | 218cm | 短軸 | 78cm | |
| 法量 深さ | 73cm | 面積 | 2.3㎡ | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－35°－E | |
| 時期 | 不明 | | | |

Ⅵ　ＳＫ215土壙　埋土

1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）粘性強。孔隙率高。黄褐色土粒を含む。
2．黒色土（10ＹＲ3/1）粘性強。孔隙率低。黄褐色土ブロック少量程度混入。
3．暗褐色土（10ＹＲ3/3）粘性中。孔隙率高。炭化物わずかに混入。



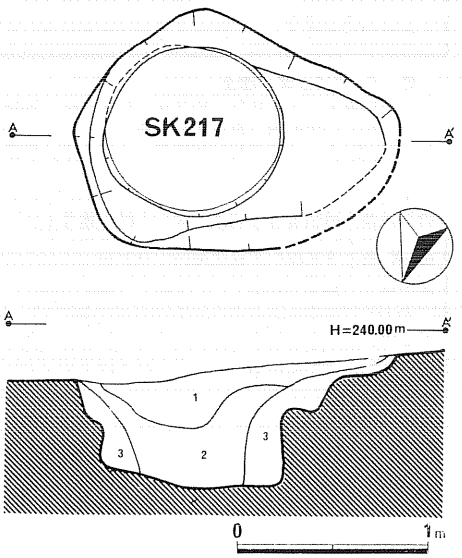

| VI第19表 | 挿図番号 | VI第28図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | SK216 | 検出地区 | HG14、15 | |
| 法量 長軸 | 150cm | 短軸 | 140cm | |
| 法量 深さ | 32cm | 面積 | 2 m² | |
| 形態 | 不整円形 | 主軸方向 | N—0°—W | |
| 時期 | | | | |




VI第28図　SK216土壙

VI　SK216土壙　埋土

1．黒色土（10YR2/3）粘性強。孔隙率低。明黄褐色土2%含む。




VI第29図　SK217土壙

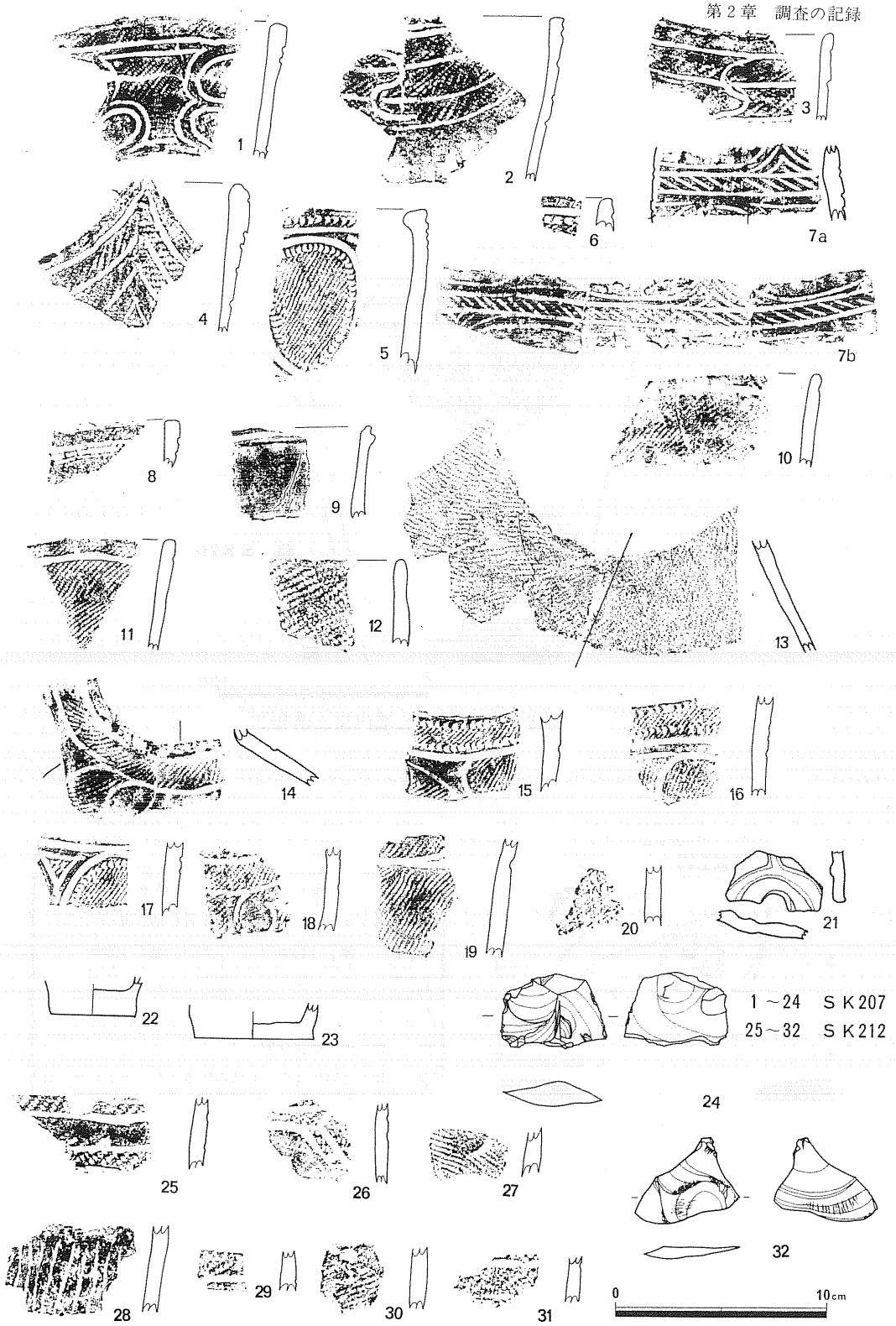
| VI第20表 | 挿図番号 | VI第29図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | SK217 | 検出地区 | GJ08 | |
| 法量 長軸 | 169cm | 短軸 | 117cm | |
| 法量 深さ | 60cm | 面積 | 1.7m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N—25°—E | |
| 時期 | 不明 | | | |

VI　SKF217土壙　埋土

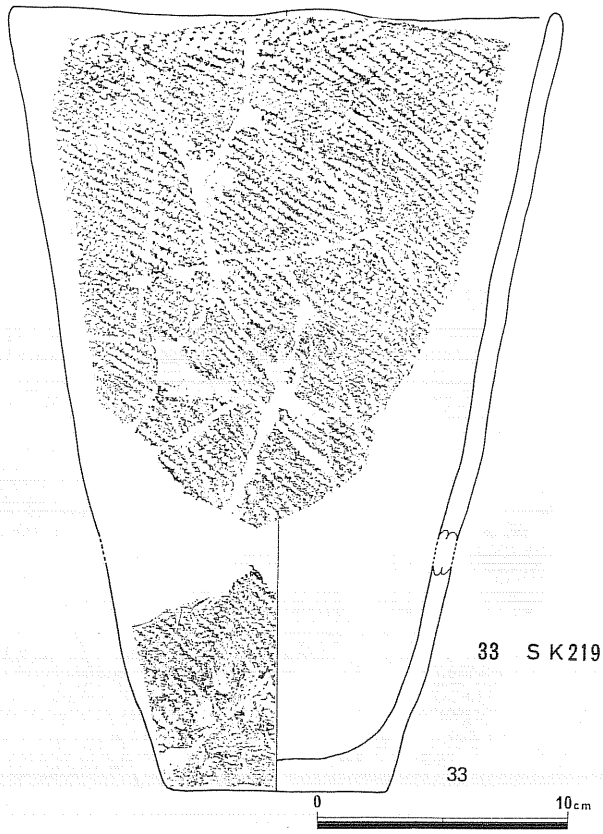
1．黒色土（10YR1.7/1）粘性強。孔隙率中。きめ細かい。

2．黒褐色土（10YR2/3）粘性中。孔隙率中。サラサラしている。

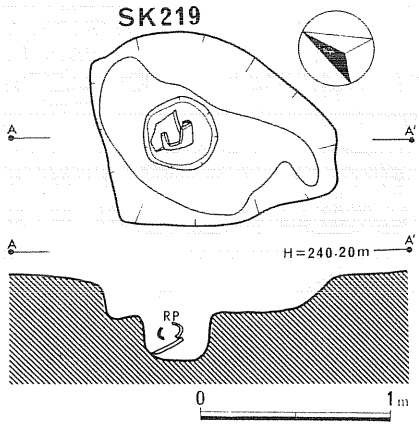
3．暗褐色土（10YR3/3）粘性中。孔隙率中。褐色土が若干混入。




Ⅵ第30図　Ｃ地区土壙内出土遺物(1)




VI第31図　Ｃ地区土壙内出土遺物(2)




VI第32図　ＳＫ219土壙

| VI第21表 | 挿図番号 | VI第30図 | 図版番号 | |
|---|---|---|---|---|
| 遺構名 | ＳＫ219 | 検出地区 | ＨＦ15、16 | |
| 法量 長軸 | 142cm | 短軸 | 109cm | |
| 法量 深さ | 40cm | 面積 | 1.2m² | |
| 形態 | 不整楕円形 | 主軸方向 | N－0°－W | |
| 時期 | 縄文時代後期 | | | |
| 遺物出土状況 | 土器片はピット状の凹み内から出土した。VI第31図33は、縄文後期と思われる粗製の土器片である。外面の口唇部にＲＬ単節縄文原体を横位回転で施文し、胴部は同原体を縦位に回転施文したものである。胴上部には煤状炭化物の付着が見られる。内面はミガキによる調整が施されている。 | | | |

## ３．埋甕

### ＳＫ126埋甕　（Ⅵ第33・34図　図版　）

ＭＡ53地区にて、標準層位第Ⅳ層中面で土器口縁部とこれを囲む黒色土の円形プランを確認した。掘り込み面は凸レンズ状を呈する。掘り込み部上部は72×57cm、深さ30cm、面積6.3m²を計る。主軸方位はＮ57°Ｗ。覆土には若干の炭化物が混入していた。土器は正立して埋められており外面はハケメ状工具と思われるものによって縦方向に調整されており朱塗りである。縄文時代晩期の土器と思われる。

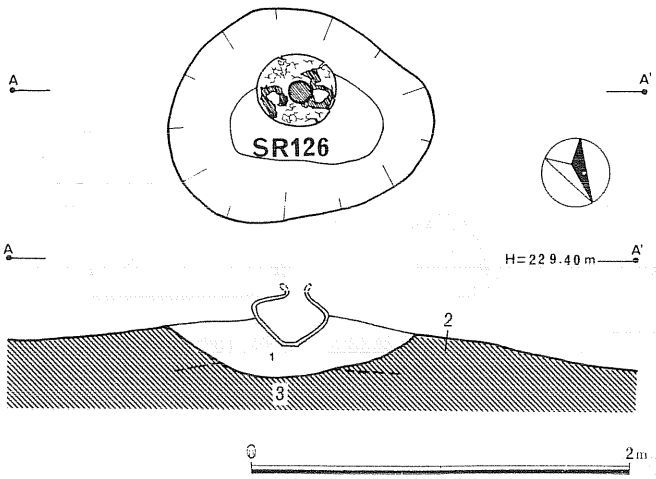
Ⅵ　ＳＲ126埋甕　埋土

１．黒色土（10ＹＲ2/1）炭化物混入。黄褐色土極小土粒混入。

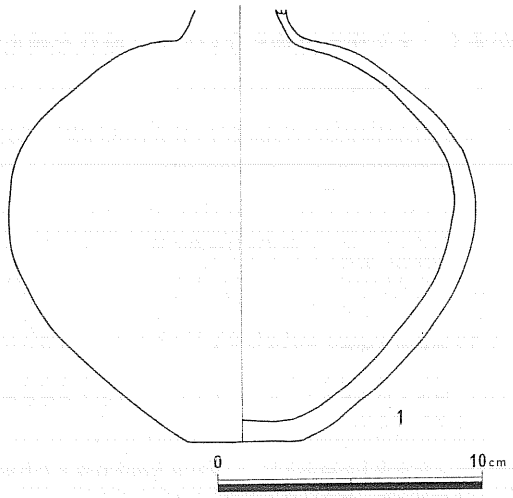
２．黒褐色土（10ＹＲ3/2）１層に比しややしまり悪い。

※１．２．……差をとらえるのはとても困難。

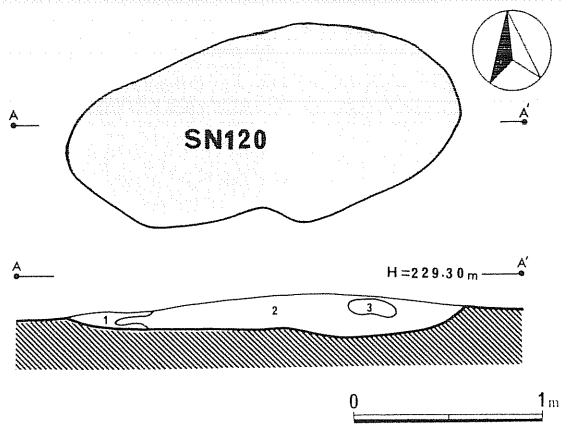
３．暗褐色土（10ＹＲ3/4）地山漸移層。やわらかい。黒褐色土粒少量混入。



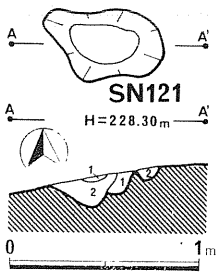

Ⅵ第33図　ＳＲ126埋甕



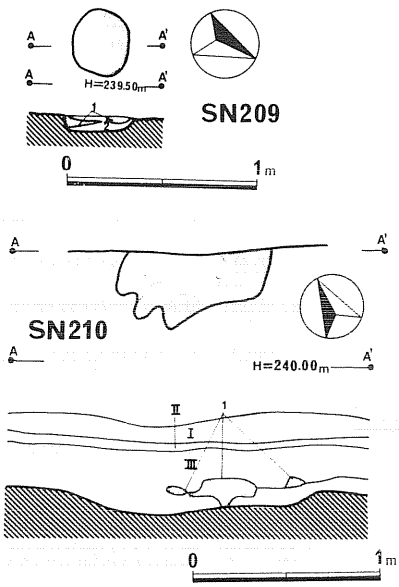

Ⅵ第34図　ＳＲ126埋甕実測図



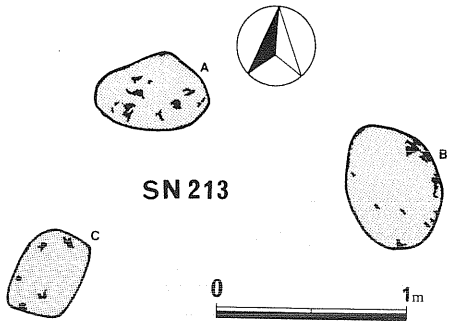

Ⅵ第35図　ＳＮ120焼土遺構




Ⅵ第36図　ＳＮ121焼土遺構




VI第37図　ＳＮ209・210焼土遺構




VI第38図　ＳＮ213焼土遺構

4．焼土遺構

焼土は５か所から検出されているが、検出状態が悪く、また伴出遺物もないため、時代を確定づけることはできなかった。

VI第22表　焼土遺構計測表

| 遺構名 | 検出地区 | 形態 | 法量 長軸 | 法量 短軸 | 法量 深さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | cm | cm | cm | |
| ＳＮ 120 | ＭＩ59<br>ＭＪ59 | 不整楕円形 | 206 | 90 | 21 | スクリーントーン部分は特に熱を帯びていると思われ赤褐色に変色しているところ。 |
| ＳＮ 121 | ＭＪ59 | 不整楕円形 | 65 | 38 | 18 | |
| ＳＮ 209 | ＩＣ22 | 不整円形 | 35 | 30 | 8 | スクリーントーン部分は特に熱を帯びていると思われ赤褐色に変色しているところ。 |
| ＳＮ 210 | ＩＣ23 | 不整楕円形 | (80) | (35) | (15) | 北側半分は調査範囲外となっており、たまたま調査範囲外との境界線上に出土したため、表土からの断面観察ができた。 |
| ＳＮ 213 | ＧＨ08 | Ａ不整楕円形 | 60 | 41 | | ３か所焼土が検出され、いずれも大湯浮石直下である。図中の黒い部分は焼土のブロック。 |
| | | Ｂ不整楕円形 | 67 | 52 | | |
| | | Ｃ不整楕円形 | 47 | 34 | | |

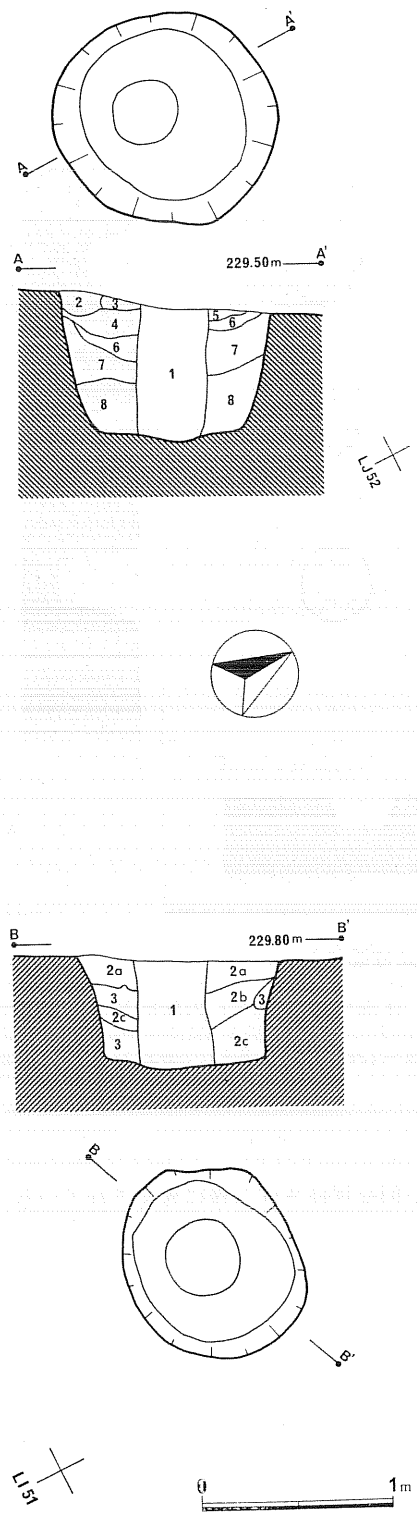
5．柱列・掘立柱建物跡

**ＳＡ07**　（第39図　図版10・11）

ＬＩ51、ＬＪ51、52地区より地山上面で検出した東西１間の掘立柱列と思われる。南北方向は調査区外のため、この方向にも柱列がのびるかは不明である。柱間距離は6.05ｍで、柱掘形は97～107cmの円形を呈し、深さは56～70cmである。又直径40cm程の柱痕跡が認められる。

**ＳＢ202掘立柱建物跡**　（第40図　図版12）

ＪＡ27、ＪＢ27地区から検出した。東西２間、南北２間の掘立柱建物跡である。柱間距離は北側柱列の隅柱直線距離2.55ｍ、柱間延長距離2.64ｍ（東から86＋85＋93ｍ）であり、西側柱




VI第39図　ＳＡ07柱列

列の隅柱直線距離は2.55ｍ、柱間延長距離2.61ｍ(北から86＋100＋75cm)、南側柱列の隅柱直線距離2.80ｍ、柱間延長距離2.88ｍ(西から100＋103＋85cm)、東側柱列の隅柱直線距離は2.68ｍ、柱間延長距離は2.69ｍ（東から84＋87＋98cm)である。柱間直線距離から計画尺をみると、北側８.５尺、西側８.５尺、南側９.５尺、東側９尺となり１尺は平均29.8cmである。柱穴の規模は平均で直径38～50cm、深さ21～26cmであり、柱痕は確認できなかった。隅柱間の柱穴を結んだ線は東側柱列は直線に近いが、その他の柱は外側に張り出す位置にある。主軸方向はＮ28°Ｅである。

本建物跡は規模が小さく正方形に近い平面形で、出入口、床束などの手がかりはつかめなかった。柱穴も浅く、柱痕もなかったことから考えて、簡易で野小屋のような性格をもつ建物跡と思われる。また遺構は大湯浮石層を切って構築されている。

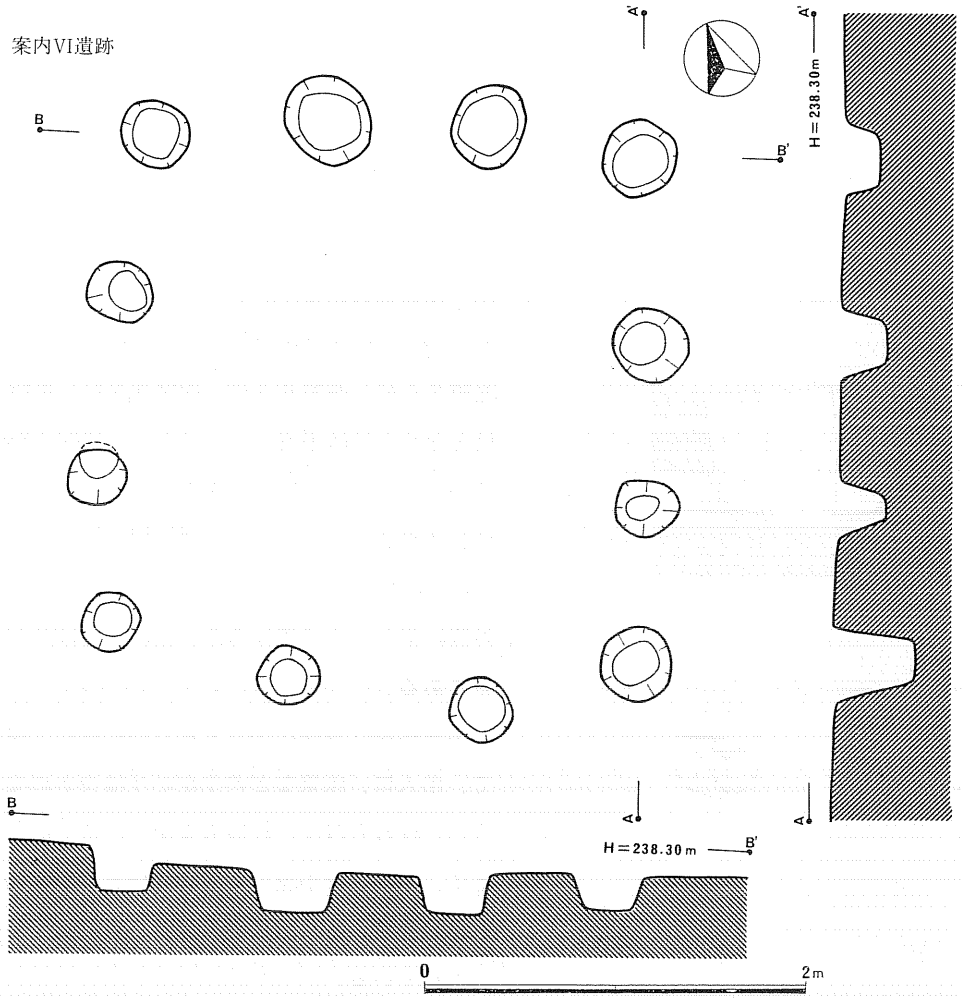
## 第２節　その他の遺物

### １．土器

**第Ⅰ群土器**…縄文時代前期の土器（VI第40図１～６・８・10・12・13・VI第43図・66・67・VI第44図・77・78）

第１類（１～６）

０段多条の羽状縄文を施文した土器である。羽状縄文は撚りの異なる原体を用いて器面に施されている。原体として用いられているのは、Ｌ｛R R R とＲ｛L L L の撚りのものである。第40図１は口縁部にＬの平行撚糸文を横位に回転施文し、




VI第40図　ＳＢ202掘立柱建物跡

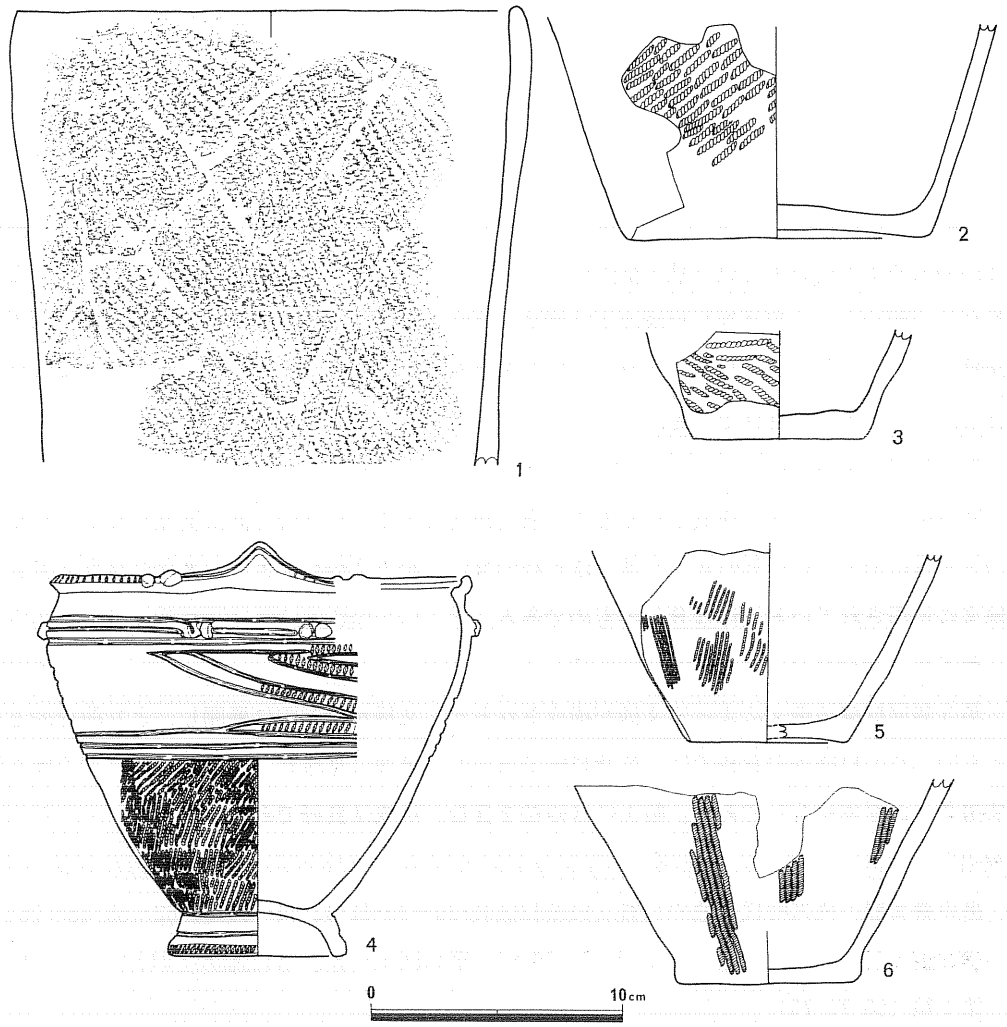
体部以下にＬ$\left\{\begin{matrix}R\\R\\R\end{matrix}\right.$の０段多条の縄文を施文している。体部の資料２～６の断面形から推して底部は丸底に近い尖底となろう。器厚は比較的厚く９㎜～12㎜程あり多量の繊維を含む。焼成は良好。

第２類（12・13）

爪形文の施された土器である。爪形文はＲＬ原体が回転押捺された後に施文されている。胎土には砂粒を含むが、焼き上りは堅緻なものとなっている。

第３類（８・10・66・67・77・78）

口縁部文様帯に縄線文、絡縄体圧痕文等を施文し、体部以下に羽状縄文、特殊原体による縄文を施した土器である。８は口縁部にＲの原体の側面圧痕文を横位にめぐらし、一個所縦位に二条施している。体部にはＲＬとＬＲ原体の結束第１種による羽状縄文が施されている。口縁部、体部の境界には右→左の方向で竹管状工具による押し引き文がめぐる。10はＲの撚糸を軸に左巻に巻きつけた絡縄体の側面圧痕文を口縁部に廻し、体部に多軸絡縄体を回転施文してい




**Ⅵ第41図　遺構外出土土器実測図**

る。口縁部と体部の境界には棒状工具による刺突列がめぐる。８、10とも胎土に繊維を含む。焼成は良好である。66、67はＲＬＲの複節の斜縄文、77、78は多軸絡縄体を施文した体部破片である。

**第Ⅱ群土器**…縄文時代中期の土器（Ⅵ第43図９・11・14～21、Ⅵ第44図40・57・58）

第１類（９、11、14、15、16）

器面に比較的太い粘土紐を貼り付け、文様を構成する。粘土紐の貼付された隙には縄線文や刺突が施される。９は波状口縁の波頂部である。二叉に分かれた波頂部からは粘土紐の貼付により、２条の隆帯が弧線を描いて垂下する。隆帯上には半截した竹管状工具による刺突列が並ぶ。隆帯間にはＬＲ原体による縄線文が隆帯に沿って施される。口唇部にもＬＲの縄文が回転

押捺される。隆帯上には、11のように刻目の施される例や、14～16のように縄文が回転される場合もある。また14、15では刺突列が充塡される。胎土には砂粒が含まれる。焼成は概して良好。

第２類（17･18･19･20･21）

比較的細い粘土紐の貼付により文様が描かれる。17～20は同一個体であるが、ＲＬの単節縄文が回転施文された上に細い粘土紐の貼り付けによって肋骨文が構成される。17の口縁部の資料では、幅10㎜程の折り返し口縁の上に鋸歯状に粘土紐が貼り付けられる。21の資料は粘土紐が剝落しているが、貼り付けられた粘土紐の上にも縄文が回転施文される。胎土中には砂粒が含まれるが、焼成は良好である。

第３類（57・58）

磨消縄文により文様が構成されるもの。磨消縄文による文様は縦方向に展開される。縄文部の区画線に沿って刺突列が並ぶ。器厚は比較的薄い。胎土に砂粒を含むが焼成は良好である。地文に使用されている原体はＲＬのものである。

第４類（22･23･24･25･26･40）

第３類同様磨消縄文によって文様が構成されるが、文様が横方向に展開し、より曲線的となるもの。22の口縁部の資料では、波状口縁の波頂部の裏面に魚鰭状の突起が付される。地文に使用された原体はＬＲである。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

**第Ⅲ群土器**…縄文時代後期の土器（VI第42図34･36～39･41･42･44～56･59･62～65･68～76･79･86･87、第43図１～３、第42図90・91）

第１類（65･75･76）

複節の斜縄文の施されるもの。原体はＲＬＲが使用されている。65の口縁部の資料では、折り返し口縁を呈し、口縁と平行して一条沈線がひかれる。胎土には細砂粒を含む。焼成は良好。

第２類（27･28･29･41･42･47･49･50･59）

沈線によって曲線的な文様の描かれるもの。磨消縄文の手法が用いられる場合と、単に沈線によって文様の構成されるものの二種がある。27、28、29、41、42、49が前者例、47、50、59が後者例である。口縁部は27のように波状を呈するもの、50のように折返し口縁となるものもある。磨消縄文手法のとられるもので縄文はＬＲの原体が使用される。

第３類（34･38･39･48）

第２類同様磨消縄文の手法により文様が描かれるが、構図がより直線的となる。34のようなかなり肥厚した突起が口縁に付く場合もある。体部の文様では38、39のように数条の平行沈線がめぐらされた縄文帯があり、Ｓ字状の沈線によって連絡される場合もある。胎土には砂粒を

含むが、焼成は良好である。

第４類（30・31・32・33・44・45・46）

細密な縄文と沈線によって文様が構成される。文様は全体では入組文となろう。30～33は口縁部に付く所謂魚尾状の突起である。胎土には極く細かな砂粒を含む。焼成は良好で非常に堅緻な仕上りである。

第５類（63・64）

棒状工具による刺突文が施されるもの。63は斜めに倒した棒状の工具を器面に押しあてて刺突文を構成している。64は平行沈線の区画の中に、斜めに押しあてた刺突列と垂直に施文したものとを充填している。胎土には砂粒を含む。

第６類（51・52・53・54・55・56・79・86・87）

撚糸文を施したもの。51～56のように格子目状の撚糸文となるものと、79、86、87のようにかなりくずれた格子目状もしくは平行撚糸文となるものがある。使用される原体には、ＬとＲの両者がある。胎土は精選された粘土を用い、色調は黄灰色を呈するものが多い。

第７類（36・37・62・68・69・70・71・72・73・74、第43図１）

所謂粗製の土器である。36、37は口縁部無文帯に二条の縄線文をめぐらした例、62は平行沈線をめぐらした例である。口縁は平縁が多いが、68～72のように細かな波状を呈する場合もある。使用される原体はＬＲが多いが、68～70はＲＬである。胎土には砂粒を含む。

**底部資料**（90・91第43図２・３）

90は木葉痕の印された底部である。第43図２は底部近くに幅２～３cmでミガキ調整による無文帯が設けられている。

**第Ⅳ群土器**…縄文時代晩期の土器（Ⅵ第42図60・61、第43図４　第１類（60））

三叉文が描かれる。沈線はよく調整され、殆ど彫刻的な手法となり、文様も浮彫文に近くなる。口唇上には所謂Ｂ突起がつく。胎土は精選された粘土を用い、焼成も良好で堅緻な仕上りとなっている。

第２類（61）

かなり大まかな截痕列による文様が施される。体部には細密なＲＬ縄文が施文される。口唇上には１類同様Ｂ突起が付けられる。胎土、焼成とも良好で色調は黒色に近い。

第３類（第43図４）

台付の鉢形土器である。口唇上、口縁部、頸部、体上半部、体下半部、台部と文様帯を分けることができる。口唇上には所謂山形のＡ突起と二個一対のＢ突起がつけられ、細い刻目が施される。口縁部は丹念に磨かれ無文帯をつくる。頸部は粘土瘤をもったメガネ状の付帯文がつ

けられる。体上半部には磨消縄文の手法によりかなり直線的になった雲形文が描かれる。帯下半部は細密なＬＲの縄文帯である。台部は二条の平行沈線によって画されて無文帯をつくるが、下端はＬＲの縄文帯となる。粘土は精選したものを用い、焼成は良好である。

**第Ⅴ群土器**…弥生時代以降の土器（Ⅵ第43図５・６、Ⅵ第44図35・80～85・88・89、Ⅵ第45図91～100）

第１類（35）

山形の突起をもつ土器。突起頂部は二叉に分かれる。口縁部全体では波状口縁を呈すると思われるが、口縁表裏面には口縁に沿った沈線が一条ずつひかれる。口唇上にも一条沈線がひかれる。器厚は薄手で、胎土には僅かに砂粒を含む。焼成は良好である。器形はおそらく台付の浅鉢となろう。

第２類（81・82・83・84・85、第43図５）

撚糸文が施される。80の口縁部の資料では、口縁付近で原体を横位に回転させ、口縁下で縦方向に回転させている。使用される原体はＲが多い。器厚は比較的薄い。胎土に砂粒が多く混入される。焼成は概して良好である。

第３類（91・92・93・94・95・96・97・98・99・100、第41図５・６）

０段多条の原体による帯縄文と、断面形が四角の棒状工具による刺突列により文様を構成する土器。95～100では帯縄文施文後に、それに沿って細い粘土紐を貼り付け両側を先端の丸い工具で調整し、微隆起線を形づくっている。微隆起線はところどころ剥落した個所が認められる。帯縄文に使用される原体はＲ$\left\{\begin{matrix}L\\L\\L\end{matrix}\right.$のものが多い。胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。

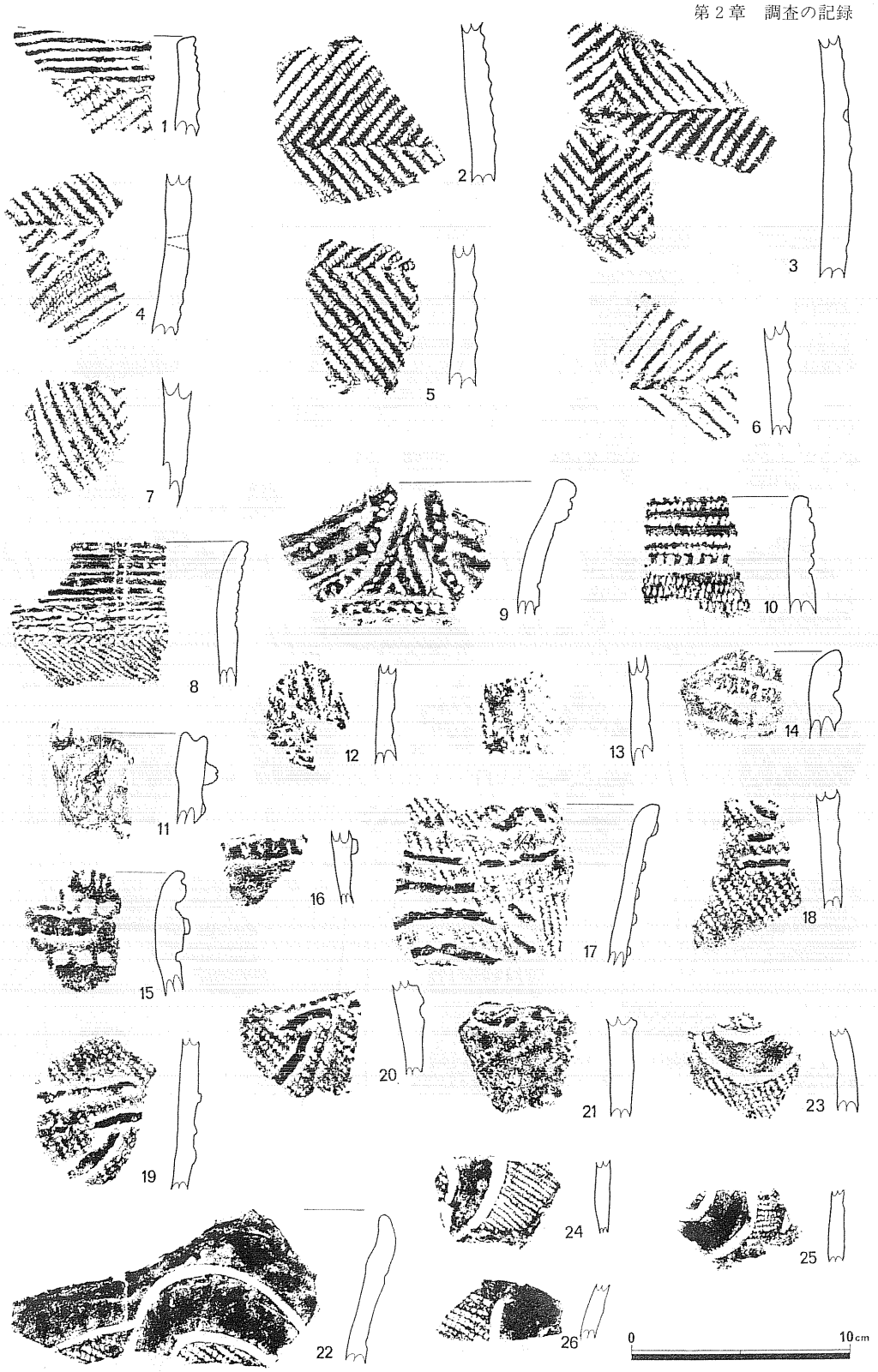
第４類（88・89）

ハケ目のある古代土師器である。第３類土器と共伴した。胎土には砂粒を含む。

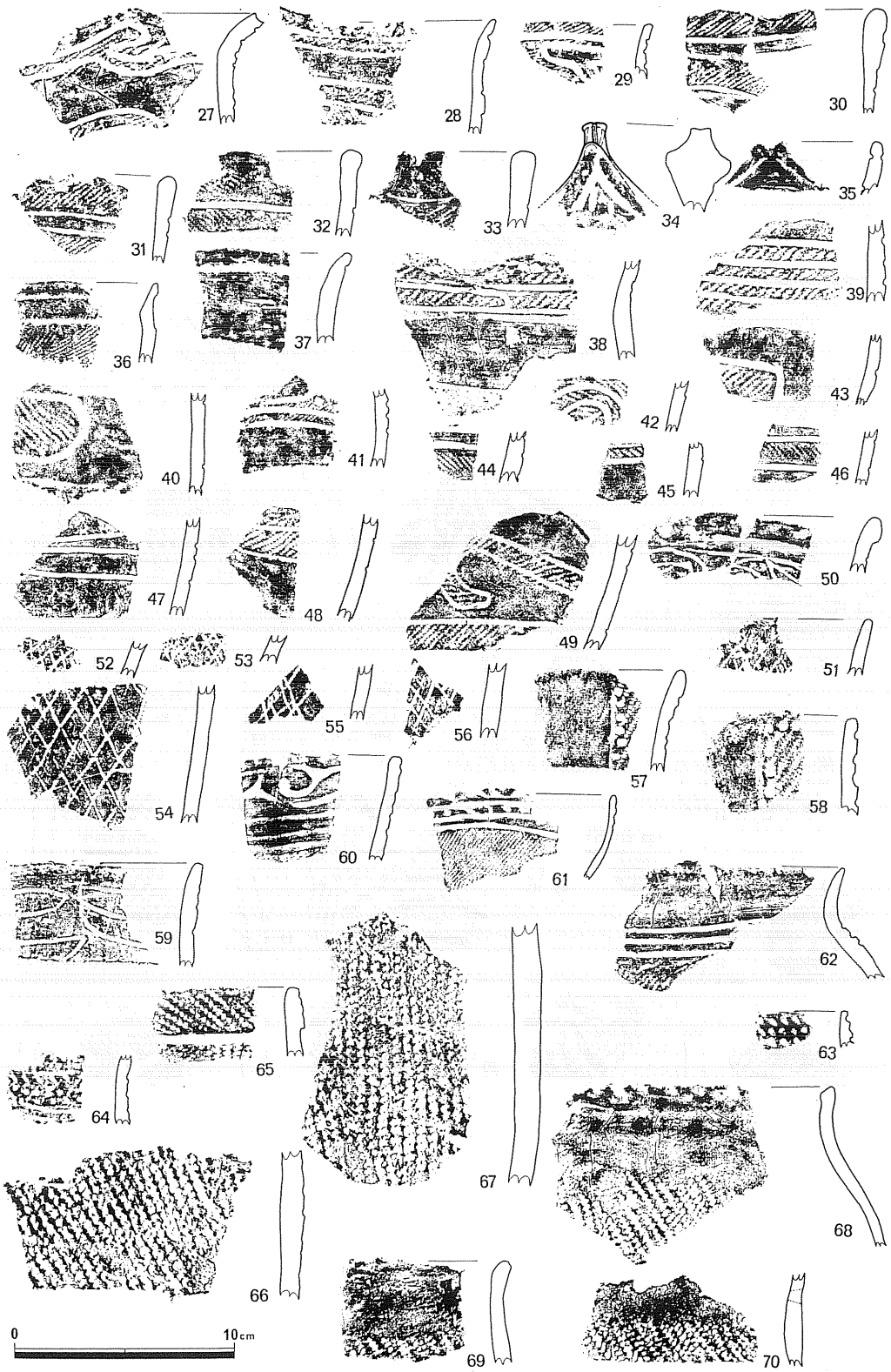
## ２．石器

Ⅵ第45・46図に示す13点の石器が出土した。１は無茎石鏃である。２・３は石匙で、２は先の部分が欠損している。４・12は掻器で二次調整して刃部が形成されている。５～11は不定形石器である。５は側縁を刃部として使用している。７は主要剥離面の左側縁がヒンジフラクチュアとなる。８は表面右側縁に粗い剥離が認められる。９は先端が僅かにヒンジフラクチュアとなる。10は表面両側縁に粗い剥離が認められる。13は磨製石斧である。断面形は楕円形で刃部は弧状を呈する。

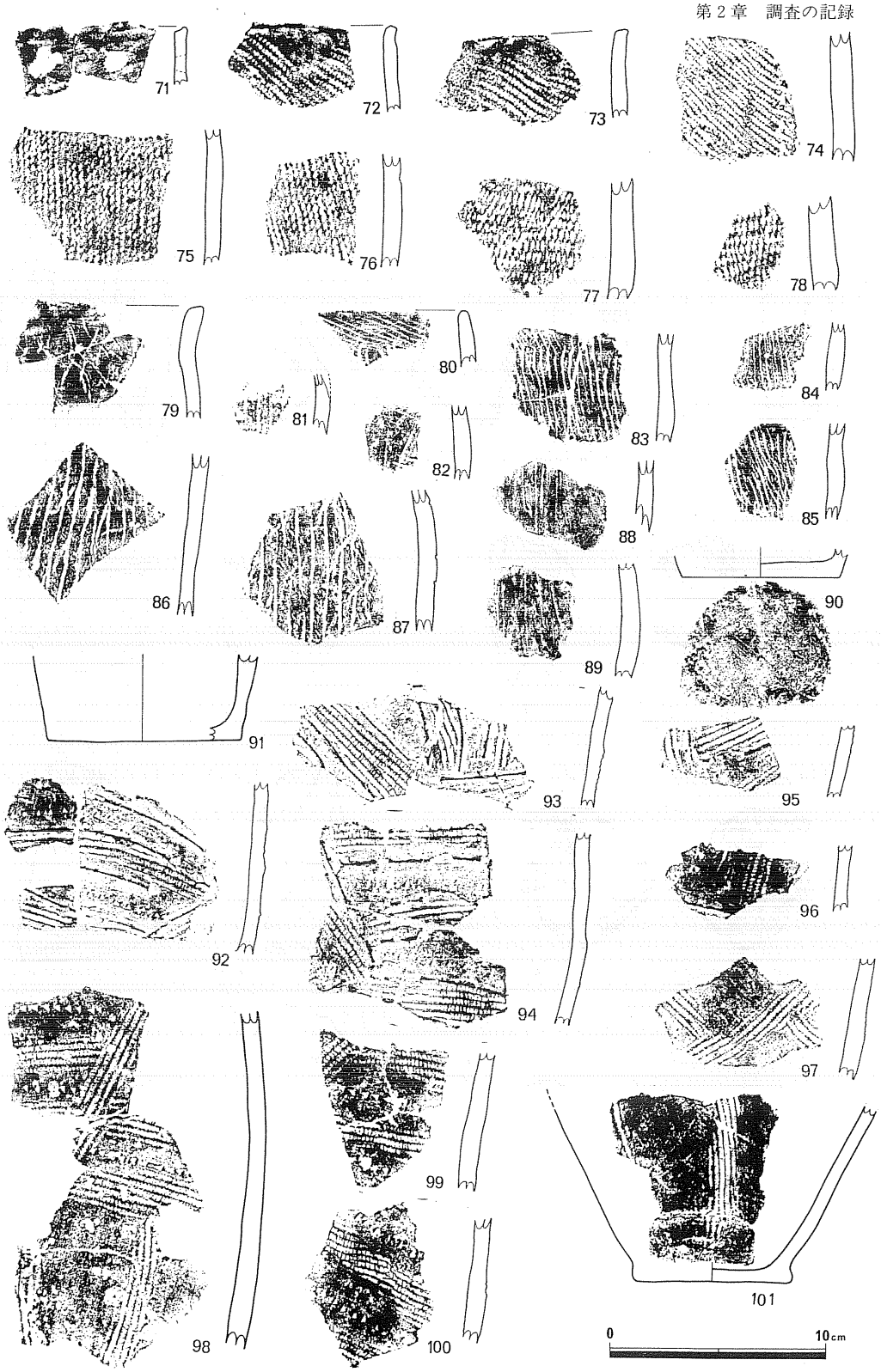
石質は１～12が頁岩、13が緑泥片岩である。



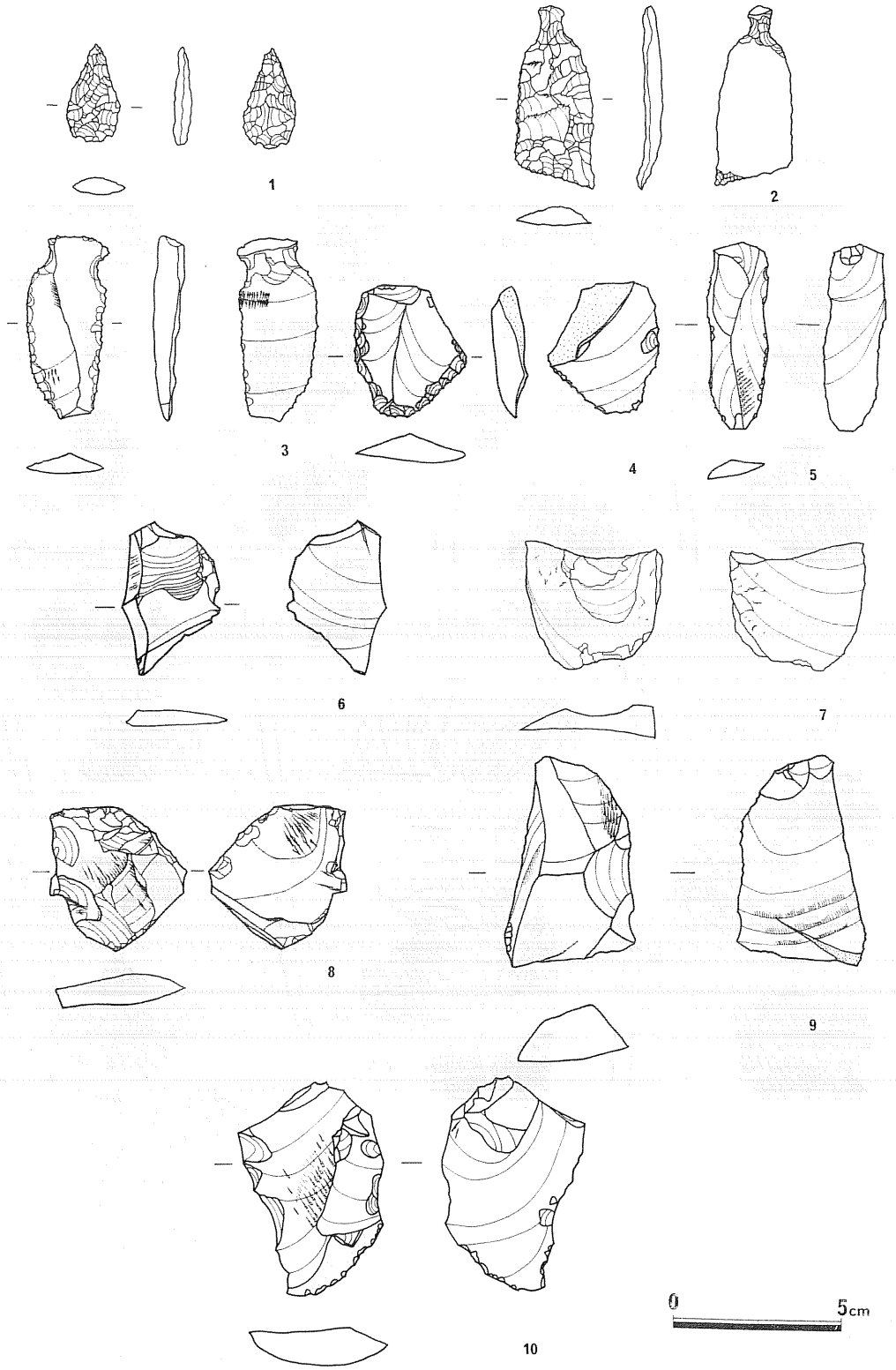

Ⅵ第42図　遺構外出土土器拓影図(1)



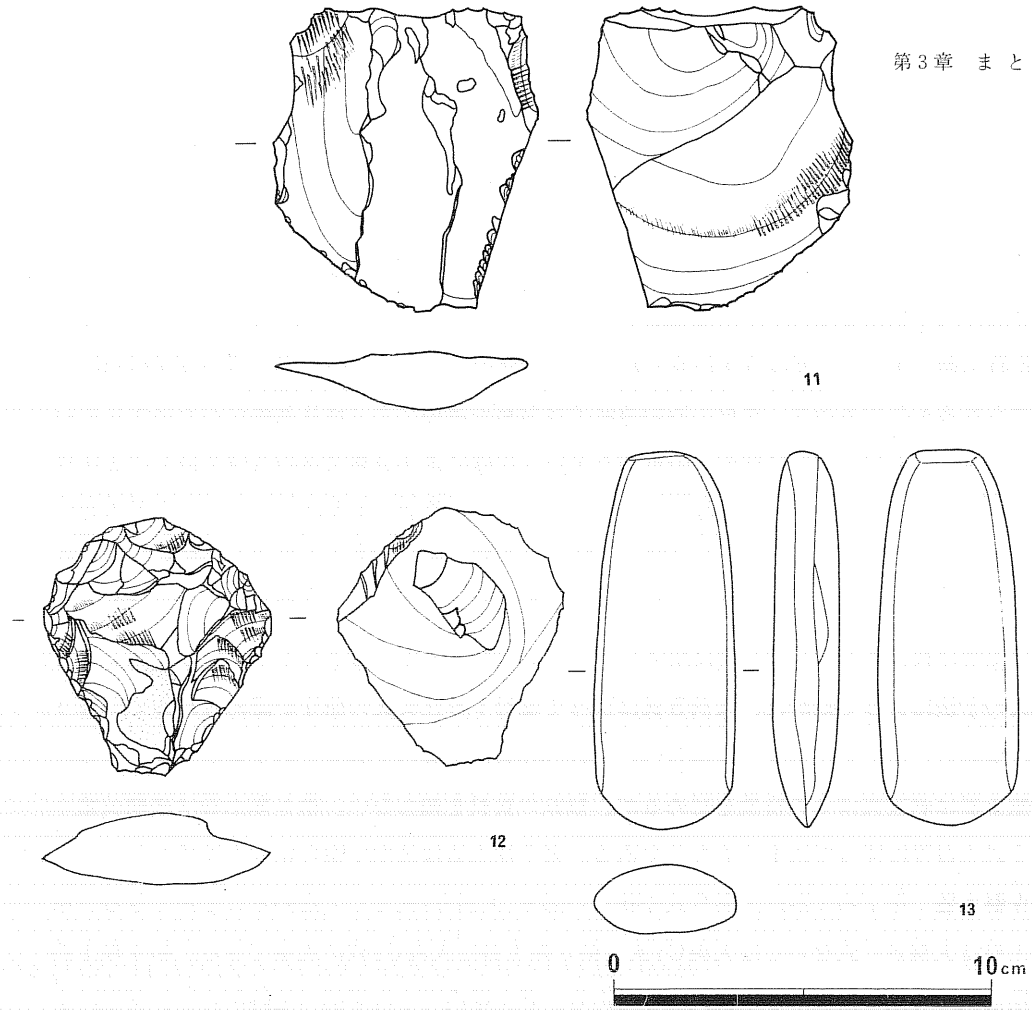

VI第43図　遺構外出土土器拓影図(2)




Ⅵ第44図　遺構外出土土器拓影図(3)




VI第45図　遺構外出土石器実測図(1)




VI第46図　遺構外出土石器実測図(2)

# 第3章　ま　と　め

案内VI遺跡から検出された遺構は縄文時代竪穴住居跡5軒、Tピット1基、フラスコ状ピット2基、土壙18基、焼土遺構5基、埋甕1基、柱列1、溝跡1条、掘立柱建物跡1棟、道路跡1である。いずれの遺構も削平が著しく、特に竪穴住居跡においては壁がほとんど検出できない状態であった。また伴出遺物も少なかった。次に土器について若干考察してみよう。

**第I群土器**：第1類土器は0段多条の羽状縄文をその特徴とし、前期初頭に位置づけられる。青森県内の編年に照合すれば長七谷地第III群土器にあてることができる。(註1) 本遺跡の周辺（案内II遺跡でもこの手の土器を確認している。(註2)）第2類土器は前期中葉の円筒下層b式土器である。秋田県北部米代川流域の円筒下層b式土器には、口縁部文様帯と体部文様帯を画するため頸部に1列か2列爪形文を連続して施文する例がある。(註3) 第2類土器の爪形文はその種のものと見る

ことができよう。第３類土器は前期末葉の円筒下層ｄ式に比定できよう。

**第II群土器**：第１類土器は中期前葉円筒上層ａ式～同ｂ式に比定し得る。９の資料は中でも早い部分に位置すると見ることが可能である。第２類土器は中期中葉円筒上層ｄ式に比定し得る。第３類、第４類土器はそれぞれ、大木９式、大木10式に比定したい。ただし、大木９式、10式の地域的な変差をもった土器と理解しておきたい。

**第III群土器**：第１類土器は近年注意されている十腰内Ｉ式土器の前段階、即ち後期初頭に位置づけられるものであろう。鹿角市内の遺跡では飛鳥平遺跡(註４)、北ノ林II遺跡(註５)などで出土している。この種の土器では地文に複節の斜縄文を用い、沈線により渦巻文等の文様を描くことが多いが、本遺跡例では65を除いて沈線文は描かれていない。第２類土器は十腰内Ｉ式土器の範疇で把えることができる。ただし、この種の土器には文様に変化が多く大湯式との関係などで再考すべきものも多い。第３類土器は、後期中葉十腰内II式～III式、加曽利Ｂ式に比定できる。第４類土器は後期末葉～晩期初頭に位置づけられる土器である。おそらく体部には入組文が磨消縄文の手法によって描かれ、大洞Ｂ式に至って盛行する三叉文の萌芽が認められるであろう。従前の型式名をあてるならば、大洞$B_1$式、宮戸IIIb式、十腰内Ｖ式等をあてることができる。第５類土器は刺突文にその特徴を認めるが、類似の資料を知らない。第６類土器は後期前葉十腰内Ｉ式土器等に伴って出土するものである。第７類土器は後期中葉の粗製土器であろう。

**第IV群土器**：第１類土器は大洞Ｂ式の新しい部分、大洞$B_2$式として認めることができる。第２類土器は大洞ＢＣ式ないしは大洞$C_1$式、第３類土器は大洞$C_2$式に比定できる。第４類土器は晩期前葉の時期に出土する条痕文土器である。秋田県内でも海岸部の遺跡からは、貝殻による条痕文の施された土器が多く出土している。

**第Ｖ群土器**：第１類土器は、縄文時代晩期大洞A′式からの影響を色濃く残す土器である。青森県内で五所式等と呼ばれた資料にも類似のものがある。第２類土器は、小坂Ｘ式、青森県内では鳥海山式と呼称されている土器である。この種の土器には天王山式に特徴として認められる交互刺突文を施した土器が伴うこともある。第３類土器は後北$C_2$式土器である。第３類土器は秋田県内では鹿角市の北に隣接する小坂町内で早くから注意されていたが、鹿角市内では初見である。第２～４類土器はいずれも弥生時代後期に属する。

註１　長七谷地第III群土器と比較すると原体の撚り等の違いがあり、米沢市の歳頭林(さいずりん)遺跡出土の０段多条土器に類似するとの御教示が林謙作氏からあった。

註２　秋田県教育委員会　「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ｖ」　1982年。

註３　秋田県教育委員会　「杉沢台遺跡竹生遺跡発掘調査報告書」　1981年。など。

註４　秋田県教育委員会　「東北縦貫自動車道発掘調査報告書III」　1982年。

註５　秋田県教育委員会　「東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV」　1982年。

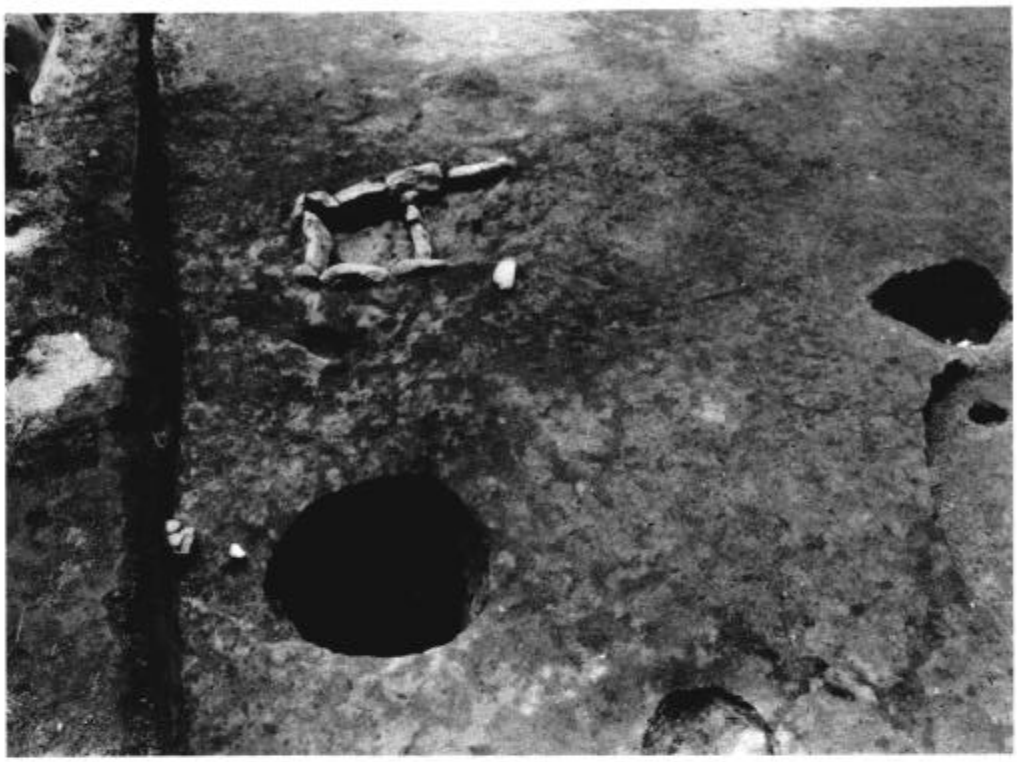
Ⅵ図版１　案内Ⅵ遺跡航空写真　（上が東）

Ⅵ図版２　案内Ⅵ遺跡近景　上　Ａ地区
下　Ｂ地区

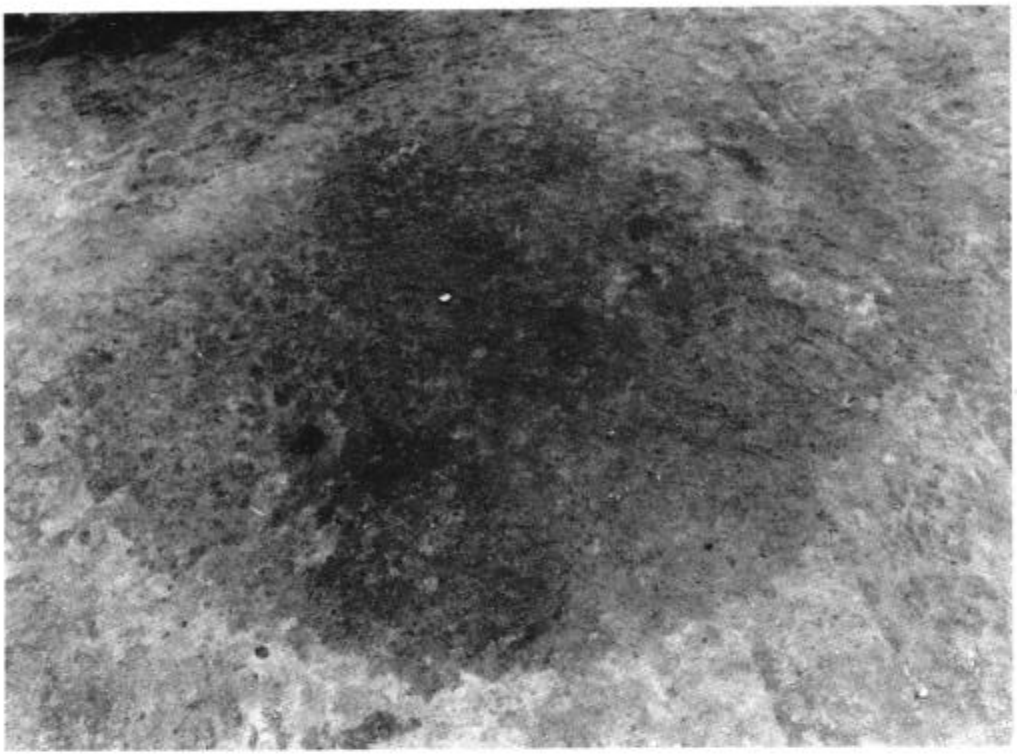
Ⅵ図版3　案内Ⅵ遺跡C地区近景　上　発掘前（西→東）
下　発掘後（北西→南東）

VI図版4　上　C地区土層断面　（南西▶北東）
　　下　S I 101竪穴住居跡　（南▶北）

Ⅵ図版5　Ｓ Ⅰ 106竪穴住居跡　上　完掘（南►北）
左下　炉検出状態（北►南）
右下　炉完掘（東►西）

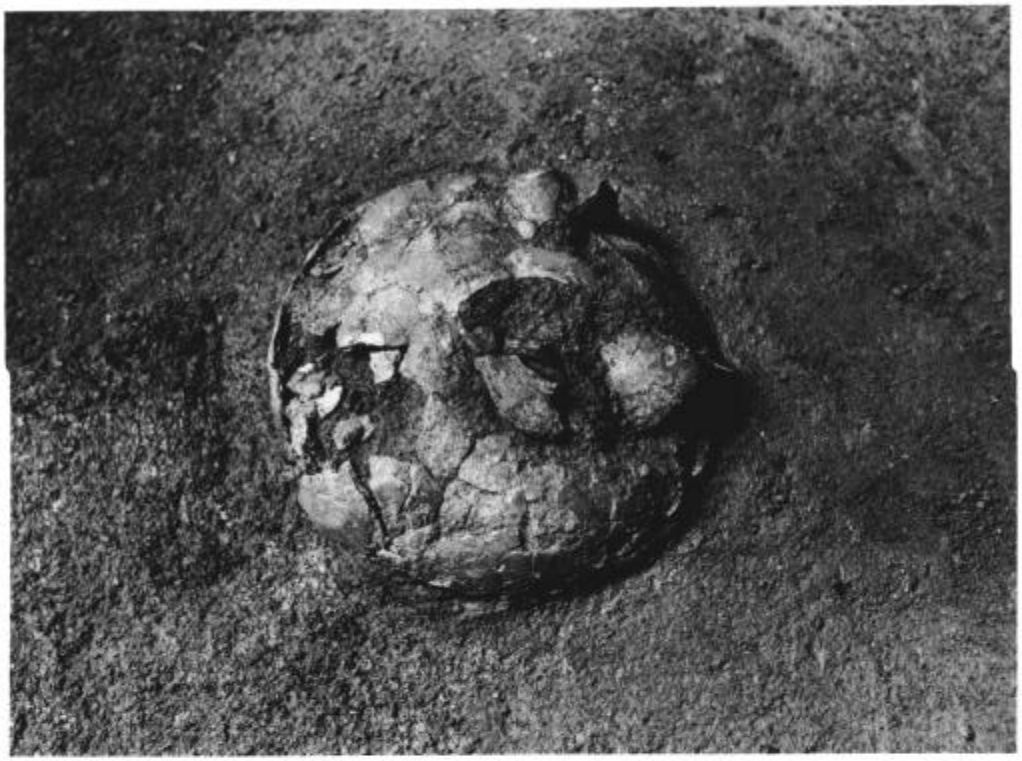


Ⅵ図版6　S I 107竪穴住居跡　上　完掘（北→南）
下　炉（南西→北東）

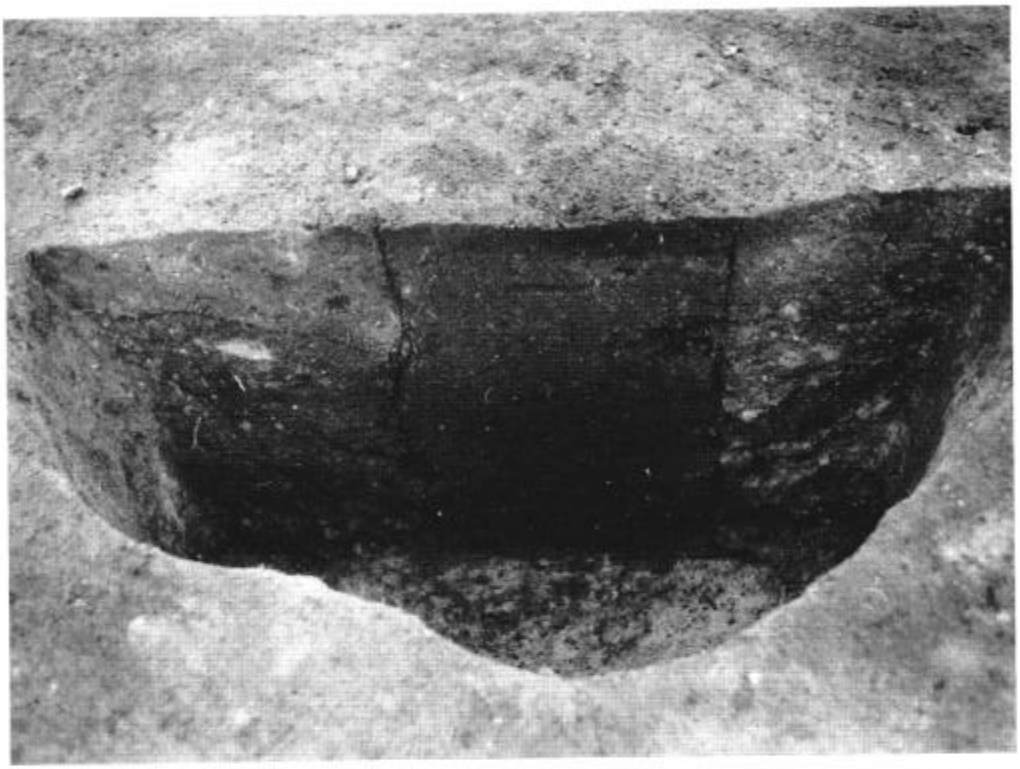


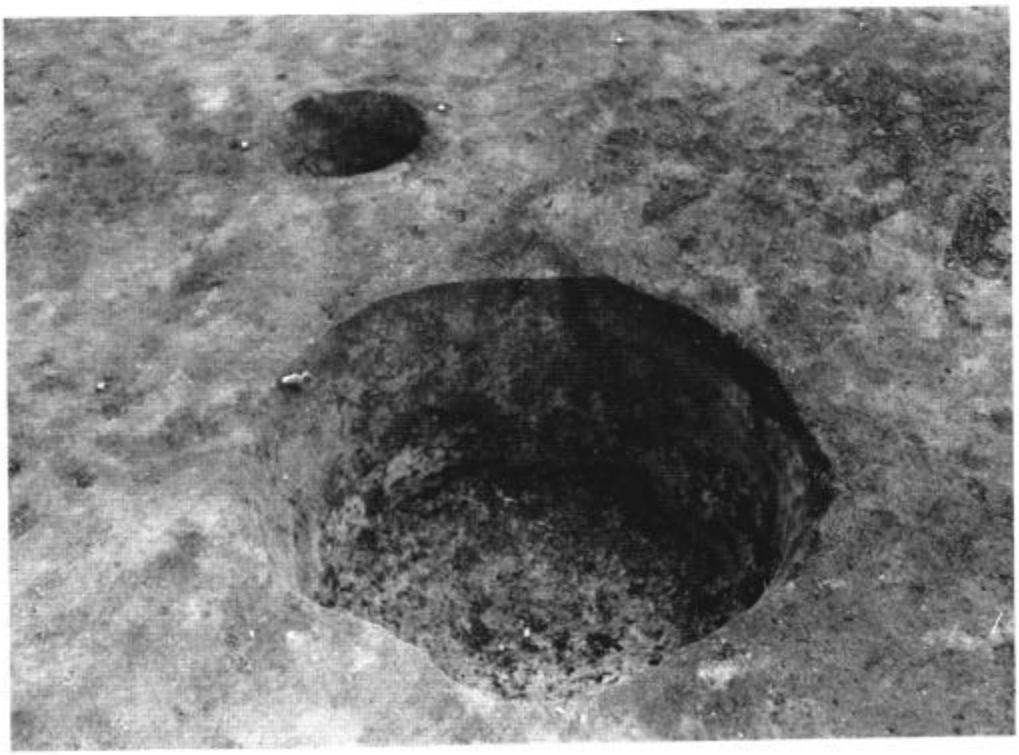
Ⅵ図版７　ＳＩ112竪穴住居跡　上　確認面（西→東）
下　完　掘（西→東）

Ⅵ図版8　S I 119竪穴住居跡　上　完掘（南東→北西）
左下　炉（西→東）
右下　遺物出土状態

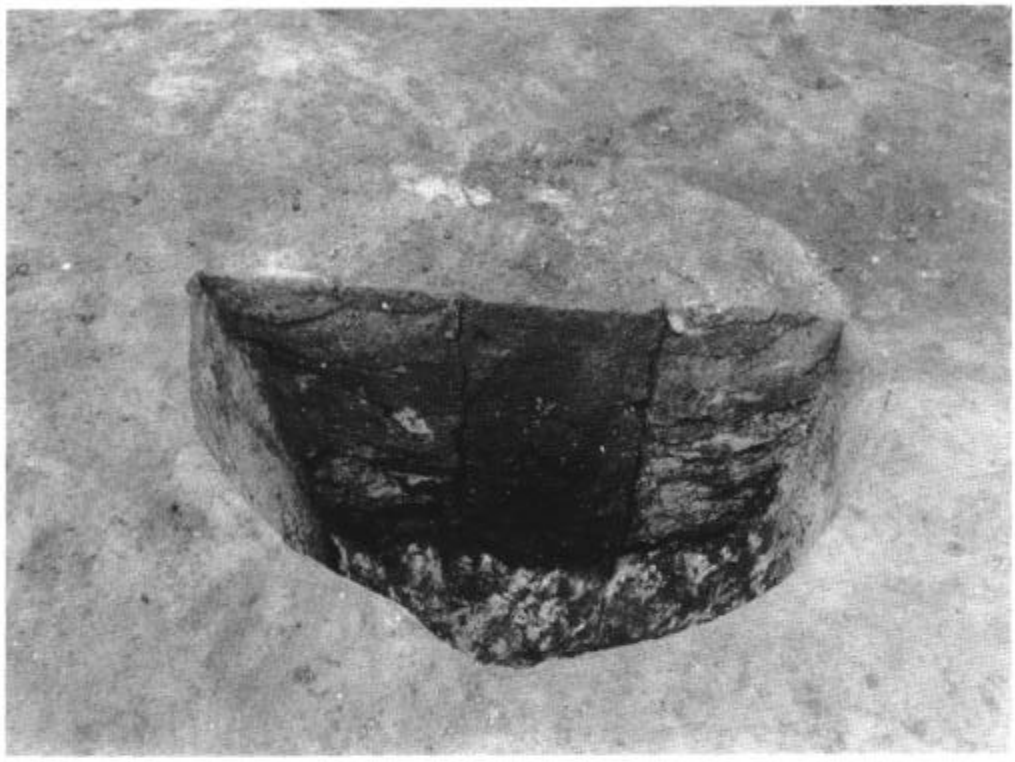


Ⅵ図版9　ＳＲ126埋甕　上　確認面（北→南）
下　半　截（北→南）



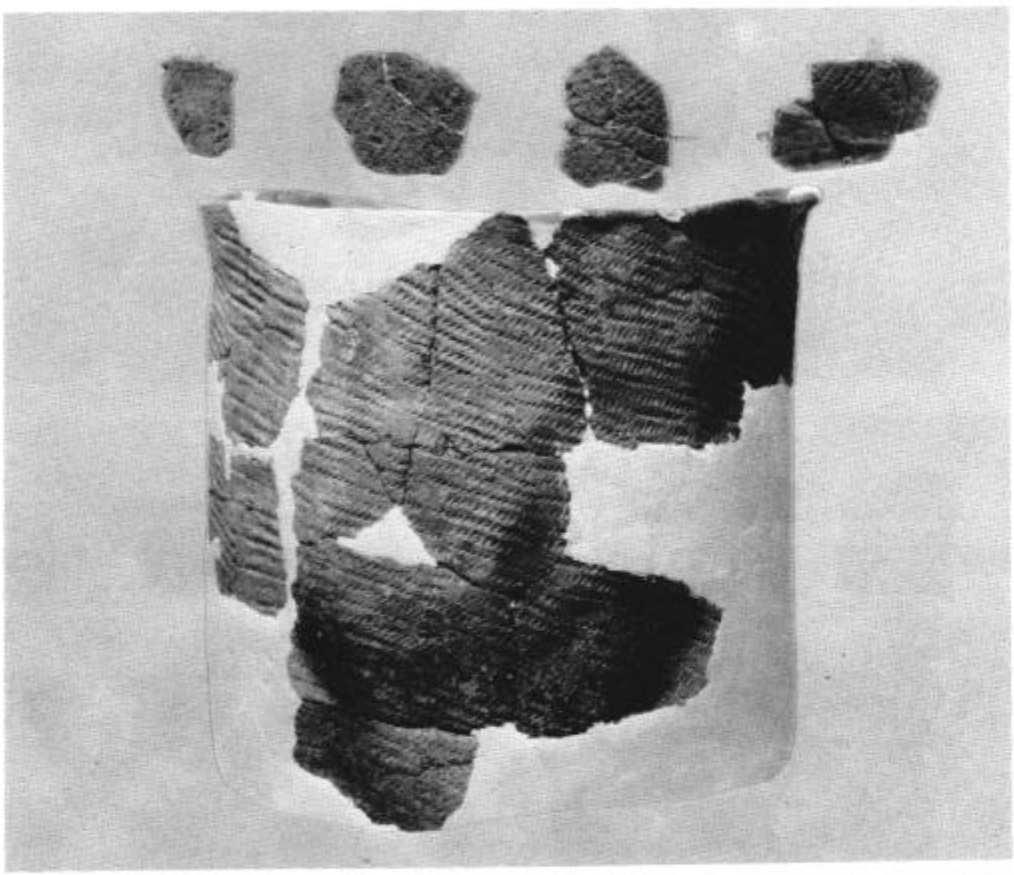


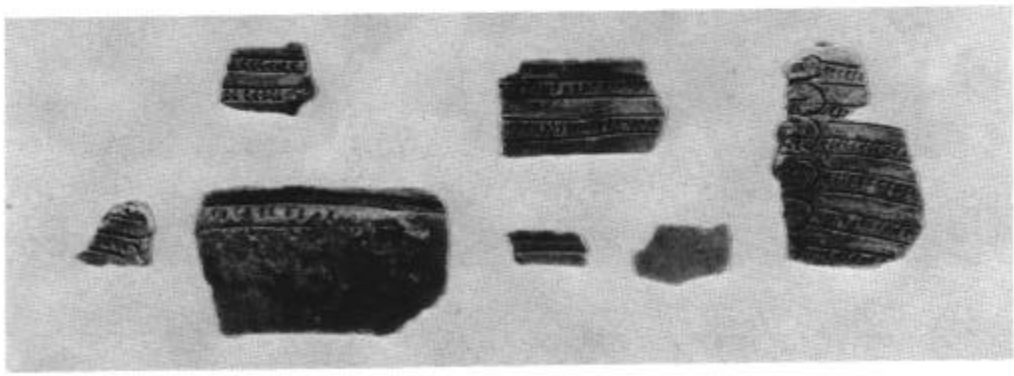
VI図版10　ＳＡ07Ａ柱穴　上　断面（東→西）
下　完掘（東→西）



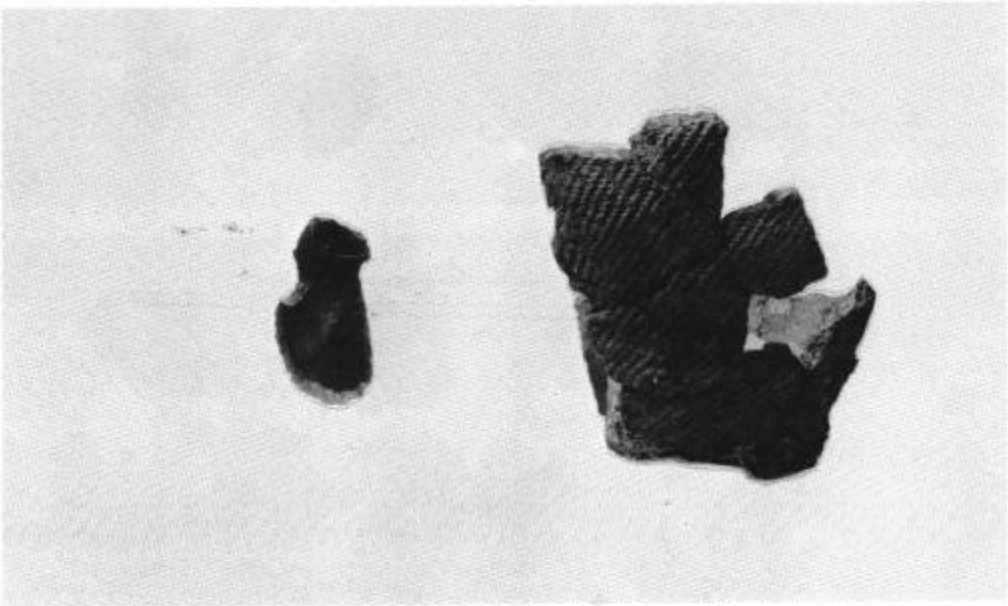
VI図版11　ＳＡ07Ｂ柱穴　上　断面（西→東）
下　完掘（東→西）

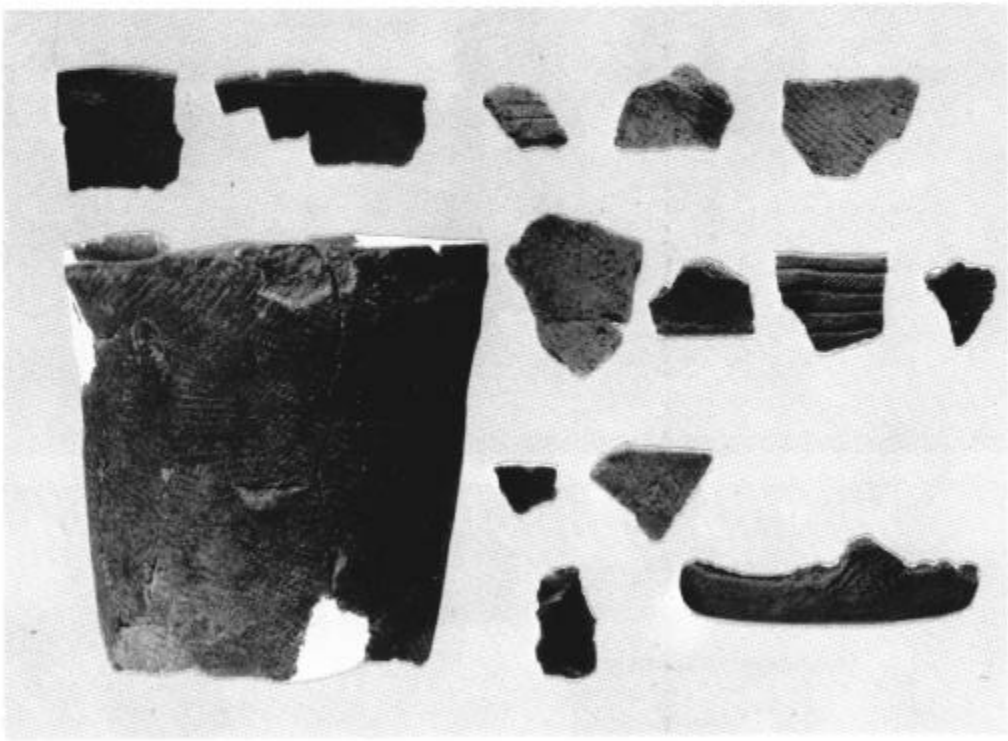
Ⅵ図版12　上　ＳＢ202掘立柱建物跡　（西→東）
　　下　ＳＤ208溝跡　（東→西）



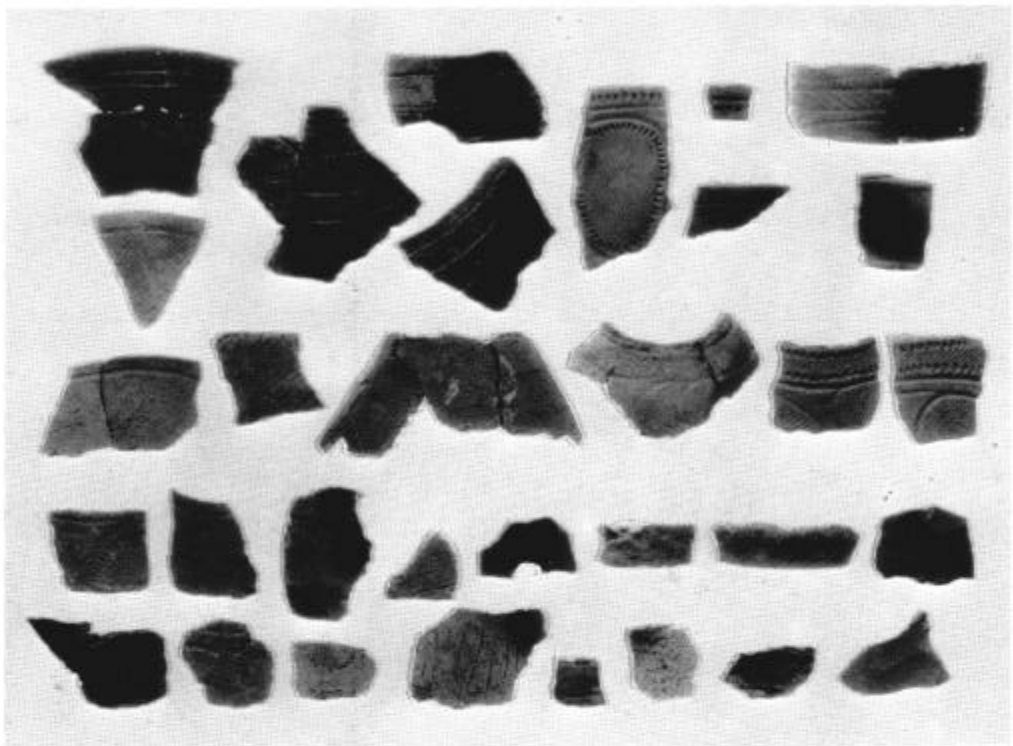


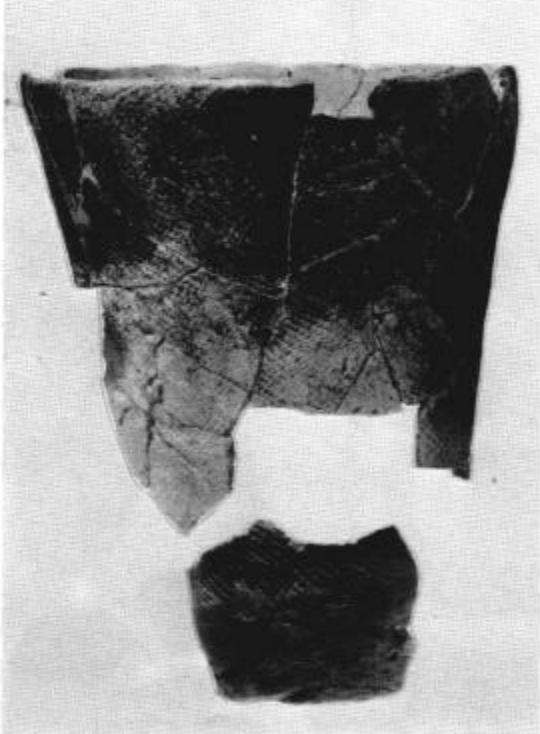
Ⅵ図版13　上　ＳＩ106竪穴住居跡出土土器
　　中　ＳＩ107竪穴住居跡出土土器
　　下　ＳＩ112竪穴住居跡出土土器



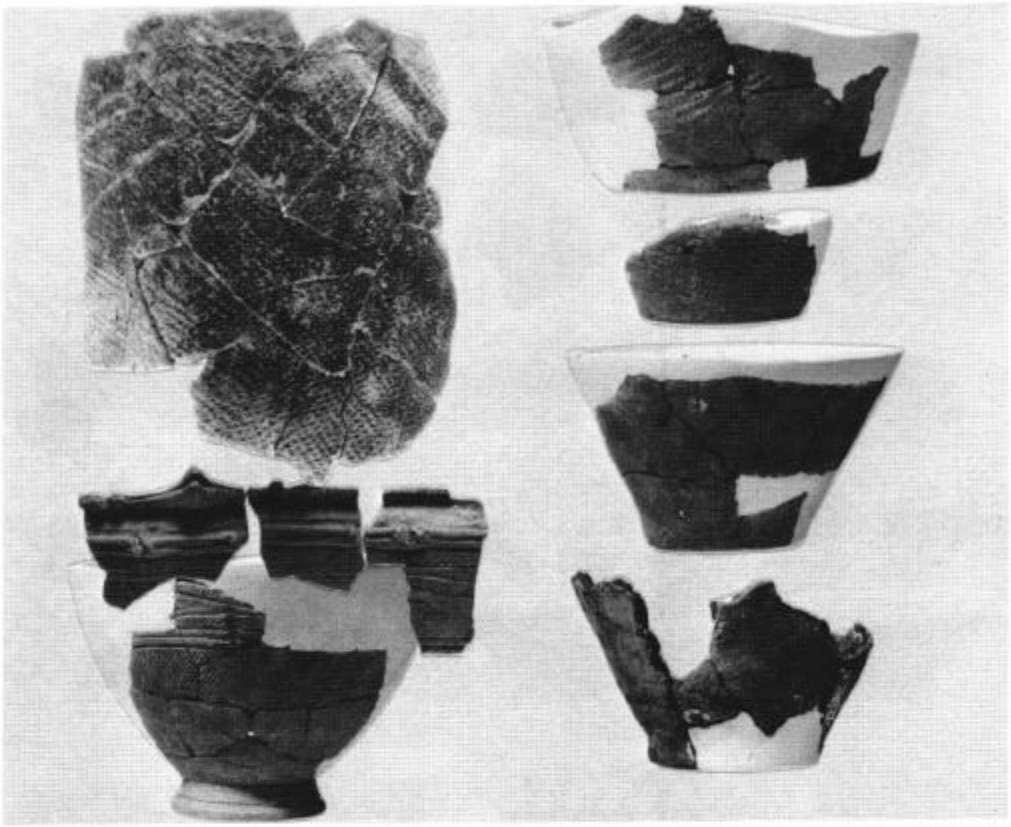


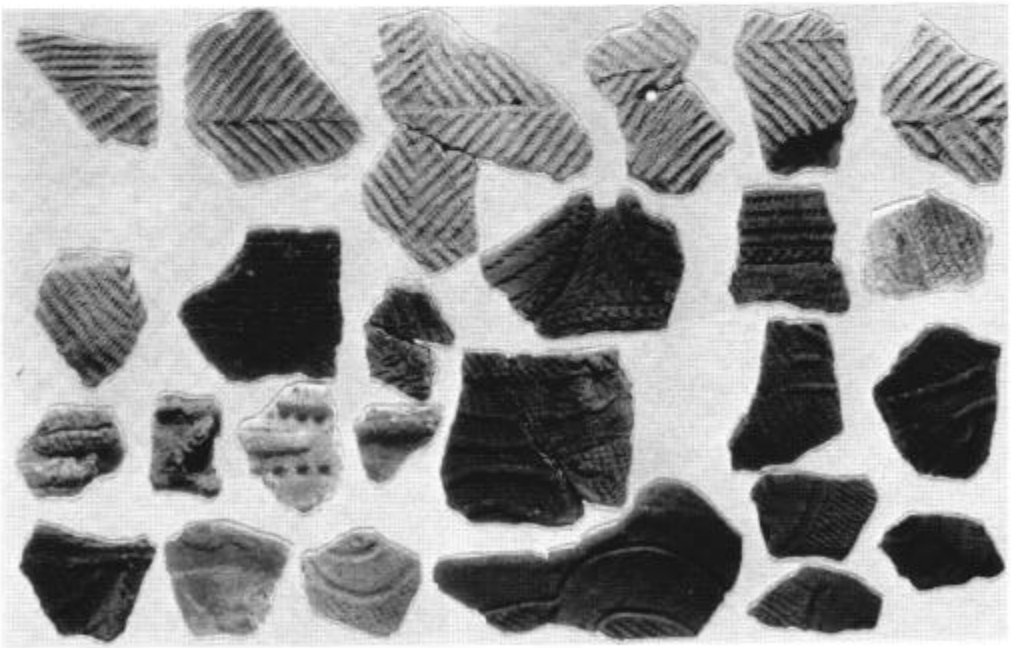
Ⅵ図版14　上　ＳＩ119竪穴住居跡出土遺物
　　下　Ａ地区土壙内出土遺物



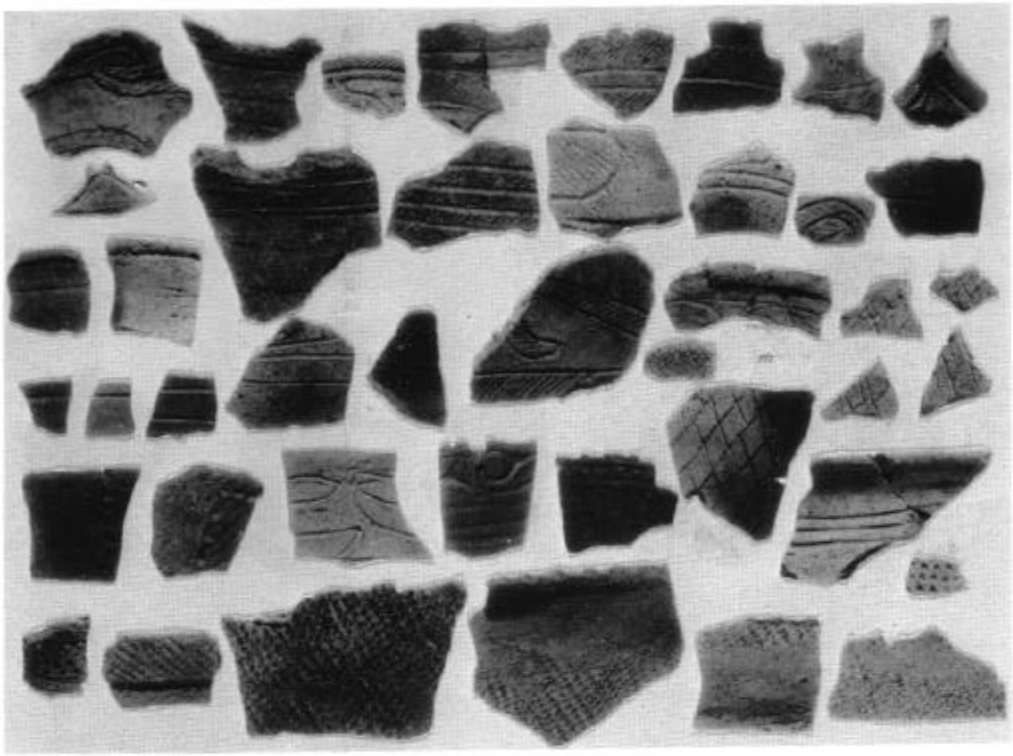


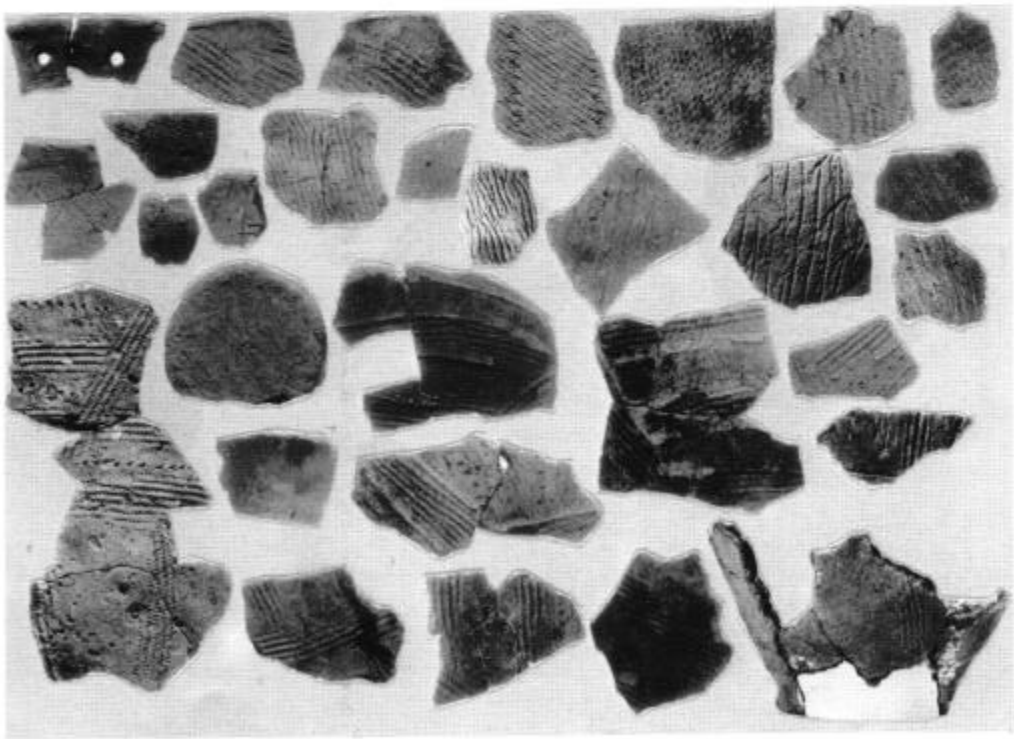
Ⅵ図版15　上　　C地区土壙内出土遺物
　　右下　SR126埋甕



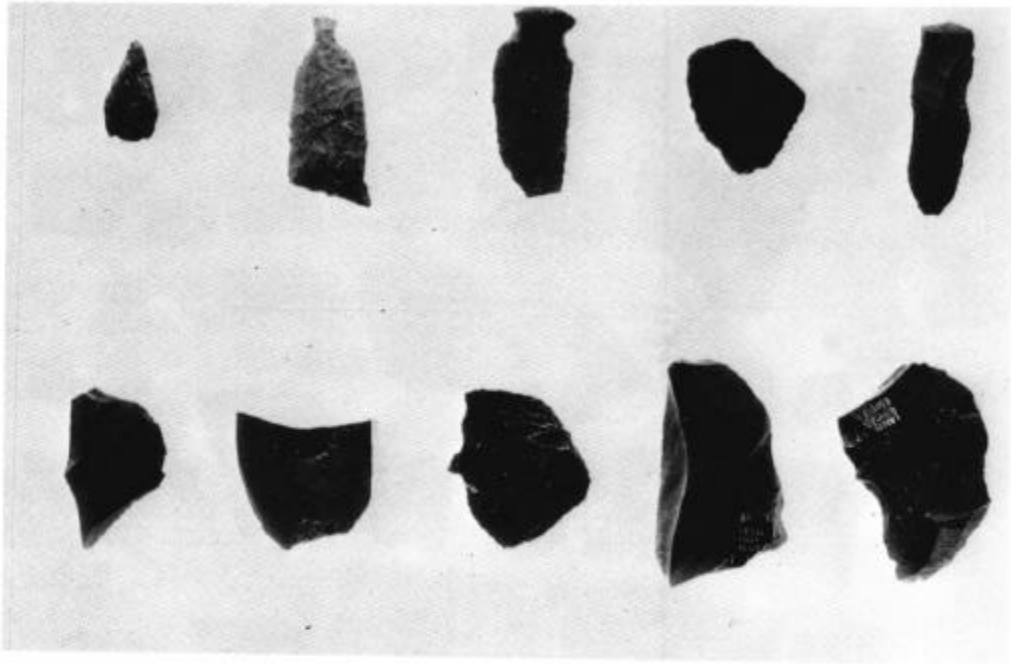


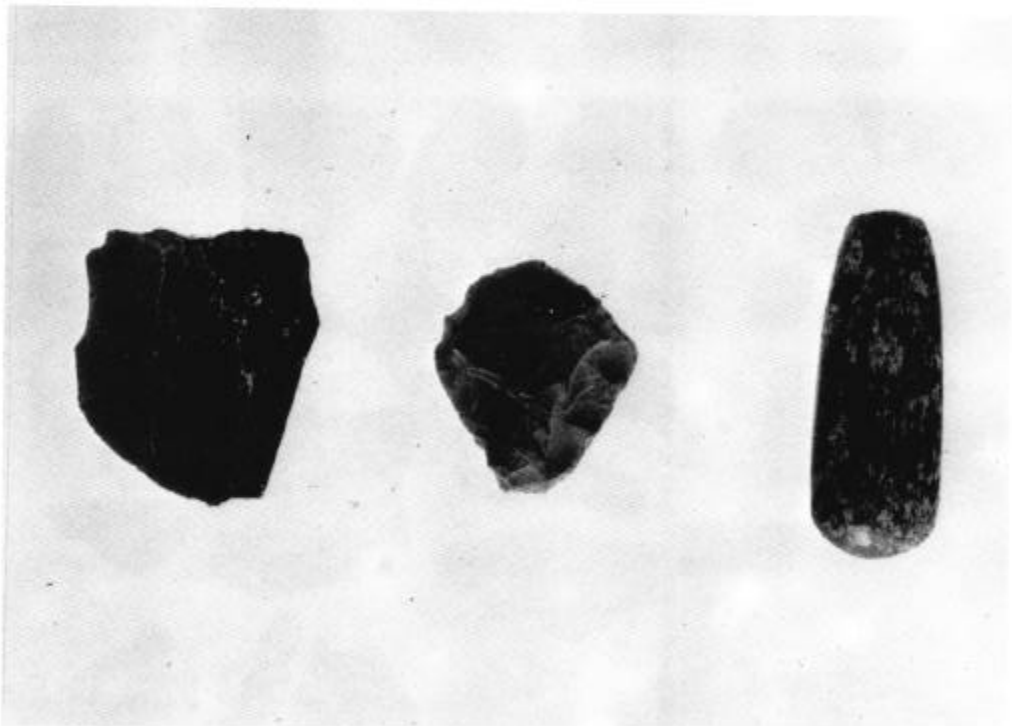
Ⅵ図版16　上　遺構外出土土器(1)
　　下　遺構外出土土器(2)



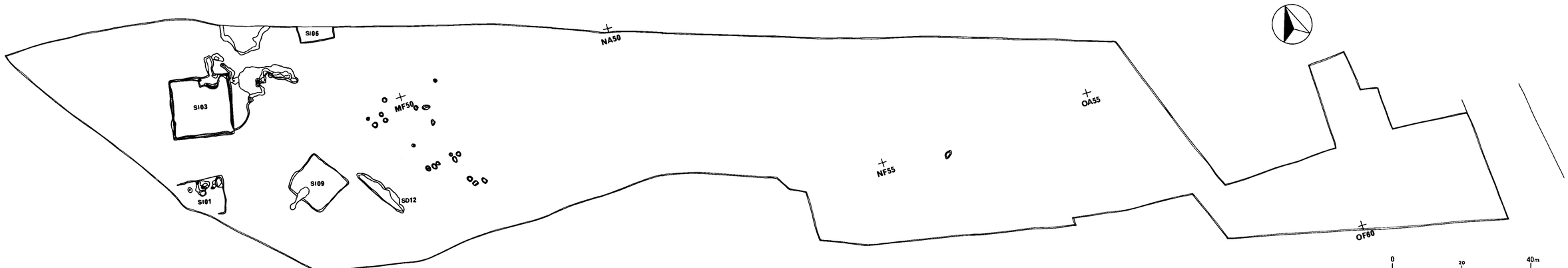


VI図版17　上　遺構外出土土器(3)
　　下　遺構外出土土器(4)

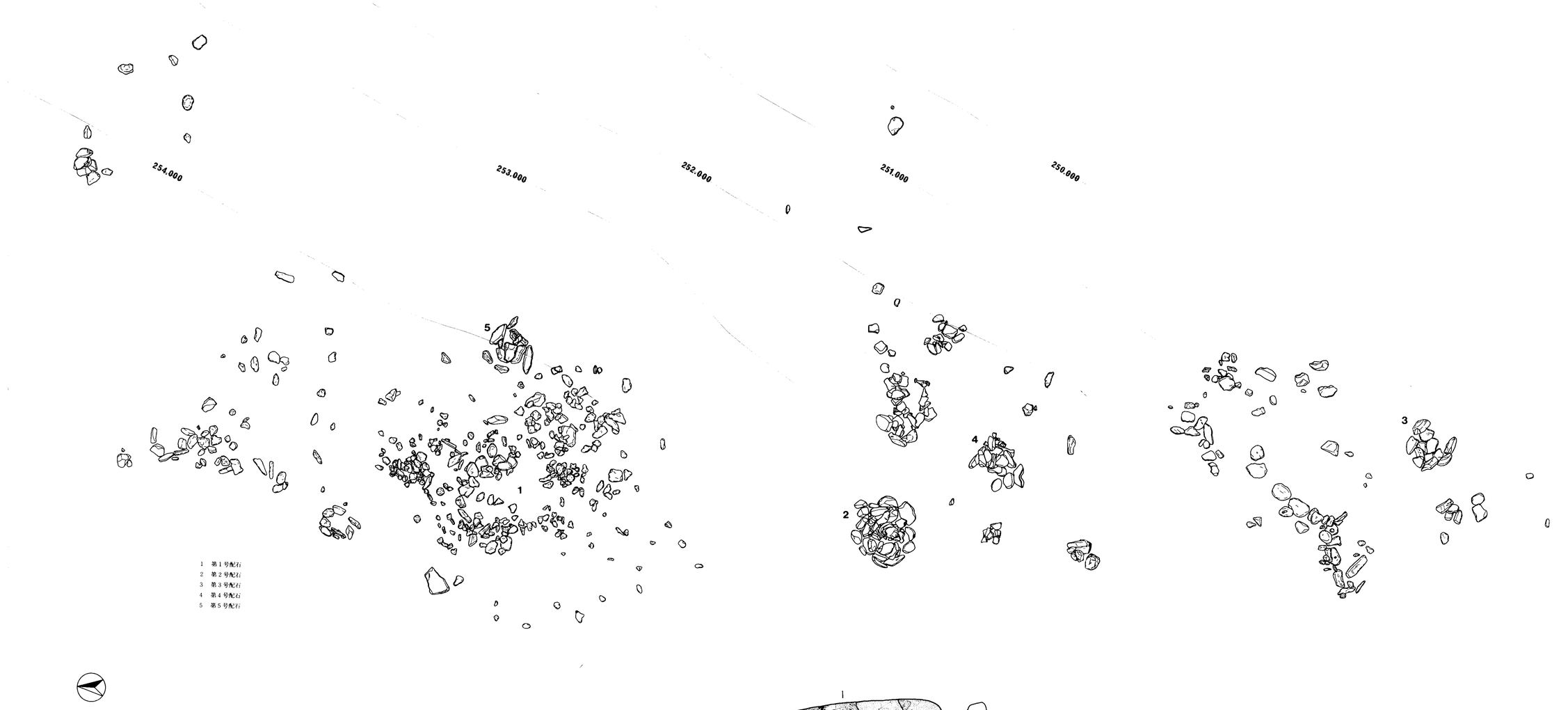


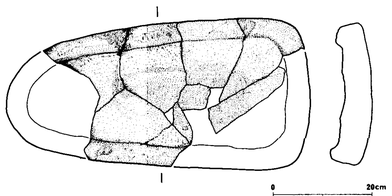


VI図版18　上　遺構外出土石器(1)
　　下　遺構外出土石器(2)




別図1　案内Ⅳ遺構配置図




出土石器（石皿）実測図

大岱II遺跡配石群〈附図2〉

別図3　案内VI遺構配置図